
いつもの空 + 時々雨

Izumo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつもの空＋時々雨

【Nコード】

N4401K

【作者名】

I z u m o

【あらすじ】

春とは、数多くの者達に新たな出会いが訪れる季節。

そんな中、主人公・霧島 亮は、少し遅い高校入学を向かえ、これから始まる学園生活を楽しみにしていたのだが……

コメディーではのぼのとした日常と、シリアスでときどきな非日常を交差する生活をする事になった主人公の視点から描かれる不思議な物語が幕を開ける！

前に連載していたやつのリメイク版です。

ブローグ

春休みの最終日を利用して、俺は今、ある場所に来ていた。

あたり一面廃墟しか無い場所を、俺は歩いている。

途中、春の冷たい風が、首から上に当たった。

太陽が出ているのにもかかわらず冷たい風は、背筋にゾクツと寒気を走らせ、鳥肌を立たせる。

幸い、服は少し厚手の為に、身体は無事だが、顔が寒い事には変わり無い。

……早く暖かくなんねえかな。

そんな事を願いながら、立ち入り禁止と書かれた看板を無視して道なりに進み、とあるビルへと入って行く。

何年もほったらかしになっているこのビルの壁には罅が入っており、上ろうとしている階段は錆びていた。

一段踏む度に金属が軋む音を聞きながら、最上階へと向かった。

最上階と屋上を隔てる扉は既に無く、まっすぐに屋上の隅へと歩いて行く。

そこにはドラム缶が幾つか置かれており、俺はその内の一つに、ジープンから取り出した缶ジュースを置き、隣のドラム缶に座る。

次いで、もう片方のポケットから缶コーヒーを取り出し、開封して一口。

無糖の苦い液体が口の中に広がり、温かいそれは熱を胃に染み渡らせる。

ホットにしておいて良かった、と内心で呟き、暫くの間、ボーッと屋上から望める周囲の景色を見る。

目に映るのは、廃墟となった幾つものビルだ。

数え始めると途中で挫折してしまいそうなそれらを、缶コーヒーにちびちびと口を付けながら見据える。

……そういえば、昔、ある人にこんな事を言われたな。

「お前が無駄に過ごした今日は、昨日死んだ誰かが死ぬほど生きたかった明日かもしれないぞ?」と。

だとすると、今ここに居る事は、一日を無駄に過ごす事なのだろうか。

ここら一帯が廃墟になった原因の出来事で死んだ者達が、死ぬほど生きたかった日を。

「……馬鹿馬鹿しい」

呟き、缶コーヒーを一気に飲み干す。

自分の時間が無駄かどうかは、自分で決めるもんだ。

だから、もし、もっと生きたかったという身近な人間が死んだのなら、俺はそいつの分も生きて行こうと、そう思う。

「それで良いんだよな? 詩織」

隣のドラム缶に置かれた缶ジュースに向かって返答のある筈が無い問いを放つ。

同時に、どうかこれまでの日常もこれからの日常も、胸を張って良かったと言えるものであるように、と切実な願いをしておく。

しかし、神様という存在が実在するとしたら、俺はどうやら神様に毛嫌いされているらしい。将来が不安である。

そんな事を思い、苦笑を漏らしながら、空になった缶コーヒーを外へと投げ捨てた。

次いで、最後に景色を一瞥し、踵を返してその場を後にした。

二〇三六年現在。東京都の一部は、未だに崩壊したままだった。

第01話：新しい日常の始まり

お前が無駄に過ごした今日は、昨日死んだ誰かが死ぬほど生きたかった明日かもしれないぞ？

そう、昔言われた事があった。

だが俺は、毎日がそんな無駄だとも言える日常でも良かった。

何も大きく変わらない、そんな日常が好きだと、胸を張って言いたいからだ。

三途の川で対岸に渡る船を待っている間、良き思い出として回想する為に。

だが、もし神様が居るとしたら、その神様とやらは俺を毛嫌いしているらしい。

望み通りの日常が突然、非日常となった時、身をもってその事を実感させられたよ……。

それでも俺は、いつかその神様とやらに好かれる為、俺らしく生きていこうとそう決めたんだ。

春だ。その時期は新たな一步の始まりであり、新たな出会いの季節。

周りには、紺色の制服を着込んだ男女生徒がそれぞれの友達と会

話をしながら歩いている。

その人々の中の一人である俺、霧島^{きりしま} 亮^{りょう}は、私立・第二飛翔鷹高等学校の入学式に向かう真つ最中だ。

……何で第二なんだろうか。

まあその疑問は、ずいぶん前に考えるのを止めた事だ。
などと思いつながら、俺は歩みを続ける。

事前の調べによると飛翔鷹高校前には、俺の自宅マンションの近くにあるバス停を経由しているバスが停まるそうだ。

自宅から飛翔鷹高校まで、そんなに遠くは無いが、ありがたく使わせてもらう事にする……筈だったのだが、入学式が始まる八時四十分に丁度良い時間帯のバスが無く、かと言ってそれより前の時間帯だと早すぎる為、こうして歩いている訳だ。

春休みが取れていないのか、重い足を動かしながら。

にしても、徒歩で登校する生徒が多いな。健康に気を使いすぎじゃないか？

そんな事を内心で呟きつつ、ふと生徒達を見渡した時、視界に入る光景に新たな疑問が生まれた。

疑問を持ちまくるとは、忙しい性格だなと思いつつも、ご丁寧に疑問を脳内で読み上げる。

この高校に入学する生徒の数人は髪色が黒では無く、それぞれ多色の髪色なのだ。銀髪である俺が言える事では無いのだが。

「うーッス、おっはよ！ りょーちゃん！」

その時、突然後ろから響く大声。

振り向くとそこには、ツンツンの黒い短髪がトレードマークの男子生徒が、こちらに向かつて来ていた。

彼を見て俺は、思わず溜息をつく。

「お前なあ。もしかして高校でも俺をその名で呼ぶ気か？」

「あつたりまえじゃねえか。相手をニツクネームで呼ぶ事は、親友として当然なんだよ！」

俺をりょーちゃんなどという名で呼ぶこいつは、自称・親友の本^{ほん}田^{んだ}圭吾^{けいご}。

昔からずっと同じ学校であり、同じクラスだった嫌な縁がある為、高校も同じになるのかと思っていたが、その通りになってしまった。なんでも、一人に一台、最新型のノートパソコンが支給されるからだそうだ。

そういえば圭吾がパンフレットを見ながら、最新型だぞ最新型！と五月蠅かったつけ……。

だが、一番の理由は、馬鹿の圭吾に推薦が来ていたからだ。驚きだね。例えるなら、天変地異でも起きたかのよう。

あ、ちなみに俺も推薦入学。

と、そんな纏めを内心で行いつつ、横で喚いている奴の頭にチョップを一発食らわせる。

すると彼は手で頭を押さえて、驚いた表情で俺を見た。

「な、何すんだ、りょーちゃん！」

「だから、そのりょーちゃんつてのを止めろつ。……にしても、やけにテンションが高いな？」

「おいおい、テンション高いのはいつもの事だろ？ それにな、」

一度言葉を区切り、人差し指を左右に振った圭吾は、不適なもとい、馬鹿みたいな笑みを浮かべて周りを見渡した。

「見てみるよ、この美少女の数！ さっすが有名私立校は格が違うね、格が！」

「……あゝ、前々から思ってたんだが、お前つてやっぱり馬鹿だな」「ストリートに言っつなよ……。ってか、普通男なら、美少女だらけ

の学校に夢を持たねえか!？」

両手を広げて訴えるようにして叫ぶ圭吾はしかし、一点を見たまま固まった。

そんな圭吾に、どうしたんだ?　と問おうとすると、

「早速、今日一番の美少女発見!　亮、俺、ちよっくら行ってくるぜ!」

そう言つて、圭吾は俺に親指をグツと突き出し、ウィンク一つして走つて行つた。

……心配だから、俺も付いて行く。

その方向には楽しそうに笑いながら、歩いている二人組みの女子生徒が見える。

圭吾はその二人の内、左側の金色をした短髪の女子生徒に声を掛けた。

呼び掛けに振り返つた彼女は、確かに美少女と言える綺麗な顔立ちだ。

……いや別に、その隣の、黒い短髪の女子生徒が美少女では無いと言っている訳ではないが。

ともあれ、そんな彼女に圭吾は、右手の人差し指でビシッと指した。

「我が魔術の一つ、制約の意を持つ“ギアス”?で、命令させてもらうぜ!　俺と付き合つて下さい!　ぐがっ!？」

「阿呆」

唐突に馬鹿をほざいた圭吾の背中を足で蹴り、もう一蹴りで地に落とした。

そんな状況を見た金髪の女子生徒は、困惑した表情で何か言おうとしている。

ちなみに、もう一人の女子生徒は、啞然の表情だ。

「あゝ……気にするな。コイツの事は綺麗さっぱり忘れて、さっさと登校しろ」

言うと、金髪の女子生徒はにこやかな笑みで会釈し、もう一人の女子生徒と共に歩いて行った。

……あの笑みの意味は感謝だろうか、それとも同情だろうか……。たぶん後者だろうな、と苦笑交じりの呟きを内心で行う。

ちなみに、下から俺を呼ぶ呻き声が聞こえたが、気にしない。

他人のフリ他人のフリ、と自分に何度も言い聞かせ、？平成四十八年・入学式？と書かれた看板の掛かっている校門を早足で目指した。

かつたるい入学式を終え、一年間お世話になる教室へとクラスごととに列となって向かい、今は教室内だ。

席順は市松模様という形式で、縦の列を男子・女子・男子・女子という順番で一列六人構成となっており、俺は窓際が一番後ろから一つ前という、居眠りには打って付けの席をゲットした。

嬉しい事、この上ないな。

だが、「いやっほう！ たまらねえぜ！！」などと叫びながら狂

喜するつもりは無い為、常人らしく内心で喜んでおく。

そして新学年の基本、自己紹介が始まった。

トップバッターは、俺の席の最前列にいる人からだ。

一番最初に言うという、とても緊張するであろう役柄を担う阿部さんに、内心でエールを送っておく。

そんなこんなで、俺は自分の番が終わった後は何をしようかと考えながらも、自己紹介に耳を傾けた。

「
中学校出身の出雲いずも 直樹なおきです。一年間、よろしくお願いします」

……俺の二つ前の奴、紹介はシンプルだが名前が気になる。

出雲：か。確か、島根県の方にも出雲と言う所があった筈だ。

出雲大社、だったかな？　つと、そんな事を考えている間に俺の番。

「あゝ、俺は星凜中学出身の霧島 亮だ。とりあえず、よろしく」

よし、普通だ。

その事に満足し、その後の順調な進行に時たま耳を傾けつつ、俺は窓の外を見ている事にした。

相変わらずの青い空は、どこか心が落ち着く。

流れる雲を見ると、時間を忘れてしまう位だ。

それから大分経って、圭吾の番。

すると圭吾は勢い良く立ち上がり、思い切り息を吸う。

そして、

「星凜中出身の本田 圭吾だ！　俺はこの高校生活を、誰も感じた事が無いぐらいに面白く過ごしたいと思う！　よって、興味のある奴は俺に話し掛けてみる！　但し、ヲタクだになっ！　以上です！
」

静まり返る教室。

もちろん、俺は言葉が出なかった。

啞然だな。

…… 本当、いきなり何言っただよ、馬鹿圭吾くんは。

あいつには少しの間、他人のフリでもしていようかな？ などと
考えながら、俺は机に突っ伏した。

圭吾によって、今後の日常が狂わされないか心配しつつも、それは
ありませんようにと、俺を嫌う神に祈りながら。

第02話：懐かしい夢

いつもと変わらない電話の着信音が、家中に響き渡る。

俺はその電話の受話器をいつも通りに取り、もしもしつと問い掛けた。

聞いた事のある声だ。

確か、親父の友人。

その時の受話器の向こうで、慌てつつも詳細に教えてくれたその人の内容を聞いて、頭が真っ白になる。

親父と母さんと妹が交通事故に逢ったらしい、との事だ。

俺は上手く思考が動かないまま、急いで病院へ向かった。

「あの、き、霧島だけど！ お、親父達は！」

俺はパニックになりつつも、親父の友人である医師に問うた。

だがその医師は、曇らせた表情で俺を見る。

既に電話の時のような慌てた様子は、無い。

そんな彼には、今話すべきでは無いという個人の意思と、今話さなくてはいけないという医師としての感情、どちらを選べばいいか迷っているような表情が見えた。

しかしすぐに、決心が付いたかのように吐息を一つし、眉尻を下げて言った。

「……言いにくい事なんだけど……。亮君のお父さんとお母さんは、相手の車両に衝突した際、即死だったんだよ……。」

「　　っ!」

そんな!　　っという否定の言葉は、ショックで喉が詰まり、出ない。

同時に、パニックだった頭が壊れそうになった。

……だが、絶望するのはまだ早い。

まだ、聞いていない答えが一つあったから。

「……い、妹は?　夢月は無事なんですか……?」

「うん。夢月ちゃんに関しては、大丈夫。かすり傷で済んだよ」

その言葉を聞き、悲しみよりも先に安堵が心を満たした。
そして、神様に感謝した。

肉親を、一人だけでも救ってくれた事に。

……けれども同時に、神様に怒りを感じた。
どうして、両親は助けてくれなかったのかと。

贅沢な願いはしかし、医師の声で我に戻り掻き消される。

「……だけどね……両親を目の前で失ったショックが大きいんだ。
事故に遭った時、彼女だけは意識があったらしいからね。だから、
今は心を閉ざしてしまっている。　　亮くん、ちょっとついて来て
くれるかな?」

その言葉に、俺は言われるまま医師について行った。

嫌な予感が、瞬時に思考となって頭の中で渦巻き、最悪の結果を
想像しながら。

「き……よ……ちゃん」

誰だ？ 俺の眠りを邪魔する奴は……。

「おきて……お……ちゃん」

起きる訳が無いけど後五分……。

そう、内心で報告し、寝返りを打つ。

「起きなさい！ この馬鹿兄貴！」

「うごおっ！」

腹に、強い衝撃……。

「やっと起きたね。全く、起きられないんだったら目覚まし掛けないでよ」

痛みで意識が飛びそうになりながらも目を開けて腹を見ると、どうやらフライパンを叩き落されたようだ。

そしてそのまま視線を右にずらすとそこには、綺麗な銀色の長髪に赤い髪留めを付けた、俺の妹である夢月の姿があった。

ついでに、少々ご立腹の様子。

「イツツ……。何だ、夢月か」

「何だ夢月か、じゃないよ。早くしないと、入学二日目でききなり遅刻だよ？」

言われ、時計を見ると七時四十分。

正直言つて、この寝坊は洒落にやらん。

どれくらい洒落にならないかって？

そりゃ、目が覚めたら一日分寝ていたって事くらい洒落にならない
い！

などと訳の分からない事を内心で叫びつつ、俺は急いでベッドから起き上がり、クローゼットから取り出した制服に着替え、肩に掛けるタイプの鞆を持つ。メッセンジャーバッグな。

……それにしても夢月、顔は可愛いんだが、それに似合わず結構乱暴なや

「あだっ！」

瞬間、頭にフライパンが直撃した。

「何するんだよ……」

「何か失礼な事を考えているようだったから」

「超能力者ですか、貴女は……」

言つて苦笑しながら、夢月と共に部屋を出る。

そして俺はそのまま、玄関へと向かった。

しかし、まさか今頃中二の頃の夢を見るとは。

内容は……何だったっけ？

……忘れちゃった。

何とか間に合ったバスを降りた後に、登校中の生徒の間を素早く駆け抜け、残りを全力で走った結果、能天気な校門を通過した圭吾に蹴り入れる事が出来た。

「よし、今日は大吉だな」

「何がよしだ！ 俺は占い機じゃねえ！ ってコラ、逃げるなー！」

このまま走って教室へと向かおうと思ったが、急に感じた悪寒。

俺は圭吾が居る真後ろを見ていた為、前に何が居るかはわからないが、すかさず姿勢を低くして右に飛ぶと、

「吹っ飛ばええええっ！」

「うごおっ！？」

見事に俺を狙った（？）拳は後ろに居た圭吾に直撃。

そして盛大に響いた、圭吾の断末魔。

「ゴウツて聞こえるくらいの拳だったからなあ……。御冥福を祈るぞ、圭吾……」

「ちっ、外してしもた。よう避けられたなあ」

拳の主は、吹っ飛ばした圭吾を無視し、俺の方を向いた。

そいつはガツチリした一七五センチくらいある身体の、如何にも筋肉馬鹿みたいな男子生徒が立っていた。

もちろん、全く面識の無い他人だ。

「嫌な悪寒がしたからな……。で、誰？」

「よう聞いてくれたな霧島あ。わいの名は藤林^{ふじばやし} 凧^{なぎ}。お前の膝を地面に着かせる男や」

……… どういう状況だ？ これは。

凧と名乗ったこいつは、ファイティングポーズをとってやる気満々のご様子。

それを見ながら俺は、日常がいきなりぶち壊されるんじゃないかと心配しつつ、どちらにしろ馬鹿が増えた気がしてならなかった……。

第03話：次から次へと……

さて、どうしたものか。

俺の前に居る凧って奴は、どうも喧嘩する気満々だ。こっとなったら、脅しネタを言っておくべきだろうか。余り使いたくはないんだけどな……。

「……良いのか？ 俺には中学の時、不良共を総計百人以上負かせたっていう噂があるんだぞ？」

「ふんっ、今更そんな事言わんでもわかつとるわい。その噂を聞いたから、俺はお前を負かしに来たんや！」

あれー？ それを聞いて会いに来たのか。

つと、そんな事よりも、まだその噂が出回ってる事に驚いた。人の噂も七十五日つても、当てにならないんだなあ。

そう思っている間にも、凧はファイティングポーズをしたまま、眉間に皺を寄せた。

「どうしたんや？ はよう仕掛けてこんかい！」

面倒臭い、の一言です。

つてか、俺から仕掛けなきゃいけないのかよ、と内心で突っ込みを入れたその瞬間、

「待たんかお前らああー!!」

物凄く大きい怒鳴り声が俺達に向かって飛んで来た。

「朝っぱらから学校の前で喧嘩するとは、良い度胸してるじゃないか？ 何なら、私がキツイお灸を添えてやるぞ？」

言いながら生徒玄関前からやって来る、皮のコートを着てミニスカートを穿いた、如何にも悪という感じがする黒い長髪の女は、両手の指を鳴らしながら歩み寄ってくる。

すると、いつの間にか復活していた圭吾が、俺の肩に手を載せて来た。

「すつげえ、ありゃ百七十くらいあるぜ？　しかも美人だな！」

「お前は黙ってる」

「あつ、つつめたいなあ。コラコラ、人の手を叩き落とさない落とさない」

「なん……やと？　なら、そのお灸とやらを、やれるもんならやってみいやあ！」

圭吾が耳障りな事を言っている間に、風はその女に向かって走り出した。

刹那、風が吹く。人工的に起きた風が、だ。

「嘘……だろ？」

俺は自分の目を疑った。

それは、一瞬の出来事。

風は結構、身体が大きいのだが、その巨体が軽々と宙を舞った。

「弱いな。貴様は独活の大木か？」

ドシャツという、重い物が地面に叩き付けられる音がした後、その女は次に俺を見る。

「次は……貴様か？」

「いや、別にいい。俺は元々やる気が無かったからな」

「そうか、それは残念だな。まあいい……。さあ野次馬共！早くしないとホームルームに間に合わないぞ！」

言つて、その女は生徒玄関から校内へと消えて行つた。

その後を追うようにして、群がつていた野次馬達は一斉に校内へと走って行く。

……にしても、誰なんだろうかあの人。

教師？んな訳無いよな。

結局、あの女が誰なのかという思考を断ち切つて走つた結果、俺達は何とかホームルームに間に合った。

そしてチャイムが鳴り終わった後、通常通り担任が入つて来る。だが、入つて来た人は昨日と違つていた。

その姿には見覚えがある。つというより、忘れる訳が無い。

ついさつき見たばかりだからだ。

「おはよう、そして初めまして、だな。えー、私の名前は鬼頭きとう弥生よいだ、よろしくな」

「あの一、昨日来ていた加藤先生は？」

「ああ、加藤か。あいつは邪魔な予備の　もとい、副担任だ。私は昨日、ちよつと用事があつてね。最近金が足りなくなつてきたからアレを、だな」

一人の生徒の質問に答えた鬼頭は言いながら、片手を少し上げて何かを軽くつかむような形にし、手首を少し傾げた。

「あ、パチンコッスか！」

「正解だ。有休貰えたおかげで大儲けだ！　つと、まあそういう事だ。とりあえず、一年間私が担任だから、よろしくな。じゃ、ホームルーム終了」

圭吾が何故分かったのか不思議だったが、それよりもさり気なくいい加減そうな感じがする教師だな……。
そんな事を思いつつ、俺は圭吾と他愛も無い話をする為、席を立ち上がった。

四時間目。

春の暖かい陽気が、左側にある窓から流れ込んでくる。

それはまるで眠気を誘うかのように。

しかも授業が国語というミスマツチ。

眠い。非常に眠い。

次は昼休みだから、耐えておきたい。腹も減ってるし……。

そう思っていると後ろから小さく、そして鈍い、ゴンツという音が聞こえた。

「イタタ……」

同時に、痛みを堪える女の声が聞こえた為、後ろを向く。

そこには額を撫でている、クリーム色で癖毛が目立つ短髪の子
生徒が居た。

「あゝ、寝てたかお前」

「はひ？　そ、そんな訳無いじゃないですか！」

「授業中に、ゴンって音がした後に額撫でてる奴は、大抵寝てんだよ。お前みたいにな」

前例がある。去年の話だが。

まあ、言うまでも無く、圭吾なのだが。

ちなみにあいつは、席から転げ落ちた事もある。

一方、彼女は少し考えた後、舌をペロツと出して小さく笑った。

「あはは、バレちゃいました？」

「ば、バレるって……」

天然ですか、こいつは。

「何だ！？　天然要素の香りがする！　圭吾センサーがそう告げている！！」

「何い！？　それは聞き捨てならねえぞ！　後でその天然が何処に居るのか教える本田！！」

急に立ち上がって叫んだ圭吾と乗りの良い馬鹿に、教室内のありとあらゆる視線が向けられた。

だが二人はその視線を全く気にしている様子は無く、親指をグツと立て合い、座り直す。

……席が離れているのに、共感し合う奴ってのは居るんだな……。高校って、やっぱり怖い。

などと思っている内に、微かな笑い声を残して視線はそれぞれの位置に戻った。

すると暫くの間を置いて、癖毛の女子生徒は困惑した表情で問い掛けて来た。

「……何だったんですか？ 今の」

「あゝ、大馬鹿に共鳴した馬鹿が偶然居たってだけだろ」

苦笑しつつ答えると彼女は、そうなんですか、と呟いた後、唐突に何かを思い出したのか、顔を近付けて来た。

「あの、先程の事は御内密に……」

「誰に言うつてん ああ、あの馬鹿共にか。分かったよ」

「あ、ありがとうございます。恩はいつか返させて貰いますね」

何か、面白い奴だな。会話で暇潰しができる。

こんな天然を見たのは久しぶりだな、と思った。

同時に、圭吾が反応した理由が分かった、とも。

すると突然、彼女は拍手を打った。

頭上に豆電球が見える勢いで。

「……あの、こうやって知り合ったのも何かの縁って事で、自己紹介でもしませんか？」

「ああ、いいぞ。俺は霧島 亮、お前は？」

「九条 朔夜くじょう しかやです。よろしくお願いします！」

「こうして俺は、後ろの席の奴と知り合いになった」

しまった。つい、RPGの様に声に出して言っちゃった。

これも、圭吾の影響なのだろうか……。

「……え？ えと……え？ ……はい、知り合いになりました！」

ああ……色んな意味でありがとうと、内心で感謝しておく。

「あ、霧島さん。聞きたい事があるんですが」

「ん？ 何だ？」

「あのですね、本田さんは霧島さんのお友達なんですか？」

問いの表情は、興味津々つてところだ。

「ああ、そうだ。　　ってか、名前は下で呼んで貰った方が俺としては楽なんだが。本田も、圭吾とな」

「そうですか？ それじゃあ、亮さんと呼ばせて貰いますね。」

昨日、圭吾さんが自己紹介で言っていた事についてなんですけど」

「その事が……。正直、引いたろ？」

そう聞くと、朔夜は力一杯両手を胸元で振って否定し、笑みを作った。

「いえいえ、その逆ですよ。高校生活を面白く過ごすって考えに興味がありました。……亮さんはその考えに賛成なんですか？」

笑みのまま、小首を傾げて聞いて来た為、俺は苦笑を返して答える。

「いや、俺は普通の高校生活を過ごせられれば、それで良いと思ってる」

「そうなんですか……。でも、それって何だか勿体無い感じがしませんか？ やっぱり、多分最後になる学生生活の三年間は、楽しい思い出で埋めないと。　　って、すみません！ 何だか偉そうに言っってしまったって」

この学校は一応進学校らしいから、最後の三年間って訳では無いだろう、という言葉を出しかけて、止めた。

楽しい思い出に、かあ……。

悪く無いかもなと思い始めた俺は、何かが進歩したのかもしれない。

また、それと同時に、先程の言葉の代わりに違う言葉が出た。

「……そう、だな。面白く過ごすつてのも、悪く無いかもしれない。……考えとくよ。ありがとな」

突然、礼を言ってきた俺に朔夜戸惑いつつも、こちらこそ言つて軽く会釈をして来た。

同時、授業を終了するチャイムが鳴る。それは、昼休みになった合図だ。

……やつと飯の時間か。

思い、午前中の疲れを溜息にして吐き出していると視界に、いきなり立ち上がった圭吾の姿が映った。

「昼だ！」

圭吾はそう、大声で叫ぶ。

「弁当だ！」

それに続くようにして直樹が……つて、ん？

「昼飯だあああ……！」

最後に二人揃ってフィッシュ！

ナイス実況だ、俺。ああ、虚しいとも。

そんな事は置いといて、二人は一瞬にして教室中の視線を浴びていた。

「いつの間に仲良くなってたんだ？ あいつら」

「ユーモアなお二人ですね」

言いながら、朔夜は口元に片手を添えて笑った。

そして俺も、釣られるようにして笑いが込み上げて来る。

一方、圭吾と直樹は誇らしげにハイタッチをしていた。

……さっきの話、考え直そうかな……。

第04話：一匹狼と生徒会役員

「すまん、俺購買行くわ」

「はい？ 夢月ちゃんの手料理弁当は？」

告げて立ち上がる俺に、満面の笑みで近寄って来た圭吾は表情を一転させ、目を丸くして驚きながら問い掛けて来た。

「いや、今日の朝、夢月をちょっと怒らせちゃって……。自然と弁当抜き」

本当は、急ぎ過ぎてて弁当を持って来るの忘れたんだが。

……。また、怒られるな……。

「そんなあゝ、それじゃあ学校に来てる意味が無いじゃねえか！」

「……お前は、夢月の弁当だけの為に学校に来てたのか？」

「おうよ！ 中三の時からずっと三分の二が弁当目当て」

「なら一日ぐらい我慢しろ。出来なきゃ消しゴム食ってる。それじゃ、行ってくる」

如何にも面倒臭そうな口調で言った後から教室を出る直前まで、

圭吾は大声で訳の分からない事を言っていた。

フンツ、文句など何度でも言っている。その分、お前は夢月の弁当から遠ざかって行くのだからな。

……人が悪いな、俺。

自粛の為、自分に突っ込みを入れておき、購買へと向かう。

一階の玄関近くに構えられた、まるで食堂の厨房みたいなその場所、カウンターテーブルのような部分があり、その奥に店員が居る形となっている。

俺はその場所で焼きそばパンを無事に購入した後、どこで食うかなと思いつつ、この時間は人気が無さそうな屋上へ行ってみる事にした。

無駄に長く、疲れる階段を最上階まで上り切り、屋上へ繋がる扉を開けると案の定、誰も居なかった…… と思ったが、
「先客かよ」

視界が開け、さほど広く無い屋上の周りを、俺の背と同じ位の高さがあるフェンスに囲まれたその奥に、人影が一つ。

どうやらその人影は、男子生徒のようだ。

黒髪は邪魔にならないのだろうかと思える程長く、背中 of 辺りまで伸びており、風に僅かながら靡いている。

その男子生徒は、パンを食いながら、フェンスに正面からもたれ掛かっていた。

…… ああ、カレーパンか。
とりあえず、声を掛けてみる。

「…… よう、お前もいつもこの時間はここに居るのか？」

問いに反応してその男子生徒がこちらを向くと、そいつの顔にはどこか見覚えがあった。

…… そりゃ、美形だが、そういう意味で見覚えある訳では無いと付け足しておく。

ってか、こいつの表情が、どこか俺を小馬鹿にしているように見えるのは気のせいだろうか。

「おかしい事を言う奴だな。昨日、入学したばかりだぞ。今日が初めてだ」

「あゝ…… 一年だったのか。 っと、とりあえず、隣良いか？」
「問題無い」

ありがたく許可を頂いた俺は、長髪の男子生徒の横に座る。

そこからさり気無く後ろを振り向いて見える光景は、一面に広がる街並みだ。

また、横を見れば校舎の屋根も見えた。

そこには、大量の巨大なソーラーパネルが敷き詰められていた。屋上が校舎に比べて小さいのは、これが理由だったのか。

エコって奴だな、節電だ。もしくは、艦隊を壊滅させる為か。

明らかに前者だな、と内心で呟きつつ、焼きそばパンに施されたラップを綺麗に剥がし、一口齧る。咀嚼。

この間、大体三十秒程。

空気が重い故に、動作がスロー化してしまう……。

あゝ……何か切り出す、か。

「あ、俺は霧島 亮だ。お前は？」

「……かんだ ひなた神田 日向だ」

突然の自己紹介だったのに、日向と名乗ったこいつは直ぐに答えた。

まるで、俺が名前を言うのを待っていたかのように……って、

「神田？ もしかしてC組か？」

驚きつつ出した問いに日向はこちらを見ずに、そうだと答えた。そうか、だから見覚えがあったのか。まさか、クラスメイトだったとは。

良い偶然だ、と思いもう少し話そうかと思ったが、話題が出て来ない。

結局、チャイムが鳴っても何も浮かばなかった為、立ち上がってクラスに戻ろうとした。

だが、日向は一步も動こうとしていない。

「……チャイムが鳴ったが、行かないのか？」
「後から行く」

またしてもこちらを見ずに答えた為、俺は言葉を返さずに屋上を後にした。

その途中、さりげなく呟く。

「一匹狼、か」

その一言は他の誰の耳に入る事無く、僅かに響いて消えた。
実際、誰にも聞いて欲しくは無い呟きだったので、ホッとしておく。

午後の授業は何の騒ぎも無く、順調に終わった。

それは、圭吾が空いた腹のまま午後を耐え切る為に寝ていたからである。

……平和だったな。

思い、微笑を漏らしながら、教科書などを机に全て入れ終えた空の鞆を持ち、机に突っ伏して眠っている圭吾の下に歩み寄る。

そして、圭吾の椅子を軽く蹴った。

すると圭吾は驚いたのか跳ね起きて、目を見開いたまま辺りを見

渡した。

「何だ！ 敵襲か！？ …… って、亮かよ。つまらねえ事するなよ……」

敵襲つて、どれだけ壮絶な夢見てたんだよ、こいつ。
とりあえず、悪態を吐いておく。

「お前なあ、今はもう放課後だぞ？」
「へえ……」

軽く相槌を打った圭吾は、ゆっくりと顔を黒板の真上にある時計の方に向ける。

そのままジッと見て、そして立ち上がった。

勢いで椅子が倒れ、五月蠅い音が響くが、気にしていない。

「放課後じゃねえか！」

「何だよ、その平成初期のようなボケは」

「お前、平成初期生まれの人に謝れ！ 多分、鬼頭先生だ。謝って来い！ と、そうじゃなくて。すまんが帰り寄る所があるから一緒に帰れねえわ！」

「そうか、まあ別にいいって、速いな……。本当、変わらねえ馬鹿だ……」

呟き、苦笑を漏らす。

そして圭吾が通ったのと同じ戸を通り、他の下校生の流れに乗って階段を下り始める。

……にしても四階から下りる生徒、つまりは一年生だけでも結構な量だ。

流石と言えば流石なのだろうか、有名私立校さん？

と、答えが来る筈の無い問い掛けをしつつ、ようやく一階に到着。このまま生徒玄関まで行こうか、と思ったのだが、やけに喉が渴いた。

「……確か、別棟に自販機があるって、昨日聞いたな。たまには役に立つなあ、圭吾は」

馬鹿に賞賛を送りながら、階段の真正面にある別棟への渡り廊下を通り、別棟へと向かう。

そこは、教室のある側の棟とはやはり光景が違い、色々な部活の名前が書かれたプレートが多数見える廊下だった。

ずっと奥までそれは続いている。

確か、管理棟と言ったっけか。その名の通りに値する場所は、二階の職員室のみだが。

まあ、そんな事はどうでもいい。自販機だ、自販機。

そうやって目的を再確認し、入ってすぐ右側を見ると、そのには多数の企業が販売する自販機の列があった。

俺はその内の一台に金を入れてボタンを押す。

同時、飲み物が出て来た時にチャリンツという音がした。

金は丁度入れた筈だ。

そして、分かっている。この音は自販機の中の金を貯めておく部分に落ちた音だと。

だが、人間の欲は恐ろしい。

何故か、釣銭の出る部分に手を入れてしまう。

すると後ろから、笑い声が聞こえた。

「ふふふつ、そうじゃのう少年。つついっただけかめなくなる、という気持ちに分かるぞ」

爺さんのような喋り方をした女の声でした。

俺はそれに反応し、後ろへと振り返るとそこには、長い紫色の長髪美人が立っていた。

百七十センチはあろう身長と細身のある身体つきは、まるでモデルのよう。

多少見とれてしまいそうだ。

ちなみに、目前に居る美人の青色をした瞳は、笑みを作っている。

「おや？ 少年、どこかで見た顔じゃな？」

それは、俺も同じ意見だった。

またか、と思えるくらいの偶然で、その人はクラスメイトだったからだ。

「えと、川瀬^{かわせ} 奈々^{なな}だよな？ C組の」

C組で生徒会役員に立候補したたった一人の人で、クラス委員だったな、確か。

「そうじゃが何故、俺の名を？ もしかして、奴らと同じファンか？」

「いや、別にファンじゃないが。……俺は霧島 亮。同じC組だ」

「おお、同じクラスであったか。よろしくのう。そしてすまん、最近そういう輩が多くて困ったんで疑ってしまった」

ファンって、何だよ……。

どうやら俺が出会うこの学校の生徒は皆、不思議な奴のようだ。神よ、頼むから普通の奴にも会わせてくれ……。

と、さり気無く、俺を嫌っているであろう神様に小さな願い事をし、奈々に別れの言葉を言って自販機を後にした。

だが、何故か奈々は、満面の笑みでついて来る。

「……どうした？」

「どうしたと言われても、僕はこれから帰るのじゃ。校内での道が同じでもおかしくなかるう？」

言われてみれば、確かにそうだ。
だが、笑みの意味が分からない。

「……何か、良い事でもあったのか？」

「ん？ 鋭い奴じゃのう、その通りじゃ！ 内容は言えんがのおゝ……。許せよ？」

そう言い残して、奈々は早足で俺を追い越して行った。

途中、彼女は軽く飛び、次の瞬間には回し蹴りをしていた。

俺はそれを見て、啞然とする。

「……何者だよ、あの人は……」

眩き、深い溜息をついた。

第05話：休日の過ごし方

俺は今、自宅のマンションの最上階である七階の廊下を歩いている。

ちなみにこのマンションは、もう二〇三六年だというのに入口にセキュリティシステムが無く、各部屋の入口のドアノブに指紋認証式の鍵がついているだけだ。

まあそれだけでも、充分なセキュリティなんだろうがな。

そんな、どこでも良いような事を考え、深く溜息をつきながら歩いている。

……にしても、一日がこんなにも長く感じたのは初めてだ。その事に苦笑しつつ、自宅の扉を開ける。

「あ、お帰りお兄ちゃん！」

開けた扉の向こうには、いつも通り夕飯を作っているエプロン姿の夢月が、履いているスリッパでパタパタと音を立ててこちらに小走りしながら、出迎えてくれた。

「嗚呼……帰って来たんだな、俺」

「ん？ どうしたの？」

「あ、いや、何でも無い」

しまった、無意識に声に出していたか。
気をつけなければ。

「……あ、そうだ、朝はすまなかったな。おまけに弁当まで忘れちゃって」

「本当、お弁当を忘れて行った時は驚いたよー！ 次からは、目覚

まし時計とお弁当の両方に気をつけてね？　じゃないとお弁当抜きにするから」

「あゝ、そりゃキツイな……。分かった、気をつけるよ」

あれ？　つてか俺、目覚ましの設定したっけか？

ボケが始まったか……？

そんな事を考えつつ、疲れた身体を引き摺るようにしてリビングへと向かった。

制服を着替え終えた俺は、リビングの中央にあるテーブルの前に座り、その上に顎を載せて虚空を見つめた。
ちなみに明日は、土曜日で休み。

「……何をしようか……」

呟きながら、予定が無い自分に絶望した。
と、その時だ。

突然、視界に華やかな枠で飾られた選択肢が二つ現れた。

一つは《見てろライト兄弟！　俺はお前達を越えてやる！　と叫びながら、新聞紙で作った羽を背負い、マンションの屋上から飛び立つ》

もう一つは《渋谷に行き、どの組でもいいのでヤクザ者の事務所を襲撃する》

……どれも、死ぬんじゃないか……？

と言うよりも、選択肢が浮かび上がる時点で変だ。

これも全て、春休みの間に三日三晩休憩無しで圭吾にやらされた

恋愛シミュレーションゲーム？都内乱ラン パラダイス2〜崖つぷち編〜？のせいだ、きつとそうだ。

なんなんだ、あのゲームは。

恋愛シミュレーションゲームとかパッケージに書いてあるのに、現代版米騒動っていう、訳の分からんイベントとかあるし。

「ねえ、お兄ちゃん」

またしても突然の出来事だ。

気付けば夢月が、いつの間にかキッチンから隣に来ていた。

そして、満面の笑みで話し掛けて来ていた。

「明日はどうせ暇でしょ？ なら久しぶりに、映画でも行かない？」
「映画、か……。そいやあ、もう何年も行つて無いな。よし、行くか」

どうせ予定が無いしな。

何故、映画なのかは敢えて聞かないでおこう。

それこそが兄らしさ、つてもんだしな。

……何、格好付けてんだ俺。

「本当に？ やたー！」

俺の了承を聞いた夢月は、嬉しそうに飛び跳ねた。

と言うわけで、土曜日は映画を見に行く事になったんだが……何を見ればいいんだろうか？

あゝ、圭吾に聞いてみるか。

そうと決まれば善は急げだ。

ポケットから取り出した携帯電話を開き、メールを作成し始める。
内容は……面白い映画、何？ でいつか。

翌日の土曜日。ちなみに晴天。

俺と夢月は、近所のデパートの一階、映画館前にて、上映中の映画一覧表の前に立っていた。

「……え？ これしか無いの……？」

「これしか無いな」

映画館には着いたものの、土曜日なのに　もとい、土曜日だから人が多く、ほとんどの映画が満員なんだそうだが、圭吾が席を予約していた映画のチケットを譲り受け、現在その映画のポスターを眺めている。

ちなみに圭吾がチケットを譲ってくれた理由は、今日しか無いイベントがあるからそっちを優先する、との事。

その為、同じく今日のこの時間にしか効力を持たない予約チケットは俺の手元にある。

「？永遠の六月？……か。俺はこれでいいぞ？　これの原作の小説、好きだし」

「へえ……。……つて、ええ！？　お兄ちゃんが小説を読む！？」

「まあ、それしか読んだ事の無い、本に全く縁が無い能無しだが何を言わせてんだよ。他にも読んでるよ」

言って、夢月の額にデコピンを一発。
らしくない乗り突っ込みはやるもんじゃないな。
新たな教訓である。

「いたっ！ 自分で言ったんじゃない！ えと、それで、この作品はシリーズ物だったりするの？」

「ああ、原作者は有名な野球選手らしくてな、プロ野球チームに入団する前に書いた作品なんだそうだ。で、この作品は昔、実際にその人が体験した物語だって噂もあるんだ」

「えと……実話って事？」
「飽くまで、噂だな」

苦笑交じりでそう言つと、夢月は俯き片手を口元に当て、見てみたいかも、と呟いた。

……ちなみに、この噂のソースはもちろん圭吾だ。
こういう関係の情報は圭吾が一番持つてるからな。
にしても、実話ねえ……。

俺の視線の先には今、その実話とされている作品のポスターが見える。

森に囲まれ、不自然に円形の平原が開けた場所の奥に小さな祠が一つ置かれている、とそんな感じの写真だ。

不思議と、引き寄せられるような感じがするのは気のせいだろうか。

「それで、今回は何作目なの？」

「今回は確か、記念すべき一作目だ。んで、ちなみに全三部作」
「三部作って、ありがちな数字だね」

「もつともです。」

「とりあえず、入る！」

そう言つて夢月は俺の腕を自分の両腕で抱え込み、引つ張るようにして館内へと突入した。

館内から出た俺は、暗闇から明るい所に出た時の眩しい感覚に耐える為、その場で止まる。

同時に、力一杯腕を伸ばして固まつた身体を解した。

その後、腕時計を見ると、上映開始の時間から丁度二時間が経過していた。

感想は、キャストが微妙だった事だ。

珍しく圭吾の意見に賛成した瞬間である。

俺はそう呟きながら、隣を歩く夢月を見た。

彼女は館内で買ったパンフレットを食い入るように見ており、前を見ていない様子。

そんな彼女を見て、一応感想を聞いてみる。

「……そんなに面白かったか？」

「うん、面白かった！ 続きが楽しみだよ！」

そうだな、キャストなんてどうでもいいよな。

中学生は純粹に、映画を楽しまなくっちゃな。

……高校生になると、映画を見ての感じ方が変わるんだなあ……。などとしみじみと思いながら帰り道を歩いていると突然、血が疼いた。

もつ、全身の肌が総立ちである。

「この気配は！」 「この気配って！」

その感覚に、俺と夢月は顔を見合わせて声を揃える。
ほぼ同時、早歩きでその気配のする方へと向かった。

するとそこには、ダンボールに入った子猫が五匹、それぞれの動きをしながら鳴いていた。

「か、可愛い……。うにゃ〜」

俺と夢月は、再度声を揃えて、人が変わったかのように子猫とじやれ合い始めた。

あゝ……可愛い……。

ふさふさの毛にあどけない表情、そしてぷにぷにの肉球。
癒される。

そうして、経過時間が十分とも三十分とも思えてしまうほど集中してじやれ合っていると、突然後ろから聞き覚えのある声がした。

「……お主は、何をやっておるのじゃ……？」

問いに、反射的に振り向く。

それがミスである事に気付いていながらも、振り向いてしまった。

「にゃ？ あ」

し、しまった……。

刹那、全身に大量の冷や汗が流れ出したのが分かった。

それは、まるで人生が終わったような感覚。

簡単な一般的例えとしたは、天国が地獄に変わったって奴だ。

対して、如何にも申し訳無さそうな表情で目前に立っているのは、川瀬 奈々だった。

彼女はその表情のまま、片手を自分の顔の前まで上げる。それは、謝罪の意だ。

「すまん……邪魔したようじゃな」

「ま、待った川瀬！ これには深い訳が！」

自分が哀れに思えてくる。

俺の必死の言葉を聞いた奈々は人差し指を立て、チツチツチツと左右に振った。

「このような公共の道で、にゃ？ とか言っておる男の言葉は、ただの言い訳にしか聞こえぬと思うぞ？」

「そこを何とか頼む！ 理由を話すから、この事は誰にも言わないでくれ……」

「ふむ。……ならば僕の頼みを一つ聞いてくれるのならよいぞ。それは、苗字で呼ばんといってくれぬか？ というものじゃ」

意外と簡単な頼みだった。

その為、思わず啞然としてしまう。

ちなみにこの状況下で、夢月はまだ猫とじゃれ合っている。

「……そんなのでいいのか？」

「もちろんじゃ。無理難題を言って出来なかった場合、お主の弱みを握る事になってしまふからのう。その場合、わしの仁義に反する故、苗字で呼ぶなという頼み事にした」

じ、仁義？

仁義ってあれか？ 「これはわっちの問題じゃきん！」とか言っ

てたりする人が心得ている奴か？

……一種の冗談というやつである。

ともあれ、この事を黙っていてくれるというのが分かったただけでもいっか。

「あゝ……それじゃあ呼び名を変えるって事で、姉御と呼ばせてもらってもいいか？ 尊敬に値する感じの人だから」

「あ、姉御とな？ 別に良いが。……それより、理由とは何じゃ？」

本題に入ったか。

とりあえず、人差し指を目前に上げて実はな、と前置きして理由を説明し始める。

「霧島の血を引く物は、昔から猫が大好きなんだ。猫を見ると人が変わって、猫一色になってしまう。未だに横で猫とじゃれ合っている、あゝ、こいつは妹なんだが、とにかくこの姿を見れば信じられる……だろう？」

「ふむ。じゃがお主は何故、今は平気なんじゃ？」

「こ、これでも我慢している方だ……」

今でも、猫の鳴き声が聞こえる度に触りたくなる。

このままだと不味いな……。

「そ、それじゃ、そろそろ行くわ」

そう言うのと同時に、夢月の腕を掴んで無理矢理立たせる。

「ほら夢月、行くぞ。じゃあ姉御、また明日！」

「うむ、また明日会おうぞ」

「ああゝ！ ねこおゝ！」

猫を触りたいと駄々を捏ねる夢月を無理矢理引っ張りながら、俺は急いで自宅へと向かった。

……この日の感想を言わせて貰うと、日常と地獄を味わうと言う不釣合いな一日だった。

まさに天国と地獄。本日、二度ネタだ。

神よ、頼むから一度は天国だけの日にしてくれ……。

第06話：空腹の少女

朝。月曜の朝。気怠い朝。
そんなもって学校の日だ。
だが、怠い……。

「……よし、寝よう」

刹那、金属音と共に額から痛みが広がった。

……痛い。つてか激痛。

そう思いながら視野に入っている人影のある方を向くと、夢月がおたまを持って、不機嫌そうに立っていた。

「あ……夢月、おたまをそんな事に使っちゃいけません」

「お兄ちゃんも、朝食を目の前にして寝ちゃいけません。さ、変なボケかましてないで、早く食べて学校へ行く！」

朝から夢月の大声。

そのおかげで、眠気が吹き飛んだ気がする。

偉大なる妹様に、感謝感謝。

内心で手を合わせ、感謝の言葉を内心で述べながら、テレビの方を向く。

その時目に留まったのは、朝のニュース番組でよく見られるデジタル表記の時刻だ。

表示されているのは、七時。

ちなみに、今日は自力で起きられた。

俺が早起きねえ……。

珍しく早起きをした自分に驚きつつ、朝食である食パン二枚を平らげた後、一つの考えが生まれた。

「……たまには、早く登校するのも悪くは無い、か」

「えー？ お兄ちゃんが早めに登校！？ 防災キットを準備しとかないと！」

「あゝ……お前なあ、そんなに珍しい事か？」

「うん」

即答。しかも、満面の笑みで。

兄として、ちょっと悲しい……。

まあ、その通りかもしれないが。

「つと。それじゃ、行ってくるわ」

「はいはい、いつてらっしゃーい！」

夢月の元氣すぎる声に返事を返して、俺は自宅を後にしてバス停へと向かった。

こんな時に突然でなんだが、俺の好きな言葉は？ 日常？ だ。

理由は簡単、毎日に然程大きな変化が無く、慣れた日々を過ごせる事は良い事だと思っているからだ。

ちなみに、今から向かうバス停には利用者が誰も居ない、これがいつも通りの事。

それは、近所に飛翔鷹高校に行く生徒が、俺を除いて一人も居ないからだ。

偶然と行って良い程、朝にバスを利用する人が居ない。

だからこそ、今日も誰も居ない……筈だった。
誰かが居た。いや、誰かが倒れていた。

飛翔鷹高校の制服を着た、青色の長髪でツインテールを作った
つちな もとい、小柄な女子生徒が、だ。

「……生きてるのか？」

近寄ってみても何の反応も無い。

無視、するべきだろうか。

刹那、

「うわあああああああああああああつ！！！！」

「だあああああああああああああつ！！！！」

急に叫ぶから釣られてしまった……。

辺りを見渡して、誰も見ていない事を確認し、ホッとする。

そして、ツインテールの女子生徒の方を向くと目が合った。

同時に俺は、蛇に睨まれた蛙の如く、全く動く事が出来ない。

しばしの沈黙……。

その沈黙が、彼女の腹の音によって破られた。

「……腹、減ってるのか？」

とりあえず問うと、彼女は勢い良く頷く。

……どうする、どうするよ俺。

食い物はある。だがこれは俺の昼食だ。

だがだが、俺の目の前では少女が腹を空かせて困っている。

だがだがだが、二日連続で弁当が無いと、圭吾が死ぬのではない
か？

などと迷っている内にバスが来た。

「と、とりあえず乗るか……」

言ってバスに乗り込み前の方の席に座ると、ツインテールの子
生徒は隣に座った。

その後、バスが走り出した後もずっと彼女の腹は、小太鼓の様に
鳴り続けている。

ライブ状態である。

「……ったく、しょうがねえな」

圭吾なんて、どうでもいいや。

よし決めた、昼はパンにしよう。

そう決心して、俺は弁当を鞆から取り出し、ツインテールの女子
生徒に差し出す。

「やるよ」

「え？ ……いい、良いの!？」

暫しの間を空けた後、彼女は目を輝かせて聞いてくる。

「お前のその五月蠅い腹が鳴り止むのな って、あれ？」

気付けば、俺の手から弁当が消えていた！

それと同時に彼女の方を向くと、いつの間にか俺の手にあった弁
当を食っていた。流し込むようにして。

少しは味わって食えよ……。

「ぷふうっ、ごちそうさま！」

「速っ!!!」

渡された弁当を見ると、まるで何も入って無かったかのように空っぽだった。

いやもちろん、仕切りの紙は残ってるけども。
蓋の裏に、水分で綺麗に貼り付けられて、だ。

「……お前、食うの速過ぎるだろ」

「……………」

「ん？ どうした？ 黙り込んで」

「……パンの方がよかった」

「なら食うなよっ！」

勢い良く、額にデコピンを当ててやった。

「痛いっ！ な、何でデコピン！？」

「食うだけ食ってそんなセリフを吐く奴には、当然の報いだっ」

本当はチョップも追加したかったが、我慢しておこう。

するとツインテールの女子生徒は、顎に人差し指を当てながら、
うゝんっと唸り出した。

そして急に何かを思いついたのか、その人差し指で俺を指してきた。

人を指で指すな、指で。

「それじゃ、明日の昼食を奢るっていうのはどう！？」

「期待は余り出来ないが……。悪くない条件だし、それで勘弁してやる」

「オツケ、それじゃ明日の昼にね。えっと、私はB組の篠塚しのづか 葵あおい

だよ、よろしくね！」

「俺はC組の霧島 亮だ。よろしく」

隣のクラスか。

なら、問題無いだろうな。こいつが忘れてても会いに行けば良いだけだし。

と、丁度その時、バスがブレーキ音を立てて停まった。

「それじゃーねー」

葵は元気の良い大声を出しながら片手を振り、にやはは〜と笑いながらバスを飛び出して行った。

俺も降りようかなと思い、出口へと向かったその時だ。体が止まる。気付くと、運転手に腕を掴まれていた。

「どうした？ 料金は払ったぞ？」

「お連れの方の分がまだですけど」

「……………」

あいつ、俺に払わせる為に急いで出て行ったのか。

それとも忘れていただけなのか。

どちらにしても、なんて奴なんだ……。

そんな事を思いながら、俺は渋々と金を出し、バスを降りて行った。

「そりゃ、フラグが立っただな」

「は？ フラグ？」

朝のホームルーム後、圭吾に先程の事を話した。

すると、まったくまた我が友人の圭吾は、訳の分からん事を言い出しやがる。

「いいか、亮。その様な普通じゃ有り得ない出来事があつたんだ。フラグの一つや二つは軽く立っているもんなんだよ」

「それはお前の理想論だろうが。　　って、あれ？　お前今、俺の事を亮って呼んだか？　前までのあれはどうしたんだ？」

フラグがなんとかって話は、さり気無く逸らすように話を変えてみる。

「ああ、りょーちゃんの事か？　呼び方を亮の方に変えたの、今頃気付くとはな。とりあえず飽きた。色んな意味でヤバイだろうし」
「確かに、男のお前がりょーちゃんなどと言うと、人聞きが悪いしな……」

「ってな訳で、だ。俺は呼び方を次の様に考えている！　ラッキーフラグマン《幸福な伏線を引き当てる男》かラッキースケベマン《幸福な助平男》だ！」

まず、何も言わずに圭吾の額目掛けてチョップを放つ。
次に、額を押さえて蹲った彼の頭を平手で連続して叩く。

「あだっ、あだっ、おだっ！　やめろい！　あだっ！」

「全く、お前のネーミングセンスには驚かされるぞ。なんだよ、ラッキーフラグマンかラッキースケベマンって。どこからスケベが出て来たんだよ」

「どこからスケベが出たのか、だと！？　シスコンは誰もがスケベヘエッ！」

とりあえず、首筋にチョップを入れて止めを刺す。

斜め四十五度……で良かったっけ？

まあ、圭吾だから別にいつか。

ってか、誰がシスコンだ、誰が。

と、丁度その時、チャイムの音と同時に先生が入って来た。

怠い授業〜午前ver〜の始まり、か……。

そう内心で呟きつつ、気絶した圭吾を無視して自分の席へと戻った。

三時間目、怠い授業の一つである現代国語。

その時間の教師は隙が多い事で評判のある女教師、山内という奴である為、辺りを見渡すと寝ている奴が軽く十人以上は居た。

だが俺は、何故か眠く無い。故に暇だ。

その為、後ろの朔夜と話でもするかな、と思い後ろを向くと、彼女はぐっすりと眠っていた。

気持ち良さそうに寝てやがるよ……。

「……おい、朔夜！」

「ふへっ!？」

小さく、それでも力強く声を掛けると、夢から覚めた彼女は勢い良く立ち上がった。

「え、えと、その……って、あれ？」
「どうしたのですか？ 九条さん」

黒板の方を向いていた山内の、振り向きざまの問いと共に、クラス内の全ての視線が朔夜に向けられる。

だが、圭吾の方を見れば、まだ眠ったままだ。
あいっらしく無いな、反応しないなんて。
……まだ、気絶しているのか……？

「あ……いえ、何でもありません……」

その言葉と共に、クラス中に笑い声が響き渡った。
朔夜はその事に赤面しながら、恥ずかしそうに座る。

「……朔夜、とりあえずわりい」

「え？ いえいえ別に良いですよ。……えと、何の事で謝ったんですか？」

「いや、別に深い意味は無い」

本当は海よりも深い訳があつて謝ったんだけどな。

……例えのスケールがでか過ぎた。

とりあえず、本人は知らないとしても、ついでで謝っておいた。

「……そうだ、お前何か特技あるか？」

とりあえず、話題を振ってみる。

そうでないと、空気が気まずいからな。特に俺が。

「特技、ですかあ……早口言葉ですね！」

「なっ！？　い、意外だな……」
「し、失礼ですよ亮さんっ！　信じないのなら、実際にやって信じさせます！」

言って、朔夜は軽く深呼吸。

そして、呼吸が整ったのと同時に、
「いきます！　　生ゴミ生米生海鼠！」

た、確かに早口だが……。

「屏風がジョーズに坊主の絵を描いた！」

……ウケを狙っているのか？
何か、間違い過ぎているぞ……？

「九条さん、静かにして下さい！」

今度は山内の湯が飛んできた。

同時、再び笑い声が教室内に響き渡る。

「す、すみませ　」

「これかぁー！　これが先日感じた天然要素の香りかぁ！　九条と
言うその名、覚えておくぜ！？」

「待て本田！　まだ確定した訳じゃ無いだろう！？　たまたまもう
一人居たのかもしれない。もう少し待て！」

復活した圭吾と誰か知らない馬鹿、以後二馬鹿がまたしても叫び
出した。

そんな二馬鹿を見た山内は、手元にある何かに文字を書き込み始
めた。

すると圭吾はそれに気付いたのか、驚きの表情を見せる。

「や、山内先生！　もしかして今、天然要素の候補に九条ちゃんを追加しましたか！？　でも駄目ですよ、俺達が先に目を付けたんですから！」

「違います！　貴方達を鬼頭先生への報告対象としてチェックを入れただけです！」

力一杯否定した山内に、二馬鹿は同時に頭を抱えてから、しまったあゝ！　っと叫び出した。

……忙しい奴らめ。

と、そんな騒動の間を見た朔夜は、赤面のまま席に着いた。

「お前、面白過ぎ」

「ぬう……。……私としては、先生に怒られた事よりも、圭吾さんに目を付けられた事が怖かったんですが、面白かったですか？」

「ああ、面白かった。早口言葉が面白かった訳じゃなくて、この一連の流れを作ったお前がな」

微笑しながらそう言つと朔夜はどういう意味ですか？　　つと言いながら小首を傾げる。

「いや、気にするような意味は無いよ。　　ってか、本当に早口言葉が特技なのか？」

「……え？　あ、はい、だと思います……」

「だと思つ？　　どつという意味なんだ？」

問うと、朔夜は少し俯き、苦笑した。

「……私、昔の記憶が、その……　　あ！　　そうだ、亮さんの特技

は何ですか!？」

「は？ あ、あゝ、特技か。……喧嘩、なのかな」

「あー、暴力はいけないんですよ？ 絶対にやっちゃ駄目です!」

「今はやってねえよ。昔の話だ」

そう言つと、彼女は口先を尖らせ、眉を寄せた。

……つてか、上手い具合に話を逸らされた気がする。

「そうだ！ 亮さんが喧嘩をしたら、私がデコピンします!」

「待て待て、人の話を聞けよ。今はもうやってないつて」

「決まりです！ 決定事項です！ もう変更出来ません!」

やけに、やる気満々のようだ。

やっぱり、さっきの事が俺のせいだと知つてて、仕返しをしているのだろうか。

「わかったわかった、それで良いよ。もっとも、お前のデコピンは痛そうに無いしな」

「あ、それつて失礼ですよ!」

そう言つて朔夜は、頬を膨らませて少々お怒り気味。

「冗談だつて、冗談」

「……なら、いいですけど」

彼女は間を置いてそう呟き、膨らました頬を緩ませ、笑顔にした。
約束ですよ？ と言つた彼女が、何となく可愛く思えてしまつた事に、俺は後々気付いた。

ちなみに、二馬鹿は未だに騒ぎ続けている。

第07話：崩壊した過去の都市

さてさて、放課後。

この学校の生徒達はどれ程までに放課後を楽しみにしているのだろうか、今俺が居る教室内には既に、ほとんどの生徒が姿を消していた。

まあ、俺もこのまま教室に残ってもやる事が無いので帰ろうとすると、急に圭吾が俺を呼び止めた。

「なあ亮、お前これから暇か？」

「いや、実はこれから用事があつてな」

自宅に帰るという用事がある。

「よかったよかった！ それじゃ、今から新秋葉原に行かねえか？」

「いや、だから俺は」

「直樹が急用出来たみたいで、一緒に行く相手が居なかったんだ」

「ちよつと待て、俺はただの埋め合わせか？」

「あつはつはつは、そんな訳無いじゃないか。とにかく、行こうぜ」

どう考えても、埋め合わせな気がするぞ……。

まあいつか。最近、こいつと行動した事無いしな。

それに、今日の昼も弁当が無かったから、結構落ち込んでいたし。

「わかったよ、一緒に行つてやる」

「そうこなくっちゃな！ さすが亮だぜ！」

意味わかんねえよ。

とりあえず、俺は圭吾を追うようにして教室を後にした。

新秋葉原までは、学校前から乗るバスで少し行った所にある駅から、電車一本で向かう事が出来る。

俺達は何とか出発直前の電車に乗る事が出来、同時に笛の音が鳴って電車が走り出した。

後は数十分の間、途中途中停まる電車に揺られるだけとなる。

それから駅を抜け数分後、いつの間にか外の景色は左右が全く違っていた。

電車の進行方向を正面として右の窓から見える景色は、たくさん的高層ビルが敷き詰められるようにして建っている、崩壊から復旧した日本の首都であり中心都市、新東京都。

対して左の窓から見える景色は、崩れ落ち廃墟と化した建物が所々にある崩壊都市、旧東京都。

廃墟は、今では旧東京だが、昔は右の新東京と何ら変わり無い中心都市だった。

そんな中心都市が崩壊した理由は、今から三年前。

俺が中一だった頃に起きた事件が原因だった。

当時、東京では世界一の人工知能を搭載したAI？HEAVEN？を導入し、都内における全てのネットワークの中枢となって活躍していた。

充実した生活。その全てを市民に提供していた。

だが、天国と名付けられたAIは、一夜にして人々に地獄を見せる事となる。

二〇三三年七月二十七日、悲劇の始まりの夜、突如HEAVENが暴走。

その暴走は管理下にあったネットワークに混乱を与え、更には同じく管理下にあった防犯用無人機が、守るべきである人間への攻撃を開始。

他にも、信号機の混乱によって交通事故が多発、電子機器のショートによる火災、電車の制御も乗っ取られて脱線・衝突がそこら中で起きた。

この混乱により、東京は僅か数時間でほぼ壊滅。
死傷者も数千人に及んだ。

これが、歴史にも残る大事件、H E A V E N事件だ。

「……いつ見ても、悲しい光景だな……」

圭吾はそう呟きながら、窓の外を眺めていた。

ちなみに俺はこの事件があった時、丁度家族と旅行へ行っていた為、ニュースを見て驚いた記憶が印象的だな。

だが、何故か旅行中の記憶が余り無い。

もしかしたら記憶が無いのは、この事件と関係あるのか？ と、

当時の俺は馬鹿みたいに悩んでたっけ。

そんな風に、俺が昔の思い出に浸っていると、圭吾は外を眺めるのを止めてこちらを向いた。

「なあ、亮。どうやって、そして誰がH E A V E Nの暴走を止めたか、知りたくないか？」

「は？ そんな情報どこから……って、ああ。情報収集はお前の得意分野だったな」

「お褒め頂き、ありがと〜うつ。そんじゃま、俺が集めて纏めた情報を教えてやるぜ！」

右手の親指をグツと立て、俺に突き出してきた圭吾は、自信満々の表情で話を始めた。

「あの日、日本のテロ対策組織・通称？PJFT？は、HEAVENの暴走停止の任務を引き受けたんだ。だが結局、止めるどころか近寄る事さえ出来なかった。そこでPJFTは前代未聞の行動に出たんだ。それは、日本国内で確認されている有能なハッカー達に声を掛け、HEAVEN停止の協力を要請したんだ。どうなったと思う？」

「成功したのか？」

「ぶっ！ 残念、その逆だよ。大失敗だった。どれだけハッキングを試みても、侵入する事が出来なかったんだ。たしか、量子コンピュータとかっていう、人間の脳に似た機能のコンピュータだったらしい。そんな凄いAIが、全てのハッキングを防いだんだってよ」

「そんな時だ！ と言つて彼は、右手の指をパチンツと鳴らして、俺を指差した。」

「打つ手無しのPJFTの所に、ある一つのチームから連絡が入った。そのチームは、自分達が五人構成である事を伝えと、HEAVENを止めてやると言つて来たらしい。そしてその言葉の通り、見事HEAVENの暴走を止めたそうだ。そのチームは自分達を、ユグドラシルと名乗ったらしい」

「……ちよつと待て、さすがにそれは出来過ぎた話じゃないか？」

「たつた五人でだと？ なんで日本の有能ハッカーとやらが挑戦して無理だったのに、そいつらは出来たんだよ。」

「ま、実際こうして平和なもの、それが真実だからじゃないのか？」
「う、うまく纏めやがったなお前……」

苦笑交じりで言うと、圭吾は微笑しながら先程の人差し指を左右

に振った。

「不足した状態の情報を、上手く纏められただけでも、俺は凄いだよ」

自画自賛ですか。

そう思っている間に、電車は途中の駅に停まった。

さすがは東京、乗車数が半端じゃない。

そんな中、一人の男がなにやらブツブツ独り言を呟きながら、俺達の座る席の前に立ち、吊革を掴んだ。

彼は、節々に微笑などを入れながら、楽しそうに独り言を呟いている。

「お、電腦か。良いなあ……」

不意に、彼を見て圭吾が言ったのは、通称？生体式電子脳？。

それは、H E A V E N が日本に導入された時とほぼ同時期に利用され始めた、脳にマイクロ・コンピュータを埋め込む技術の事だ。

まあ、脳の半分をコンピュータにする、みたいな感じのものだな。たしか、埋め込んだマイクロ・コンピュータが、頭脳と結線して情報をインプットしたりアンインプットする事が出来るようにするらしい。

それは、無線や有線を使って外部のネットワークにも接続する事も可能で、インプットの場合はネットの情報を視神経や超神経に直接送り込み、アンインプットは頭脳の言語野に繋がれている事によって、思考するとメッセージを送れるという物だ。

つまり今、目の前で独り言を呟いている男は、携帯電話のネットワークに接続して、相手と会話を楽しんでいるのだろう。

僅かに声が出ているのは、楽しんでいる為につい、という事だろうか。

「亮は、将来電腦にするのか？」

「俺？ 俺はやらねえよ。ネットなんて、滅多にやらないし」

「何！？ それは残念だな……」

圭吾がそう言って立ち上がったのとほぼ同時、電車が次の駅に停まった。

窓の外を見れば、新秋葉原の看板が見える。

何だ、着いたのか。

やけにタイミングが良いな、などと思いながら、電車を降りて目的地へと向かった。

……とは言ったものの、何処へ行くんだよ。

俺が今居るのは、新秋葉原。

そこは、圭吾のようなオタク達には夢の地であり、それだけでなく多くの一般人も良く来ており、数多くある電気店も並んでいる色々と便利な町だ。

ちなみに、何故名前に？ 新？ が付いているのかは、H E A V E N 事件の影響だ。

この町もまた、崩壊し復旧した町の一つなのだ。

などと俺が内心で説明している間に、圭吾は勝手に進んで行った。その後ろを俺は、何とか逸れないようにと必死に追い駆ける。

だがしばらくすると、彼は歩く速度を落として俺の横に並んだ。

見える表情は、笑顔だ。

何だ、気持ち悪い。

「いやあ、久々に親友と一緒にこういう所に行くつても良いもんだなあ。お前、最近付き合い悪かったからなあ」
「それは嫌味か？」

そう言つと圭吾は、フンツと鼻で笑いやがった。
何か、こいつに鼻で笑われると腹が立つ。

「お！　ここだここ、今回の目的地！」

圭吾が立ち止まって指を指した方向には、一つの店があった。
その店の看板には？西洋メイド喫茶・和み？と書かれている。

「せ、西洋メイド？」

「とにかく入ってみようぜ。大丈夫、俺も初めてだから」

「おい。自信満々な表情なのはいいが、初めてって言葉は聞き捨てならねえぞ」

そんな俺の不満を無視して、圭吾は中へ入って行った。
とりあえず、俺も中に入る事にしよう。

「　お帰りなさいませ、ご主人様」

……メイド喫茶つてのはたまにテレビに出ているから、どんな場所かは大体想像がついていた。

だがここは、入った時のセリフ以外、何かが違う。

店内はまるでどこかの御屋敷のような造りとなっており、店名通り何と無く和み、落ち着きのある空間だった。

そして何よりメイド達の服装が派手では無く、漫画とかで出てくる金持ちの家のメイドみたいな感じた。

まあ、漫画にも馬鹿みたいに派手は服装はあったけれど……。

それは、圭吾趣味の漫画にしか無かった為、安心して貰いたい。

「それではご主人様。席を案内しますので、ついて来て下さい」

優しい声でそう言っただけで案内され、少し戸惑いながらも座る事にした。

それにしても、落ち着く席だ。

大体四人分のボックス席で、その周りにはスモーク張りのガラスが設置されており、他の席の客に邪魔される心配も無い。

次いで、席に置いてあったメニューを見て、更に驚いた。

内容が、普通だ……。

「……お、おい圭吾。いったいここはどんな場所なんだよ？」

「気付いたか？ ここはそこら辺のメイド喫茶とは違い、メイドの発祥地と言われている西洋の文化を取り入れたんだ。質素で穏やかに、それでもって主人第一に。だから、派手なサービスは一切せず、メイド服もシンプル。メニューも普通の喫茶店と同じだ。そんなシンプルさが密かに人気を生んでいる、という訳なんだよ。……それに、ここで働いている人達は、実際に豪邸でメイドをやっている人だけなんだそうだ」

はい長い説明ご苦労さん。

息を切らして水を一気飲みしている圭吾に、内心で棒読みの感謝をしておく。

丁度その時、メイドの一人が横を通った為、呼び止めた。

「あ、わりい、紅茶一杯と水おかわり」

「畏まりました。紅茶の方は砂糖、どうされますか？」

「お勧めで」

「……………」

「あゝ……二杯分で」

「それではしばらくお待ちください、ご主人様」

ニツコリと、満面の笑みを見せたメイドは、会釈してカウンターの方へと消えて行った。

……それにしても、落ち着いた店だな。

BGMはクラシックで、バッフェルベルのカノンだ。

ゆったりとした曲を聴きながら、心を和ませる。

ここなら、ゆつくりできそうだ。いや、本当に。

そんな事を思いながらBGMに耳を傾けていると、店員　もと
い、メイドが紅茶と水の入ったボトルを持って来た。

「ご、ご、ご注文頂いた紅茶をお持ちしました！」

「ん？ あ、ああ、どうも　つて、あれ？」

この声、どこかで聞いた事が……。

そう思いメイドを見ると、

「あつ」「えっ!？」

発音の違う声が重なる。

思った通り、俺はこのメイドを知っていた。

そのメイドは、クラスメイトの朔夜だったからだ。

第08話：予想外な遭遇

「ど、どうして亮さんがこ、ここに、ここに!？」

どうやら朔夜は、突然俺に会った事に対して動揺が隠せていないようだ。

その為か、震える手で紅茶を置く仕草は、実に危なっかしい。メイド服は、意外と似合っているが。

「俺は圭吾に誘われて来たんだ。お前こそ、何でここに居るんだ？」

「ん？ なんだ、亮。この子と知り合いか？」

「知り合いも何も、クラスメイトだ」

「へえ、クラスメイトだったのか。俺は本田 圭吾だ。よろしく!」

親指をグツと突き出し、満面の笑みで言った圭吾に、朔夜は笑顔で返した。

「あ、私は九条 朔夜です。よろしくお願いします」

と、その時だ。

名前を聞いた圭吾は、不意に表情を変えた。笑みから疑問の表情へ、だ。

「九条……？ もしかして、天然要素が香る九条ちゃん……？」

「て、天然って言わないで下さいよ!」

トレイを抱き抱えて訴える朔夜を他所に、圭吾は勢い良く立ち上がって叫んだ。

「天然の女神、ここに見つかったり！ まさかまさかの、偶然な出会いですぜ！」

「うるせえ、阿呆」

「ぐべっ！」

他の客の迷惑になるだろうと思った俺は、立ち上がって圭吾の首筋に手刀を叩き込む。

すると圭吾は、奇怪な声と共にテーブルに突っ伏し、ピクピクと痙攣を始めた。

……虫みてえだな……。

って、あれ？ 痙攣？ 角度、間違えたか？

とりあえず馬鹿は無視し、座り直して朔夜の方を向く。

「で、話を戻すぞ。なんでここに居るんだ？」

「あ、私は幼馴染みの紹介で、アルバイトとして一緒に働いているんです」

知り合いの紹介、か。

圭吾も見習って欲しいもんだねえ。

ま、期待はしていないが。

「どうしたの朔夜？ 何かトラブル？」

突然にして、メイドの一人が朔夜に話し掛けて来た。

どうやら、朔夜が俺達客と話している様子になったらしい。

そのメイドは、朔夜の隣に立つのと同時に俺と目が会う。

「ん？ その制服は……。もしかして、私と同じ飛翔鷹高校の生徒君かな？ って事は、朔夜のお友達？」

そのメイドは、どうやら俺達と同じ学校らしい。
つまりは、彼女が朔夜の言っていた幼馴染みなのか？
それにしても彼女、勘の鋭い人だな。

「ああ、そうだ。そんなもってクラスメイトだ」
「へえ、朔夜に男友達とはねえ？ 珍しい事もあるもんだにや」

そう言いながら、彼女はニヤニヤと朔夜を見る。
同時、何かを思いついたかのように拍手を打った。

「そうだ！ 朔夜、この人達を私に紹介してよ」
「あ、はい！ えと、こちらが霧島 亮さんで、こちらが」
「本田 圭吾ッス。よろしく！」

お前、いつの間に復活した？
ってか、先に言うなよ。

「あ、……えと、そしてこちらが私の幼馴染みの」
「二年の高崎^{たかざき} 真佑美^{まゆみ}だよ。朔夜とは昔からの仲なんだ。とりあ
えず、よろしく」
「あう……」

朔夜、テンションダウン。

そりゃあ、紹介を任されたのに自分より先に名前言われちゃ、落
ち込むわな。

「二年生って事は、先輩と呼ぶべき人じゃないッスか！」

先程まで朔夜に天然が何とか言って興味を示していた圭吾は、落

ち込む朔夜を全く気に掛けていないようだ。

酷い男だ。絶対、女に刺されて死ぬタイプだなこいつは。

おゝ、怖い怖い。

そして、圭吾の素早い反応に真佑美は、あははっ、気にしなくて良いよお、と言って笑った。

……って、ん？ 飛翔鷹高校二年の高崎？

「高崎ってもしかしてあの、高崎コンプレーションの？」

「おや？ 我が家も有名になったねえ。そう、その通りだよ」

高崎コンプレーションは東京崩壊時、救済作業及び新東京都の開発を支援した大企業の一つだ。

「ちなみにちなみに、このお店も我が家が経営してるんだよおゝ。

私、ここの店長っ！」

「マジッスか！？ そんなじゃ、友達って事で割引してもらえないッスか！？」

真佑美の言葉に、圭吾が勢い良く食らい付いた。
せこいぞ。

「うゝん……。常連客になってくれるのなら、考えてあげても良いよお？」

「なる！ なります！ いや、ならせて下さいー！」

言いながら圭吾は、勢い良く長椅子の上で土下座した。

……そこまでしてでも、割引して欲しいもんなのか？

確か、

「それでは、これから亮と共にちよくちよく来させて頂きます」

「は？ ちょ、おま」
「まいど」

「こらそこ、まいど言うな！ …… まあ、別に良いんだが。
来なきゃ良いだけだし。」

そして二人は、今後の入店についての話を始めた。

俺は呆れながら視線を逸らすと、丁度朔夜と目が合い、揃って苦笑い。

たぶん、朔夜も呆れているのだろう。

丁度その時だ。

カウンターの方から、元気の良い声が聞こえた。

「店長ー、九条さーん！ そろそろR入ってもいいですよー」

その声は、真佑美と朔夜に休憩の時間である事を知らせたようだ。
……ってか今、こうやって話しているのは休憩の内に入らないのか？

「はい！ それじゃ、また学校で会おうね」

「では私もこれで。また明日、会いましょうね」

そう言い残して、二人はカウンターの方へと走って行った。

「なあ、Rってロスタイムの事か？」

馬鹿は放っておこう。

すっかり冷めた紅茶を一気に飲み、伝票が表示された小型電子板を持って俺達はレジへと向かった。

……そう言えば、Rってどういう意味だったわけ？
たしか、レストだったかな。

いつもとは少し違う帰り道を、女子では無く男子と肩を並べて歩
くつてのは、全く嬉しく無いもんだな……などと思いつつ、その男
子である圭吾と下らん話をした後、いつも通りの分かれ道でそれぞ
れの帰路へと向かった。

俺は残り僅かな帰路を、綺麗に咲く桜を見ながら歩き続ける。

この桜も、あと半月程で見られなくなるんだろうなあ。

しばらくそんな事を考えていると、やっと自宅のマンション前。

俺は、エレベーターに乗って七階のボタンを押した後、ここまで
来る間にどれ程内心で喋っていたのかを考え、すぐに止める。

それとほぼ同時、七階に到着する音がしてドアが開き、自宅まで
後少しだ。

エレベーター近くのドアの前に大量の新聞紙と成人誌が置かれて
いるのを気にしつつ、安息の場へのドアを開けた。

「やっとの思いで……。ただいま」

「あ、お兄ちゃん！ ナイスタイミング、だよ」

「どうした夢月、そんなに急いで。エプロンが解けてるぞ？」

「そんな事どうでもいいから、とりあえず来てきて！」

そう言つと夢月は俺の手を取り、リビングへと引つ張った。

そしてリビングの端にある液晶テレビを指で指して、俺に問い掛

けて来る。

「見てみて、この人。この学校名って、お兄ちゃんと同じだよね？」

夢月が言う液晶テレビにはニュースがやっており、どうやらどこかの組が暴行事件を起こしたらしい。

だが、この事件の被害者の写真を見て驚いた。

そこに写っていたのは、前に一度屋上で出会った一匹狼の神田日向だったからだ。

なんでも、先に暴力を振るった暴力団組員を数人打ち負かしたそう
うだ。

……何で数人相手に勝てるんだよ……。
思わず、溜息が漏れた。

第09話：知りたいのは事件の原因

さてどうしたものか。

日向とは余り面識が無いが、昨日のニュースに出た事によって急に気になってきた。

さすがに、眠れなかったという訳では無いが、気になる。

その為に、会ったら何か聞こうと決め、今現在はいつも通りに登校中だ。

数分後、いつも通りにバスを降りた場所で、偶然か待ち伏せなのかは知らんが、最近全く姿を見せなかった熱血喧嘩馬鹿の、藤林 凧が声を掛けて来た。

「おう、久しぶりやな霧島。元気やったか？」

「ああ、元気だったよ。お前に会うまではな」

「せや、自己紹介がまだやったな。わいは藤林 凧や。こう見えて、乙女座なんやで！」

とつくに知ってるよ……聞きたくも無い星座は初耳だが。

とりあえず、そうなんだ、と軽く受け流しておく。

……にしても、回りにくい奴だ。

最初から用件を言えば良いものを。

「……なあ、無駄話は止めて本題に入ったらどうだ？」

「なんや、バレとるんかいな……。ほな、本題に入るで。霧島んこのクラスに神田って奴が居るやろ？ そいつ昨日な」

「ニュースに写真が出た、だろ？」

先に内容を言った瞬間、凧は鳩が豆鉄砲を食らったような表情をした。

それは凶星って事だろうな。

「なんや、知っとったんかいな……。ほな話は早いわ。わいはその暴力団に勝ったっていう強さに興味を持ってな、是非一度会ってみたいと思ったんや」

「……わかった、お前に会えるか聞いておくよ」

どうせ、昼は屋上に居るだろうしな。

教室で言おうにも、どうせ俺は寝てるだろうし。

「ホンマか！？ ほな、よろしく頼むわ！」

心から嬉しそうな表情を見せた後、凧は学校の方へと走り去って行った。

すると他の生徒は、凧を避けるようにして道を開けている。
やっぱり、避けなくなる奴だよな、あいつ。

「……っと、俺も急がねえと！」

言って、俺は早歩きで学校へと向かった。

早歩きをしたのが吉と出たのか、教室には意外と早く到着した。
そのついでに日向の席をチラッと見たが、欠席なのか誰も座っていないかった。

とりあえず、朔夜に昨日の事を話そうかと思いいながら席に着く。
すると彼女は、俺は来た事に気付いたようだ。

「あ、り、亮さん……。お、おはようございます」

動揺しすぎだろ。

「ああ、おは　うごお！？」

おはようと言いつ返そうとしたその時、急に体が強い衝撃で飛ばされ、横の窓に叩き付けられた。
窓が開いてたら死んでたぞ……。

「ん？　さすがに跳び蹴りは少しやり過ぎたかのお。……すまん」

この喋り方は間違い無い。

川瀬　奈々こと、姉御だ。

どうやら俺に、手加減無しのドロップキックをしたらしい。

「だ、大丈夫ですか！？」

驚きを隠せない表情の朔夜は、心配そうな表情で問い掛けて来る。
そんな彼女に俺は、大丈夫だつと言いながら席に座り直す。

「イツツ……。おいおい、どういうつもりだよ姉御！」

「いや、お主の古き噂を聞いたものでな。それが真か確かめなかったのじゃ」

……と、とうとう姉御の耳にも入ったのか……？

何故今頃、昔の話が蒸し返ったんだ？

しかも姉御の一言で朔夜までもが、古き噂って何ですか？　っと、小首を傾げて聞いて来る。

すると姉御は、素早く朔夜に答えた。

「こやつ、中学の頃に？鬼神？と呼ばれ、不良などの荒れた者達を片っ端から倒したらしいんじゃない。その総計は何と百人以上！」

何ともまあ、嬉しそうに話してらっしゃる。

姉御って、そういう関係の話が好きな人だったのか？

……ってか、俺が蹴られる理由はその中にあるのでしょうか。

「で、今でもやっておるのか？」

「……止めた。つまりは引退、幕引きだよ。理由は言えないがな」

「引退じゃと？ その様な強さを持っていて何故」

「亮にも敵わない相手が居るって事だよ」

姉御の言葉を妨げるかの様に、圭吾が割って入って来た。

良いところに来た、圭吾！

「そうか、亮が敵わぬ相手か。……一度会って見たいものじゃない」

いやいや姉御は一度会ってるよ、と思ったが、俺は敢えて口には出さなかった。

しかしこの話がこれ以上続くと思わぬところでボロが出そうだ。

無理矢理、話を変えよう。

「そ、そういうば昨日のニュース見たか？ 日向の」

「あ、神田さんのやつですね？ 驚きましたよ！ 被害者側なのに無傷だったそうですから」

「ぬ？ それは初耳じゃぞ？」

姉御の口からは、予想外の言葉が出て来た。

まあ、余り大きく取り上げられて無かったからな。
それとも、姉御は二ユースを見ない人なのだろうか。
そう思っている間に姉御は、ふむ、と頷いて圭吾を見た。

「面白そうな話じゃのう……。圭吾、説明せい！」

「へ？ ああ、昨日の夕刻に暴力団組員による暴行事件があったんだ。その被害者側の写真として日向が映ってたんだが、被害者なのに無傷で逆に相手の方がボロボロだったって訳だ」

最近のお前のセリフは、説明が多いな。

「ふむ、状況が理解出来たぞ。褒めてつかわそう」

「ははあ、ありがたき幸せ！」

「何だお前ら」

たぶん、俺が突っ込むので合っていただろう。

そんな馬鹿コントのような事をやっているとチャイムが鳴り、それと同時に鬼頭が入って来た。

すると、姉御と圭吾を含めたこの教室内の生徒達は、素早く自分の席へと戻る。

「よし、久しぶりだなお前ら、休みの間は元気してたか？ ちなみに私は破産寸前まで追い込まれてしまった。よって誰か金を貸してくれないか？」

静まり返る教室。

そりゃそうだ。生徒に金を要求するなんて、前代未聞にも程がある。

……たぶん、クラス全員が思っている事だろうな。

「何だ、誰も居ないのか……チツ」

鬼頭は舌打をした後、数秒の間を空けた。
そして腕を組み、仕方無さそうな表情になる。

「まあいいか　ん？　この席は、と。……本田、ここは誰の席だ？」

「あ、神田の席ッス」

また説明役か、圭吾よ。

つてか、自分が受け持つ生徒の席ぐらい覚えろ、担任よ。

「ああ、神田か。神田ならさつき屋上に居る姿が見えたから欠席では無いと……」

「先生！　それはサボリと言うのでは無いでしょうか？」

「黙れ、あ……あ……むらもと？　そう、村本！　人にはどうしようも無い時だってあるのだ。そこどころ、これから考えといった方がいいぞ？」

鬼頭は訳の分からん事を言って無理に村本とやらを黙らせ、体を右に向けた。

「それじゃ、HR終わりつ。一時間目の準備しろよー」

そう言い残して、鬼頭は何やらブツブツ言いながら教室を出て行った。

なんて自由主義な教師だろうか……何て考えている余裕は無かった！

一時間目は体育であり、着替える時間が限られていた。

「亮ー、先に行ってるぞー」

「待ったあ！ ストップストロップ！」

俺は先に行くとはいやがった圭吾を追って、全速力で走り出した。

かつたるい午後の授業を無事に終え、現在は昼休み。

凧の約束を果たす為……は第二として、第一は昨日の事を聞く為に、俺は日向の居ると思われる屋上へ向かう。

その途中、階段を上っている間、姉御の言葉を思い出していた。

朝、鬼頭が来て皆が席に戻っていく中で、姉御が耳元で囁いた言葉だ。

少し疼いたんじゃないかの？ と。

その言葉が何と無く挑発に思える。

確かにニユースを見た時、心が疼いた俺が居た。否定はしないさ。そんな自分がいっぴきに会いたいって思うのなら、本能のままに行動するまでだ。

吐息し、自分の考えに一区切りつけておく。

それとほぼ同時に、階段が途切れて最上階に辿り着いた為、屋上への入口を開ける。

開けた先の光景にはもちろん、フェンスにもたれ掛かっている日向が居た。

「よお、日向」

とりあえず、軽く声を掛ける。
すると日向は、俺に気付いたのかこちらを見た。

「……何だ、お前か」

「何だ、という事は別の誰かが来ると思ってたのか？」

微笑交じりに言いながら、日向の隣に行って背を預けるようにして寄り掛かる。

そして、制服のポケットから、ここに来る前に買った二個の焼きそばパンの内一個を取り出す。

「お前、昼食まだか？ なんなら、このパン食つか？」

「いらん」

「そうか、美味しいのに」

結局、口数の少ない会話の後、一人で昼食となった。

何を言っても短い一言しか返してこない為、話が續かない現実。文字通り、静寂が訪れた。

しばらくして焼きそばパンを一個食べ終えたので、そろそろ聞こうか、と思い日向の方を向く。

「……なあ、昨日は何でニュースに映るような事になったんだ？」

「お前には関係無い」

拒絶の意味を込めたような口調での即答。
だが、もう一押ししてみよう。

「最初に始めたのは向こうか？ お前か？」

「だから、お前には関係無いと言ってるだろ！」

そう一喝して、力強く睨み付けて来た。

たった二回の質問で怒りを出したんだ、相当機嫌が悪いに違いない。

さすがにこれ以上は不味いな。

……引き下がるのはええな、俺。

「えと、悪かったな。どうしても気にな」

「うりゃああっ！！」

俺が謝罪の言葉を言い終わる刹那、突然にして入口のドアが勢い良く開き、同時に謎の声。

「あー！ やつと見つけた！」

そして響き渡る大声。

その声の主は、葵だった。

「龍！ 昨日の約束忘れてたでしょ！」

「龍じゃねえ、亮だ。大丈夫、まだ腹は空いている」

正直、忘れてたよ……。

二個目の焼きそばパンを食わなくてよかった。

「それじゃ急ぐよ！ この葵ちゃんを待たせたら駄目なんだから！」

吼えた葵は、笑みのまま来た道を引き返して行った。
本当、元気の良い奴だな。

「まあ、そういう事だから俺行くな。　　って、どうした？」

日向の方を向いた瞬間、少しの間だけだったが、何かに驚いたかのように目を見開いていた。

そりゃまあ、急にあんな元気の良い奴がドアを勢い良く開けて来たら誰でも驚くだろうが。

「……ん？　あ、ああ」

俺の視線に気付いたのが軽く返事をして、急いでフェンスにもたれ掛かって町の方を向いた。

その反応に疑問を持ったが、葵が何か言ってるきそうなので、急いで彼女の後を追う事にした。

階段の下からは、葵が俺を呼ぶ声が響き続けている。

そつえば、皿の事を忘れてたな。

……まあいつか。

第10話：？鬼人？と呼ばれた者の噂

昼に聞くべき事を忘れていたのが仇となったのだろうか、俺は風呂に置手紙で呼び出される羽目となった。

それも、手紙を下駄箱の中に置くという、誤解を招きやすい方法で、だ。

しかも場所は体育館裏という、如何にも古典的な場所だ。

まあ、内容は「すぐに体育館裏の用具庫に来い！」というものだったので、俺が約束通りの事をしようがしまいが、呼び出しはくらっていたようだ。

この事を圭吾に話すと、面白そうだから、と言ってついて来る事になっちまった。

心底、言わなきゃ良かったと思う……。

内心でそう後悔しつつ、どうせ風だからと思ってゆっくりとした歩みで生徒玄関を抜け、別棟となっている体育館の裏にあるという用具庫の前へと到着した。

そこには俺を呼び出した張本人、風が腕を組んで仁王立ちをしている。

「やっと来たな、霧島。んで、どうなんや？ 神田は来るんか？」

「いや、大事な用があつて無理だつてさ」

本当は聞いてないがな。

「なんやて！？ ……そうか、わいが怖いんやな。ふくく、口ほどにも無い奴やなあ！」

突然、大笑い。

こついうのを自惚れつていうのだろうか。

そんな思いで哀れみの表情を向けている俺を気にせず、組んでいた腕を解いてビシッと人差し指を俺に指して来た。

「やっぱりわいの相手はお前だけや、霧島！ わいと勝負せい！」
「結局それかよ」

笑いたいが、それを通り越して呆れたよ……。

「俺は必要な時以外、喧嘩はしないつもりなんだが」

「せやから、わいと必要な勝負をせい！」

「言ってる意味が滅茶苦茶だ、阿呆」

「ぐっ……。しゃーない、奥の手やっ」

そう言つと風は両手をメガホンの代わりにし、口元に当てた。

何をする気なんだ？

疑問の表情で首を傾げたその時だ。

「猫のバカヤロー！！」

「は！？」

つと、駄目だ、理性を保て俺！

「猫じゃらしを見ると追いかける単純動物っ！！」

理性を保て！ たも

「猫なんていらんわああ！！」

刹那、頭の中で何かが切れる音がした。

「猫なんて　って、あれ？　何や霧島、その途轍もない殺気は！
？　ま、待つんや霧島！　まっ　」

亮の怒りが、見れば分かる程に溜まっているなあ。

そんな事を思いながら、俺は少し離れた所、用具庫の手前にある
ブロック塀に座って二人を見ていた。

「ここは、実況でもするべきかねえ」

「んじゃ、私はアシスタント！　どもー、アシスタントの葵ちゃん
ですっ！」

「おわあっ！」

突然、俺の左側に来客。

それも、やけに背の小さい女子生徒だ。
にしても、いつの間に来たんだ？

「あつと、ごめんごめん、初めましてだね！　私は篠塚　葵だよ、
よろしく」

「お、おう、俺は本田　圭吾だ。よろしくっ」

ああ、亮が前に言ってたバスのフラグ少女か。

いや、美少女と言うべきだろうか。

にしても亮は、美少女ばかり友達になるなあ。

朔夜ちゃんといい葵ちゃんといい詩織といい。

本当、羨ましい男だ。

「で、どうして亮はあんなに怒っているの？」

葵ちゃんが人差し指で示す方向を見ると、亮が途轍もない殺気を
出している様だった。

それはもう、一般人である俺にも感じ取れる程の、だ。

あ、鳥肌立った。

「さつき、尻が猫を馬鹿にしていただろ？ それに対して怒ってい
るんだよ」

「え？ 何で猫？」

何故、猫なのか。

その事に対して葵ちゃんは、興味津々に小首を傾げて問い掛けて
来た。

……まあ、別に話してもいいかな。

「あいつの家系、霧島家の人間の血を受け継いだ者は皆、大の猫好
きらしいんだ。猫を見るよ自分を抑え切れなくなり、猫以外何も見
えなくなるらしい。まあ、要するにだ。あいつは猫馬鹿ってとこだ
な」

「へえ、なんだか可愛いところあるね！ 面白いじゃんっ！」

「面白いだけだったらどれだけいい事か……」

俺は、ちよつと昔話だ、と苦笑交じりに言っつて話を始める。

「今から二年程前かな。亮が喧嘩をよくやっていた頃、他校の奴らが亮の猫好きの情報を手に入れたらしくてな。三人がかりで、今で言うと凧みたいに大声で猫を馬鹿にする言葉を言いまくったんだ。その時の亮、本当に怖かったよ」

言いながら俺は、その時の状況を思い出しながらふと思った。

鬼神なんて名前付けた奴、よくまあ亮にピッタリの名を思いついたなあ、と。

……まあ、俺なんだが。

「相手は横一列に並んでたんだがな、亮は疾風の如く真ん中の奴の懐に入り込み、鳩尾に一撃！そしてすぐ横にいた奴の顎を勢い良く蹴り上げ！最後に、啞然としている奴の首を両手で鷲掴み！」「う、うん、聞いてたよ。けど今、圭吾が言ってた事がリアルタイムで行われていた……」

そう言っただけで、再び亮の居る方向を人差し指で示す。

その先の光景に思わず、あっ、と声が出た。

亮が、自分よりも少し体の大きい凧の首を鷲掴みにして持ち上げていた。

その表情は怒りを露にしており、鋭い目で凧を睨み付けている。

「……もう一度、猫を馬鹿にしてみる。この首をへし折ってやる……」

不味いな。何とかして亮を止めなくては……。

その時俺は、あの人しかいないっ、と思って携帯を取り出し、その人物にコールした。

相手が電話に出るとすぐさま、亮が暴走したから止めてやつてくれ！　と言うと、すぐに了承された。

与えられた指示は、亮の耳に携帯を当てる事。

俺は急いで、亮の耳元へ携帯を押し当てる。

刹那、

『この、バカ兄貴いつ！！』

電話から少し離れているというのに、俺の耳までクリアに聞こえる一喝。

電話の相手は亮が唯一敵わない相手。

それは妹の夢月ちゃんなのだ。

もちろん、鬼神の引退も彼女の命令だ。

彼女が中学に入学して間もない頃、亮の？鬼神？という噂を知り、始まったばかりの中学校生活をその噂で滅茶苦茶にされたく無い、と大激怒。

その結果、亮は引退する事にし、せつかく強いのだから人の為になるような時だけその強さを発揮させなさい、とこっ酷く説教されたそうだ。

何はともあれ、亮の暴走が止まってよかったよ。

「一件落着、だねっ」

「まさにその通りだなあ」

風は気絶してぶっ倒れていて、亮は既に通話が終了している携帯片手に啞然としているという、異様な光景だな。

とにかく、早めに亮を夢月ちゃんの下に連れて帰った方が良いな、と思う俺だった。

第11話：霧島家の食卓

気が付けば、俺は夢月の怒声で我に返っていた。

目前を見れば、気絶した風が大の字になって倒れている。

ああ……やってしまった……。

さてこの状況。どうする、どうするよ？ 俺。

原因は風だ。だが、それをどう説明すれば良い？

結果としては、一方的に俺が風を叩きのめしたんだ。

それによって、夢月の怒りを買ってしまった。

もう、どれだけ説明してもそれは、言い訳にしか聞こえないだろう。

夢月は言い訳が嫌いな性格だからなあ。

何か、何か良い方法は、

「じゃーんっ！」

「だああああああっ！！！」

俺は、急に後ろから押されて大声を上げてしまった。

「にやははっ、また叫んだー」

そして同じ声で、笑い声も聞こえる。

この声は間違いない、葵だ。

「まったく、またお前のせいで大声出しちまったじゃねえか」

だが、大声を出した事によって怯えの感情が消え失せていた。

冷静に考えれば、そこまで夢月は鬼でも無いな。

……深く考えなくてもいい、か。

何か、葵に助けられたな。

「葵、ありがとな」

「へー？ な、何か短い間に、全く正反対な台詞が聞こえたんだけど……」

葵は困惑した表情で小首を傾げる。

まあ、無理も無いか。

と、その時、突然圭吾が肩を組んで来た。

「なあ、亮。どうせなら俺と一緒に前家の行って、夢月ちゃんに訳を話してやろうか？」

「……え？ いいのか？」

「もちろんだ。俺達、親友だろ？」

などと嬉しい事を言ってるが、圭吾の狙いは分かっている。

どうせ、今日の晩飯を食わせろ、だ。

それもさり気無く食卓に入ってくる。

まあ、ついて来て貰えるだけでもまだマシ、か。

「え？ もしかして亮の家に行くの？ なら私も行く」

葵、まさかの霧島家来訪宣言。

「ああ来なよ。大歓迎さ！」

「おいちよつと待て、何で勝手に了承してるんだよ」

「駄目……、なの？」

彼女は、潤んだ瞳で俺を見つめて来る。

ご丁寧に、軽く握った両手を口元に当てて可愛げに、だ。

その動作だけでも効果が上がるってのに……そんな目で俺を見る

なよ……。

抵抗はもちろんの事伝わる筈も無く、彼女は俺をジッと見つめ続ける。

「あゝ……わ、わかったわかった。もう好きにしろ！」

俺、あっさり敗北。情け無い……。

だが男として、あの目をされたら断る訳にもいかないだろう？
それが男という性別を持った生き物の愚かさなのだろうか。

……ってか、別に断る必要が全く無いな。

「さ、行く事が決まった訳だし、早速向かいますかつ」
「レッツゴー！」

圭吾と葵の掛け声を合図に俺達は霧島家、自宅に向かう事になった。

気絶している凧の事はすっかり忘れて。

「ただいまー」

俺は遣る瀬無さの箆った声で自宅のドアを開けると、奥から夢月がパタパタとスリッパの音を立てながら駆けて来た。

「お帰りー！ って、あれ？ お客さん？」

意外にも、夢月の表情はいつも通りで、怒っている様子などこ

にもなかった。

ただ、突然の来客に戸惑っているだけだ。

何だよ、内心身構えてたのに、無駄だったのか。

…… 本当は怒ってたり？

「どもーッス」

「こんばんわ」

そんな俺の思いも他所に、後ろからは圭吾と葵が、陽気な挨拶と共に一礼した。

「あ、圭ちゃんだ、久しぶりー！ それと……」

「えと、初めまして。篠塚 葵っていうんだ。よろしく夢月ちゃん！」

「もう私の名前知ってるんだね。それじゃあ改めて、霧島 夢月だよ、こちらこそよろしくねっ」

そういえば、二人は初対面だったな。当たり前か。

夢月と葵は自己紹介を終えた後、揃って笑顔になった。

さすが、と言えば良いのか、仲良くなるのが早いな。

などと思っている間に、二人は会話を数回交わしてリビングへと向かった。

「夢月ちゃん、何だが嬉しそうだったな」

「ん？ 新しい友達が、自分と同じ位の身長だったからか？」

「…… よし、俺達も行くか！」

思い切り話を逸らした圭吾は、靴を脱いでリビングへと向かい、またその途中で舌打ちをして行きやがった。

何故舌打ちなのか分からぬまま、俺もその後について行く。

そして、リビングに入ったのと同時に聞こえたのは葵の声で、

「おお！ すっごーい！」

「な、何が凄いんだ？」

「へ？ ……とにかく凄いんだよ！」

意味が分からん。

内心でそう呟き、肩を竦める。

そして後ろ、圭吾の方を見ると、彼は夢月の居るキッチンの方へと向かっていた。

行動の早い奴め。

「なあなあ、夢月ちゃん。今日は晩飯を食って行っても良いかな？」

「え？ もちろん良いよ。食事は人が多い方が楽しいもんね！」

さすが夢月、即了承か。

と、感心して頷いた時、それと、と彼女は言葉を付け足して笑顔を作った。

「今夜はカレーだよ」

「マジか！」 「マジッスか！？」

俺と圭吾は声を揃えて驚いた。

その理由は、夢月の作るカレーは凄く美味いからだ。

カレーはシンプルなのだが、カレー粉は彼女の手作りであり、調理も大分本格的だ。

そう言えば、昨夜は既にキッチンへの出入りが禁止になっていたな……。

「それじゃあお兄ちゃん、準備手伝ってね」

「うー」

軽く返事をした俺は、夢月の居るキッチンへと向かう。

キッチンの壁際には大きな食器棚があり、それを開いてカレーに使う皿を探す。

そして四人分の皿を出していると突然、夢月が脇腹を小突いて来た。

「可愛い彼女さん連れて来たねっ」

「おいちよつと待て、誰が誰の彼女だつて？」

「決まってるじゃん、葵ちゃんだよ。」 お兄ちゃんの事、よろしくね葵ちゃん！」

我が家のキッチンはカウンターキッチンの為、夢月はそこからリビングに居る葵に向かって、笑顔でそう言った。

すると葵は、頬に両手を当てながら顔を赤らめる。

「ええ！？ もう家族公認！？ どうしよ、困ったなあ……。……幸せにしてね、りょーちゃんっ」

「お前も、即効で誤解されるような仕草をしながら言っな！」

「え……？ 私とは……遊びだったの……？ そんなあゝ、葵ちゃんショック！ ヨヨヨ……」

「お、お兄ちゃん酷過ぎるよ！ どうしてあんな可愛い子を悲しませたりするの！？」

「お前の悪行を見ていると欠伸が出るぜ」

何だ、この急な展開は……。

リハーサルでもやってたのかお前ら？

「そんじゃ、悪いが葵ちゃんは俺が貰う。……葵、俺が幸せにして

やるからな」

「あ、それはちよつとごかんべーんっ」

「そんな馬鹿なあああああ!!」

「お前が馬鹿だ」

言いながら夢月に皿を渡すと、彼女は突然、クスクスッと笑い出した。

「本当、いつものノリだねっ」

「あいつはいつもマジな演技するし、提案もするからな。俺でも戸惑っちゃうよ」

「そんな圭ちゃんに合わせられる、葵ちゃんも充分凄いいけどね」

ご飯とカレーを四人分盛り付けた夢月は再度笑い、食器棚からトレイを取り出して俺に渡した。

「それじゃあこれ、皆に配ってね」

「おう、任せとけっ」

カレーの良い香りを漂わせた皿を四皿トレイに上手く載せ、リビングへと向かう。

「夢月特製カレー、お待ちどう!」

「待ってましたー!」

「……………っ!」

圭吾は歓声を上げ、葵は無言で目を輝かせている。

こいつら、餌を待つ動物みたいだな……。

そうになると、葵はよく食べる肉食で、圭吾は草でも食えそうだから草食だな。

などと考えて微笑しながら、カレーをテーブルに並べて準備完了。
そして全員がテーブルを囲むようにして座り、手を合わせた。

「いったただっきまーす!!」

全員が、声を揃えて一斉に食べ始める。

「うつめえー!」

「おかわりー!」

相変わらず速い葵　　って、

「お前、速過ぎるだろ!?!」

「あははっ、それじゃあちよっと待っててね」

葵の皿を受け取った夢月は、キッチンへと向かった。
そんな彼女を見送りながら、俺は思った。
たまには、こういうのも悪くないな、と。

夕食を食べ終え、しばらく寛いだ後、時間がヤバイと言う事で圭
吾と葵は帰る事となった。

そして、玄関まで来た時、二人はこちらの方を向いた。

「カレー、ご馳走様でしたー!」

「凄く美味しかったよ、夢月ちゃん!」

二人は元気良く一例して、靴を履きだした。

「どうせなら泊まってけばいいだろ？ 時間も時間だし」

「ええー！？ 年頃の女の子を泊めて、何を企んでいるの！？」

「やっぱ帰れ」

「む、冗談なのに」

何やら葵がブツブツ言っているが、敢えて無視しよう。
すると葵は、向きを夢月の方に変えて笑顔を見せた。

「皐月ちゃん、本当にカレー、ありがとねっ！ また機会があったら遊びに来るよ！」

「えと、皐月じゃなくて夢月だよ……。また、いつでも来ていいからね」

また名前間違えてるよ、こいつ。

そう、内心で呟いて苦笑していると、彼女は俺の方に向き直した。

「あ、亮。明日もあのバスかな？」

「亮じゃねえ、りよ……。って、合ってるか。 ああ、ここから学

校まではいつもあのバスだ」

「わかった、それじゃまた明日ね。 あ、それと亮、ナイスボケだったよっ」

そう言い残して、彼女は手を振りながら出て行った。

別にボケたつもりはなかったんだが……。

だがまさか、間違えなかったとはな。

ネタか？ 間違えてるの。

などと思っていると、葵が引き返して来た。

「わっすれってー！ はい、プレゼント！」

そう言って手渡されたのは、携帯用のシャンプーだ。
ポケットにでも入れてたのを、忘れてたようだ。

彼女はそれだけを俺に渡すと、じゃねー、と言って再度出て行った。

何で、シャンプー？

「そ、それじゃ俺もおさらばするかな」

「おう、気をつけて帰れな」

なんか急いでいる感じがしたのは気のせいかな？

そんな、急いでいる感じのする圭吾は、葵の後を追うようにして早足で出て行った。

……急に静かになったな。

とりあえず風呂にでも入ろうかなと思ったその時、不意に夢月が俺を呼び止めた。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？ どうした？」

呼び止められたものの、しばらく何も言わずにただ目を合わせているだけの時間が流れた。

その後、えへへつと声に出して笑い、

「……やっぱり、何でもないよっ」

言ってそそくさとリビングに戻って行った夢月の後ろ姿が、何と無く気になった。

一体、何の用だったんだろうか。

てっきり俺は、今日の騒動の件に関した事を言っただけかと思っただけ……。

その件の事は忘れたのかな？

だとしたら好都合だ！

右手で拳を作り、ガッツポーズ。

……さて、風呂でも入るか。

ついでに、葵に貰ったシャンプーを使う事にしよう。

普通のシャンプーだろうな？　と思いながら、玄関とリビングの途中にある脱衣所のドアを開け、中へと入った。

第12話：ヘッドスパークینگ！

朝日が顔に直撃し、目が覚める。

最初に視界に入った天井をしばらく見、そしてベッドの脇にある棚の上の目覚まし時計を見た。

表示されている時間は七時。また早起きな朝である。そして頭が少しむず痒い。

だが、いつもより目覚めがすっきりしている為、今日は何と無く良い事がある気がした。

その良い事は何だろうかと考えながら、顔を洗おうと洗面所へと向かい鏡を見て、思わず自分の目を疑った。

「　　っ！？　　なんじゃこりゃああああっ！！」

俺の髪型がとんでもない事になっていた。

どんな感じかって？　そりゃもう、自主規制でモザイクを掛けても良いくらい。

そういえば、ついさっき擦れ違った夢月が、必死に笑いを堪えていたようだったが、これの事だったのか……。

急いでお湯などを使って応急処置を施すが、南無三、ほとんど変わりはしなかった。

ヘアアイロンを買っておけばよかったと、心から思ったのは初めてだ。

その上、応急処置をやっている間に時間が大分経っており、もうバスの時間が近付いていた。

そして、どうにもならない髪形のまま、急いで制服に着替えてバス停へと走った。

バス停に行くのには、少し躊躇いがあったが……。

その理由は簡単だ。

あの場所には葵が居る、確実に。
俺のこの髪を見たら、腹抱えて大笑いするだろうよ、必ずな。

「にゃっはははははっ！ 何、何その髪！ にゃははははははっ！..!」

思った通りの反応だ。

馬鹿っ面して腹抱えて、見事に笑ってるよ、チキショウ。
なんで朝っぱらから、こんな目に合わなきゃならんのだ……。

「あはははっ、効き目はバツチリだあ あ」

葵の小さな失言を、もちろん俺は聞き逃さない。

ああ、聞き逃さないよ、聞き逃してたまるものか。

「おい、効き目とは何の事だ？」

「え？ えっと、それは……」

葵は引き攣った表情でゆっくりと後退るが、丁度バスが来た為に逃げ場が無い。

……詳しい事は、バスの中で聞く事にする。

なに、尋問なんてしないさ。手荒な真似はしたくないしな。

詰問はするだろうが。

しばらくバスに揺られ、目的地である学校付近に到着した。

そしてバスを降りた後、教室に向かう僅かな時間の間に、葵から聞いた事を纏める。

まず、こんな髪型になったのは昨日、葵が俺に渡したシャンプーが原因なんだそうだ。

そのシャンプーは、協力者がネットで偶然見つけ、面白そうだから購入したらしい。

その効果は、使ってから約十五時間程度。

つまりは昼までつて事が……。

その中で一番良い情報は、この計画を企てた奴は圭吾だということだ。

つまりは教室に行くまでの間、屈辱に耐える事が出来れば良いのか。

そう思ったのも束の間、教室に向かう途中に何人、何十人もの生徒と擦れ違ったが。

ある者は俯いて肩を震わせていたり、ある者は俺に指を指して爆笑してくるという、途轍もない屈辱を受け、早くも耐えられそうに無い。

……待つてろよ、圭吾。この屈辱は絶対に晴らしてやる……！

内心で復讐に燃えながら教室の戸を力一杯引き、中を見渡す。

しかし、教室内には圭吾の姿が見えなかった。

どうやらまだ来ていないらしい。

仕方なくいつも通り自分の席に座り、後ろ、朔夜の方を向く。

すると机に突っ伏していた彼女は、俺に気付いたのか顔を上げた。

「あ、亮さ　っ！？　お、おはよ、ううぜ、うざいますっ……」

「良いさ良いさ、笑いたければ笑えよ」

「い、いえいえ、別にそんなつもりじゃ……。でもほら、その髪型もあの、その……」

必死に笑いを堪えて、声を震わせていた彼女は、フォローしようとしているが言葉が見つからない、そんな表情をしていた。

別に、フォローなんてしなくても良いんだが……。

そんな時突然、左側から声が来た。

「ういッス、おはよう！ 亮に朔夜ちゃんっ」

お気楽な挨拶に声で、すぐに誰か分かる。

この髪型になってしまった元凶、圭吾がやっと来た。

「今日も良いあ　って、亮……？　お前、その頭……そんな、まさか……」

圭吾は俺の髪型を見るなり目を見開き、一言一言を搾り出すような声。

腹の立つ演技だ。

「本当に効くんだな、あれ！　こりゃ傑作だ！　あっははははははっ……」

続いて腹の立つ笑い方で、俺の苛立ちが更に増す。

そんな、半目で睨み付けている俺を無視して、圭吾は腹を抱えて大笑いしている。

「コレ、使つかい？」

またしても突然の声。

その声がした方を向くと、真佑美が俺にハリセンを差し出していた。

俺はそのハリセンを会釈して受け取り、まだ大笑いを続けている
圭吾の頭目掛けて思い切り振り下ろす！

直後、彼に直撃したハリセンが、快音を教室中に響き渡らせた。

「　　つてえ！　何すんだよ！！」

「何すんだ、だと……？　それはこっちのセリフでもあるんだけど
なあ？」

「あ、えと、それはだな……」

俺が圭吾を力強く睨み付けると、彼は蛇に睨まれた蛙の如く、動きを止めた。

とりあえずハリセンを床に叩き付けて、問い掛ける。

「それは、何だよ？　言ってみ　　っ！？」

瞬間、俺の頭に強い衝撃。

それと同時に、教室中に再度、快音が響き渡る。

「そろそろ、いい加減にしようと思わないか？　ん？」

怒りを無理矢理抑え込んだような声が聞こえる。

俺と圭吾は一度顔を見合わせ、その声が聞こえた方を向くと、ハリセン片手に引き攣った笑みの表情をした鬼頭が立っていた。

「この私が来たというのに、いつまでも座らないとは……。いい度胸だとは思わないか？　どうだ？」

その言葉にハッとした俺は、素早く周りを見渡す。

するといつの間にか生徒全員が座っており、真佑美の姿も消えていた。

神出鬼没って奴なのか？ 彼女は。

そんな事を思いながら鬼頭の方へよ向き直し、その表情を見て思う。

引き攣った笑みの表情が、いつどんでもなく恐ろしい表情になっ
てしまうのか、と。

そうなった場合を思うと、自然と悪寒がした。

「さて、私の気が変わらない内に、席に座った方が良いと思うぞ？」

「はいっ！！」

俺と圭吾は声を揃えて返事をし、急いで席へと座る。

「全く、朝から騒がしい奴らめ……。このハリセンも、お前らが持
つて来たのか？」

「え？ あ……。ああ、そうだ」

真佑美が持つて来たなんて言っても、信じてもらえないだろう。

それにしても、彼女はいつの間に姿を消していたのだろうか。

鬼頭は俺達が騒ぎ出した時、既に入って来ていたらしい。

しかし、真佑美はその時にハリセンを俺に渡した。

……。俊足で教室を出て行ったってのか？

よく分からない人だなあ。

「つと、それと霧島。何だその髪は、イメチェンか？」

「すまん、これに関する話題は避けてくれ……」

「ん？ そうか、残念だな」

本当に残念そうな顔をするなよ。

無駄に申し訳無い気持ちになるだろうが。

「では出席を取るぞ……って、ん？　そういえば最近、出雲の姿を見ないが、誰か欠席の理由を知ってるか？」

その問いに、圭吾が勢い良く立ち上がった。

「直樹は暫く、家の用事で休むそうです！」

「そうか、そういう大事な事はもっと早く言え」

「了解しました！！！」

彼はノリノリで敬礼し、席に座った。

……アイツは、つい先程がどんな状況であっても、テンションは高いんだな。

その後、鬼頭は短い言葉と共に教室を後にし、俺は次の授業の準備を始めた。

机からシャーペンと消しゴムを取り出して、表面に何も書いてないノートを置き、はいこれで準備完了。

後は、寝るだけだ。

第13話：夢月が予想した光景は

この世界は一つとは限らない。

それは、以前まで空想論であつた、平行世界の存在だ。

私は、私達は、その平行世界が存在すると信じて研究を進めていた。

幻想物語を読んだり聞いたりした者達は、少なからずその異世界、他世界に夢を抱くだろう。

それは、当然の事ながら私達にとつても同じなのである。

そんな世界への干渉を、理論上での成功が間近へと迫っていた。
？夢？

それが一つ、実現に近付いているのだ。

「よし、そこまで良いぞ、霧島。じゃあ続きを……石田、頼む」

言われ、俺は教科書を音読するのを止めた。

ちなみに今は、鬼頭が担当の世界史がある三時間目。

そして、俺が音読させられていたのは、とある科学者の論文なんだそう。

だが、そんな事はどうでも良い。

それよりも先程から、大分離れた斜め後方の席で机に突っ伏し体を震わせながら、声を殺して笑っている圭吾の姿に腹が立つ。

俺と目が合う度に、だ。

だが、鬼頭の授業ではあまり騒がない方が良い。

騒ぐという事、即ちそれは死を意味しているからだ。

よって、静かに窓の外を眺める事にした。

ちなみにあのシャンプーは、効果が切れるのが予定より少し早かった為に、現在は元の髪型に戻っている。

本当に良かった……っと喜んでいると突然、後ろから背中をペンのような物で突かれた。

仕方無く後ろへと振り向くと、朔夜が申し訳無さそうな顔をしていた。

「あ、あの……。朝は失礼な事をしてしまい、すみませんでした……」

「いや、気にするなつて。悪いのは全部アイツなんだから」

そう言つて俺は、離れた所に居る圭吾を睨み付ける。

するといつの間にか顔を上げていた彼は俺の顔を見るなり、またしても机に突つ伏して声を殺して笑い出した。

あいつ、反省という言葉を知らんのか？

土下座でもするべきだ。

「ところで、お願いがあるんですけど……」

朔夜が何か言い出したので、また向き直す。

「また、あの髪型で来てくれませんか？」

「断る」

俺、即答。

つてか、お前も反省という言葉、知らんのか？
いつの間に前言撤回してたんだよ。

「そうですか……」

彼女は、何故か残念そうな顔になった。

頼むから、そんな顔をするなよ……。

本日二度目だ、無駄に申し訳無くなったのは。

「……ほう、私の授業で私語とは、良い度胸だな霧島。今度は校庭を授業が終わるまで走らせてやろうか貴様」

俺達が話しているのが見えたのか、鬼頭が少々怒りの籠った声で脅して来た。

「あ、すまん」

「軽い謝罪だな。まあ、いいが……。それじゃ、授業を再開するぞ」

そう言って、鬼頭は黒板の方へと向いた。

その後は、彼女の機嫌をこれ以上損ねない為なのか、授業が終わるまでの間、この教室では鬼頭の声とチョークの音しか聞こえなかった。

四時間目終了のチャイムが鳴る。

それは同時に、昼休みの始まりを意味していた。

「よっしゃー、飯だぁ！ 夢月ちゃんの手料理弁当だぁー！」

その時間の担当をしている教師が教室を出た瞬間、教室中に圭吾のはしゃぎ声が聞こえた。

まあ、はしゃぐのも無理は無いか。

圭吾にとっては、久々の夢月特製手料理弁当が食えるんだからな。そう思っていると突然、教室の戸が音を立てて勢い良く開かれた。俺を含めた教室内の全ての視線は、その音に驚き、開いた場所へと注がれる。

そこには見た事のあるツインテールを揺らした、一人の女子生徒が立っていた。

「あれって、葵ちゃんじゃないか？」

俺の隣まで来ていた圭吾は、何故か小声で俺に言ってきた。

「俺はそんなに視力は悪くねえぞ。態々言わなくても分かっている」

葵は教室内を見渡すようにキョロキョロした後、俺を見つけたのか手を振りながら走ってきた。

「やつほー、龍馬ー！」

「なんと言ったら分かるんだ、俺の名前は亮だ」

「そんな事どうだって良いよぉ。それより、シャンプーのあれのお詫びにパンを買って来たよ」

そう言いながら、俺の前まで来た葵は、パンを一つ差し出してきた。

少し間を空け、俺は一度パンを人差し指で指し、その後に自分に

向ける。

？これを、俺に？？って意味だ。

彼女はそれが分かったのか、笑顔で頷く。

「……すまん、俺、今日は弁当なんだ」

「うにゃーん！？」

葵の笑顔は一瞬にして絶望一色となってしまう、妙な言葉と共に固まった。

そして、同時に彼女の手から落ちそうになったパンを、とりあえず勿体無いので貰っておく。

だが、彼女はピクリとも動かない。これは、俺の所為なのか？

「……なんなら、お前も一緒に弁当食うか？　たくさんあるから、

一人位増えても全く問題無い量だしな」

「ほ、本当に！？　やったー！　それじゃ、お言葉に甘えて頂いちやうよぉー！！」

俺の言葉を聞いた瞬間、目の色を変えやがった。

ついでに表情も、満面の笑みだ。

凄い変わりようだな……。

「一本取られたな」

「うるせえっ」

正面で五月蠅い圭吾から逃れるように後ろを向くと、朔夜が一人で弁当を食っている姿が目に入った。

……もしかして朔夜、いつも一人で食ってたのか？

そんな考えが、脳内で生まれる。

もしそうだとすると、俺達だけで楽しく食ってる訳にはいかねえ

な。

気が付くと、俺は朔夜に声を掛けていた。

「なあ、お前も一緒に食うか？」

「……へ？」

彼女は俺の言った事が理解出来ていないのか、ポカーンッと口を開けている。

まあ、突然だったんだから無理も無いか。

「いや、だからお前も一緒に弁当食うか？」

「……い、良いんですか？」

今度は、少し戸惑いながら聞いてくる。

それは嬉しくも、糠喜びにならないようにといった、注意深さのある問いだ。

「もちろん良いぞ。俺の弁当は無駄に多いからな」

「あ、ありがとうございます！！」

感激の声をあげた彼女は、さっそく自分の弁当を持って、椅子を俺の机の横に置いた。

そして、圭吾が差し出した割り箸を受け取り、両手の平を合わせる。

「そ、それでは遠慮無く。……いただきますっ」

彼女は割り箸で弁当から野菜炒めを少し取り、口へと運んだ。その後、表情が大きく変わる。

「　っ！　　お、おいしいです！！」

「当たったり前さ、なんせ夢月ちゃんの特製弁当だからねっ！」

圭吾は、自分が作った訳でも無いのに、何故か勝ち誇った顔をしている。

こいつは、調子に乗らせてはいけないな、やっぱり……。

そんな事を思いつつ、ふと目に入った朔夜の弁当を手に取り、蓋を開ける。

小さな円形の弁当に、おかずとご飯が入っている形だ。

朔夜に視線をやれば、どうやら感動のあまり食う事に集中しており、俺が弁当を手に取ったのには気付いていない様子。

その為、俺はそこをおかずの一つを摘んで、口に入れる。

……冷凍食品、か。

大抵の生徒は、冷凍食品を含めた弁当なんだろうか。

それとも、手作りの方が多いのだろうか。

思いながら弁当の蓋を閉じ、机の隅に置く。

「……手作りつてのは、珍しい方だな、やっぱり……」

なら、改めて夢月に感謝すべきだな、こりゃ。

そう思っただけ自分の弁当を見ると、既に半分も残っていなかった。

「って、お前ら！　俺の分も残しておけよ！」

俺は急いで割り箸を手に取って参加し、戦争のようなおかずの取り合いが始まった。

第14話：突然の重労働

「すまん、不甲斐無い私を許してくれ……」

それは午後の授業が全て終わった後のホームルーム時に、突然起きた。

鬼頭は教室に入って来るなり、教卓に頭を当てて謝罪した。その状況に、教室内の生徒達は全く理解出来なかった。当たり前だ。

とりあえず俺は圭吾の方を向き、人差し指を彼に指し、次に鬼頭を指した。

すると彼はその合図に気付き、立ち上がる。

「先生、とりあえず訳を話してくれませんか？」

その質問に彼女はゆっくりと顔を上げ、答える。

「明々後日、つまり土曜日なのだが、我が校で創立記念祭があるのは知っているな？　そしてその日までに、各クラスでやっておかなくてはいけない作業があったのだが、このクラスは私が忘れていたばかりに、二日分遅れてしまっているのだ……」

教室内は、静まり返ってしまった。

そんな中で圭吾だけが唯一、喋り続けられている。

「つまりは……俺達が放課後、全力で作業に取り掛かって遅れを取り戻さなくちゃいけないって事ですか？」

鬼頭がゆっくりと頷く。

その返答により、教室内にブーイングの音が沸き上がった。

えーい、五月蠅い……。

そんな中で、聞き覚えのある声が上がった。

「まーて待て待て、お前ら！ ブーイングする暇があったら、行動した方が良いんじゃないか！？」

この声は確か……と思いつつ声のした方向を見ると、そいつはたまに圭吾と馬鹿をやっている馬鹿だった。

圭吾の同類にしては、割って入ろうという決断力がある奴だな。こりゃ、久しぶりにマシな奴を見つけたんじゃないか？ 圭吾。

「さすがだ和津多！ それに関しては俺も同意見だぜ！ 鬼頭先生は毎日お前達生徒を思っただけで忙しく、一杯一杯なんだよ！ 多分……だから、少しのミスくらい大目に見てやれよ！」

多分は余計だったな。

そう思ったのは、どうやら俺だけじゃなくて、他にも居たようだ。

「おいおい、多分って何か、説得力が無くて曖昧じゃね？ それにさ、連絡するのは教師として当たり前じゃない？ それをミスったのに大目に見るよってのは、甘すぎるんじゃないね」

相手を馬鹿にしたような、嫌味の混じった声が、圭吾と和津多にぶつけられた。

そして、それに釣られるかのように他の生徒達もブーイングを再開する。

同時に鬼頭は、このブーイングによって更に気力が無くなっている。

その時だ。

「騒ぐなあ！！　少しは黙らぬか、馬鹿者共が！！」

突然、姉御が叫ぶ。

どうやら我慢の限界が来たらしい。

その一喝により、一瞬にして教室内の生徒達はまた静まり返った。

「どれだけ騒ぎ立てようと、これは鬼頭教師の仕事では無い、お主らの仕事じゃ！　つまらぬ言い合いをする前に、行動して見せよ！」

姉御が皆に呼び掛けるが、誰もが黙り込み、返事をしない。

……こういう時、俺は何か言うべきだろうか……。

「誰も、何も言わぬのか！？　こん　」

「姉御、もう良いだろ。後はこいつら次第って事で放課後、ここに残った奴だけで仕事をするってので良いだろう」

俺は無表情で、冷めた声で言う。

すると姉御は、その提案を聞いて頷き、同意した。

そしてその後、ホームルームが終わった時、教室に残った生徒は俺、圭吾、朔夜、姉御、和津多、他数人だけだった。

どう見ても少ない……。

朔夜もそう思ったのか、ええっと、と言葉を詰まらせながらも進めようとする。

「と、とりあえず仕事の方を始めましょう、か？　……鬼頭先生、仕事って言うのは具体的に何をするんですか？」

「ああ、そうだな。今、ここに居る皆に、残ってくれた事を感謝する。ありがとう。さて、仕事はいくつかあるのだが、最初は体育館での準備だ」

出た、重労働。

「了解しましたっ！ それじゃ、早速行くかー！」

「いよっしゃあ！ 腕が鳴るぜ！！」

無駄に威勢の良い圭吾と和津多を先頭にして、全員が体育館へと向かった。

俺は溜息一つ。その後、少し遅れて皆の後を追った。

飛翔鷹高校の体育館は、教室棟と部室棟とはこれまた別棟となっており、部室棟と渡り廊下で繋がっている。

そんな体育館はバスケットコートが六つもある程の大きさを誇っており、俺達はその中で作業を進めていた。

だがまあ、作業と言っても、内容は至って単純らしい。

なんでもこの学校の創立記念祭は文化祭並みの物なので、体育館でも各部が色々な出し物をするらしく、観客が座る為のパイプイスを置くという作業……なのだが、男子は力仕事というのが大昔からの掟となっているのか、パイプイス運びをさせられる事となった。

その途中、ふと気付けば、圭吾がステージの方を眺めていた。

「どうした、圭吾。何かあったのか？」

俺の問い掛けに反応し、彼はこちらを向く。

「いやあ、なんかさ、創立記念祭は間に合わないから、せめて文化祭には何かやってみたいなあと思ってよ。バンドとかダンスとか、特に演劇だな」

「……正直、驚いたぞ。特に演劇をやりたいってところに。どうしてまた急に？」

この馬鹿にしては珍しい発言だった。

だからこそ、それをやりたいと思った理由が聞きたくなった。

最も、理由はろくでもない事のような気がするのは、こいつと付き合いが長いからだろうか。

「実は最近、昔のアニメを見るのにはまってな。その中に、演劇部を作って文化祭に演劇をやった回があつてよ。感動したよ。その演劇の主役をやっている子の父親が」

「はいストップ。お前に聞いたのは間違いだったと思い知らされたよ。さっき思った事は前言撤回だ」

「えゝ！ これからが良いところだったのに……」

止めて良かった、とつくづく思う。

だが同時に、こいつらしいな、とも思った。

アニメに感化されて実行に移そうとする奴なんて、そうそう居ないだろう。

……ん？ 違うか。移す奴がそうそう居ないんだな。

移そうとする事ぐらいは、大抵の奴がするだろうから。

だったらこいつはやっぱり駄目だ。ただの馬鹿だ。

「こらお主ら！ 手を休めるでないぞ！」

話が丁度終わった時、立ち止まっていた俺達を見つけたのか、姉御が一喝して来た。

その声は体育館中に響き渡り、容易に俺達の耳に伝わる。

「すみませんっした！　すぐに再開しまあゝっす！」

圭吾は軽く返事をし、俺は返事の代わりに片手を上げておく。姉御を怒らせると怖い……気がするからなあ。

そう内心で呟きつつ、作業を再開する事にした。

大体、四十分程経っただろうか。

俺達は多数のパイプイスを運び終えて、それぞれがその椅子に座って休憩を取っていた。

鬼頭が言うには、今日はこの辺で終わりだそうだ。

その為、その場で解散という事になり、圭吾や姉御達は真っ直ぐに家へと帰っていった。

時刻は午後五時を少し過ぎた頃。

生憎、バスが来る時間がまだ先なので、お気に入りスポットである屋上へと向かう事にする。

だが、その途中の階段に、見た事のある女子生徒の姿があった。水色のツインテールは、葵だった。

こんな所で何してるんだ？

「よお、葵。まだ帰ってなかったのか？」

「……………」

話し掛けても返事が無い。

なんだか、葵らしく無い感じがする。

表情にはいつもの元気が一欠けらも見えず、目はいつもと違って少し虚ろだった。

だが突然、彼女は口を開いた。

「……もう少し」

「ん？」

「もう少し待ってて。時間で言うと六時まで……。でないと、んでもない事が起きてしまうから……」

正直、葵の言っている事が理解出来なかった。

「……待っててって、どこでだ？」

「この学校の中で、ね」

そう言って葵は、いきなりいつも見る笑顔になり、走って階段を下りて行った。

俺は、その後ろ姿をただ見ているしかなかった。

……全く、意味が分からない。

とりあえず、当初の目的を思い出し、葵の言っていた事を考えながら屋上へと向かった。

屋上の、外へと繋がる扉を開けると、一気に冷たい風が吹き込んできた。

音も無く浸入してくる風はあつという間に俺の全身を通り、寒さで身震いさせる。

まだ春だからなあ。……う、寒い。

そう内心で呟きながら、フェンスまで近付いてもたれ掛かる。

ここから見える街並みは、何気に気に入っていたりする。

夕方になると住宅の灯りが見え、そしてその向こう側の遠方には都会の輝きが見える、そんな景色が。

そういう訳で暫く景色を眺めていると突然、入口の扉が開く音がした。

同時に、きゃっ、という驚いた声も聞こえた。

どうやら扉を開けた時に、俺の時と同じく冷たい風が当たったのだらう。

つてか、誰だ？ こんな時間に。

俺が言える事じゃないが。

そんな事を思いながら振り向くと、そこには朔夜が立っていた。両手に飲み物であろう缶を持って。

「やっと見つけました。探しましたよ？」

「ここは俺のお気に入りの場所だからな。それよりお前、帰ったんじゃないかったのか？」

「いいえ、亮さんと一杯やろうかなっと思ひまして。偶然擦れ違った葵ちゃんに聞いたら、屋上に向かったって言うてましたから」

あゝ、なるほど。だからここだって分かったのか。

微笑を漏らす朔夜は、俺の横にならんで片方の缶を差し出してきた。

「はい、これ。お疲れ様でしたっ」

「お、ありがとな。ん、温かいな。ホットコーヒーとは気が利くな」

「いいえ？ お汁粉ですけど？」

言われ、缶を見れば、確かにお汁粉だった。

「お前なあ……。まあいいや」

「え！？ な、何ですか！？ 気になりますよ！」

横で騒ぐ朔夜を無視し、缶の蓋を開けて一飲みした。
凄く甘い……。

一方、朔夜は俺が飲んだのを見て騒ぐのを止め、同じく蓋を開けて一飲みした。

……って、

「お前それ、コーンスープか！ なんで俺のと違うんだよ！？」

「え？ あ、実は、お汁粉は私が貰おうと思ってたんですが、亮さんは甘い方が良いかと思ひまして」

「どっちもあめえよ。それに俺は、コーンスープの方がマシだったよ。交換だ、交換」

そう言つて、俺はお汁粉を朔夜に差し出す。

すると彼女はそれを見てキョトンツとし、数秒後には頬を赤らめ始めた。

「ええ！？ ちょっと、あの！ それだとー！」

「ん？ どうしたんだんだ？」

「えと……かんせつ……キ、キキキスに……」

「おいおい、それを気にしてたら、俺はこの馬鹿みたいに甘いお汁粉を飲み干さなきゃなくなるだろう。それと、お前はこれから先、好物を遠慮して相手に渡すな。分かったな？」

問いながら、もう一度お汁粉を差し出すと、朔夜は頬を赤らめた

まま頷き、お汁粉を受け取った。

そして俺はコーンスープを受け取り、一気に半分くらいまで飲む。横で、はわあああ！ とか言いながら更に頬を赤らめていたが、気にしない。

……ってか、コーンスープって一番温かい時に飲むと、異常に熱いな。

舌が火傷した感じがする……。

その事に必死に我慢をしていると、彼女は急に何かを思い出したのか、俺の方を向いて会釈した。

「あの、お昼の件は、本当にありがとうございました！」

「ん？ あゝ……別に気にする事はないって。それにしてもお前、いつも一人で食べていたのか？」

問い掛けに朔夜は、え？ と声を上げた後、少し迷った様子を見せた。

だがすぐに、口を開く。

「中学生の頃は、真佑ちゃんと一緒に食べていたんですが、真佑ちゃんが卒業した後、三年生になってからはずっと一人でした……」

真佑ちゃんってのは、真佑美の事か。

そんな事より、朔夜は余り言いたく無かった事だったのか、表情に曇りが見えて来た。

だがその表情は、すぐに笑顔へと変わる。

「でも、今日からは亮さん達と昼食が取れるので、一人じゃありません。そして、その切っ掛けを作ってくれた亮さんには、とても感謝していますよ！」

「そ、そこまで感謝しなくても良いって……」

そう言い、俺はさつと顔を逸らす。

その行動に、お辞儀をしていた朔夜はニヤニヤと笑いながら、俺の顔を見ようと回り込んで来た。

「亮さんが照れるところなんて、初めて見ました！ 激レアですよ、激レア！」

「う、うるせえ！ こっち見るなって！」

そうやって俺は顔を見せまいと回り、朔夜はそんな俺の顔を見ようと動き回るといふ、他から見れば異様な事をしばし行っていた。屋上には、笑い声と照れ隠しの大声がしばらくの間、響き渡っていた。

それにしても葵は何故、俺をこの学校に留まらせたのだろうか？
それだけが、謎だった。
家に帰る前までは……。

『 続いて、次のニュースです。今日の午後五時三十分頃、新・東京都織音市にある、私立・飛翔鷹高等学校付近の交差点で交通事故が発生しました。幸い、横転したバスの運転手が軽傷を負っただけで済んだ為、大惨事には至りませんでした。では、次の 』

第15話：人気者は面倒そうだ

小鳥の鳴き声が五月蠅い……。

そう感じた瞬間、瞼を閉じているのにも関わらず光が目射した為に目を覚ました。

眩しい。

見れば、昨夜はカーテンを閉めずに寝たらしく、太陽の光が俺に直撃していた。

その眩しさに思わず体を起こして光から逃げる。

「……あゝ……もう朝か……」

気怠さを露にした声で呟く俺は、昨夜ほとんど眠れなかったが為に寝不足だ。

理由は昨日の放課後、葵が言った？とんでもない事？と同日、俺の帰路で起きた交通事故。

その偶然とも言える二つの出来事が、妙に頭から離れず眠気を飛ばしやがった。

嫌な癖だ。

にしても、葵が言ったそれが交通事故の事だったとしたら、どうやって分かったんだらうか？

そう考えると、余計に怖い……。

もしかしたら、未来予知とか

「……馬鹿馬鹿しい、そんなもん実在するわけないだろ」

わざわざ自分に言い聞かせるように、声に出して否定する。

だが、未来予知という単語には、何故か違和感を覚えない。

それは過去に、同じように未来予知が何とかって言ってた奴が居

たからであって……。

「……あゝ、止めだ止め」

俺は考えるのを止めて、ベッドから抜け出す。

そして、顔を洗いに洗面所へと向かった。

蛇口から出る冷たい水を顔に叩き付け、僅かに残った眠気を完全に吹き飛ばす。

そうしている間に、遠くからドアが開く音がした。

同時、スリッパで床を擦りながら、その音がこちらに向かって来るのが分かる。

どうやら夢月が起きたようだ。

その音は洗面所の入口近くで止まった為、俺はタオルで顔を拭きながら夢月の方へと向く。

「よう、夢月。おは」

「ええ！？ お兄ちゃんが私より先に起きてる！ どうしよう、天変地異が起きちゃうよ！」

「朝っぱらから失礼な奴だな」

せっかく俺が爽やかにおはよう、と言おうとしたにも関わらず、言い終える前に夢月は、まるでこの世の終わりのような表情で驚いた。

その為俺は、彼女に近付いて額に一発のデコピンを食らわす。

「イタッ！ ……冗談なのに」

「冗談には聞こえなかったし、見えなかった。それよりも、早く朝食だ」

とりあえず、夢月が顔を洗うのを待って、共にリビングへと向か

った。

早起した分のんびりしてしまい、少し遅れたがいつも通りにバスに乗り、いつも通りに校門を抜け、いつも通りに生徒玄関で上履きに履き替える。

嗚呼、いつも通りというのはなんて素晴らしい響きだろうか……。いつも通り最高！ いつも通り素敵！ いつも通りに惚れ直した！などと、何故か内心でハイテンションに叫びつつ一階の廊下を歩いていると、後ろから誰かが走ってくる足音が聞こえた。

だが、それに気付いた瞬間に、俺の横をその音は勢い良く駆け抜けて行った。

は、速いな……。まるで某ハリネズミだ。

ともあれその音を放っていた人物は、すぐ近くにある女子トイレに駆け込んだ。

「……………姉御？」

スレンダーな長身、紫色の長髪、そしてその髪型までもが一致している為、まず間違いないだろう。

その姉御が女子トイレに駆け込んでから少し経って、今度は複数の足音が後ろから聞こえ始めた。

まばらな足音が、一つ一つ揃う事無く、連続して鳴り響く。

十人は居るな、こりゃ。

「奈々様ー！ 待つてくださーい！」

「逃げないでくださいよー！」

嫌な予感が、鳥肌と共に感じ取れた。

恐る恐る後ろへと振り向くと案の定、十数人の生徒達がこちらに向かつて走って来ていた。

その光景は、まるで軍隊の練習だ。

いや、足並みが揃ってないから、部活動か。

ともあれ、俺は急いで壁際へと避難する。

だが、生徒達が何故か俺の前で止まり、全員が一斉にこちらを向いた。

こ、怖いな……。

その事に口元を引きつらせていると、この団体の代表と思われる女子生徒が一人、一歩前に出て来た。

「質問です。先ほどの廊下を走って行っただと思われる人物、川瀬奈々さんはどちらへ向かったか分かりますか？ あ、紫色の長髪の女性です」

……どうやらこいつらは、姉御と初めて会った時に言っていたフアンって奴らしい。

にしても、人数が思っていたより多いな。

てつきり、二、三人という少数で成り立ってるのかと思ってた。

とにかく多い、男女問わず。

まあ、そんな事はさて置き。

彼女が指差している方を見ると、少し行った所に左右への曲がり角があった。

右は階段、左は部室棟への渡り廊下だ。

だが、確か姉御は、手前の女子トイレに入った筈だが……。

「左だ、左に行ったぞ」

その一言を聞いた生徒達は、ありがとうございました！　っと、元氣良く礼を言っで一斉に走って行った。

……悪い事したかなあ。

いや、女子トイレに大量の生徒が流れ込んで行くなって光景は怖いから、この選択で合ってるだろう。

さすがに男子生徒は入らないだろうが。

ともあれ、姉御に借りを作るってのも滅多に無い事だろうし、良しとするか。

そう思い頷いた後、何気無く腕時計を見ると、ホームルーム開始時間の五分前だった。

そう言えばたまに、鬼頭は口癖のように、私より遅かった場合は欠席扱いにする、と言っていた気がする……。

「やべえ！　もう来るじゃねえか！！」

俺はそう叫び、全速力で階段を駆け上がった。

全速力で向かった結果、僅か十秒で一年の教室がある四階に到着した……その時だ。

偶然にも、鬼頭と鉢合わせしてしまった。

「ほう、誰かと思えば霧島じゃないか。この時間にここで私と会っ

たという事は、遅刻と見て欠席扱いしてもいいな？」

「いやいや、アンタよりも先に教室に入れば問題無いって」

俺と鬼頭は睨み合っただま動かない。

唯一動かすのは口だけ。

……なんとなく、鬼頭が人を見下すような表情をしているのは気の所為ではないだろう。

「生徒の分際で、教師に対しアンタと吐くとは……。余程、私を敵に回したいようだな」

「おいおい、生徒を軽蔑するような人が、教師を名乗れると思ってるのか？」

「今の時代のガキ共には多少、軽蔑が出来る教師が必要なんだよ。やれ親だ、やれPTAだ何て言っているのは、馬鹿が増える一方だからな」

「屁理屈を並べる頭があるのなら、生徒の意見も聞いた方がいいんじゃないのか？ アンタの軽蔑は充分過ぎるので、そろそろ生徒と同じ目線で付き合って行って貰えませんか？」

それを聞いた鬼頭は、鼻で笑いやがった。

同時に腕を組み、見下す表情をより一層濃くする。

次いで、口の端を吊り上げた。

「フンッ、断る。霧島、お前は同じ事を私に言わせて楽しいか？」

今の時代のガキ共には多少の軽蔑が必要だ。そして、お前達にはまだまだ足りない物が多いのだよ……。故に霧島、お前は見せしめとなるべきだ」

……今、気付いた。

こいつと会話で争っても、一向に終わりが見えない、と。

ならば、強行突破しか無いのか？

「とりあえず、俺が遅刻にならない方法として、アンタより先に教室に入るってのは有効か？」

「ほう、試してみるか？ 霧島」

その、挑発とも言える返事を聞き終わる前に、俺は教室目指して、勢い良く走り出す。

だが、その動きを読んでいたのか、鬼頭も走り出した。

刹那、足に軽い衝撃を感じたのと同時に、視界が回転する。

そして腹部に強い衝撃を受け、一瞬にして意識が飛んだ。

ふごうっ！ なんて情けない声を上げたのは、何年振りだろうか……。

第16話：意外な奴に救われた…？

線香の香りが漂う部屋に、俺は居た。

喪服姿の人達がパイプイスに座り、手を合わせている姿が大勢居るその最前列に、だ。

俺の前方には、お経を読み上げている坊主と、またその前には多数の花に囲まれた、親父と母さんの写真がある。

不自然な水色を背景に、笑顔の写真が二人分ある。それは遺影であり、これは葬式だ。

交通事故で死んだ二人の葬式に、俺は参加している。

この時、涙はとくに涸れ果てていた。

今残っている負の感情は、心の中から大きな喪失感だけだ。

更にその喪失感は、俺の思考を停止させている。

とは言っても、もし思考があつたとしても、マイナス思考ばかりが働いていただろうが。

そんな状態の俺を他所に、後ろからは小声での会話が聞こえて来る。

「……あの子が、霧島夫妻の長男かい？」

「まだ中学二年生なのに、可哀想にねえ……」

「ご両親を一度に亡くして、妹さんも精神的ショックで心を閉ざしているんですって？」

「霧島家の時期頭首を受け継ぐには、まだ若いが……あの夫妻の子なら、やってのけられるだろうな」

所々から聞こえて来る声には、同情の意が感じられる。

だが、俺はこんな大人達は大嫌いだ。

わざと他人に聞こえる声で話し、あたかも自分が善人のように振舞う。

それが心に思っていない事であっても、だ。

その証拠に先程、一緒に住まないか？　と提案して来た夫妻が居た。

裏のありそうな言動と表情。

それは、親父達が残した莫大な研究資金と霧島家の時期頭首の権利を狙っていると、すぐに分かった。

だからこそ拒否した。

俺は、両親が居なくても生きていける人間で居なくてはいけないのだ。

そして、命に代えてでも妹を、夢月を守り続けると、そう決めた。それは、まだ世間の何たるかを知らない糞ガキの俺が、初めて心に刻み込んだ決意だった。

目が覚め、気付くと俺は、自分の席に座って机に突っ伏していた。ちなみに、嫌な夢を見ていた気がするから、気分は少々ブルー。だが、そんな事を気にしている場合では無い為、腕時計を見ると時刻は十時ちよい過ぎ。

確か、鬼頭と廊下で睨み合ってた筈なんだが、いつの間にか自分の席に居て、二時間目の授業である現代国語が始まっていた。

気絶していたのか……。

とりあえず朔夜に、気絶してる間の出来事を聞こうと思って後ろを向く。

「あ、亮さん、目が覚めたんですね！　おはようございます」
「お、おう、おはよう」

意外にも、先に言葉を発したのは朔夜だった。

「もしかして、俺が後ろを向くのを待っていたのか？」

その問いに、朔夜は少し考えた後、人差し指で入口の戸を指す。

「鬼頭先生が亮さんを引き摺りながら入って来て、私に齒向かう時は勝ち目のある時にしろ、そうじゃないと霧島のようになるぞー、って言った後に、亮さんを圭吾さん達に運ばせていました」

「そうか、圭吾が……。達って事は、他の奴も運んだって事だよな？　それじゃ、後で礼を言っておくかな。圭吾以外に」

「だ、駄目ですよ！　ちゃんと圭吾さんにも礼を言わないと」

朔夜は必死に、しかし声を殺して言った。

「いや、冗談だ。冗談」

それにしても鬼頭の奴、俺を引き摺って来たのか。

……って、あれ？　引き摺った？

「……あ」

？引き摺る？という行為をした際の代償。
それに気付いた。

「ああああああああああああっ！！！！」

俺は、大声で叫びながら立ち上がって素早く制服を脱ぎ、背中の部分を見る。

目に映ったのは、埃などのゴミを大量に付けた、哀れな制服の姿だった。

チョークの欠片でも落ちていたのか、チョークで描かれたような白い跡まで付いている。

な、何て事を……。

「あ、あの……亮さん？」

朔夜の、恐る恐る問う声で我に返った時、思い出した。
今が授業中であるという事を。

「お？ 珍しいな、霧島。それじゃあこの問題、解いてくれ」

本当、俺は運の悪い日はタイミングさえも悪いな……。

教師が丁度問題を出している時に、大声を出して立ち上がるとは。その大声のせいで、教室内の全ての視線が俺に向けられている。中には、クスクスと笑っている奴の姿も見える。

「あ……えと……」

「お！？ まさか、授業中にずっと眠っていたのに答えられるのか！？ よっ、優等生！！」

外野の圭吾がうるせえ……。

「あ……分らない、パスで……」

そう言った瞬間、教室内に笑い声が響き渡った。

「お！ これはまさかの思わせぶりか！？ 発展だな？ ここから発展するんだな！？」

「わかりません……と、見せかけて！ つて、発展するんだよな！？ 霧島！」

「うるせえぞお前ら！！」

俺がそう大声で怒鳴ると、笑い声は更に増す。
畜生、顔が熱い……。

「分からないなら立つな。それじゃあ、改めてこの問題は……五月蠅かった本田な。同じく五月蠅かった和津多は次の問題だぞ」

「うわあああ！！ まさかの展開ツスカ！？」

「そりゃ無いですよせんっせーい！！」

突然選ばれた圭吾は、頭を抱えて後ろに仰け反った。
和津多も同じ様な反応だ。

ざまあ見ろってんだ。

次いで、そのまま授業が再開される。

そんな中、俺は再度、背中の汚れを見て啞然としていた。

……こんなの、夢月が見たら……。

いや、理由を話せばなんとか……なる訳が無い。

遅刻しそうになった状況で教師に文句を言った拳句、抵抗しようとして返り討ちに合ってこうなった、なんていえる筈が無い。

どう考えても自滅行為、自業自得だ。

「大丈夫ですか？ 亮さん」

「大丈夫だったら、急に立ち上がったりはしないって」

朔夜が心配しているのは分かるが、実際起こる恐怖はその数十倍

だろう。

「すみません。気付いていたんですが、なかなか言えなくて」

「気にするなつて。叫んだのは俺だしな。それよりこれ、どうすっかなあ……」

その一言に、朔夜は何かを思い出したかのように、あっと小さく声を上げた。

「そういえば先程、葵ちゃんが来てましたよ？ それで、朝はバスに乗れなくてごめんねつて言つて出て行きました」

「葵の奴、遅刻だったのか。つてか、それだけの為に来たのか？ あいつ」

「いえいえ。その時に、亮さんの制服の汚れを見て、洗濯は得意だからお弁当のお礼に綺麗にしてあげる、とも言つてました」

「そうか……つて、なにい！？ 本当か！ 嘘じゃないんだな！？」

「私が亮さんに嘘をついて、どんな得があるつて言うんですか？」

朔夜は少しムツとした表情を見せた。

少々、頬を膨らませて。

「確かにそうだな。……いや？ この前の仕返しという線があるなほら、授業中の」

「しょんな！？ ひ、酷いですよ……」

彼女の表情は一転して、雲がかかったかの様に暗くなった。

「まあ、そんな事は置いといて」

「そ、そんな事……」

今度は涙目交じりで、俺に何かを訴えかけるように見つめてきた。
……こういう新鮮な反応があるから、こいつを弄るのが楽しく思えてくる。

だが、さすがにこれ以上やると、本当に泣き出しそうだから止めておこう。

実際、そんなに心の弱い奴じゃないだろうが、思わぬところで姉御に制裁を下されるかもしれない。

もしかしたら、真佑美かもしれないしな……。

「冗談だ、冗談。だから泣くなつて、な？」

だが、その言葉と同時に朔夜は俯き、それ以降何の反応も見せない。

あれ？ 何か、予想していた最悪の事態？

「えと、……ごめん」

言った瞬間、彼女はゆっくりと顔を上げた。

その表情は先程までとは違い、嬉しそうにニヤニヤしている。

「亮さんが珍しく謝りました〜！ これは貴重です!!」

「はい！？ ……い、一本取られた……」

ある意味、危険な奴だなこいつ。

実は、頭も凄く良かったり？

ってか、俺が謝るのが珍しいとか、失礼にも程があるぞ。

「まあ、とにかくだ。葵が言ってた事は本当なんだな？」

「はい。お昼になったらB組まで来て欲しいそうです。お弁当を持つて」

あいつ、そういうところには抜かりがないのな。
とりあえず、昼になったらB組に行ってみるか。
本題は、それからだな。

「それと朔夜、お前も来いよ」

その一言を聞いた朔夜は少し驚いた表情をし、だがすぐに喜びの
笑みに変わった。

彼女は、もちろんです！　　っと言いながら目を弓の様にして、良
い笑顔を見せてくれた。

第17話：俺達の昼はいつも宴

時刻は十二時五十分を回っており、今は昼休み。

教室や廊下には、多数の生徒による会話や笑い声が聞こえ、スピーカーからは放送部が選んだ音楽が流れている。

そんな中、俺と朔夜、圭吾は、葵の居るB組に向かっていった。もちろん、夢月の特製弁当を持って。

そして、すぐに着きましたB組。

教室の戸を開けると、葵が待つてましたと言わんばかりに、全速力で走って来た。

「さっすが亮！ 約束通りに持って来てくれたね！」

言いながら、葵は俺が手に持っている弁当を持って行こうとする。だが、簡単に渡す訳にはいかない為、手に力を入れて離さないようにしておく。

「ちょっと待て。その前に、やる事があるんじゃないのか？」

「へ？ …… あ、制服の事だね。でも、お弁当が先だよ！ 腹が減っては洗濯は出来ぬって言うじゃん？ ささ、離して離して」

「戦は出来ぬ、な。 分かったよ。約束だしな」

俺は仕方無く手の力を緩めて弁当を離すと、葵はよっぽど強く引っ張っていたのか、バランスを崩しそうになった。

「わ、馬鹿！！」

とっさに彼女の手を掴んで引き止めようとするが、その瞬間彼女は俺の手をヒラリと避けて、更に、えいっと言って足を引っ掛けて

きた。

それにより、完全にバランスを崩した俺は無様に倒れ込んだ。とっさに体勢を立て直したが、尻餅をついてしまった俺を、葵は指差して笑った。

「にやははっ！ わ、馬鹿！！ だつてさ、にやははははー！」

その笑い声と共に、後ろに居た二人も笑い出す。

特に圭吾は、大笑いと来た。

つてか、転びそうになったのは演技だったって訳か……。

溜息一つつき、制服についた埃を払いながら立ち上がって、笑い続けている葵の額にデコピン一発。

「イタイツ！ もー、何かあるとすぐにデコピンなんだからっ」

「その言葉は、自分が悪くない時に使うもんだ。お前に使用権はない」

はつきりと言い切つてやると、葵は額を片手で軽く押さえながら、頬を膨らませて、うっつと唸り始めた。

だが、そんな彼女を無視して弁当を取り上げたのは、圭吾だった。

「はい、そこまで。笑ったせいで余計に腹減つてんだ、もう飯にしようぜ飯」

言う圭吾の腹の虫は、少し離れていても充分聞こえた。

授業中だと、皆の視線が腹を鳴らした奴に集中する程の音量だ。

「そうだな。とりあえず机を動かすか。朔夜、お前もこっちへ来て手伝ってくれ」

「あ、はい！」

未だに肩を小刻みに震わせて笑っていた朔夜は、急いでこちらに向かってきた。

その後、机を二つ向かい合わせにし、その周囲に椅子を四つ置いて準備完了。

圭吾がその机の上に弁当を置くと、葵が素早く蓋を開ける。見事な連携プレーだ。

ちなみにその弁当は、四段重ねの重箱みたいな物だ。

正月によく目にする、御節の入った弁当箱が、正にそれである。

「わぁ！ 今日美味しくそう！」

葵は弁当を覗き込むなり、目を輝かせて歓声を上げる。

……それにしても夢月の奴、良く四段分の具を作るなあ。

弁当抜きを耐え抜いた、圭吾へのご褒美かな。そう思いながら、俺達は割り箸を構え、メンバーを改めて確認する。

右隣に朔夜、そして向かって右が圭吾、左が葵だ。

その場に居る全員に、緊張が走る。朔夜を除いて。

皆が割り箸を構え、互いに先手を待った。朔夜を除いて。

刹那、一人分の割り箸が、重箱へと伸びた。

それは、葵の割り箸だった。

先手は葵。そしてそれを合図に、開戦だ。

皆、自分の陣内（手が届く範囲）の具 獲物を死守しつつ、他の者が狙っている獲物を奪い取りに動く。朔夜を除いて。

「遅いぞ朔夜！ 世の中弱肉強食、弱き者は食うべからず！ その玉子焼き貰った！」

「ああ！ 今取ろうとしてたんですよ！？」

朔夜は抗議の声を上げるが、この戦場では無意味だ。

現に、圭吾と葵の方を見れば、四段ある重箱を一つずつ解体しつつ、互いの陣内にある獲物を取り合い、死闘を繰り広げていた。

だが不意に、葵が俺を見てニヤリと笑みを見せた。

「……遅いのはどっちかな？ 陣内を見てみなよ？」

「ん？ って、ああ！ 葵お前、俺の春巻きを！！ ……っと、見せかけて、それは圭吾の食いかけだ」

「ぶふうーっ！！」

「おいしいっ！ いくら俺のだからって、吹き出す事ないだろ！」

盛大に春巻きを吹き出して、それをポケットティッシュで拭いている葵に圭吾は大声で突っ込みを入れるが、彼女は完全無視だ。

とりあえず、脳内テロップで「この後春巻きはスタッフ（葵）が美味しく頂きました」と表示させて右隣を見ると、朔夜が気配を消して、圭吾の陣内にある獲物を獲得していた。

「意外と恐ろしい子なのな、お前」

「ようは慣れ、です！ 油断していると、圭吾さんの食べかけを亮さんの陣内に仕込ませますよ！？」

「いや、食いかけかどうかは見りや分かるもんだろ」

「おいおい、俺の食いかけが毒扱いになってるところを突っ込めよ」

訳の分からん声が聞こえた気がするが、無視しておく。

しかしその瞬間、もの凄い殺気が来た。

それは、圭吾の居る方向からだ。

咄嗟に俺は、その源を箸で掴む。

刹那、

「掛かったな！ 箸渡しだ！ ルール違反のお前は一旦休みとなる！！」

言われ、箸の先端を見ると、圭吾の箸が掴んでいる具を俺も掴んでいた。

「……阿呆。これ、お前も同罪じゃねえか。それに、だ。そんな事言ったら、圭吾の方がルール、じゃなくてマナー違反だぞ？　なあ、朔夜」

「刺し箸、寄せ箸、二人箸、空箸、こじ箸、叩き箸、指し　」
「すみませんでした。もう言いません！」

言いながら、圭吾は額を机に押し付けて、何度も謝り出した。
……こいつは、何で毎回自分が不利な事を唐突に言い出すんだろ
うか。

何だよ、ルールって。

「それにしても、凄いな朔夜ちゃん！　お箸のマナーを知ってるなんて！」

いつの間にか戦場が停止している事は気にせず、俺は左前に居る葵が目を輝かせているのを見ていた。

しかし、そんな彼女の言葉に朔夜は、いえいえっと言いながら両手を振り出す。

「ちょっと興味があつて覚えてみただけですよ！　それに、偉そうに言っちゃいましたけど、私だって違反は少なから　って、何さ
り気無く私の陣内から取ってるんですか、亮さん！！」

「甘いぞ朔夜！　世の中弱肉強食、弱き者は　」
「聞きましたよそれっ！　でも、そんな言葉で誤魔化しても無駄です！」

どうやら、朔夜は本気になったらしい。

その瞬間に、再開戦となった。

笑い声や叫び声が、教室内に響き渡る。

……俺と圭吾にとって、こんな馬鹿騒ぎは中学以来だ。

B組の皆さんには、さぞかし迷惑だったろうな。

内心で、深々と謝っておこう。

昼食後、俺と葵は体育館の裏手、グラウンドの近くにある水道で、制服を洗っていた。

もちろん、俺は一切作業に参加しておらず、洗っているのは葵だけだ。

それにしても手際が良く、準備も良い。

まさか充電式外部バッテリーをセットにしたヘアドライヤーを持つて来ているとは。

などと思っている間に彼女の洗濯作業は終わり、俺に制服を両手一杯広げて見せた。

「じゃっじゃーん！ 見た目もスツキリ、心もスツキリだよっ」

「一昔前のCMみたいなセリフだな…… ってか、確かにスツキリしてるな。関心したよ」

褒め言葉を言つてやると、ヘアドライヤーで乾燥作業をやつていた葵は急に勝ち誇つた表情で、フフーンツと鼻で笑つた。

「家での家事はほとんど私がやっているから、これくらい朝飯前なんだよ。……制服は普通に洗えないから、特殊な洗剤使つちやつたし、副作用的な何かが起こるかもしれないけどね……」

何だ？ 最後の呟きは。

「つて、家事全般やつてるんなら、自分で弁当作つて来ればいいんじゃないのか？ そうすりゃ、昼食が増えるしな」

「りよ、料理は苦手なの。異常な程に……」

「なんだ、そうだったのか。キッチンに立つたら、鍋が爆発とかするのか？」

「……え？ ……何で鍋が爆発するの？」

……あ。

墓穴掘つたああ！

その内心の言葉と同時に、悲鳴も上げておく。
もちろん内心で、だ。

「ねえねえ、なんで爆発するの？ 詳しく教えてよ」

ニヤニヤ笑いながら、下から上目遣いで俺を見る葵は、ここぞとばかりに問い掛けて来た。

ええい、まさかこんな初歩的なミスをするとは……！

全部圭吾のせいだ、きつとそうだ。

「そ、そんな事より、制服の乾燥終わったのか？」

「も、誤魔化しちゃつて。……まあいつか。また今度詳しく聞か

せてね。　　はいつ、良い感じに仕上がったよ」

「あ、ああ、ありがとな。いやはや、助かった」

「いいのいいのっ！　それより、そろそろお昼休み終わっちゃうよ」

言われ、そうだなっというしながら俺は、受け取った制服を羽織ってボタンを留めながら、先に歩き出した葵の後を追った。

そして彼女の横に並び、ふと思いついた事を聞いてみる事にする。彼女が昨日、俺に言った言葉についてだ。

「……そういえば、昨日の放課後に言った事って、どういう意味なんだ？」

その問いに彼女は小首を傾げ、まるで頭上にクエスチョンマークが出ているかのような表情をした。

「昨日の、放課後に？　えと、……何か言ってたっけ？」

「おいおい、とぼけ　　っておい、ちょっと待ってっ！」

急に駆け足で俺と距離を開けた彼女は、制止の言葉に反応し、こちらを向いた。

表情は、満面の笑み。

「早くしないと遅れるよー！」

その無邪気過ぎる笑顔を見て、聞くのが面倒になった。

……また、今度でいつか。

内心でそう呟きながら腕時計に目をやると、時刻は既に一時を過ぎていた。

確かに、急がなくてはいけない時間だ。

俺は走って葵に追いつき、教室へと向かった。
途中、制服の襟から漂う洗剤の香りが、僅かに俺の鼻を刺激する。
悪く無い香りだな……と、内心で呟いておく。

第18話：忙しく、騒がしく、楽しく

創立記念祭の前日である金曜日。

この日は一日中、本番を明日に控えているが為の準備らしく、授業は無しだ。

その分、準備とやらが忙しい訳だが……。

ちなみにC組は、結局放課後に残ってやる生徒が二日目から増え始めた為、なんとか二日で三日分を終える事が出来た。

つまりは、今日の作業が残り少ないという事であり、三時間程で終わった。

よって残るは最終調整だが、それは各部活が利用する模擬店などに必要な物を設置するというものであり、僅か十分程度で終了した。その為、俺と圭吾は自由時間を利用して、今は屋上へと来ている。

「それにしても、この学校の創立記念祭は大規模だな。おかげでヘトヘトだぜ」

「たった一日の為であっても、成功させようと全力を出す、か。良い方針じゃないか、そういうの」

「まあ、そうなんだけどな。けどよ、やっぱり規模がでか過ぎるって」

圭吾はそう言いながら、先程、彼が自販機で買って来た炭酸飲料を開けて、一口飲む。

ちなみに俺も、パシリで もとい、頼んで買って来て貰った炭酸飲料を片手に持っている。

「……ぷはー！ この一杯の為に生きているんだあ」

「黙れ、お前はおっさんかっ。……ってか、お前は余り働いてなかっただろうが」

そう文句を言い、俺も炭酸飲料を開けて、一口飲む。

「ぶはっ！ 何だこれ！？ めちゃくちゃ苦いぞー！」

豪快に噴出す俺。

仕方ないだろう、異常な程に苦いんだから。

確か、これは圭吾が買って来た物だから……。

つと、それに気付いて圭吾の方を向くと、腹を抱えて笑っていた。

「ぶはっ！ だってさ、ははははは！ はら、腹がいてえ！ はははははっー！」

「やっぱりお前の仕業か……。今度は何だ？」

「ははは ン？ その事か？ それは無糖炭酸飲料？ 元氣百倍炭酸君 ニガリ君混入ver.？だ。普通の飲み物みたいなラベルに騙されて、お前と同じような反応をした奴が続出したそうだ」

た、炭酸君って……。

しかもニガリ君混入って何だよ、本当。

そう思いながらラベルを見ると、圭吾が好きそうな萌え系とかいう部類のキャラクターのイラストがプリントされていた。

何故か猫耳が生えた金髪巨乳の美女が、「お疲れにゃん！」と言っているイラストだ。

「な、なあ圭吾。……その犠牲者って普通の飲み物みたいな、とかじゃなくてこのイラストに釣られて買ったんじゃないか？ っ
て、ん？」

俺が半目で圭吾に問い掛けている途中、滅多に来客の無い（と思われる）屋上に、人が来た。

入口の重い扉を開けて来たそいつは、日向だった。

「……嬉しいと思ったらお前らか。笑い声の一つ下の階段まで聞こえていたぞ」

「よう、日向。突然なんだが、コレ飲んでみないか？」

言って、俺は手に持っていた炭酸君を差し出す。

ちなみにラベルは、手で器用に隠しているが為に、怪しまれはしないだろう。

近寄って来た日向はそれを無言で受け取り、何一つ疑う事無く一気飲み。

ゴクリツと、彼の喉が快音を鳴らした瞬間、

「ぶはっ！ く、ぐふっ。……チツ」

反応は良かったが、舌打ちされてしまった。

ちらりと横に居る圭吾を見れば、必死に笑いを堪えている様子。

一方、日向は腹が立ったのか炭酸君をフェンスの外側に向けて投げ捨て、出口へと向かった。

そして、扉のドアノブに手を掛けようとしたその時だ。

「っ！？」

「あ。……あゝ」

扉が突然、しかも勢い良く開き、日向に直撃した。

俺と圭吾は、そんな彼を見て思わず声を揃えた。

……一歩横にずれていたのが運の尽きだったな、日向。

そして、その犯人である扉の向こう側の奴は、半開きになった扉の間から顔を覗かせた。

って、葵じゃねえか。

「亮介いる？」

青髪のツインテールと、相変わらずの、まるで新人芸人がやりそうなボケは、間違いない。

その新人芸人は俺と目が合つと、笑顔で大きく手を振った。

「見つけた見つけた！ ヤッホー」

「何がヤッホー、だ。それに、俺は亮介じゃない、亮だ。……そんな事よりお前、開けた扉が直撃しちまったそいつに謝つとけよ？」

「え？ 直撃？ 何の話？」

どうやら、まだ気付いていないらしい。

視野が狭いのか？ あいつは。

とりあえず、面倒臭いが一応、日向を指差す。

すると日向は、やっと動き出し、額をさすりながら半開きの扉を全開にした。

「ありや？ ドアが勝手に おわあ！ ご、ごめんなさい！ まさかドアの向こうに人が居るとは思わなくて！」

慌てふためきながら謝罪する葵を見る日向は、しばらくその状態を保ち、そして額をさすっていた手を下ろした。

「気にする事は無い。単なる事故だ」

日向はそう言い残して、屋上を出て行った。

その途中、一瞬だったがこちらを、いや葵をちらりと見て、何か安心したかのような笑みを浮かべたのが見えた……気がする。

なんか、不気味だな。

じゃなくって。……どういう意味だろうか？

そう思ったのとほぼ同時に、圭吾が俺の肩を数回、軽く叩いた。
振り向けば、こっちは本当に不気味な笑み。

「見たか？ 日向のあの表情。ありゃきつと、恋って奴だぜ……！」
「あ……お前の脳内はいつでもハッピーハッピーだな。第一、あの表情はそんな意味じゃないと思うぞ」

小声で多分、と付け足しておく。

「じゃー何だよ？ お前には分かるっつーのか？」

「そうだな……あの表情は」

「葵選手、走る走る！ ホームまで間に合うか!？」

俺の言葉を遮るかの如く、どこからとも無く訳の分からん実況が聞こえてきた。

つと、次の瞬間、

「スライディング！ セーフ!!」

「うぐおっ!？」

脇腹に、棒で思い切り突かれたような痛みが来た。

それと同時に体は変な方向に曲がり、その後俺は激痛で蹲った。

……しゃ、洒落になんねえ……。

「上手く滑られたなあ、葵ちゃん」

「へへへーん、これが私の実力なのだあ！」

圭吾の言葉から察するに、葵がスライディングをしたらしい。

んで、その時の足が俺の横腹に直撃した、と。

激痛で体を振るわせつつ、ゆっくりと葵を見れば、人差し指を天へと突きたてて勝ち誇っていた。

「……いつてえじゃ……ねえか……！」

怒りを込めた声で呟きながら、両手で素早く葵のツイントールごと頭を鷲掴みし、髪を思い切りくしゃくしゃにし始める。

これでもか！　とでも言う位、わしゃわしゃとくしゃくしゃに。

「ひゃあああああ！　やめ、止めてー！　ごめん、謝る！　謝るから止めてえー！！」

悲鳴を上げながら謝る葵を見て、充分……とは思わなかったが、謝罪の言葉を放った為、仕方なく手を離す。

「び、びつくりしたよ　　って、なんで亮、そんなに楽しそうに笑ってるの？」

「は？　楽しそう……？」

気付くと俺は、確かに笑っていた。

さっきまでは怒りの感情だったはずなのに。

「にやはは、亮が壊れたあ！　にやはははは！」
「う、うるせえ」

何故、俺は笑っていたのかと疑問に持ちながらも、笑い続けている葵にデコピン一発当てておく。

すると彼女は痛いじゃん、と言いながら額をさすり、そして何かを思い出したかのように、無理矢理笑うのを止めた。

「あ、そうそう。明日の創立記念祭なんだけど、皆で一緒に模擬店を見て回らない？」

その問いに圭吾はもちろん、と背後から即答。
まあ、俺も同意権である訳で。

「模擬店やイベントは各部活動や生徒会が担当だし、俺達は暇だからな。もちろん、オッケーだ」

「それじゃ、朔夜ちゃんも呼んでね！」

夢月もなと言いつけた瞬間、先程の疑問が解けた。

「そうか……夢月か……」

「え？ もちろん、夢月ちゃんも！ それじゃ、また明日ね」

手を大きく振りながら、葵は屋上を出て行った。

その姿を見送った後、圭吾は俺の肩に手を置き、立ち上がった。

「それじゃあ、俺達も行くか」

「……なあ、圭吾。さっき俺が笑ってた理由なんだがな。……単に楽しかったというのもあったんだが……あいつ、夢月に似てる感じがするんだよ」

「それで、昔を思い出したってか？ 馬鹿馬鹿しい」

俺が引き止めるかのように話を始めた為、圭吾は仕方無さそうに座り直した。

そして、肩を竦めて、呆れた表情をする。

「いいか？ 夢月ちゃんはまだ生きてるんだぜ？ 元氣百倍、生存率百パーだ。簡単に照らし合わせるなって」

「いや、そういう意味じゃねえんだ。何て言うか……無理して明るく振舞っていた頃の夢月にな……」

「ああ、あの事件の後の……退院後か」

俺はそうだ、と軽く返事をし、昔の夢月を思い出していた。両親が事故で死んだ後、しばらく入院していた夢月は、心を閉ざしていた。

だが、ある事を切っ掛けに心を開いたが、退院後の数日間は大分無理をしているように見えていた。

だから俺は、先程葵にしたのと同じように、夢月の髪をくしゃくしゃにしたりして、自然な笑顔を出させていた。

今思えば、かなり自分勝手な理由な気がするが。

それ以来、無理をしなくなったが

「いってえ！ 何だよ」

「なーにポーっとしてるんだよ。過去を無理矢理振り返って我忘れる奴には、俺の制裁チヨップが一番だ」

「うるせえ、なら俺は仕返しに踵落としを食らわせるぞ」

言いながら、技を構える為に立ち上がる。

「おいおい、意味わかんねえぞ って、ちよつと待て、とりあえずその足を下ろせって！」

「チッ、仕方ねえな。今回だけだぞ」

「いつの間にか、立場変わって無いか？ …… まあいつか。とりあえず、明日の模擬店をさっさと把握しておこうぜ」

言いながら、圭吾は制服のポケットから小さく丸められた紙を取り出した。

それを俺に見せつけながら、親指をグッと突き立てる。

「創立記念祭のパンフレットだ。用意周到だろ？」

「まるでゴミのようにここまで丸められてたら、ただ捨てるのが面

倒だったと思えねえよ」

呆れた口調で言い、圭吾の手から紙を奪い取って、破らないよう慎重に開いて、しばらく目を通す事にした。

第19話：盛大な創立記念祭

さて、創立記念祭当日。

時刻はいつもの登校時間よりも遅い、十時ちよい過ぎ。

俺は学校へと向かう為に、バス停へと向かっていた。

ちなみに俺の隣には、いつもは一緒に並んで歩かない人物が一緒に歩いている。

「今日のお祭り、楽しみだね、お兄ちゃん！」

その人物とは、妹の夢月だ。

彼女はやけに機嫌が良く、その理由を説明するには少し時間を遡る必要がある。

それは、昨日の夕方の事。

学校から帰って来た俺は、ソファアに座ってテレビを見ていた。時間的に、どこの局もニュースをやっている為、特に興味を持たず、ボーっと。

その内、天気予報が始まり、明日の天気映し出された。

明日、土曜日はどうやら、晴れマーク一色らしい。

創立記念祭は、問題無く開催か。

……っと、そうだったそうだった。

「あゝ、夢月。明日の創立記念祭だが、一緒に行くか？」

「え？ なーにいい？」

夢月はキッチンにて料理中の為、どうやら聞こえにくいようだ。
その為、もう少し声のボリュームを上げてリトライ。

「記念祭だよ、創立記念祭！ 明日あるだろ？ それを、一緒に行かないかって」

「え？ もちろん行くよ！ …… 所謂えば初めてだなあ、お兄ちゃんの学校に行くの」

「そりやそうだろ。機会が無いんだし。 あ、それと葵が、一緒に模擬店回ろうってさ」

「ええ、本当！？ やったー！」

表情は見えないが、声からして結構喜んでるのが分かった。

だからと言って、まさかフライパンを持ちながらリビングに来るとは思わなかったが。

そして彼女が俺の横に立ったのと同じ、ガーリックの香ばしい匂いが漂ってきた。

フライパンで炒めるガールック入りの飯といえば…… 晩飯は炒飯か。

「お前、葵とは一度しか会っていないのに、随分と気に入ってるんだな」

問いに、夢月は当たり前じゃん、と言いながらフライパンを持っていない方の手の親指を立てた。

その動作で、フライパンが傾く。

中身を見れば、どんぴしゃり炒飯だった。

「私の料理をとて美味しそうに食べてくれる人は皆大好きだよ！ だから、まだ会った事無いけど、前にお兄ちゃんが言ってた朔夜

ちゃんって人もねっ！」

「あゝ……そういえば言ってたな、そんな事。 ん？ 誰でも？
相手が護でもか？」

「うあ……えと、榊君は……ちょっと……」

夢月は、口元を引きつらせながら苦笑。

ま、無理も無いか。

ちなみに護という奴は、フルネームで榊^{さかき}護^{まもる}。

そいつは俺と同じ中学だった奴であり、喋り方がいちいち腹の立つライバルみたいな奴で、モテるくせに夢月にしつこく付きまとっていた為、避けたい存在となっている訳だ。

まあ、簡単に纏めると、俺と同じく訳ありな奴だ。
纏まって無い気がするが、そこはスルーで。

「……っと、そういえば、まだ料理の途中じゃなかったか？」

「あ、そうだった！ もう少して出来上がるから、待っててねー」

そう言い残して、夢月はキッチンへと戻って行った……のだが、スキップしながら戻るといふ、あり得ない行動をした為、フライパンから炒飯が器用に一粒ずつこぼれていく。

マーキングでもしているのか、妹よ……。

そう思いながら、落としている事を教えず、出来上がりを待つ事にした。

この後、夢月がこぼれた炒飯を踏んでしまったのは、言うまでも無い。

一方テレビでは、番組が終わるまでの残り一分間のフリートークで、ニュースキャスターが「お米をスリッパで踏んだ時の面倒な取り除きを、簡単にする方法を見つけたんですよー。詳しくは、私のブログまで！」などと、まるでこの状況を見ているかのような台詞を吐いていた。

余計なお世話だ。

斜め上に視線を向け、空を見ながら回想を終えると、タイミング良くバスが学校近くに到着した。

その為、俺と夢月は早々にバスを降り、学校へと向かう。
ちなみに、今日のバスには意外と一般の乗客が多かった。

飛翔鷹高校で創立記念祭があるからか、はたまたこの時間はいつも多いのか、どうかは知らないが。

どちらにせよ、学校への道のりを行く人がいつもより多いのは、間違い無く創立記念祭だからだろう。

そして、校門前に差し掛かった時、不意に夢月が足を止めた。

「ん？ どうした、夢月」

「うっん、何か盛大だなあって思っちゃって」

「盛大、ねえ……」

夢月の視線の先、校門の上にある虹の形をした看板には？私立第二飛翔鷹高等学校・創立記念祭？と、色鮮やかな文字で作られており、周囲には大量の華やかな装飾が成されていた。

手が込んでるなあ、と思い苦笑しつつ、校門を潜って生徒玄関までの道のりを歩もうとした。

だが、その先に広がっていた光景に、驚きの表情は隠せなかった。校門から生徒玄関までの僅か数十メートル間に、多数の模擬店が敷き詰められていたのだ。

途中、色々な模擬店に目を向けると、客寄せの為か大きな着ぐるみを装着していたり、コスプレをしていたりと、多種多様な姿をし

た学生の姿が見えた。

まるで、圭吾が毎年行ってるイベントみたいだな……。
コミック……なんだっけか。まあいいや。

「これで文化祭じゃないってんだから、もつと驚きだな」

「ええ！？　これ、文化祭じゃないの！？　　って、創立記念祭じゃん！」

「何でボケと突っ込みを一人でやってんだよ」

にしても、この驚きようだと、文化祭の時はもつと驚くだろうな。
ここの文化祭は見た事無いけど。

そんな事を思いながら、生徒玄関内へと入って行く。

ちなみに、創立記念祭の時のみ、校内は土足オツケーなんだそう
だ。

それを証明する？　土足・可？　という看板が、生徒用ロッカーの側
面、つまりは入ってすぐに目に入る位置に多数設置されている。

来客する方々に、靴の履き替えという面倒な事をさせない為らし
い。

故に、普段味わえない土足での校内闊歩を体感する気満々で廊下
にその第一歩を踏み出した。

そこから校内を見渡せば、生徒玄関付近だけでもたくさんの人が
おり、その中にはイベントや校内模擬店の宣伝をしている生徒がち
らほら見える。

だが、某テーマパーク程混雑はしていない為、難無く歩く事が出
来た。

「ねえ、階段はどこ？」

「あゝ、そこを曲がったらすぐだ」

言いながら、俺はもう少し行った所にある右への曲がり角を指で

指し示した。

すると夢月は、駆け足で階段へと向かって行った。
やれやれ、せっかちな妹め。

肩を竦めながら、内心でそう呟き、俺も後を追おうとする。

だは、彼女が角を曲がった瞬間、きゃっという声が二人分聞こえ、同時に夢月が曲がった角から尻餅について俺の視界に戻って来た。

「……お前、何やってんだ？」

「だって、急にぶつかっちゃったんだもん」

「ぶつかっちゃったんだもん、じゃねえよ。立てるか？」

問うと、夢月はその簡単に折れてしまいそうな細い腕をこちらに伸ばして来た。

俺は仕方無くその腕を掴み、立ち上がらせる。

「もーん、なんて伸ばしてないよ。それ以前に、お兄ちゃんの裏声、気持ち悪い！」

「気持ち悪いとは失礼なっ！ 滅多に出さない声なんだから、驚くだけにしとけ」

「寄らないで〜けたもの〜」

「人聞きの悪い事言わないで下さい」

言いながら苦笑し、夢月と衝突した相手の方へと向かう。

角を曲がれば、ゆっくりと起き上がっている女子生徒の姿が見える。

「わりいな、妹が迷惑を掛け　　って、ん？」

「すみません、私が余所見を　　あれ？」

姿と声を聞いて疑問を持ち、顔を見合わせる。

それは、二人とも同時の動作。
ってか、

「朔夜だったのか！」 「亮さんですか!？」

お前はトラブルメーカーかよ……。

いや、俺がそうなのか？

などと思いつながら、朔夜に手を伸ばす。

すると彼女は、差し出した手を見て首を傾げるが、すぐに何の為
の手なのか分かったらしく失礼します、と言いつつ慌てて手を掴
んで立ち上がった。

こいつの腕も、夢月と同じ位細いな。

「す、すみませんでした！」

「いや、誤る相手は俺じゃなくて、こいつだ」

言いながら、夢月を指差す。

すると朔夜は、今以上に慌てて夢月の前まで行き、何度も頭を下
げて謝った。

「本当にすみません！ ぶつかってしまったのに、謝る相手を間違
えるなんて」

「別に気にしないでいいよお、お互い怪我も無かったんだし」

夢月は笑顔で、広げた手を数回振り、否定の意を表す。

ぱっと見だと、どっちが年上なのか分からない光景だな。

「えと、朔夜ちゃんだっけ？」

「え？ あ、はい」

朔夜は突然、初対面の人に名前を呼ばれた為、戸惑いながらも返

事をした。

まあ、朔夜には妹の話を弁当の事以外何一つしていなかったから、心当たりさえも無いだろうな。

「えと、始めまして。私は亮の妹の夢月って言うんだよ。よろしくね！ 朔夜ちゃんの事は、お兄ちゃんから聞いてるよ」

「ええ！？ 亮さんが私の事を！？」

「何故頬を赤らめる、頬を。話って言っても、お前が夢月の弁当をおいしそうに食べてくれたぞとか、話しやすい奴だ、とか」

「天然っぽいだとか、からかいがある、とも言ってたね」

頬を赤らめていた朔夜表情は、俺の言葉を聞いて明るくなり、夢月の言葉を聞いて暗くなった。

表情の変化が激しい奴だな。

「……そういえば、何で降りて来てたんだ？ 確か、集合場所は屋上だった筈だが」

「それは、屋上から校門辺りを見ていたら、亮さんを見つけたんですよ。だから、お迎えに行こうと思ひまして」

またしても表情が変わった朔夜は、笑みの表情で事情を説明してくれた。

なるほど納得。

そう思った丁度その時だ。

ポケットに入っている携帯が、着信音を鳴らしてメールが着た事を報せた。

俺はそれを面倒臭く思いながら取り出し、開いてメールを確認する。

「圭吾からだ。……遅いぞ、早く来い！ だそうだ」

言って夢月を見ると、彼女はじとーとした目で俺を見ていた。
不愉快である。

「……何だよ？」

「お兄ちゃん、まだ着信音が初期設定の固定音1なんだね、と思つて。ほんつと、昔っからどーでもいいところが地味なんだから」

「う、うるせえな。着信音なんて」

「確かに地味ですね……」

「ぐっ」

二対一とは、卑怯だ！

一体全体、俺にどんな着信音を選べと言うのだ、この二人は。そう内心で訴えかけていると、不意に夢月が拍手を打った。

「それじゃあ、次に私が近くに居る時、着信音が鳴ったら別の音になつてゐる事を心がけてねっ。タイムリミットはそれまでの期間！」

決定だよ、と笑顔と言う名の先払いの報酬を俺に見せ、朔夜の手を取って階段を上り始めた。

……本当、主権を握り逃げするのがお上手な事で。

短い溜息をつきながら、内心でそう呟く俺は、携帯をマナーモードに切り替えて二人の後を追う事にした。

第20話：安息の中の悲劇

階段を上っている間、校内スピーカーからはCMでよく聞く音楽が流れていた。

そして、途中で通る各階の廊下からは笑い声や叫び声、活気のある客寄せの声や大当たり、という声と共に聞こえるベルの音など、多数の音が混じり合って俺の耳に流れ込んで来ている。

実に楽しそうだ。

だが、俺のポケットからはそれらの音を掻き乱す不協和音と言っても良いくらい、バイブの振動音が煩い。

携帯にメールが着たのを報せるのは、少し休憩して良いですよ、と携帯に言うという訳の分からん行動を取りたくなる程、頻繁にだ。どうせ相手は圭吾だろうから無視し続けているが、屋上で会ったら仕返しに完全無視してやろうと心に決め、階段を上り続ける。

そして、階段を踏み切って辿り着いた場所は最上階、屋上への入口前だ。

内部と外部を隔てる扉のドアノブを捻り、開け放つ。

その瞬間、圭吾の怒鳴り声が降り掛かって来た。

「おっそーい！ 遅すぎるぞ！ 何回メールしたと思ってるんだ！」

見渡せば、近くของフェンスに背を預けて寄りかかり、腕を組んでこちらを見ている姉御の姿と、横に居る夢月を見つけて、満面の笑顔になった葵の姿が見えた。

「あれ？ 姉御、生徒会は仕事が無いのか？」

「ああ、今日の出店はほとんどが部活中心じゃ。生徒会メンバーは、生徒会長と学年代表以外、暇を貰っておる」

「あれ？ 俺は無視かな……？」

煩い蠅を無視していると、奥に気になる人物を見つけた。
それは、フェンスにもたれ掛かって街の方を見ている日向だった。
まず疑問に思ったのは、何故ここに居るのか、という事だ。
故に、少しの間考え、そしてある結論に辿り着いた。

「……もしかして日向、お前も参加したいのか！」

大声でそう言うと、日向は無言で俺を睨んで来た。
かなりお怒りのご様子。

そして暫くすると、何事も無かったかのように、街の方へと向き直した。

あいつには、触れない方が良さそうだな。

とりあえず溜息をついておき、皆の居る方へと向くと、パンフレットを中心に円の形になって、今日の計画を立てている真っ最中だった。

おいおい、俺だけ仲間外れかよ。

「それじゃあ、最初は卓球部の団子って事でけってーい！」

葵の言葉に、夢月と朔夜は声を揃えてさんせい！ と、元気良く答えた。

同時に、勢い任せに飛び上がった圭吾は、やる気満々な表情。

……何をやる気で満々になってんだ？ あいつは。

そんな思いが聞こえている筈はもちろん無く、圭吾に続いて立ち上がった女子三人は、駆け足で階段へと向かって行った。

一方俺は、そんな四人の後ろ姿を見て吐息を一つ。

「元気の良い奴らだなあ……」

「それが、あ奴らの面白いところじゃろっ」

「……姉御、あんたって本当、人を驚かせるのが上手いな」

いつの間にか隣に立っていた姉御に、思った事を直で伝えると、彼女は横目で俺を見た。

口元が微妙に釣り上がっており、僅かな微笑を見せながら。

「わしが何時、お主を驚かせたか？」

「始めて会った時。廊下で。急に回し蹴りした」

箇条書き三行分で簡潔に伝えると、姉御はそうだったな、と言って笑いながら、階段へと向かって行った。

心底思うが、不思議な人である。いやマジで。そんな事を内心で呟きながら、俺もその後を追った。後を追うのは、本日二度目だな。

屋上を出発してから、既に二時間経っていた。ちなみに、現在は午後一時三十分頃。

俺達はほとんどの模擬店を回り終えており、今は教室棟二階の空き教室に設けられた休憩室の一角で休んでいた。

「いやあ、それにしても今日一番驚いたのは、私が最初に行こう

って提案した卓球部の団子のお皿が、ラケットだった事だねえ」

「いやいや、ライフル射撃部の射的の銃が本物だった事だろ。立ち方、持つ姿勢、撃ち方を親切に教えてくれたしな」

「葵ちゃん、反動でこけちゃってたしねっ。本当、蛍光灯が割れただけで済んで良かったよ」

「逆に言えば、蛍光灯に当たっちまう程の射撃力の無さに笑わされるよ、俺は」

「う、五月蠅いよるさーい！」

圭吾と葵、夢月がとんでもない話をしているのを苦笑しながら聞いていると、姉御が微笑しながら話し掛けて来た。

「お主、そのような物を獲得するとは、中々良い運を持っておるのお」

「何故か、無駄な所で運を使っちゃった気がするの俺だけか？」

彼女が言う？そのような物？とは、卓球部の団子屋の次に行った文芸部の籤引きで、俺が当てた一等の巨大な犬のぬいぐるみだ。

ってか、これのせいで二時間近く羞恥心で一杯一杯だったと言うのに、何が良い運か。

「そんな事を言うのはこの口か！ この口か！」などと、ふざけるつもりは微塵も無い為、代わりに濃い苦笑をしておく。

「猫だったら良かったんだがな……生憎、置く場所が無くて絶賛お困り中だ」

「ねえねえ、要らないのなら貰っても良い？」

不意に問い掛けて来たのは、葵だった。

彼女はしゃがんで、下から上目遣いで俺を見て来ていた。

「ああ、別に良いぞ。だが……」

言葉を止めて、ぬいぐるみと葵を見比べる。

「お前、ちっちゃいからなあ。持てるか？」

「ち、ちっちゃいって言わないでよぉー！ そりゃ確かに、一五センチしかないけれども……大丈夫だよ！」

ムキになって吼える葵は、俺の手からぬいぐるみを引つ手繰った。そして彼女はかわいー、と言いながらぬいぐるみを抱きしめて、愛情を示すように頬擦りをした。

大分、気に入っているな。

「ふむ。こういう光景も、悪くないものじゃな。こういうのを最近の言葉で……萌え、と言うのだったかの？」

「姉御、その言葉は禁句だ、禁句。あんたが使って良いもんじゃないよ。圭吾みたいな変人しか、使っちゃいけないんだ」

「んなぁに！？ 誰が変人だ！ 誰が！！」

「ほう、圭吾のような者を変人、か。良い例えじゃのう。分かり易くて助かるわい」

「……………」

さすが姉御。

煩い圭吾を、軽く轟沈しやがった。

彼は再起不能に陥り、しばらく動けそくに無い模様と、その時だ。

突然、朔夜が立ち上がってねえ皆さん、と言いながら笑顔を見せた。

その声とほぼ同時に、皆の視線が朔夜に向けられる。

「最後に写真部で、記念写真を撮りませんか？」

彼女が提案する記念写真とは、隣の管理棟三階にある写真部の部屋にて行われている、写真部のイベントだ。

まあ、そういうのも悪く無いな。

「ナイスアイデア！　だねっ。早速行こうよ！」

夢月の言葉に、皆が賛成の声を上げる。

そして、一行はそろそろと休憩所を退室し始めた。

だが、その途中、俺は異変に気付いた。

葵が、立ち上がったから一度も動いていないのだ。

「どうした、葵。早く来いよ」

声を掛けてみるが、返事どころか微動だにしない。

自分と同じ位のぬいぐるみを抱えているにも関わらず、だ。

「おい、どうし　っ！！」

それは、突然起きた。

故に、言葉が途切れる。

一瞬、自分の目を疑ったが、現実だった。

葵の腕が、力が抜けたかのようにだらりと下がり、ぬいぐるみが無造作に落ちた。

そして彼女は、崩れ落ちるかのようにして倒れた。

一瞬の出来事。

その一瞬の出来事に、俺は反応出来なかった。

幸い、ぬいぐるみが丁度真下に落ちた為にクッションとなり、頭を床に打ち付ける事は無かったが、彼女は未だ動かない。

「……葵？ どうした葵！」

俺は彼女の名を呼びながら、傍へと駆け寄った。

「どうしたの？ お兄ちゃ え！？」

「おいおい！ どうしたんだよ葵ちゃん！」

俺の声に気付いた夢月達は、何が起きているのか分からず、後ろで驚きの声を上げていた。

そんな中、俺は葵の背中に腕を添えて抱き起こすが、彼女の目を見て驚いた。

先日の放課後に見た時と同じ、虚ろな目をしていたのだ。

……何だっつてんだよ……

内心で嘆きの言葉を呟いたのと同じ、彼女の身体がピクリと動いた。

そして、目が正常な色を取り戻す。

「……あ、あれ？ 何で私……倒れているの？」

「葵ちゃん！？ 良かった、気が付いたんだね！」

慌てて俺の反対側に来ていた夢月が、歓喜の声を上げる。

そんな彼女を見た葵は、何故喜んでいいのか分からないらしく、小首を傾げた。

「ふむ、何事も無くて良かったわい。……っと、言いたいところじやが」

姉御はそう言いながら葵の正面でしゃがみ込み、彼女の顔をジッと見据えた。

その後、軽く吐息を吐いて、苦笑した。

「顔色がまだ悪いのう。これは、一度保健室に行った方が良くもしれぬ」

「ええ！？　だ、大丈夫だよ！」

姉御の言葉を聞いた途端、葵は急いで立ち上がりクルリと回って大丈夫である事を見せようとしたが、バランスを崩して転びそうになる。

ああ、駄目だなこりゃ。

姉御の目だけでなく、俺達の目さえ誤魔化せないだろう。

「決まりじゃ。保健室に行くぞ」

「で、でも……！　記念写真を　　いたいつ！」

「無理する奴にはデコピンだ。……いいか？　お前が無理した結果ぶっ倒れて最悪入院って事になったら、写真を撮るのは先延ばしになっちまうだろう？」

けれど、

「けれど、写真はいつでも撮れるんだ。だから、今は保健室に行つて少し休め、な？」

微笑を保ったまま、葵の頭を撫でて説得を続けると、最初はでも、と反論しようとしていた彼女は、仕方無さそうに頷いた。
やっと観念したかい。

「では、私が連れて行こう。　　朔夜、夢月、共に来て貰っても良いだろうか？」

姉御の頼みに二人は、快く了解し、夢月がしゃがんで背を葵に向

けた。

どうやら彼女に、背に乗るのを促しているようだ。
負んぶしてやるって事だろうな。

葵はそれに気付いたのか、夢月の背に前から寄りかかって、腕を
首元に回した。

「……あ、良い香り……」

「ふふふ、ありがとっ」

当たり前だろう。

何たって、俺の自慢の妹だからな。

「それでは殿方には、何処かで暇をしていて貰いたい」

「へいへい。それじゃ、俺達は屋上に行ってるよ」

「お大事にね、葵ちゃん！」

俺は別れ際に片手を上げて、いつの間にか現れた野次馬を押し
けて階段へと向かった。

その後ろを圭吾は、片手を大きく振りながら付いて来る。
足取りは、少し重かった。

第21話：一日中、空腹です。

創立記念祭から二日経ち、現在は月曜日の朝。

当日に騒ぎまくってたのと大規模な後片付けによる疲れがまだ取れていないのか、身体が怠い。

そんな状態の身体を引き摺って、リビングへと向かう。

すると、キッチンに居た夢月が俺を見て、驚いた表情をした。

「あ、また自分から起きて来た！ …… 最近ずっと、自分で起きて来てるね。関心、関心！」

朝っぱらから失礼な奴だな、と思いながらもテーブルの前まで行き、カーペットの上に座る。

既に電源が入っているテレビは、相変わらず朝のニュース番組？寝起きにDON!？だ。

必ずCM明けに大音量の爆発音が流れるこの番組は、なんでも寝起きでウトウトとしている人の目を覚まさせるつもりで実行しているらしいが、迷惑極まり無い。

故に、俺は無言でテレビのリモコンを手に取り、極めて普通のニュース番組をやっているチャンネルに切り換えた。

「……ここまでの動作で、一日分のエネルギーを使った気がする……」

「それはあ朝食でも食べて、エネルギーを蓄えなさいっ」

キッチンから早足で来た夢月が、そう言って差し出して来た物は？一食分を五秒でチャージ？をキャッチコピーにした、CMで極稀に宣伝されている急速栄養補給飲料、ゲルロンゼリーだ。

名前のせいで余り売れていないというのは、言うまでもないだろ

う。

……ってか、何で朝っぱらからゲテモノばかり目にしなくてはいいかんのだ。

「……我が妹よ、これは俺の朝食なのか？」

「あはは、何言ってるの？ この時間に出される食べ物を朝食以外に何て呼ぶって言うの？」

「いやいやいや、他には無いのかよ？ パンとか、ごはん」
「無いよ。これだけ」

きつぱりと言い切られた。

絶望が、俺の心を侵食して行く……。――

俺はその心情を最大限に表現する為、わざとらしく片手で顔を覆う。

「な、何と鬼畜な妹だ。シンデレラの姉より質が悪い……。愛する兄に対してこのような粗食を朝食として出すとは……」

「って事は、要らないって事かな？」

「要ります。いえ、下さい！」

俺、即答。

多分、兄としての尊厳を失った歴史的瞬間だな。

とにかく、そんな事はどうでも良い状態の俺は、ゲルロンゼリーのキャップを開けて、一気に喉へと流し込む。

ぐっ……。最悪だ、粘土の味がする。

いや、別に粘土を食べた事があるという訳では無いが。

そう、風味だ、風味。

「うし、三秒でチャージしてやったぜ！」

「態々、親指立ててまでして、虚しいでしょ？」

「自分で言つのも難だが……同感です」

我ながら、ブルーな朝だ……。

「つと、そんな事よりだ。何で朝食がこうなつたんだ？」

「えと、土曜日に葵ちゃんが突然倒れたでしょ？ その原因を保健室の先生が栄養不足かもしれないって言ってたから、お弁当の中身をいつもより多くしようとしたんだよ。そしたらお弁当が二つになっちゃった上に、朝食の分が無くなっちゃって」

夢月は舌を出して自分の頭を左手の拳で小突いててへっ、と可愛らしく言つた。

てへっ、じゃねえよ……。

俺の朝食……。

「……ま、流石は我が妹だ。友達への気遣いの為に兄を捨てたのなら、今回は許してやろう」

「お兄ちゃん、それって何様だよ」

俺様だ、などと古臭い返事は敢えてせず、無言でテレビへと視線を移す。

やがて、出発の時間になると、ソファの横に立て掛けたままになつている鞆に水筒と重箱弁当、ついでも小さい弁当を入れる。

本当、置き勉って奴は便利だな。

鞆が嵩張らなくて楽ちんだ。

「それじゃ、そろそろ行くわ」

「うん、行つてらっしゃい！ 葵ちゃんによろしくねっ」

夢月からの頼まれ事に俺はおう、とだけ答え、玄関にて靴を履き、

扉を開けた。

朝日が眩しいぜ、この野郎。

迫り来る空腹に耐え抜く事、約四時間。

現在は待ちに待った昼休みで、俺は屋上にて重箱弁当と水筒を横に置き、ジッと座っている。

日向は珍しくまだ屋上に来ていない為、朝のバスにて昼食を食おうと約束しておいた葵を一人寂しく待っていた。

ちなみに圭吾には、小さい弁当を与えておいたから、問題無いだろう。

「あゝ……腹減った……。大体、何だよゲルロンゼリーって。あんな物で腹が満たされる訳無いだろうに。そりゃまあ、栄養を補給するだけなのは知ってるけどよ」

誰も居ないというのに、まるで誰かと話しているかのように喋り出す俺。

空腹の余り、視界が歪み出しているからだろうか。

……俺って、意外と食いしん坊なんだな。

十六年生きて来て、思わぬ事実が発覚した事に対し、溜息しか出ない。

嗚呼……もう限界だ……。

内心でそう嘆いた俺は、ゆつくりと重箱弁当の蓋に手を添える。
と、丁度その時。

入口の扉が勢い良く解き放たれた。

その音に驚いた俺は、両手を蓋から即座に離して、代わりに天高く上げる。

「うわあああ！！ すまん、別に食おうとしてた訳じゃ……って、
葵か。 Welcome to the roof！」

俺は両手を広げて、救いの女神である葵が来たのを心から喜んだ。
ちなみに今の英文は、直訳で？ ようこそ屋上へ？ だ。

「えと……大丈夫？」

「大丈夫なもんか……。腹が減って気が狂って来ているんだ。早く
飯、食おう」

「にははは、私が遅れちゃったせいだね。ごめんごめん」

葵は自慢の笑みを見せながら、俺の横に座った。
役者は揃った。準備万端、という訳だな。

「よし……見て驚け！ 泣け！ そして歓喜を上げろ！ 我が妹を
称え、敬い、崇めろ！！」

言いながらも、つくづく思う。

俺は馬鹿だ、と。

そんな事はどうでも良いとして、重箱弁当の蓋を開き、それぞれの
段を崩していくと葵は、一瞬にして目を輝かせた。

「す、すっごーい！ 卵焼きにハンバーグに春巻きにロールキャベ

ツにタコさんウィンナーに……ああ、いただきまーす!!」

感極まっている葵は、差し出した割り箸をすぐに受け取って割り、一つずつ味わって食べ始めた。

……それにしても、中身を見て改めて思う。

夢月は凄いな、と。まるで、御節じゃねえか。

これだけの物を朝に作ったんだ、朝食が作れなくても無理は無いだろう。

俺は只々、感謝の気持ちを内心に留めておき、割り箸を割って食べ始めた。

「ごちそうさまー!!」

二人分の大声が、屋上に響き渡る。

その後、水筒のお茶を飲んで一息ついた葵は、立ち上がってフェンスの前に立ち、街の方を見始めた。

後ろ姿、ちっちゃー。

内心にて、馬鹿にした声で呟きつつ、重箱弁当の蓋を閉じた後に、俺も彼女の横まで行く。

すると彼女は、フェンスの穴に爪先を掛けて俺と同じ位の高さまで上がって来た。

だがその所為で、フェンスから上半身を乗り出すという、危ない状態になってしまっていた。

「ちっちゃいくせに、見栄張らなくて良いんだぞ?」

「うが! 失礼な! 私より小さい人なんて、たくさん居るよ!」

「ああ、小学一年生か」
「そんなにしたあ!？」

がびーんつ、という効果音が似合う驚き顔をした葵は、されどすぐに表情を変えた。

無表情へと。

そして、街の方に視線を向けたまま、俺に問い掛けて来た。

「……ねえ、もし自分の運命が決まっっていて、知っっていて。どうしても抗えないと知ったら、亮ならどうする？」

葵の口から出た言葉は、俺にとっては全く持って意外だった。
しかしながら、答えられないから言葉が詰まっているのではない、マジで。

只単に、似たような言葉が、場面が脳内で再生されているだけだ。
一瞬の間に、まるで走馬灯のように。

『未来が……先が全部、見えちゃうんだよ……。分かつちゃうんだよ、全部。だから、怖い。お兄ちゃんが、お母さんやお父さんみたいに、どっか行っちゃう……』

ああ、非常に懐かしい記憶だ。

それも、別に思い出す必要が無い記憶。

俺の記憶が正しければ、退院後の数日間、夢月が無理をしていたのが最後となった日の夜。

深夜、突然泣き付いて来た。

彼女が無理をしていた理由は、多分その、俺がどっかに行っちゃう出来事に怯えていたからだろうと、俺の中で勝手に納得した時。

『ねえ……ねえ、お兄ちゃん……。お兄ちゃんなら……。どうするの

……？』

今の夢月と比べると、全く持って別人のような振る舞い。
その時の彼女と、今日の前に居る葵が……被って仕方が無い。
全く……。

「……あ………良いか？ 運命つてのは、未来つてのは無限にある
もんなんだぞ？ 一つとは限らねえんだ。お前が見ているその先は、
簡単に変わる物なんだよ」

その返答を聞くなり、葵は顔を俺に向け、目を合わせて来た。
どうやら、驚いているようだ。

だが、その動揺があってもなお、彼女は問い続ける。

全く、お前らみたいな予知能力者だっけ？ まあ、まだ葵がそう
とは確定していないが。

そついう能力を持った奴らは……。

「どんなに頑張っても、一つしか無かったとしたら？」

どうも、見た未来をその先の真実と見て、それ以外は見ない頑固
な頭を持っているらしい。

頭蓋骨がチタン合金で出来ていて、脳がマイクロチップで制御で
もされていない限り、常人には考えられない結論だな。

ともあれ、もう言葉は決まっている。

後は発すればいいだけだ。

「………そんな時は、俺に言え。突貫工事でもして、道を無理矢理作っ
てやるさ」

それを聞いた葵は、笑った。

そりやもう、馬券が全部外れて自棄になった奴のように。

「にやは、にやははは！　そうだよな。そうして貰えると嬉しいよ！にやははははは！！」

目一杯笑った彼女は、笑い疲れたのか一息ついて、また口を開く。

「実はね……わた」

刹那、葵の言葉が途中で途切れた。

それと同時に、彼女の身体はまるで人形のように、軽々とフェンスの向こうへと傾いて行く。

一瞬、思考が止まった。否、反応が遅れた。

脳を百パーセントフル稼働して導き出した行動を、即座に行う。

俺は、翻した身で乗り出し、膝の裏をフェンスの最上部に引っ掛けながら、落ちた葵を空中でキャッチした。

その際、脇腹を掴んだというのに反応しないという事は、完全に気を失ってるな、と暢気な事を考える。

同時に背をフェンスに、肩甲骨をコンクリートの角に思い切り打ち付けたが、これは気にしない。

とりあえず、ホッと一息ついて下を見れば、寸での所に落し物防止用であるう小さな段差があった。

……これ、あつたらあつたで危ないな。

さてさて、悠長な事を考えている場合では無い。

実は昔、祖父　もとい、糞爺から死亡寸前のハードトレーニングをさせられており、かなりの体力と筋力はある……筈なのだが。

「ふぬっ……！　あ、上がらねえ……！？」

どうやら先程の食事で腹が満腹状態である上に、身体が鈍り始め

ているらしく、身体を起こせない。

そして、そんな最悪の状態に追い討ちを掛けるかのように、最悪のアクシデント。

足攣ったぁ……！

痛みを必死に堪えるが、追加要素発覚。

膝の裏が、フェンスから滑り始めている。

万事休すという言葉が一番似合うか？　こういう時。

そう思った瞬間、誰かが俺の脚を掴んだ。

多少乱暴で力加減の全く無い掴み方だが、助かった事には変わり無いな。

そして、脚を掴んでいる腕はぶつきら棒に俺を引き上げた。

同時に、救出した葵を抱え、自力で屋上に足を着ける。

数年ぶりに死ぬかと思い、命の恩人に礼を言おうと正面に居る奴を見ると、そいつは日向だった。

「ひ、日向！？　いつからここに！？」

「丁度今だ。入って来た瞬間、驚いた」

「そ、そうだったのか……ありがとな。　　って、そうだ葵！」

言った瞬間、日向の表情が変わった。

今までに、一度も見えた事の無い表情だった。

……じゃなくって、今は葵だ。

俺は急速な首振り運動の如く、抱えている葵を素早く見る。

彼女の目はまたしても虚ろな目をしており、微動だにしていない。

何だ、何なんだ。

さっきまで普通に、いや寸前まで話をしていたってのに、これか！
とにかく、急いで保健室に連れて行くしか無いと考えた俺は、葵を背負って日向を見る。

「お前は、」「俺が道を開ける！　だから、急ぐぞ！」

俺の言葉を遮った日向の台詞は、俺が言おうとしていた台詞と同じだった事に関心しつつ、日向を先頭にして一気に階段を駆け下りて行った。

昼休みのせいで廊下に群がっている生徒達を邪魔に思いながらも、走る。

背負っている小さな身体が落ちないように、しっかりと両手で支えながら。

第22話：保健室はサボりの場？

意識が覚醒すると、薬品の独特な匂いが鼻に入って来た。いや、臭いとするべきか。

薬のにおいとやらは、どちらの？におい？と認識すればいいのか迷う。

もったも、個人差という物があるのだが。

ともあれ、どうでもいい思考に発破を掛けて粉々にし、目を開ける。

どうやら俺は寝ていたらしく、パイプイスに座って寝ていた為、足が痺れている。

視界には葵が眠っているベッドの真っ白なシートがすぐに入り、そこに顔を埋めている状態である。

多少、ボーっとする頭を無理に起こし、それが先程の発破の所為では断じて無いと確定して辺りを見渡す。

とは言っても、辺り一面が白のレースで囲われている為、周囲の現状把握は不可能だったが、記憶がここがどこだかを教えてくれた。サボり常習犯の巣窟。もとい、学校の診療所こと、保健室だ。つと、それと同時にもう一つ思い出す。

確か、日向と一緒に来ていた筈だ、と。

だが、見渡しても姿が見えない限り、先に教室か屋上へと戻って行ったようだ。

とりあえず立ち上がって、ベッドを囲うレースを開け、一纏めにして隅に追い遣ってから保険室内を見渡す。

が、日向どころか他の人さえ見当たらない。

ここ担当の衛生兵は留守か、と内心で呟き、パイプイスに座り直す。

金属同士が擦れる音が響いた事に、僅かながら不快に感じながらも、未だ眠り続けている葵の寝顔を見る。

と、その時だ。

彼女がうっんつ、と唸りながら目を薄っすらと開け、次の瞬間には全開になる。

眠り姫のお目覚めだ。

「あ……あれ……？ どうして……ベッドで眠ってるの？」

「よっ、おはようさん」

「あ、竜太……何で居るの？」

「段々、亮から遠ざかって行くの……。お前、また倒れたから、保健室まで連れて来たんだ。危なかったんだぞ？ お前、屋上から落ちそうになるし」

事情を説明すると、葵はきょとんとしながら、小首を傾げる。

「……ま、また？ それで、亮が助けてくれたの？」

「ん、まあ、助けたのは俺なんだが、最終的には」

「ちょ、ちょちょちょっと待って待って！ 助けたからって、そんな、いきなりベッドシーン突入だなんて……。外道だよ、亮の人生設計！」

寝起きだからなのかは分かんが、確実に葵は暴走を始めている。その証拠に、頬を赤らめて喚き出して、拳句の果てに枕を力一杯投げつけて来る始末。

まあ、痛く無いが。

「ベッドシーンとか知らん。ってか、そんなのはどうでも良いんだ。とりあえず、礼を言うなら俺よりも日向に言えな。俺も助けられた訳だし」

「……？ 日向？」

「ああ、日向。屋上に出没する、長髪の男だよ」

パツと見て分かるであろう特徴を言つと、うゝんつと唸りを上げた葵は、急に拍手を打った。

「どうやら、思い出したようだ。」

「この前、ドアをぶつけちゃった人だね！ 次会つたら、礼を言つておかないと……。でも、亮にも言わなきゃ。ありがと！」

「あい、どういたしまして。まあ良かったよ、元気そ　ん？」

刹那、視界が暗闇に覆われた。

目元に当たる感触からして、どうやら人の手だ。

サイズと柔らかさをプラスすると、女子生徒に絞られるな。

などと目元の肌で触感し、誰であるか考えていると、無邪気な声が真後ろから聞こえた。

「だーつれだつ！」

分かる訳無かるうて。

どこぞのフォース使いじゃあるまいし。

とりあえず、目を覆っている手を掴んで退かす。

そして、後ろへと振り向くと、

「ああ、真佑美か。……つて、何でここに居るんだ！？」

「おっと、それを聞くのは野暮つてもんだぜい。一応、私は保険委員なんだっ」

何故だろう、言葉に信憑性が感じられない。

相手が真佑美だからか？

とにかく、一度腕時計に目をやると、二本の針は午後二時五十五分を示していた。

つまりは、六時間目の授業後半戦を絶賛開催中だ。

「……保険委員って肩書きを悪用して、サボりか？」

「おおおっと、人を職権乱用者扱いしない！ 私は保健室の先生に特別許可を頂いたが為に、隣のベッドにて匍匐体勢で待機していたのである！」

「つまりはここで一時間、休養を取らせて貰っているって訳か」

「ふっはっはっは！ 流石は朔夜の彼氏 もとい、フィアンセ

もとい、旦那 もとい、友達以上恋人未満！ 察しが良いねえ

」

途中途中、間違い過ぎた。

その上、人聞きが悪すぎるだろう。

最終的には、もはや面影一つ残って無いし。

俺が内心でぶつぶつと呟いているのを他所に、真佑美は腰に手を当てて、大笑いしていた。

何ともまあ、不思議な人である。

いや、変な人か。

「ねえ、亮。その人は？」

後ろから、葵の質問。

そいやあ、二人は初めて会ったんだな。

「あゝ、この人はな」

「簡単に他人の名前をほいそれと教えて良いもんじゃないぞよ？

霧島くん。ねー？ 簡単に真佑美だなんて教えちゃったら、面白く無いじゃんかね、葵ちゃん」

「あれ？ どうして私の名前を？」

突然、自分の名前を呼ばれた事に驚く葵は、小首を再度傾げた。

ってか、突っ込み所はそこか？
それより先に、突っ込みを入れるべき箇所が……。

「朔夜が教えてくれてねえ。友達が増えたって、喜んでたよ。私も、葵ちゃんみたいな可愛い子と友達になれて、嬉しいよー！ 感激。とりあえずよろしくねっ！」

まるで機関銃のように、台詞を連射する真佑美は、その銃口を今度は俺に向けた。

思わず、両手が上がる。

「そつえばきりっち。常連客になるって言うておいて、あの日以来、一度も来ていないとは何事か！ けいちゃんは頻繁に来ているのに」

「ちよつと待て。あの時、常連客になるって言ったのは圭吾だけだ。俺は、俺……は……」

最後の言葉を発する前に、真佑美の表情が見る見る内に崩れ始めた。

おいおいおい、悲劇めいた少女のような表情をするなよ……。こいつ、俺がこういう表情に弱いのを知ってやってるのか！？

「……俺は、たまに行く……」

「はいはい、今のは本音として受け取っておくよ」

「好きにしろ」

ひ、卑怯者め……。

半目で睨みながら、内心でその一言を連発していると、六時間目終了を報せるチャイムがスピーカーを通して響き渡った。

それを聞いた瞬間、真佑美はじゃあね、と言いながら片手を大

きく振って、保健室を出て行った。

全く、騒々しい人め。

とりあえず、後ろ姿を見送った後、葵の方へと向く。

「それじゃ、俺も行くわ。お前はもう少し休んでくか？」

「ん。もう動けるから、一緒に行くよっ」

葵はそう言うなり素早く起き上がり、ベッドから降りた。

そして内履きに履き替え、準備万端な彼女の頭に、俺は右手を載せる。

「お前、無理してないか？」

「んーん、大丈夫。無理はしてないよ」

「なら良いんだが……それじゃ、行くか」

そう言つと、葵は元気良く返事をして歩き出した。

ちなみに問いの理由は……止めた。

とりあえず、被ったという事だけ、呟いておく。

空が赤く染まる夕刻。

やけにしつこく鳴き続ける鳥にアホ扱いされながらも、疲れた身

体を癒す為に急ぎ足で自宅へと向かう。

そして、ようやく自宅に到着し、俺はリビングで大の字になって倒れた。

すると突然、六時の方向、キッチンのある場所から夢月の声が聞こえた。

「こら、お兄ちゃん、倒れるのなら着替えてからにしてよね！ 皺になるじゃない！」

「へいへい、了解」

やる気の無い返事をしながら立ち上がり、制服を脱ごうとした時、ふと視線がテレビの方に移った。

今は夕方の為、ニュースをやっている、のだが。

またしても見覚えのある顔が映っていた。

「おいおい、またかよ……」

つい声に出してしまうほどの驚き　いや、それを通り越して呆れてきた。

また、暴行事件のニュースで日向が映っていた。

何をどうしたら、短期間で二度も事件を起こす事が出来るのかねえ。

……明日、また聞いてみるかな。

今度こそ、聞き出したいと、そう思ったから。

そう決心した俺は、服を脱ぐ作業を再開する事にした。

第23話：今日は鬱々真っ盛り

朝。
 またしても日向がニュースに映ったのを見てから、一日経った今

バスに揺られる俺は、鬱々真つ盛りだ。

とりあえず、青空でも見上げて気分を落ち着かせようと一瞬思ったが、そういえば今日は曇りだった。

窓の外、空にはそれでもかと思せ付けるかのように、一面灰色の雲で覆われていたが為に、更に鬱になる。

鬱々を超えたな。

もう、
あゝ、醜い。もとい、見難い。

超鬱々真っ盛りの方が短縮出来て良いな。

はあ。

とにかく、灰色の空を見ている鬱が追加されるだけなので、下を見る。

眼下、道路なり。

「線……線……線……線……線……線……線……線……線……」

今度は、まるで病人のように、道路の白線を見て？線？と呟き出す俺。

俺の機嫌は、
 天気
 に左右されるのだ。

以後、覚えておいて貰いたい。

あれ？ 誰にだよ、という突っ込み、聞こえなかった？

はあ。

「ひょー、ほいつ!!」

とりあえず、訳の分からん言葉を発するのと同時に、両頬を思い切り叩き、意識を戻す。

よし、大丈夫だ。

後は空の雲が、急速に立ち退いて晴れ間を見せてくれれば万事解決だ。

ちなみに、今回も葵はバスに乗っていない。

完全に、俺一人という訳だ。

とにかく、暇な時間を潰す為、昨日のニュースの内容を整理しておこう。

今回は二回目という事で、そして飛翔鷹高校が有名校である為に、大きく取り上げられていた。

目撃者の証言によって纏められた内容はこうだ。

最初は五人組の暴力団組員が少年　つまりは日向に近寄って二、三回会話の後、突然日向が殴り掛かったそうだ。

流石に今回は五人相手に一人だった為に、日向も頬に痣が出来たらしいが、相手側は五人全員、病院送りになったらしい。

本当、中々の腕前だな、日向。

つとまあ、この事件を切っ掛けに、予想では校門前がマスコミによつて押し競饅頭状態になっている気がする。

そんな想像をしている内に、バスがいつもと同じ場所に到着した為、降りた後に早足で校門へと向かう。

だが、いざ校門に到着しても押し競饅頭が開催されている様子は無く、生徒達がいつも通りに登校している光景があるだけだ。

おいおいどうした、マスコミユニケーション。

いやまあ、別に来ていて欲しい訳では無いけれども、しかし何故、居ないんだ……？

「……まあ、考えるだけ無駄だな」

誰にも聞こえないように呟き、疑問を全て捨ておく。

一雨降りそうな空を見上げ、早々に生徒玄関へと向かった。

四時間目、鬼頭の授業。

既に後半を迎えている今現在、各自自習と黒板に大きく書かれ、鬼頭はと言うと教卓で睡眠中だ。

ほんと、それでいいのかね、担任教師さん。

そして、相変わらず授業に顔を出さない日向の席は、もちろんの事空席。

理由は多分、いや絶対、昨日の件だ。

ついでに朝、鬼頭がホームルームに来ていなかったが、何か関係はあるのだろうか。

もつとも、朝も不思議に思った、マスコミが居ない事に対する原因も掴めていない現状だ。

まあ、一生徒である俺が、そんな裏情報を知る術がある訳無いだろうが。

などと考えていると、背中をペンのような物で突かれた。後ろ、という事は朔夜だろう。

とりあえず、呼ばれたので後ろへと振り向く。

「あの、亮さん。神田さんがまたテレビに映っていましたよ？」

「ああ、知ってる。ほんと、どうしたもんかねえ……。その内、俺

も映ったりして」

「変な冗談は止めて下さいよ、もう……」

頬を可愛らしく膨らましてしかめっ面をする朔夜は、僅かに顔を傾けて上目遣いになっている。

やっぱり、鬱を吹き飛ばす為の新鮮な反応を求めるなら、こいつが一番だな。

おかげで、大量に並んだ鬱の字が、二十個も減った。ほぼ全部だ。思い、微笑してから、冗談はここまでにしておく。

「とりあえず、この後の昼休みに屋上にでも顔を出してくるわ。どうせ後二、三分でチャイムが鳴るしな」

「分かりました。それでは、今日はお弁当が無いと圭吾さんに伝えておきますか？ 多分、まだ起きないと思いますし」

「いや、その必要は無い。お前達で食っていてくれ。折角持ってきてるんだから、無駄にしたくないからな。……もしあいつと二人つきりが嫌なら、姉御でも誘えばいいしな」

「え？ そ、そうですか？ では、遠慮無く頂きたいと思います」

多少、遠慮がちに見えるのは、俺だけだろうか。

とりあえず、小さく会釈した朔夜に、鞆から取り出した弁当を渡した。

そして、チャイムが鳴ると同時に、教室を出ようとする鬼頭の下へと向かった。

真後ろに立つと、彼女は俺に気付いたのか、戸に手を掛けたままこちらを向いた。

「どうした、霧島。何か用か？」

「ああ。……日向の件なんだが、処分は決まっちゃったのか？」

記憶の冷蔵庫から一日だけ冷凍保存していた情報を取り出し、問い掛けると、鬼頭は腕を組んで困った表情をした。

だがそれも、表面上だ。

俺の目には、偽の表情をしているようにしか見えない。

今の俺には、どうでも良い事だが。

「その件か。……とりあえず、マスコミに関してはこうしようがふあふえふあああつと」

「欠伸するか喋るか、どっちかにしろよ」

「欠伸するか喋るか、そのどちらかで無いといけないのか!? ……すまん、私の年代ネタだ、忘れてくれ。とにかく、校長が何もかもを手回して押さえ込んでくれたのだが……」

はあ、と年の所為かやけに似合う溜息のつき方をした鬼頭は、肩を竦めた。

「次があると、流石に庇い切れんのだ。最悪、退学処分となつてしまつたらう」

「退学、か……。わかった、ありがとう。なら俺が、日向に話をつけてくるわ。もうするな、とな」

「ほう、それは良い考えだな。だが、ゾンビ取りがゾンビになるなよ?」

「ミイラ、だろ。ま、ゾンビの方が分かりやすいけどな。つー事は、俺は既に感染している、と」

微笑と共にそう言うと、彼女は対照的に苦笑を返して来た。

「何だそれは? それだと、行く意味が無いじゃないか」

「それじゃ、血清を探す為、屋上へサバイバルに」

「なら納得だな。ペンは要るか? ペンは剣より強し、と言うから

な」

「それは自動拳銃を見た事が無い奴しか吐かない台詞だ」

「違ういな」

鬼頭と、他愛の無い会話を自然な形で終わらせ、教室の戸を潜る。途中、彼女が俺のポケットにペンを突っ込んで来た為、すかさず抜き取って、前に行く生徒のポケットに入れた。

そしてそのまま、何食わぬ顔で屋上へと向かう。

後ろから、怒りか呆れの交じった声が聞こえたが、気にしないでおこつ。

いつもよりやけに長く感じる階段を上りながら、ああきつと鬱々だからだと結論を出した俺の足は、最上階に到達した。

そして、目の前にある扉のドアノブを捻り、開け放つ。

開けた外の光景を少し見渡せば、すぐに日向は見つかった。

いつも通り、フェンスにもたれ掛かって。

その為、俺は彼の隣まで行き、同じようにもたれ掛かった。

相変わらずの曇り空は、俺の機嫌をまたしても悪くする。

……つと、駄目だ駄目だ。どう考えても、機嫌を悪くするような状況じゃない。

とりあえず深呼吸し、日向の方へと向いた。

会話のキャッチボールを始めるか。

「……なあ、日向。昨日は何で、あんな事になったんだ？」

問うが、多分無言か回答拒否を決め込むだろう。

そう思っていた俺の予想を、日向は軽々と外してくれた。

「先に、俺から質問させてもらう。……お前と良く一緒に居た、篠塚葵とは大分、仲が良いのか？」

日向が放つ最初の一球で、いきなり魔球を投げて来た。そのボールは、完全に予想外の方角から飛んで来る。全く、質の悪いボールを投げる事がお好きなようで。まあ、いくら魔球でも取っちまえばただのボールだ。手元に入ったボールを、今度は俺が投げる。

「ああ、仲が良いぞ。馬鹿にし合える位。だが、どうしてそれを聞く？」

「あいつ、今日は欠席だったろ？ ……あれは昨日、俺が相手をした奴らの組に連れて行かれたからだ」

んん？ 正直、日向の言っている台詞の意味が理解出来ない。だから、上手くボールをキャッチ出来なかった。

……何故、そうなるんだ？

「それは、真面目に言ってるのか？」

「大真面目だ。昨日の奴らが、それを教えて来た。だから俺は、奴らを殴った訳だ」

「ちよつと待て。まず、まずだ。何でお前に教えたんだ？ お前と葵のどこに関係性があるって言うんだよ」

問いに、日向は吐息一つし、間を空ける。

その間が辛い。

知りたいという欲求が、苛々に変わりそうになる丁度その時。何かを決心したかのように頷いた日向は、言った。

「あいつは、葵は……双子の妹だ」

キャッチボールの筈なのに、投げたボールがバットで打ち返された。

第24話：嘘か、真か

雨の匂いがし始めた風が、身体に吹き付ける。

僅かな鳥肌を立てた肌が、寒いと俺に訴え掛けて来る。

雲は少しずつ濃くなって行き、今にも雨が降り出しそうな雰囲気だ。

そんな空の下で、俺は日向の言葉を聞いて、啞然としていた。脳が、混乱気味。

その状態が出る言葉は、脳内で浮かんだ物全てを吐き出しているようなもんだ。

「待て待て待て。お前は神田、葵は篠塚だ。姓が違うだろ。似てもしねえ。それに、葵がお前を知っているような素振りをしたところ、一度も見た事無いぞ？　さん付けで呼んでたしな」

とりあえず、上げられる否定用証拠はこれ位だろう。

少し勝ち誇ってみる。

そんな俺を見た日向は、少し困った表情をした。

「説明は少し長くなるが、それでも良いか？」

その声は、先程までとはどこか違う、下手したら風の音に掻き消されそうな程の静かな声。

多分、過去の話をするんだろう。

聞いて、その後俺はどうするのだろうか。

ああ、いつその事、掻き消されて聞こえなければ良いのに……。などという考えはすぐに捨て、耳を澄ませる。
今、俺が知りたいのは真実だからな。

「別に良いぞ。時間はある」

「わかった。……まずは、俺がまだ篠塚姓だった頃だ。俺はいつも、双子の葵と、どちらが兄・姉かという事を、決まった課題で競争し決めていた。勝った方が、次の競争まで年上になれるって事だ。だが、その全てで俺は負けていたが……。とにかく、これが俺達の？いつも通り？だった」

随分と、今の日向には似合わない事やってたのな。

脳内にて、プチ感想を述べていると、彼はちなみに、と言葉を付け足す。

「俺の家族は葵と親父の三人暮らしで、母親は居ない。俺達が生まれて間もない頃、病気で死んでしまったらしい」

両親を意味する二つの単語を口にする時、日向は口元を微妙に歪ませる。

俺じゃなかったら、見逃してるな。

別に見つけたところでどうという事では無いが。

「だから、親父が男一人で俺達を育ててくれた。だが、次第に性格が変わっていき、いつの間にか始めていた金貸しの仕事の所為で、遅い帰りの後は怒声と暴力。この組み合わせがずっと続いた。俺はずっと親父を避けていたんだ」

だから、

「だから、実際は俺と葵の二人家族みたいなもんだった。葵が居れば、それで良いと思っていた。だが、五年前の八月、夏休みのある日。突然、葵が俺に、未来を予告する事が出来るんだと告げて来た。もちろん、最初は信じられなかった。けれど、昔やってた競争でほとんど全勝だったのはそれのおかげ、と言われると、信じるし

が無かった」

葵は、そんなに前から予知が出来ていたのか。

「その能力を、親父が知ってしまった時から、何もかもが変わった。……親父は金目当てで、葵を扱き使い始めた。だが、その能力はど
うやら体力を消耗するのか、葵は日に日に痩せていった。そんな彼
女を、俺はどうする事も出来ず、かと言って親父に抵抗しようとし
ても、暴力団を金で雇っていた為、敵わなかった……」

途中、日向の手は拳を作っており、震わせていた。

瞳には、後悔の色。

力一杯噛まれている唇には、血の色。

「それから二年後、ある事件が起こった。丁度、H E A V E N 事件
と同じ日だ。葵が急に気を失って、倒れた。目を覚ましたのはそれ
から三日後。もちろん喜んだが、それも糠喜びとなった。目覚めた
葵には、記憶が残ってなかったんだ。必要最低限の知識以外、全部
それを知った瞬間、今まで辛うじて繋ぎ止めていた何かが喪失した
感覚が襲って来た。もう、ここには居場所が無いと、そう案じたん
だ。だから俺は逃げた。親父から、過去から、葵から……全てから
闇雲に走って、走って、走って……」

過去を遠くに見ているかのように、視線は虚空を泳いでいる。

ああ、駄目だ日向。その目は駄目だ。

「そんな時、神田家に拾われた。それ以来、姓を変え、自分も変え
ていった。鍛えて鍛えて鍛えまくった。それから三年が経って、こ
の学校に入学した時、葵を見つけて驚かされたよ。それも、昔と同
じように無邪気に笑っていたからな……」

より一層、一つの色が日向の目を染める。

……だから、駄目なんだよ日向。

胸の奥から、何かが込み上げて来る。

その目は、俺が大嫌いな目だからだ。

だが、そんな感情を無理矢理押さえ込みながら、問う。

返答次第では、俺がどうにかなってしまいそうだけれども。

「あゝ、過去の事は大体分かった。惨劇混じりの、悲しい過去だつて事はな。それで……お前は何か言いたいんだ？」

本当は、聞きたくない。

だが、感情は恐ろしいな。

苛立ちを糧に、何でも口に出しちゃう。

だから、いつものように冗談を内心で呟く事も出来ない。

「俺には、葵を助けるなんて事、出来ないんだ……。まともに目を合わせる事が……出来ないんだ。だから……。だから、葵と仲の良いお前に頼みたい！ 代わりに、俺の代わりに葵を助けてやってくつ！？」

刹那、俺の中の何かが弾けた。

剥き出しになったのは、怒り。

どうしようも無い、怒りだ。

……あれ？ 俺は今、何をしたんだ？

おいおい、ふざけている場合じゃない。

日向の頬に、打ち込んだんだよ。

何を？

ああ、拳をか。

苛立ちをぶつけているのか。

だが、怒りの熱はまだ冷め無い。

脳が、沸騰しているかのように熱い。

ぐつぐつ煮えてるな。

だから、拳を振るうのか、俺は。

馬鹿馬鹿しい。

おやつさん、この煮えた頭蓋骨鍋で鋤焼きでも作るズラー。

「ぐっ！！……阿呆。氷水でもぶち込んで……」

最後の一撃は、俺の頬に。

よし、止まった。……痛いな。

とりあえず一連の行動を纏めると、怒りを発散する為に日向を殴り出したが自分を殴って暴走をキャンセルし再起動、と。

オーケー、冷静だ。

見れば、フェンスに背を預けて座り込んでいる日向の頬は、真っ赤に腫れていた。

……ほんと、馬鹿な奴だ、日向は。俺もだが。

畜生が、まだ怒りが沸き出した。

叫びたいと、俺の脳が訴える。

だからこそ、本能のままに。

「……お前の話は、どう考えたって自分勝手なんだよ……！ お前はそうやって、誰かに縋るのがお得意の人間か？ 違っただろ！？ 本当に葵を想う気持ちがあるのなら、押し付けるな！」

言い終え、目一杯吸い込んだ空気を大量の二酸化炭素に変換して吐き出す。

深呼吸、深呼吸。

……はいはい、そこまで俺。

俯いている日向を見据え、もう一度だけ深呼吸。

まだ、聞きたい事はあるんだから。

「思うに……助けってくれと頼んだ理由は、他にもあるんだろ？ 例えば葵が昨日、急に倒れた事に関係するとか」

問うと、日向は俯いていた顔を上げた。
どうやらビンゴらしい。

「……お前が知っている葵の倒れた日ってのは、創立記念祭の時と昨日か」

「えとな……ああ、そうだ。二回だな」

「実は、他の日にも倒れていたんだ。日曜日に」

衝撃の事実を聞いて、驚いた。

確か、葵にとっての倒れる、という症状は過去に、記憶の消滅を意味した。

だが、何度かその場面に遭遇しているが、今のところは何の影響も見えない。表面上は。

「だから俺は、昔から葵の担当をやっている医師に会いに行った。そして、葵の兄である事を告げたら、すんなりと教えてくれた」

何をだ？ などと問う必要は無いだろう。

日向は既に、それを説明し始めたから。

「倒れる期間が短くなって来ているのは、かなり危ないそうなんだ。元々、葵にとっての未来予知は、脳に異常なまでの負荷を与える。だから、このままだと後一、二回倒れるだけで……昏睡状態になってしまうそうだ」

背筋が、凍りついた感じがした。

その所為か、喉まで出掛かった声は詰まり、何も発せられない。待て待て、昏睡状態だと？

つまりは、日常の風景に収まったばかりの葵が、突然にして抜けるって事じゃないか。

そんなふざけた話があるかつ。

「何とか、ならないのか？」

僅かに掠れてしまった声をそのまま発し、問う。

しかし日向は、首を横に振った。

「無理、なんだ。だからこそ、あいつを救い出して、残りの時間を良い思い出にしてやって欲しいんだ。今週の金曜日は、あいつの誕生日だから……」

言い終えた日向は、再度黙り込んだ。

……全く、またしても俺に縋りやがって。

ええい、仕方の無い奴だ。

俺は頭を人差し指で掻きながら、溜息をつく。

「……あゝ、妹想いなどところには感心したよ。だが、俺に全部託しちゃいけねえ。手助け位ならしてやるから、お前も参加しろ！」

葵が居なくなったら、夢月が悲しんじまうしな」

掻いていた手とは逆の手を、拳にして日向に向ける。

だが、彼はその拳を見て呆然としていた。

……知らない、のか？

まさかの状況に再度、溜息をつこうとしたその時。

聞き覚えのある、無性に腹が立つ笑い声が後ろから屋上周辺の空

域に響いた。

「あつはっはっはっ、さすがはシスコン。妹想いな事でえ！」

「あ？ 誰がシスコンだ、誰が。ってかお前、いつからそこに居たよ」

言いながら、屋上への入口へと振り向くと、そこには扉を開けたばかりの圭吾の姿があった。

とりあえず、力強く睨み付けておく。

「そう睨むなつて。そんな事より、だ。……お前ら、何か面白そうな事をやらかそうとしてるな？ しかも、葵ちゃんの救出という一大任務まで！ どうだ、人手が足りてないのなら俺も同行するぜ？」

「あ、いや、お前は要らないから。帰って良いよ」

「ええ！？ そりゃ無いツスよ！！」

邪魔者扱いしてやると、圭吾は必死の表情で走って来た。

そして短い距離の半分まで来た所で、土下座体勢に入ってから滑り、丁度俺の真ん前で止まった。

……はつきり言ってやりたいが、内心だけで我慢してやる。

気持ち悪いぞ。

「……こんな気持ち悪い奴が来ても大丈夫なのか？」

「お。俺が言おうとしていた台詞だ」

「味方が一人もいねえええ！！」

「黙ってる。まあ、こいつは意外と良い助っ人だ。昔、俺が喧嘩に明け暮れてた頃は、こいつも一緒に参加してた位だからな。囃役として」

最後の一言を聞いた瞬間、圭吾は奇妙な絶滅危惧種にでも登録さ

れそんな程、目をかつぴらいて驚いた。

「ご丁寧にくわっ！？　とかいう鳴き声を発して、だ。

「え？　あれって囮だったのか！？　俺を信じて相手を任せてくれ
えたんじゃなくて！？」

「だからお前は阿呆なのだ。第一、それ以外にどんな事で役立った
？　お前」

「……そういえば、何もなかった気が……。もういいです」

肩を落してうな垂れている圭吾を尻目に、俺は日向の方を向く。

「んで？　俺達は何をすればいいんだ？」

「……今、篠塚家の自宅には親父と、親父が雇った暴力団達が住ん
でいる。だから、俺達はそこから葵を救い出す」

だから、の使い方が間違ってねえか？　とは、敢えて言わないで
おく。

近年の若者による日本語離れには、慣れてきたところだ。
ともあれ、多分だが組一つ分が相手になるんだろうな。

一般論だと、絶対に勝ち目は無い。

だが、それを覆す異常者は、二人も居るんだ。……日向を含めて
も良いんだよな？

とにかく、だ。

アクシデントさえ無ければ、余裕で突破可能だ。

「なあ、どうせな」

「どうせならそいつらをまとめて潰しておこうぜ！　そうすれば、
後々安全だしな！」

圭吾は、俺が言おうとしていた事を大声で言った。

考える事は一緒、か。

「できるのか？ そんな事」

「大丈夫、こう見えて亮は結構強いから。なんせ、昔から化け物のようなやつに鍛えられていたからな」

「よせ、あんな糞爺の話をするのは」

思い出しただけでも虫唾が走る。

吐き気がする、鳥肌が立つ、眼球が微動する。

そんな、トラウマじゃないかと言っても過言では無い症状を押さえ込み、微笑を日向に向けた。

「ま、大船に乗ったつもりでいてくれな」

「……分かった。信用しよう」

「よし、善は急げだ。今すぐ行くぞ！」

「馬鹿野郎、今は昼だ。明るい人目につくぞ。第一、もう授業が始まる」

言いながら、圭吾に腕時計を見せる。

時刻は一時十五分。

言っておいてなんだが、自分でも驚いている。

「つてなわけで、決行は放課後だ。いいな？」

とりあえず、俺が話をまとめると他の二人が揃ってわかった、と答えた為、俺達は授業開始ギリギリの時間に、教室へと向かった。全く、何で俺は面倒事に首を突っ込んだしまったんだろうか。そんな事を一瞬思うが、馬鹿馬鹿しくなったから脳内から消去した。

今更、何言ってんだろうね、俺。

面倒事なんて、両親が死んだ日から起こりっぱなしだったと言っ
のに。

……たまには、休暇が欲しいな。

俺はそう思いました、まる。

うむ、上出来。

第25話：真実を知ったから、どうするのだろうか。

太陽が完全に沈み、暗闇が訪れた頃。

俺は圭吾達と待ち合わせ場所である、飛翔鷹高校の校門前に行く前に、夢月に全てを話しておいた。

もちろん、未来予知が出来る事も含めて、だ。

話が終わった時、夢月はある事を話してくれた。

どうやら、葵が未来予知の出来る奴だと気付いていたようだ。それは自宅でカレーを皆で食った日の前日、夢で見たらしい。

……夢月の予知能力も、完全には無くなってないんだな。

ともあれ、話を終えた彼女は、満面の笑みで見送ってくれた。

「お兄ちゃんなら大丈夫、保障付きの信頼だよ。だから、葵ちゃんをよろしくね!」と、そう言つて。

そして今、俺は夜の道を徘徊　もとい、ランニング中だ。

ちなみに本日の服装は、お気に入りの普段着である水色のTシャツの上に、暗闇で目立たない地味な茶色のカーディガンを羽織っており、下も同色のカーゴパンツという、ランニングに不似合いな組み合わせだ。

特にカーゴパンツは、ポケットが多い為、走り難いったらありやしない。

まあ、未だに肌寒い夜風対策としては、丁度良いのかもしれないが。

以上、誰も聞いていないファッションブリーフィングでした。

「にしても、こんな服よくあつたな……」

俺が買ったという記憶が無い以上、親父の物だろう。

意外と服を買い込む人だったからな。

んで、たまに圭吾にあげてたし。

そんな昔の記憶を思い起こしながら数十分走ると、やっと目的地に着いた。

校門の前には、街灯に照らされている圭吾と日向の姿が見えた為、ラストスパートを速度ちょい上げてゴールしたが、同時に視界に堂々と入った圭吾を見て失笑してしまった。

「……圭吾。お前はそんなにも目立ちたいのか？ 日向を見てみろよ、あのステルス性の高い服を」

指摘する圭吾の服装は、黄色の長袖シャツに、昭和のスターのような金色に光り輝くひらひらが付いた白いジーパン姿だ。

本当、今日何しに行くのか分かってないのか？

隣の日向を見てみる、上下揃ってジャージを着込み、黒一色だ。

……あ、こいつが一番、ランニング姿だな。

「とにかく、お前に聞きたい事が二、三ある。……その服は何だ？ 今日はどこへ行くつもりなんだ？ 隠れる気無いのか！？」

「おおおう、質問攻めだな。芸能人にでもなった気分だぜ」

「それで、どこにあるんだ？ 葵の家は」

「ええ！？ 質問しといて放置かよー！ パネエッスよ亮さんよお！」

横から死語を放つ、五月蠅い馬鹿を無視しつつ、日向に問う。

「桐河町だ。きりかわちようその中でも、住宅地から少し離れた所に建っているから、少し位騒ぎがあっても通報はされないだろう」

「桐河町、か。ここから少し距離があるな……」

桐河町。

そこはH A V E N事件の後、一部が壊滅し完全な復旧が出来なか

った東京都が、新東京都としての地域を確保する為に、埼玉県を削って作られた新しい町だ。

……って、桐河町？

桐河、きりかわ……。

「って、俺の住んでる町じゃねえか！？ 走って損したあああ！！」

「お前、葵ちゃんと同じバス停って時点で、近所だと気付けよ馬鹿」

俺を罵りながら、圭吾は俺の肩に手を載せて来た。

笑いをわざと堪えている表情が、非常に腹が立つ。

だが、そんな事よりも、だ。

彼が言った最後の一言に、俺はこの世の終わりであるかのように地面に膝をつき、頭を両手で抱えて嘆いた。

「圭吾如きに馬鹿にされたあああ！！」

「本当、お前って失礼な奴だな……」

「心配するな、こういう態度を取る相手はお前だけだ。良かったな、泣いて喜べ！」

「それはそれで、何か嫌だぜ！？」

「お前ら、漫才をやりに来た訳じゃないんだ。早く行くぞ」

日向に怒られちゃった。

明らかに、呆れた表情で吐息しながら。

「わりい、そうだな。それじゃ、行くか。丁度騒ぎを聞きつけた警官が御出座しだし」

言って、俺が来た方向とは逆の方を指差す。

視界に入ったのは、二人組みの警察官がこちらへと歩み寄って来ていた。

こんな時間にご苦勞な事で。

「大方、金色のひらひらを付けた変質者に職質しに来たんだろう。どんまいだ、圭吾つと、内心で呟いておく」

「最初から最後まで、声に出てたぞおい」

変質者が何か言っている気がしたが、空耳だと結論付けておこう。そして、税金泥棒から逃げるのをサブミッションにしながら、メインミッションである篠塚宅へ向けて、全速力を持ってして駆け出した。

心許無い月明かりがアスファルトを照らす中を、俺達は篠塚宅の近くに來ていた。

さり気無く腕時計を見てみれば、時刻は午後八時ちょい前。

日向曰く、この時間にはいつも、総会と呼ばれる会議を開いているらしい。

その証拠に、明かりが煌々と点いている部屋は四箇所だけだ。

多分、総会と証した飲み会でもやっているのだろう。

腹踊りをやっている日向の親父の姿が目に見え浮かぶ。

はい、馬鹿な想像終了。

「んにしてもでかいな……既に豪邸だつて」

正面から見た感じでは、窓の位置からして二階建てだが、横幅がとても長い。もう、篠塚宅じゃなくて篠塚邸だな。

感想を一言で表すと、パネェな。あ、死語だった。

気を取り直して。門から玄関までの距離も何気に長い。

パツと見だと、飛翔鷹高校の校門から生徒玄関までの距離と似ている為、まず正面突破は自滅行為だ。

理由として、玄関の扉上部には小さなスポットライトが下向きに設置されており、その下には二つの人影がある。

見張りと言つて、まず間違い無いだろう。

その二人を見た圭吾は、その方向を指し示す。

「で、あの二人はどうすんよ？」

「いや、見張り……なんだがな」

耳を澄ませると、会話と笑い声が聞こえる。

見張りとは言えないな、ありゃ。

「お前の親父は、緊張感の無い奴を雇ったのな。もしかして、もしかすると？」

「ああ、素人同然の奴らだ。だからこそ、武器に頼って集団リンチしかやれない。……馬鹿親父は、少しでも安い賃金で雇える奴らを集めたんだ。その金銭欲が、俺達に吉と出た」

「だが、いくら雑魚でも数が多けりゃ強敵となるって言うべきところか？ この場合。まあ、俺達二人は一人ずつが既にラスボス級だから、心配する事はないな」

「……あのー、三人じゃないの？ おーい」

とにかく、数が多い事と、屋内戦であり、尚且つ相手は武器を所持している事を考慮しとかないたな。

……全滅させるのは、リスクが大きい、か？

「んじゃ、行くか？」

二人に問い掛けると、圭吾は右腕を振り上げて勇ましい表情になった。

切り替えの早い奴だな、本当。

「よっしゃ、そんじゃあ悪党、篠塚……何だ？」

「篠塚 謙介だ」

「うし。悪党、篠塚 謙介に制裁を！そして我が姫君、葵ちゃんを救い出すぞ！」

なるべく響かないように、小声で掛け声を放った圭吾を見て微笑しつつ、篠塚邸を見る。

「それじゃ、勝ちに行くか」

呟き、内心で別の言葉を発して気合を入れる。
葵を必ず救い出す、と。

第26話：侵入！ 篠塚邸

虫の合唱だけが聞こえる暗闇。

俺は、正面から向かって左側の暗闇を通って篠塚邸に接近し、見張りをやっている黒スーツ姿の男の背後に無音を保って近寄る。にしても、さすが素人だ。全く気付いてやしねえ。

刹那、二人居る内の一人が、一箇所を指差した。

「……おい、あそこに何か見えないか？」

「あ、ああ、何だ？ あれ」

その言葉に釣られて、俺も見てみる。

するとその方向には、街灯の僅かな光によって輝いている金色のひらひらが見えた。

圭吾だ、絶対そうだ。

俺はそれを見て内心で苦笑しつつも、声には出さない。

ちよつと近付き過ぎたからな、音は出せねえ。

と、その時だ。

俺の近くに居ない方の男が、圭吾の居る場所に向かって歩き出した。

懐中電灯も持たずに、だ。

もう一人の男は、流石にそれは不味いと悟ったのか、やや震えが混ざった声で止めようとする。

「お、おい、待て！ 何があるか分からないんだ、見に行く必要なんて」

「大丈夫、こつちには武器があるんだ。誰が居ようと関係無いさ」

言って、ポケットから自慢げに警棒を取り出した男は、圭吾の居

る方へと歩いて行く。

……うし、大分距離が開いたな。

残った男と俺との距離は、僅か四歩。

クリア……と、某特殊部隊の真似事を内心で行いつつ、構える。

そして、足音を立てずに背後まで行き、横向きの体勢で相手の首元に左腕を回し、同時に足元を右足で蹴って、左腕を思い切り引く。すると、男は一瞬の間にバランスを崩して、地面に叩き落された。多分、脳は現状を把握出来ず、混乱状態だろう。

とりあえず、回復する前に腹部に左足の踵落としをぶち込んでおく。

相手はその痛みでぐっ、という声を漏らすが、すぐに気絶した。

一段落。

その後、圭吾の居る方へと向かったもう一人の男を見ると、見事にこつちには気付いていないようだ。

俺は急いで気絶させた男を暗闇引きずり込み、持ち物を探る。

すると、胸元に突起物があった。

一瞬、悪寒がする。

だが、その突起物を確認するためにスーツの内ポケットに手をつ込み、それを引き出すと、刃先に安全用のカバーが被せられた小さなサバイバルナイフだった。

「おいおい……ナイフかよ……」

拳銃かと思った……。

予想が外れて、一安心。

少なくとも、拳銃を部下に持たせたりはしないようだ。

とりあえずそのナイフを持って、もう一人の男がいる方向へと駆ける。

すると丁度、日向が男を押さえつけているところだった。

「ナイスだ、日向」

俺はそう言つて男に近付き、先ほど手に入れたナイフを首元にあてる。

そして、表情は笑顔を保ち、優しく問う。

「……さて質問だ。この家に、葵という名の女の子がいるだろ？
どこの部屋にいるんだ？」

「……………」

ふむ、無言とな。

良く見れば、震えている。

答えられない理由はこのせいか。

「何だ、怖いのか？ せつかく笑顔で優しく聞いているのに……」
「笑顔でナイフを突き付けられて脅してくる奴に対して、恐怖を持たないわけがないだろ」

日向の突っ込みにうるせえつと答え、話を続ける。

「……このナイフな、さっき拾ったんだけど、試し斬りをしてみた
いんだよなあ……………」

その脅しに男はふへえ！？ と声を発した。

「話さねえつてのなら仕方ねえ。お前で試し斬りを」

「ま、待って、わかった、答える！ 答えるから止めてくれ！」

男は酷く怯え、必死に止めるよう、訴えてきた。
ああ、それで良いんだよ。

尋問は俺の得意分野じゃないからな。
実際、手詰まり寸前だった。

「それで、葵はどこだ？」

「あ、あの子なら、二階の奥にある大きな扉の部屋だ！……だ
けど、急いだ方が良さ。だいぶ弱っているようだった」

男は震える声で言ったが、最後の言葉は震えがなく、力強く言っ
ていた……気がする。

その言葉が気になりつつも、問い掛けている時間は無く、ナイフ
にカバーをセットしてポケットに仕舞う。

するとその時、背後から足音が聞こえた。

俺はすかさずその足音がする方へと振り向くが、そこには相変わ
らず金色に（以下省略）、圭吾の姿があった。

どうやら彼は、家の中の様子を見に行っていたようだ。
珍しく、立ち回りが良いな。

「一つだけ鍵が開いていた窓があったから、そこから入って中を見
てきたが、ほとんどの奴らが総会に参加しているのか、一階の廊下
を巡回しているのは六人だ。二階はわからねえ」

「そうか。……どうする、日向。強行突破で行くか？」

その提案を聞いた日向は、少し考える素振りをした後、答える。

「……それもいいが、あまり騒動が起きない方がいい。脱出が困難
になる」

「んなら、誰にも見つからずに二階の奥に行くってか？ それもそ
れでキツいと思うぜ？」

「だったら、その巡回しているやつらを全員潰すのか？」

日向の問いに、俺は親指を立てる。

それも、満面の笑みで。ついでにオプションサービスとしてウィングをセツトに。

スマイルは無料の為、金は取らん。ウィング代は後で請求するが。

「その提案、ナイス！」

「それなら急ごう。少しでも早く、葵を助けたい」

その言葉を合図に、俺達は唯一開いていたという窓の場所へと向かう事にした。

だが、不意に背後、情報を与えてくれた男の居ると思われる方から声が聞こえた。

「全部、予定通りだよ……」

呟くようなその声は、確かにあの男がいる方向からだったのだが、ついさっきまで聞いていた声とは違っていた。

そしてそれは、何処かで聞いた事のある声だった。

でも何故か、誰の声だったのか思い出せない。

俺は振り向かず、圭吾達と共に歩み続ける。

一階で唯一明かりが灯っている、横幅の広い廊下を巡回している黒いスーツ姿の男達は嬉しい事に、やる気のなさそうな奴らばかりだった。

よって、それを好機と見た俺達は、それぞれ別の部屋に行き、構える。

数秒後、日向の行くぞつ、という合図と共に廊下の明かりが消えた。

明かりのスイッチを切ったらしい。

それにより廊下は真っ暗になったが、男達は懐中電灯を照らし始めた為、場所は容易に分かった。

俺はその場所に向かって疾走する。

ノルマは一人で二人。

俺はまず、一人の男目がけて飛び上がり、回し蹴りをする。

綺麗なフォームで繰り出された蹴りは相手の首に直撃し、頭が壁にぶち当たった。

どんまい、と内心で呟きながら、倒れた男を見ずに次の標的を狙う。

もう一人との距離は、わずか一メートル。

相手は物音に気付き、こちらに振り向こうとする。

だが、遅い。

相手が持つ懐中電灯の光が俺を照らす前に、懐へと潜り込む。

がら空きである。

思わず口元を吊り上げつつ、腹部に右の拳をえぐり込んだ。

するとその衝撃で相手の身体がくの字に曲がった為、真上まで来た顎目掛けて掌低を打つ。

それにより、相手の頭は勢いよく後ろに吹き飛び、身体がそれについていくように曲がった為、まるでブリッジをしているようになり、一瞬笑いが吹き出した。

だが、そんな馬鹿な思考をすぐに捨て、相手が落した懐中電灯を手に取り、日向と圭吾がいる方を照らす。

すると、見事に全員が倒れていた。

それを見て俺は、微笑しながら二人に歩み寄る。

「まあ、日向はやれるとわかっていたが、まさか圭吾がノルマをクリアするとは……」

「お前、今日はやけに失礼だな。俺だつて傷つくんだぞ?」

「あゝ、それはごめんねえー。ほら、いいこいいこ」

俺は少し馬鹿にした口調で圭吾の頭に右手を伸ばし、数回撫でる。

「……なあ亮、一回ぐらい死んでくれないか?」

「馬鹿やってないで行くぞ!」

日向はそう言つと、ため息をつきながら奥にある螺旋階段へと向かった。

日向殿は、ご冗談がお気に召さないようだ。

第27話：親子の亀裂は深すぎて

二階の廊下には何故か、誰もいなかった。確か、総会は二階で行われている筈だが。

「……怪しいな、畏かもしれないぞ……」

「だが、行くしかないだろ。足音は立てないようにしろよ」

そう言い残し、日向は静かに、それでも素早く進んで行った。

「……だとよ圭吾、お前はエクソシストのアレみたいにブリッジで壁を伝って行け」

「変人ですよね？ それ」

「良いじゃねえか、似合ってるぜ？ 多分」

「理由はとつてもくだらないッスね……」

あれ？ 圭吾の奴、慣れちまったか？

面白く無いなあ。

どうでも良い感想を述べつつ、日向の後を追う。

すると、日向は大きな扉の前で立ち止まっていた。

「……ここか？」

その問いに日向は無言で頷き、ドアノブに手をかける。

するとその扉は、ギィツという古い音と共に解き放たれた。

そして、開いたドアの向こうに広がる光景は家具がほとんど無く、窓が二つしかない部屋だった。

殺風景という言葉が似合う部屋である。

その部屋の隅、唯一の家具であるベッドの上に、眠っている葵の

姿があつた。

彼女を見た日向の目は、大きく開かれた。
同時に口を開いた。

ちよつと待て、まさか叫ぶのか!?

「ああ　っ!」

「ストップ、叫んでどうする。色々は無駄になるぞおい」

「ぐっ……。分かった」

とりあえず、冷静な表情に戻ってくれた日向は、深呼吸をし始めた。

それに安心にした俺は、彼の発声を止めるべくして口を塞いでいた手を離す。

さり気無く、圭吾の服に擦り付けておく。

「ん? ……って、あ、こらっ!　お前今何した!？」

静かにしなくてはいけない場で五月蠅い圭吾を無視し、辺りを警戒しながら俺達はゆつくりと葵の元へと向かう。

近くで見た彼女の顔は酷くやつれており、寝息は荒々しかった。予知能力つてのは、自分の体力を消費する必要があるのだろうか。そう思っている間に日向は、葵の顔に左手を伸ばして添えようとしたが、少し前で止めて手を戻す。

「葵……ごめんな。……俺が、俺がお前をこの家に置いて行つたせい……」

日向の口から出る、途切れ途切れの声には後悔の念を感じ取れた。その兄らしい行動をもっと早くとおけばよかったのにな、と口に出しかけて止めた。

こいつには、日向には、決心を固める時間が必要だったのかもしれない。

室内に数回響き渡った、日向の後悔と謝罪の声。

その声で目が覚めたのか、葵がゆっくりと目を開けた。

「……あれ？ 日向さん……それに亮太……なんでここに？」

「おいしい、亮太じゃなくて亮だ。 お前を助けに来たって言ったら、おかしいか？」

それを聞いた葵は驚かず、代わりに嬉しそうな表情になった。

「……ありが……とう……」

葵は振り絞るような声で、弱々しい笑顔を作った。

「……なあ、俺を忘れてないか？」

「大丈夫か？ 何処か痛むとか」

「ううん、大丈夫だよ」

「おーい、俺の事」

「なんかうるせえっ」

後ろでぶつぶつ言っている圭吾の頭を、俺は勢いよくチョップし

た。

もちろん力強く　もとい、手加減して。
すると圭吾はその場にしゃがみ込み、頭を押さえて悶え出した。
忙しい奴だな。

「チョップしたな！？　親父にもチョップされた事ないのに！」
「いや、誰も好き好んでお前の頭なんかチョップしないだろ。ちなみに俺もだ。そしてこれは偶然だ」
「何が偶然だよ！」

俺と圭吾はいつものように馬鹿をやっていると葵は、くすくすつと笑った。

ふむ、笑えたのか。そんなに圭吾が馬鹿に見えたか。
良か良か。

「それで、どうする？　すぐにここを出るのもいいが、葵は目が覚めたばかりだからな」

「あ、その事なんだが、ちょっと見てくれねえか？」

圭吾はそう言って、窓の方へと向かった。

俺は不思議に思いながらも圭吾の後を追うと、こいつは窓の前で立ち止まり、カーテンを開ける。

するとそこには、大きな鉄の柵がはめ込んであった。
たぶん、窓から逃げないようにするための物だろう。
だが圭吾は、それを見て口元に笑みを作った。

「これ、少し時間をくれれば開けられるんだよ」

そう言って圭吾は、ズボンの腰につけてあったポーチから携帯式の工具セットを取り出した。

あれ？ そんな物、付けてたつけ？
拾ったのか。

「おお！ さすが技術系の成績だけ！ が良いだけあるな！ ……
家は醤油屋だつてのに」

「一言、もとい一言余計だつての」

圭吾はそう呟きながら作業にとりかかった。
もう三十年代だつてのに甘い防犯だなあ、と呟きながら。

日本語がおかしいところは突っ込まないのな。

やっぱり、こいつは馬鹿でした。

ともあれ、確かにまだ動かさない方がいい葵を待っている間、他の脱出経路を確保しておくのも悪くはないな。

ここに留まるのは、危険と隣り合わせなんだし……。

などと大事な思考をしていると、突然葵が圭吾に声を掛けた。

「圭吾さん、作業中は自分の身体が隠れるようにしたほうがいいよ」
「え？ 何でだ？」

圭吾は振り向かず、作業を続けたまま問う。

「なんとなく、だよ」

……もしかして予知つてやつか？

「日向、そこにある唯一の家具を運ぶぞ」

そう言つて俺が指をさす方向には、木で出来た枠に鮮やかな絵の描かれた紙が貼られている横置き型の屏風びようつぶがあつた。

その絵は桜だ。

たぶん、部屋に和風感を出すための飾りだろう。

圭吾一人を隠すには丁度いい大きさだった。

ってか、入って来た時には全く気付かなかったな……。

「分かった。それじゃあ、片方持て」

日向の命令に近い返事に、了解と答えて反対側に回る。

そして持ち上げた時、ふとこの屏風の作者名が目に入った。

木の枠に書かれた名前、如月きさらぎ源次郎げんじろうとな？

「……あの糞爺、こんな物まで……」

武道の達人である糞爺は、どうやら芸術にも通じているらしい。

どうでも良い事を知ってしまった。

久々にこの名を見て胸糞悪くなりながらも、屏風を置き終えた後、葵の元へと戻って行った。

とその時、突然入り口のドアが勢いよく開き、黒スーツ姿の男達が次々と部屋の中に入ってきた。

数にして、約十六人。

全員が警棒を持ち、身構えている。

幸い、銃を持っているやつは一人もない。

内心ではホッとしながらも、警戒心は緩めないでおく。

……それにしても、いくら経費削減のためとはいえ警棒はないだろ……。

威力はあると言っても、所詮は警棒ですぜ？

などと思っている内に男達が全員入り終え、その後に他の奴らは服装が違ふ男が入って来た。

鋭い目つきと皺のよった眉に、髪型はオールバックで決めて、オマケに茶色のスーツといういかにも悪人っぽい人物だ。

俺の服と色が被っている所は、あえて触れないでおく。

余り、関係無い事だしね。

「糞親父……!!」

突然、日向は怒りのこもった声をその男に向けて放つ。

……最近は目上の人に？糞？をつけるのが流行っているのかな？
なら俺ももう一度言っておこう。

「糞爺……!!」

もちろん誰にも聞こえないように小さく。

などとやっている間に、対する日向の親父、篠塚 謙介は、鼻で笑って呆れた口調で話し出した。

「久しぶりの再会で糞親父か……。ならば聞くぞ？ お前にはここ
にくる権利が、意味があるのか？」

その問いに日向は、少しの間黙り込み、そして口を開く。

「……権利はないかもしれないが意味はある。葵を縛り付けている
お前という鎖から、開放するためにここに来たんだ！」

「私が鎖……か。ならばお前は大方、錆と言ったところか」

鎖と錆、ねえ。

「口では偉そうな事を言っているけど、所詮は俺の錆。……開放した
後の葵に、居場所を作るのか？ 葵を置いて行く事しか出来なか
ったお前が。分かるか？ お前は俺の代わりに、錆として葵の邪魔
となるだけなんだよ」

「……確かに、俺は邪魔になるかもしれないな。だが、お前と居る

よりかは何十倍もマシな筈だ！　俺は、そこに賭けたい！」

今だからこそ、と言いながら、眉間に皺を目一杯寄せる。

「俺は、兄として葵を守る！　それは、葵が俺を覚えていなくても構わないという事だ！」

息子の一喝は、親父の表情を僅かに変える。

頬がひくついただけだが、それでもやってやった方だ。

「……………どうしても、連れて行くのか？」

問いに日向はもちろんだ、と答える。

すると謙介は目を瞑り、スーツの内ポケットに右手を突っ込んだ。

「そうか。　だが！　お前に私の商売道具は渡さんぞ！」

その言葉と同時に、内ポケットから勢いよく右手を出す。

露になった手に握られていたのは、銃身が短い拳銃だった。

第28話：四方八方敵だらけ

構えられた銃口は、真っ直ぐに日向を狙っている。

突然の出来事に、日向は反応が出来ないでいた。

だが、俺だけは先に動いていた。

謙介の人差し指が引き金を絞る前に、俺は右手を思い切り振る。

それと同時に、謙介の右手の甲に何かが生え、拳銃が手元から落ちた。

「 ツ！？」

自分の右手の甲に生えた何かを、謙介は驚きながらも引き抜く。

その何かとは、俺が持っていたナイフだ。

百発百中、威力絶大。

大方、手の甲を穿ったのだろう。

謙介は痛みを堪えながら、周りの男達に応急処置を受けている。

丁度その時、圭吾のいた方向からガラスの破碎音と、圭吾の大声が響き渡った。

「急いで飛び出せ！ お前らなら、たぶんうまく着地できる！」

相変わらず馬鹿を言う圭吾は、先に飛び出して行った。

その光景を見ていた相手の男達は戸惑っていたが、謙介が捕まえる！ と叫んだ時、初めて行動を起こそうとする。

だがその合図も遅く、俺は急いで葵を抱きかかえて窓から飛び出す。

そして地面に近づいた時に両足を着地体勢にし、衝撃を和らげる。時計台から落ちるよりかは痛くない為、我慢は可能だ。

ってか、あれは頭から落ちたんだけ？

などと、どっかのジャッキーの有名話をしている場合ではない。

「舌は嚙まなかったか？」

「もちろん……大丈夫だよ……」

葵はいつもの笑顔を作りながら、右手でピースを作った。

とりあえず、良かったと呟いた後、彼女を立たせてから自分も立ち上がる。

丁度その時、後ろで音がした。

振り向くと、日向が着地したところだった。

全員、無事に降りられたって事か。

「あのクソ親父の始末は無理だったが、後は逃げるだけだ。そして葵を安全なところに」

「じ、人生そう簡単にいかないものなんだな……」

日向の言葉をさえぎったのは圭吾だった。

圭吾が指をさす方向、この家の門前には、たくさんの黒塗りされた車が停まっていた。

しかも、後からどんどん追加させている模様。

そして中からは、先程と同じような黒スーツ姿の男達が次々と降りてくる。

「おいおい……援軍か……？」

俺の言葉と同時に、篠塚邸の玄関が勢い良く開き、謙介と共にまたしても黒いスーツ姿の男達が出て来た。

万事休す。

「最悪の状況だな……」

日向の言葉を聞き、より一層緊張感が増す。

少しの沈黙の中、最初に動きを見せたのは、援軍と思わしき男達の間から出て来た代表のような男だ。

その男は、上下共真っ赤なスーツを着込むというなんとも派手な服装だった。

その男は思いっきり息を吸うと、大声で言い放つ。

「篠塚謙介！ 人の組の領地内で勝手に一つのグループを立ち上げた拳句、少女を誘拐し監禁するとは、潰される覚悟があるというのだな！？」

その充分すぎるぐらいに響く大声には、怒りが混じっている気がした。

「ま、まさかお前ら……鹿島組か！？」

「その通りだ。 行け！ 全員、病院送りにしろ！」

健介の問いに頷いて答えた赤スーツの男が出した合図と同時に、後ろに居た男達は一斉に走り出す。

俺達を上手く避けながら。

そして、乱闘が始まる。

もちろん、鹿島組とかいうやらが優勢なんだが……。

俺達はその光景を啞然としながら見ていると不意に、後ろから声を掛けられた。

振り向くとそこには、先ほどまで指示を出していた赤スーツの男が居た。

近くで見ると結構若いな……二十代だろうか。

「申し訳ありませんが、確認させて頂きます。霧島 亮さんですね

「？」

「何で俺の名前を？　という疑問があったが、今は質問に答えておこう。」

「折角、回避出来そうな面倒事が、別の方法で降り掛かって来ちゃうかもしれない。」

「……ああ、そうだ。アンタは？」

「そう問いかけると、赤スーツの男は会釈し、答える。」

「申し遅れました。私は鹿島組頭首の補佐であり幹部、かしま とうき鹿島 光輝。今回は、頭首の命により、貴方を助けに来ました。」

「俺を助けるに？　……その、頭首とやらは誰なんだ？　助ける理由も知りたい。」

「頭首という単語は知っているが、誰かは知らん。」

「問うと、光輝は困った表情になった。」

「申し訳ありません、名前はお教えする事が出来ないのです。ですが頭首は、借りを返すぞと申しておりました。」

「借り？」

「残念ながら俺の記憶には、頭首というほどの凄い人物に貸しを作った覚えが無い。」

「とりあえず、車にて皆様を自宅にお送りします。……全員、霧島家の方でよろしいですか？」

「おう、俺は良いぜ？」

圭吾が勝手に　　もとい、代わりに了承した後、他の皆の方へ視線を向ける。

その行動に、全員頷いた。

それを見た俺も頷き、口を開く。

「ああ、そうしてくれ」

その返答に光輝はもう一度会釈して畏まりました、と言った。
まるで執事だな。

そう思っている間に光輝は、近くまで来た黒塗り車両の後部座席を開け、微笑を浮かべたままこちらを向く。

「さ、どうぞ。お乗りください」

俺の自宅があるマンションの前で俺と葵は車を降り、光輝に礼を言つて、車が去って行くのを見送った。

ナンバーを覚えておこうかな、と思つたが、面倒なので止めておく。

ちなみに、圭吾と日向はそれぞれの家に帰ると言つて別れる事となつた。

そして俺と葵はというと、最上階にある霧島家へと向かう事にした。

多分、夢月は了承してくれるだろう。
そう思っている内に、霧島と書かれたプレートのある扉の前に到

着。

「二回目だあ！」

葵は無駄にはしゃいでいる。

まあ、夢月に会いたいようだから無理もないか。

内心で呟き、微笑。

そして中に入ると、夢月が早足で出迎えてくれた。

「お帰り！ お兄ちゃん、葵ちゃん。ご飯の準備、出来てるよ」

正直言うと、真面目に驚いた。

葵を連れて来るとは一言も伝えてないというのに。

さすがは俺の妹だ。

「……まずお前にしよう」

「あははははは 出て行け、助平愚兄」

汚らわしい物を見るような目で睨まれた。

目つきが怖いです。

「ごめんなさい、冗談です賢妹様……」

「うんうん、わかればよろしい。ご褒美に、晩飯は鰹節だけならあげる」

「……すみませんでした」

俺、深く土下座。

さすがに鰹節は嫌だ。

いくら猫好きであっても、食事を合わせる気は全く無い。

そんなやり取りを見ていた葵は、急に笑い出した。

「にやはは、亮が喋るといつつ面白いねっ！」

「何か、遠回しに馬鹿扱いされているような気が……」

「そんな事ないよ！……えと、とりあえず、ご飯食べよう」

誤魔化しで無理矢理話を変えた葵は、靴を早々に脱ぎ捨ててリビングへと走って行った。

そんな葵を見て夢月は笑みを、俺は苦笑を浮かべながら少し遅れてリビングへと向かった。

本当、騒々しい夜だった。

もう勘弁。

第29話：気を取り直して、計画立て

いつもは寝て過ごす、一時間目の数学。

その時間、俺は自分の生活がほのぼのとした日常から、毎日が戦いばかりのバトル生活になるような気がして鳥肌を立てながらも、そんな筈は無い！と自分に言い聞かせ、気晴らしに昨日の事を整理していた。

葵と日向が双子だった事、葵とはあと数日しか会えない事。

そして、今週の金曜日は葵の誕生日だという事。

クソジジイの作品が、篠塚家にあった事　って、これはどうでもいいか。

思えば、一日で色んな事があつたなあ……と、溜息をつく。

「……とりあえず、後で朔夜と姉御に招待するかな。葵の誕生会」

出来るだけ葵に悟られないよう、隠密に計画を立てる事にしよう。そう決断した後、思考に休憩を入れるために左側、窓の外を見る。外は生憎の雨。

無限に降り続けている雨が、窓に力強く当たってメロディを奏でている。

当たっては流れ、当たっては流れ、当たっては流れ。

自然が織り成すメロディーって奴だな。ナイス自然。

だが、その自然のせいで屋上に行けないのが事実である。駄目じやん自然。

矛盾した二つの言葉を発した気がするが、気にしない。

自然は気にした様子だが。

雨が、強くなった。

とりあえず、全国の雨に悩んでいる人々に偽善で塗り固めた謝罪を内心でしておき、残りの時間を寝て過ごすために俺は机に突っ伏

した。

数式を言っている教師の音が、だんだんと子守唄のように聞こえ始めた頃、ゆっくりと夢の世界へと落ちていく。

目覚まし時計のように鳴り響くチャイムの音で目を覚まし、腕時計に目をやると時刻は十二時四十分。

昼休みである。

……ちよい、俺、何時間寝てたんだ？

昨日の疲れが原因だな、多分。

そう思いながら圭吾の方を見ると、アイツも寝ていた。

起きる気配が無い以上、昼食は朔夜と二人つきり、か。

ちなみに葵は休養の為、俺の家で休んでいる。

夢月が言うには、栄養不足だから一日安静にして、ゆっくりと体力を養っておく必要があるとの事だ。

故に、夢月も学校を休んだらしい。

友達思いつてのは、良いもんだなあ。

圭吾にも付けて欲しいオプションだねえ……。

とりあえず夢月に感謝しつつ、鞆から弁当を取り出して後ろを向く。

「……飯の時間だぞ」

そう言いながら、朔夜の机の上で弁当を開く。

「あ、亮さん、おはようございます！ って、もう開けちゃうんですか？ 葵ちゃんと圭吾さんはまだ来ていないようですが」

「あゝ、葵は休みだ。そして圭吾はあの通り、結構疲れているから寝かせてやって欲しい」

「あ、はい、わかりました……」

そう言つて朔夜は、しばらく何かを考えるように黙り込み、急に頬を赤らめた。

「……え、ええ！ 二人だけで昼食なんてそんな……ふああ！」

明らかに取り乱している。

……何を考えたんだ？ コイツは。

「あのなあ、少しは落ちつ っ!？」

瞬間、俺の言葉を止めるかのように強い衝撃が頭に直撃した。

その衝撃で、顔面が目の前の変当にシュート！ ……されるわけにはいかない為、素早く両手をストッパーとして机に叩きつける。

そのおかげで、俺の顔面は弁当スレスレで止まった。

「……つぶねえな！ 誰だよ！」

怒声を出しながら衝撃が来た方を向くと、そこには両手を合わせて謝罪の意を表している姉御の姿があった。

「すまん、力加減を誤ってしまったんじゃ」

「……まず、力を使うような事をするなよ」

俺は呆れてため息をつく。

それと同時に、大切な事を思い出した。

「あゝ、そうだ。お前ら二人に話しておきたい事がある。とりあえず、姉御もそれに座れ。そして弁当を食え」

「なんじゃ、藪から棒に。まあ、良いがの」

アンタがそれを言うな。

とりあえず、隣の席の空いている椅子を持って来て、机の横に置く。

すると姉御は、少し驚きつつも席に座った。

「で、話というのはだな　　って、朔夜。お前いつまで取り乱しているんだよ」

「つまりは、あゝんで口に　　ほえ？　　あ、すみませんっ！　　……それで、何でしたっけ？」

「……まあいいや、気を取り直してお前らに話しておきたい事がある。その内容というのはだな」

俺は今週の金曜日に葵の誕生会を開きたいから、二人に参加して欲しいという事と、その準備を手伝って欲しいという事を話した。その際、葵の予知能力や昨日の事、日向と双子である事は伏せておいた。

告げるのは、まだ先になるだろう。

話し終えた後、朔夜は目を輝かせて笑顔を見せた。

「もちろんいいですよ！　……プレゼント、何がいいかなあ」
「わしもいいぞ。宴ほど楽しい事はないからのあ」

「よし、今週の金曜日を葵にとって最高の思い出にしてやるつか」
「はい、頑張りましょう！」 「当然じゃ！」

俺の声の後に二人の揃った声、合計三人の声が教室内に響き、全員の視線を集めてしまったが、今はそんな事を気にせずに食事を始める事にした。

とりあえず、食事に集中しよう。

やっそこさ放課後。

いやあ、最近一日が長く感じるわ。

俺は軽いカバンを持って帰ろうとすると、ちょっと待つてという声に呼び止められた。

……って、この声、どこかで……。

そう思い、声のした方へと向くとそこには、最近ずっと休んでいた出雲 直樹が立っていた。

「久しぶり、りょーちゃん」

「おう、久ぶ　って、ちょっと待て。お前は俺をその名で呼ぶつもりか？ 第一、会話したのは初めてじゃねえか」

言つと直樹は、はははっと笑い出した。

「細かい事は気にしない、気にしない。それに圭ちゃんが、亮の事はりょーちゃんと呼べって言ってたし」

あいつ、余計な事を……。

俺の知らない所でも面倒事を振りまきおつて。
後でお仕置きするべえ。しないけど。

「……なあ、りょーちゃんなんてやめて亮にしないか？」
「嫌だ」

即答かよ。

「……………」
「……………」

しばらくの間、両者目を合わせたまま、一步も動かない。
蛇蛙だな。あ、勝手に略させて頂きました。
結局、折れたのは、

「……分かった分かった、好きに呼べ」

俺だった。

とりあえず、用件を聞いて帰る。
それが一番だ。

「で、何の用なんだ？」

「あ、そうそう、どうせ帰るのなら、途中まで一緒に帰ろう」

「……は？ 誰と？」

「僕と」

「……本気か？」

「当たり前じゃん」

当たり前なのか？

「だけど、俺はすぐそのバ」

「別にいいよ」

「……………」

初対面で一緒に帰ろう、か。

相手が女の子なら、どんなに嬉しかっただろうか……。

まあ、そこまで女好きじゃないが。

「分かったよ。それじゃ行くぞ」

俺はそう言つて、先に歩き出す。

その横を直樹は、無言のままついて来た。

無言、ねえ。

せめて何か、話題を振って欲しいものだ。

俺は振るような話題を、残念ながら常時持ち合わせていない。
そのまま話題も無く歩き、階段を下りる。

途中、唐突に聞きたい事が頭に浮かび、すぐさま問い掛けた。

「なあ、何でずっと休んでいたんだ？」

「ん……ちょっと用事で、九州と四国に行つてたんだ」

「ちよつとの用事でそんな所まで行つたのかよ。変な奴だな」

「ははは、よく言われるよ」

直樹は満面の笑みを見せた。

だがその笑顔はすぐに消え、何故か真剣な表情になる。

「……ねえ、次は僕からの質問。もし、自分の姓の家系が特別な存在で、昔から穢れを持っていたらどうする？」
「特別な……家系？」

それは出雲家がなのか？ と問おうとしたが、喉から先に出る前に、直樹が言葉を発した。

「そう、特別。……そしてその穢れが、もしも大切な者を傷つけてしまう物だった場合、りょーちゃんならどうする？」
「……お前、何が言いたい？」

穢れ。

その言葉を聞いていて思い出してしまったじゃねえか……。
霧島家の、穢れを。

「もしもの事を、質問しているだけだよ？」

その、小首を傾げた直樹の表情には、どこか小悪魔のような雰囲気
気が漂っていた。

男に対する例えで小悪魔ってのは、趣味の悪い冗談だな。
対する俺の表情は、強張っている……気がする。
そう思ったのと同じ、直樹は急に笑顔になった。

「そんなに怖い顔しないでよっ。ビックリしたなあ」

「は？ あ、ああ、わりい」

「まあ、まだ答えが出ていないって事で良しとするかな……
せてよかったよ！ それじゃ、圭ちゃんをよろしくねー！」

「お、おい！」

俺の制止も空しく、直樹は走って行ってしまった。

話

何が言いたかったんだ？

答えとか……良しとするとか……。

「……それにしても、何で圭吾を　　って、ああ！！」

アイツ、教室で寝たままじゃねえか！

それに気付くと俺は、急いで教室へと向かった。
馬鹿を起こすために。

第30話：不気味すぎる森

目が覚める。

だがそれは、眠っていたという感覚が全く無い目覚めだった。

そして、まず最初に視界に広がったのは、無限に広がる森。

見上げれば薄暗い空が見え、他の木よりも遥かに大きな樹木が上部に見えた。

どうやら俺は、その大きな樹木に寄り掛かった状態で座っているようだ。

だが、まだ脳の処理が追いつかない。

そんな状態で出た言葉は、

「……何処だよ、ここ……」

どの方向を見ても木しかねえ……。

とりあえずの動作で立ち上がり、眼下にある道に沿って歩き出す。まるでこの上を歩いて欲しいと、不思議な方法で要求されているような道を。

……早めに出たいな、ここ。

明日は葵の誕生日だ。

なのに、こんな訳の分からん場所で迷ってる場合じゃない。つと、思っていたその時だ。

不意に後方から、奇妙な声が聞こえた。

耳を劈くような高いピギツ、と聞こえる奇声。

その何度も繰り返し聞こえる声にはパターンが無く、しかし少しずつ俺に近付いて来ているのが分かる。

数にして、二。

さすがにこれ以上の接近は許したくないので、その方向へと振り向く。

「　　は？」

思わず疑問の言葉が出た。

見えたものが信じられなかったからだ。

その、奇妙な声を放っているそれは案の定二体居り、左右の存在は人では無く、異形だった。

向かって右側は、人の手が足の代わりとなって地に着き、尚且つたった一本で己の身を支え、胴体は鱗の表皮が目立つ。

そしてその所々に、苦痛な表情をした人の顔が浮かび上がっている。

人の場合は腕であろう胴体の左右には、見た事の無い生物の頭と刃毀れしつとも未だ輝かしい大鎌が生えていた。

頭部であるべき場所には、何も無い。

僅かに、無数の半透明な触手のような物が陽炎の如く蠢いているが、それだけだ。

次に右。

あらぬ方向に曲がった脚の脛脛を軸とし、上部の胴体には口が、鋭く尖った牙から垂れる涎が地面の草を一瞬にして腐らせている。

その涎を拭う両の腕は獣の腕。

逆立った毛は纏まり、三本の刃、計六本分が出来上がっていた。

そして上部は、狼の顔。

目が真つ赤に腫れ上がって飛び出し、狼の特徴である口は針金で縫われて開かないでいた。

まるで胴体の口が己の口だと身を持って思い知らされているかのように。

その姿は隣に比べてまともだが、やはり異様であり異形、そして異常だ。

「あゝ……夢だったらいいんだけどな……」

言ってる間にも、化物と呼んでもいいそれらは、ゆっくりと近付いて来る。

どうすれば良いのか、と思うよりも早く脚が動いた。

その方向は、化物とは逆の方向。

逃げる理由は簡単だ。

こちらは一、向こうは二。

向こうがどんな動きをするのか分からない上に、刃という武器を身に付けている。

そして何より、近寄りたくない……。

最優先事項は、少しでも早く家に帰る事だし。

「……明日は、葵の誕生会だしな……」

先程と同じ言葉を呟くのと、身を翻して走り出すのはほぼ同時。

軽く前に身体を倒して姿勢を低くしつつ、出来るだけ化物から離れる為に、出来るだけこの果てしなく続く道を進む為に。

後方からは、足音とあの鳴き声が聞こえる。

その音はわずかに遠く、だがそれ以上離れない事を考えると、化物も走っているという事だ。

「は、走れるような足じゃなかっただろ、あいつらって……!」

そう考えると、この森では何でも有りのようだな。

何でもありの森かぁ。

仕舞いには、金属バッドを持った少年が、全力疾走で追って来そうだな。

つと、その時だ。不意に視界に僅かな光が入った。

それはこの道の先であり、木々が開けているという事だ。

今の俺には希望とも言えるそれは目前に迫っており、果たして俺は広い平原に出た。

すると視界には違和感が、黒く大きな何かが入った。
その何かに目を凝らしてよく見るとそこには、

「……で、でけえ洋館だな……」

闇のように黒いその洋館は、縦横共に最上級の大きさとで聳え立っていた。

縦の窓の数からして六階くらいはあってもおかしくは無く、そうやって数えている内に見えたのは、洋館の一階部中央にあるドアが僅かながら内側に開いているという事だ。

……どうするよ？ 俺。

片や、後方からは未だに追って来ているであろう化物が。
片や、前方には怪しい洋館が口を開けて待っている。

「……化物から逃げる為だ……洋館に入るしかねえだろうが……！」

自分に言い聞かせるように叫び、一步を踏み出して走る。

そして、体当たりするようにして押し開けたドアを即座に閉め、
鍵を掛ける。

刹那、ドアに激しい打撃の振動と、館内に轟音が響き渡った。
間一髪つてのは、まさにこの事だな……。

そう思いながら館内へと振り向いて、辺りを見渡す。

電気は一切通っていないのか電灯はついておらず、眼下に広がる
のは薄暗いロビー。

だがそれは、かなりの大きさだ。

上を見上げれば錆付いて何時落ちるかわからないシャンデリアが
吊るされ、また辺りを見れば正面にある階段の床は朽ちて無くなっ
ている。

そして右の通路には、何故かテーブルや椅子などの家具でバリケ
ードが出来ている。

何か、あったのだろうか。

実験中にバイオハザードでも起きたか？

……馬鹿馬鹿しい。これだから妄想って奴は。

だが、先程の化物を思えば、強ち有り得ないとは言いつ切れぬ。
ともあれ、真実は分からないんだし、視察を続けよう。

下を見る。

そこには何かの模様みたいな物が描かれており、中央には大きく
？ 神護島研究所・本部？ という文字があった。

…… 神護島？

違和感。

いや、見覚えがある、と言った方が良いな。

確か、俺の好きな小説？ 永遠の六月？ の舞台となった島の名前と
同じだ。

…… いやいやいやいや、待て待て。

もしそうなら、今俺が居る場所は神護島である訳で、それ以前に
神護島が実在していたって事に行き着いて、そうなるにあの話は実
話なのかって疑問が生まれるがまだ断定出来る事では無くて……。

とりあえず、思考を一時停止する。

これ以上考えると、ショートしてしまいそうだ。

全く、不思議な事ばかりが詰まっている世界だな、ここ。

これが現実だった場合、俺なら自殺してでも前まで居た世界に戻
ろうとするだろう。

とにかく、唯一通れるのは、左の通路だけだ。

その為俺は、左の通路へと歩み始める。

先程の事は、保留だ。

その廊下は、とてつもなく殺風景だった。

ロビーにあったシャンデリアのような電灯も無ければ、窓にはカーテンも無く、ここは立派な洋館である筈なのに壁には絵画どころか何の模様もない無地だ。

部屋が無いのか、扉さえも無い。

俺の知っている洋館のイメージは間違っていたりするのか？ と思いつながら、長い廊下をただ歩き続ける。

床にはカーペットが無く、されど木目のついた床がある訳でも無い、壁と同じ無地の床だ。

その床はどうやら靴音を許さないらしく、先ほどからどれだけ靴で踏んでも無音だ。

「有り得ない森で有り得ない化物に会わされただけでは飽き足らず、次は有り得ない洋館かよ……」

夢であつて欲しいぞ、と付け足して苦笑を漏らす。

丁度、その時だった。

今まで一向に見つからなかったと扉が、一つだけ向かつて右側にあつた。

現れたと言っても良いのかもしれないその木製の扉に近付き、ドアノブを捻る。

すると扉は無音で向こう側に開き、俺に室内を見せた。

そして、殺風景な部屋へと足を踏み入れる。

まあ、殺風景とは言つても、最低限の物はあつた。

床には一面茶色のカーペットが敷かれており、壁は紅の色を宿している。

奥に見える大窓には同じく紅の色を宿したカーテンが二枚掛かつており、片方が纏められ、片方が大窓を半分だけ隠すようにして広げられている。

何より気になるのは、その大窓の前に置かれた、セミダブルサイズのベッドだ。

そのベッドは頭を壁に向けられており、大窓から日が差しした場合、寝ている者が居れば丁度身体を横から照らすようになっていた。

しかも近付いて、改めて見たそのベッドの上には、

「……女の子……？」

純白のネグリジェを着た、金色に輝く長髪の可愛らしい少女が眠っていた。

歳は一つ違い、もしくは同じだろう。

そんな彼女は、寝返りどころか身動き一つ無く、ただ眠っている。

「……こんな所で、たった一人なのか？　この子……」

眉を潜めて呟きつつ、そつと手を伸ばしてみる。

そうして触れた頬は柔らかく、されど温度が無かった。

暖かくも冷たくも無い肌。それは、まるで人形のような。

眠り姫って奴か？　と思った直後、突然後方から何かが軋む音が聞こえた。

それと同時に聞こえるのは、ガラスが連続して割れる音。

二つの音に驚いた俺は、素早く後方へと振り向く。

その時目に映ったのは、闇だった。部屋を、空間を暗いながら迫る闇。

既に部屋の入口を喰らい尽くしたその闇は、俺から逃げ場を奪っていく。

全くもって、嫌な状況だ。

最悪、大窓から飛び出す手が有るだろうが、こんなのが相手じゃ逃げ切れる気がしない。

第一、と前置きしてベッドの上を見る。

「この子を、見捨てる訳にはいかねえ気がするしな……」

眩き、苦笑。

そしてその表情のまま、迫る闇を見る。

大体の距離で五メートルほど。もうすぐその闇は、俺を喰らうだろう。

思い、一步下がろうとする間にも、闇は残り二メートルだ。

そして闇は、俺の足から順に、一瞬という速さで喰らうていった。刹那、不意に手を握られたと、そんな感覚があった。

だがその感覚はすぐに消え失せ、同時に五感も消え失せる。

意識が、飛んだ。

それは、またしても唐突の目覚めだ。

背筋に電気が走ったような感覚が、睡眠状態だった脳を叩き起す。

だが、唐突すぎたが故に、意識が朦朧とする。

頭痛と嘔吐の催し、眼球が引き締まる感じと同時に小刻みに揺れる視界。

しばらくしてそれらが収まれば、脳も少しずつ状況把握を開始した。

今のところ分かる事は、自分がベッドの上で仰向けに寝ていて、天井を見ているという事だけ。

……ベッドで寝ている？

「！？」

その疑問と同時に脳が一気に覚醒し、勢い良く起き上がる。そうした事でめでたく、新たに視界入りしたのは、白一色の部屋とベッドの端に纏められている白いカーテン、ガラス張りの棚と消毒液などの薬品類だ。

そして、独特な匂いが漂うここは、

「保健室……？」

今、自分が居る場所は言った名の通り学校の保健室だろうが、何故ここに居るのが分からなかった。

俺はついさっきまで、森の中の怪しい洋館に居た筈だから。

だが、俺は今学校の保健室にいる事は確かだ。

多分、飛翔鷹高校の、だ。

その二つの異なった事実が、俺の頭を混乱させていた。

無駄な思考を停止、と。

そうした後にとった行動は、まずベッドから降りる事。

すると床には内履きがご丁寧に置かれていた為に、それを履く。

ちなみに、俺は制服姿だった。

とりあえず、そのまま出口へと歩き、引き戸を開けて廊下へと出た。

次の瞬間。

「うつ……！？」

思わず鼻を覆った。

その理由は、突然鼻を強烈な臭いが貫いたからだ。

鉄の、濃い臭いが。

それは俺の記憶通りだった場合……血の臭いだ。

少なくとも校内全域に充満しているであろう血の臭いはしかし、

根源である血がどこにも見当たらない。

それでも、嫌な予感しかしないのは確かだがな……。
軽く溜息をついて、歩き始める。

自分でもわからないが、とりあえず自分の教室へと向かって。

教室を目指して歩いている途中、通った教室の全てが地獄だった。多くの机が四散し、床に転がっている生徒達はバラバラに切り刻まれて、八頭身だった身体の面影を残しておらず、その体内にあるはずの血は教室内に無差別に飛び散っている。

その猟奇的な殺し方は、もはや人間技とは思えない。

常人なら、この光景は耐え切れないだろう。必ず嘔吐する。

俺は……糞爺のせいで多少は平気で居られる。

血など、腐るほど見てきてしまっているから……。

だが、そんな俺でもこんな事はする筈が無い。

血慣れと猟奇的殺意は全く違う物だ。

身に付く物と性格。ああ、確かに違う。

良かった。

じゃあ誰が？ いや、何が？

自問し、しかし自答が出ない。

真っ先に予想したのは、森の化物。

だが、ここは学校だ。俺の記憶がただ聞ければ神護島は大分離れた所に位置しており、まず日本に近寄る事さえ出来ない。

もちろんそれが、小説の中の設定だったとしても。

こんな変な状況に立たされた以上、少しでもある手がかりを信じるしかないのだ。

だから、これは化物の仕業では無い。そう思いたい。

だって、もう見たくないしな。気持ち悪かったし。そんな事を考えながら、俺はC組の教室へと入る。同時に見た。見てしまった。

信じたくは無かった光景を。

それは、他のクラスとはなんら変わりが無かった。

机が四散し、クラスメイトがバラバラに切り刻まれている。

只々、視覚が脳に、そこに肉片がありますよ、と知らせている。

死体の中には、朔夜や姉御、日向などの見知った顔も居て、

「！！！」

俺は俯いた。

それは、他のクラスと違って死体の人物を知っているからこそ、これ以上は見たくないという意味を持った行動なのかもしれない。

だが、他のクラスとは違う点が、もう一つあった。

下を見ている俺の視野、その上部に違和感がある。

俺は、それが何か確認する為に顔を上げた。

視覚がそれを存在として認識した時、正座をしている一人の女子生徒が見えた。

顔には影が掛かっていて誰かは分からないが、赤みの掛かった黒い長髪と制服で女子生徒だと分かる。

彼女の制服は血に塗れており、左腕のあるべき位置には、大きな禍々しい形の刃が見える。

それは、指先や肘から発達しており、刃に絡み付いている肉は一定のパターンで脈打っている。

また、彼女が視線を落としている先、膝の上には男子生徒が頭を載せて、眠っているかのように倒れていた。

腹部には真っ赤な血が、今はもう乾いて残っている。

顔は見えない。いや、見たくない。

周りに死体となって倒れていない奴がそいつなら、尚更だ。

同時に脳内で、離れるべきだという警告が生まれる。

だが、そんな警告が発せられようとしている間に、長髪の女子生徒は俺に気付いたのか顔を上げた。

「顔には変わらず影が掛かっているが、頬には涙のような物が伝った。ぐっ!？」

刹那、いつの間にか彼女は俺の前へ、そして胸部を暖かい刃で穿っていた。

それによって、身体が前屈みになり、刃が更に深く刺さっていく。

「ぐ……あがつ!！」

肺が潰れたのか、息を吸おうとすれば詰まり、吐こうとすれば血が湧き上がって鉄の味が口内に広がり、吐き出す。

そのまま意識は遠退いていつて、五感がゆっくりと消え失せていった……。

「……ふはっ!！」

肺の息を一気に吐き出したのと同じ時、意識を強制的に覚醒させられた。

呼吸は荒く、背中に大量の汗を掻いている自分に驚きつつも、辺りを見渡す。

今、俺が居るのは自室だ。

毎朝、目が覚めた時に見る、シンプルな自室。

俺の寝ているベッドの横にある木製の棚とその上で充電されている携帯、壁に埋め込んである、展開状態のクローゼット内にハンガーで掛けられている制服など、全てが何の変わりも無く存在している。

それらを見て、先ほどまでは夢だったのだと、実感するのに五分、いや十分程掛かった。

悪夢と言っても良い夢を思い出しながら、ゆっくりと起き上がる。

「あゝ……とりあえず、帰って来れたな……」

呟き、苦笑する。

それと同時に、やけに元気な声を出しながら夢月が俺を起こしに部屋に入って来た。

起きろー、という言葉に答え、俺はベッドを出てリビングへと向かう。

途中、僅かに胸に痛みを感じた気がする。

第31話：朝からハイテンション

眠っていた脳が、少しずつ覚醒していく。

春の、未だに肌寒い空気が張り詰める朝。

俺はその覚醒していく感覚がとうとう寒さを感じ取り、暖かい布団に顔ごと潜り込んで寒さを凌ぎ、再び眠りにつこうとした……筈だったのだが。

「どーんっ！！」

突然、腹に強烈な衝撃が来た。

「ッ！？」

声にもならない叫びが出る。

激しい痛みに耐え切れず、脳は一気に覚醒しエマージェンシーエマージェンシー！

警報が脳内で鳴り響き、急いで起き上がった。

そして、俺の腹に来た衝撃の原因を確かめようとすると、そこには葵が立っていた。

一度言った気がするが、俺の腹の上で。

「おっはよう！」

「お……はよ……うじゃ……ねえ……」

今にも気絶しそうな痛みを気力で堪えながら、震える手でデコピンの形を作り、何とか葵の額まで伸ばそうとする。

が、気力持たず、全身の力が抜けて、起き上がった身体がベッドに倒れた。

同時に、伸ばした腕は無造作に落ち、俺はゆっくりと目を閉じた。

「あ、あれ？ 亮？ 亮〜？」

近くにいるはずの葵の声が遠退いて行く。

そして、今までの思い出が走馬灯となって頭の中を駆け巡った。

『お前の膝を地につける男や』

『ええ！？ お兄ちゃんが私より先に起きてる！ どうしよう、天変地異が起きちゃうよー！』

『にやはは！ わ、馬鹿！！ だってさ、にやははははは！！』

「 って、俺にとって鬱な記憶しか思い出さねえのかよー！」

地獄の入口で整理券を持ち、待機していると閻魔大王が直々にやって来て俺を現世へと摘み出した。

冗談はさて置き、再度、勢い良く起き上がる。

葵はその突然の動きに驚き、うひゃあ！ という声を上げて、俺の腹、というよりベッドから落ちた。

「注意力が薄いぞ、何やってんの？ お前」

「だって亮が急に起き上がるんだもん って、私を無視しないでよお」

「うるせえ、腹減ったんだ。飯食いに行くぞ、飯」

痛みが残る腹を摩りながら言い、俺は部屋を出た。しっかし、腹が痛いと言うのに食欲があるとはな。

天性の鋼鉄胃袋なのだろうか。いや、もしそうだったとしたら空腹感が無いわな。

と言う訳で却下。

ともあれ、後ろから俺の名を何度も呼ぶ葵を無視しながら、急ぎ足でリビングへと向かった。

葵が霧島家に泊まる事になってから三日目。

そして、今日は葵の誕生日でもある金曜日だ。

誕生会の開始は夕方、葵が霧島家に帰るのと同じ時。

それまでに俺は、日向を誘っておこうと考えていた。

だが、いざ教室に入っても日向の姿は無かった。

全く、あいつは居なきやいけない時に限って屋上だな。

いつも屋上に居るのだと思うが。

ともあれ、俺は吐息をつきながらカバンを机の上に置き、屋上へと向かう。

途中、この学校に自販機がある事を思い出し、先に一階にある自販機コーナーへと向かった。

そこでお気に入りの缶コーヒーを二本購入し、両手に一本ずつ持って再度、屋上へと向かう。

「……それにしても、この学校の自販機はある意味凄いな」

呟きながら、手に持っている缶コーヒーに目を落す。

その表面には大きく？M I S S・香り重視のブレンドコーヒー？と言う風に、長々とプリントされていた。

だが、微糖と書いてあるのに、時々チョコ以上に甘い。

名前通りなんだが、製品としては最悪である。
とはいいつつも、この当たり外れのような所が、俺のお気に入りである理由なんだが。

などと考えている間に最上階に着いた為、屋上への扉を開いて日向を探す。

ああ、やっぱり居た。それも、いつもの通りの場所でフェンスにもたれ掛かり、目下に広がる街を見渡していた。

「おい、日向！」

その声が聞こえたからか、日向はゆっくりとこちらを向く。
同時に俺は、受け取れと言って缶コーヒーを一本投げると、彼は片手で上手くキャッチし、ありがとと言って来た。

日向の口からその言葉が出た事に感心し、驚きながら彼の横まで行き、同じようにしてフェンスにもたれ掛かる。

「……なあ、日向。突然だが、お前も葵の誕生会に出てくれないか？　っというより、出る。強制だ」

「強制って……俺は出ない。いや、アイツが俺を兄だと知らない限り、出る資格は無い」

あ、また苛つと来ましたよ、と意味の無いナレーション。

「葵のせいにして逃げるのか？　ってか、資格が無いって言うけどよ、三日前に葵を助ける事を提案し、共に実行したのは誰だった？　葵の姿を見た瞬間、叫びそうになったのは誰だ？」

一度言葉を止め、缶コーヒーを開けて一口飲む。
そして、微笑を浮かべながら話を再開する。

「……本当は祝いたいんだろ？ あいつに良い思い出を作ってやりたいんだろ？ もしそうなら、お前には参加する資格があるんだよ、残念ながら」

それを聞いた日向は、缶コーヒを二口ほど飲んで溜息をつく。

「……お前は、何で俺がそう思っていると言えるんだ？」

「そりゃあ、俺も妹がいる身の兄って立場だからな。不器用なお前の考えなんて、全てお見通しだっ」

俺は微笑と共に、日向に向かって親指をグツと上げる。

その姿を見た日向は、苦笑して吐息を一つ。

「お見通し、か……それはそれで困るな。……本当の事を言えば、怖いだけなんだ。俺を知らない妹と同じ時間を過ごす事が」

「そんな恐怖は捨てろって。あの日、篠塚邸に葵を助けにいった時の気持ち、それを一番にしろ。自身を持てって、な！」

最後の一言と同時に、日向の背中を少し強めに叩く。

叩く、叩く、叩く、睨まれる。

どうやら、調子に乗り過ぎたようだ。

「ささ、そろそろ行くぞ。鬼頭がキレルぞ！」

話を無理矢理逸らした俺が先に走り出すと日向は、もう遅いと思うがなと呟き、同じく走り出した。

この後、鬼頭に捕まり、怒りをぶつけられたのは言うまでも無い。

第32話：ビッグサプライズ

「ねえ、凄い事って何？」

「早まるなって、行ってみてのお楽しみだ」

俺と葵は、走り続けるバスに揺られながら、自宅へと向かっていた。

ちなみに圭吾達は、先に俺の自宅に帰ってもらっている。葵を驚かすために。

もちろん、その為に時間稼ぎはした。財布から所持金が少し減る羽目になったが、まあ良いだろう。

「き、気になるなあ……。寄り道して帰る時間を遅らせた位なんだから、期待してるよ？」

「当たり前だ。絶対に驚くぞ。ほら、もうすぐ到着だ。驚く準備をしておけよ？」

「にははは、良いよ？ 驚いたらスライディングしてあげるっ」

「ははは、そりゃ楽しみだ」

「にはははははっ」「ははははははっ」

不気味な笑い声が、バス内に響き渡る。

運転手にとつては、さぞかし耳障りで五月蠅かった事だろう。

その後、バス停に到着するまでバスの中では、延々と笑い声が響いていた。

迷惑極まりないね、こりゃ。

太陽がほとんど傾いて、周囲は暗くなりつつあった。
腕時計に目をやると、時刻は六時を少し過ぎたくらい。

丁度良い時間帯だなと思いながら、最上階に到着したエレベーターを降りる。

「……あゝ、そういえば、玄関にはオイルなんて塗ってないから、スライディングする時は痛いぞ？」

「急に何かと思えば、本当にスライディングなんてすると思ってた？」

葵はそう言って満面の笑み。

俺の期待を裏切りおって！ 返事なんてするもんか！
冗談だが。

「ほら、到着だ。ドアはお前が開けるんだぞ」

「む、無視しないでよ……まあ良いや。それじゃあ、開けるね」

言いながらドアを思い切り開けると、パーンツというクラツカの快音が響き、飛び出した物は葵の周りに散らばる。

それと同時に、数人の揃った声が聞こえた。

「誕生日おめでとー！！」

声の主は、今回の誕生日会参加者である夢月と朔夜、圭吾に直樹、姉御、そしてどこことなく照れ臭そうな日向だった。

とりあえず俺は、日向が来た事に心の中でホツとし、葵の頭に手をおく。

「俺からも、誕生日おめでとっ、だ。 時に葵、スライディング

はどうした？」

「そんな事、やってる暇はないよ！ この時間を一秒でも無駄にしないからねっ！」

俺は、そうだなっと思いで答える。

すると夢月が駆け寄って来て、葵の手を取った。

「さ、いつまでも玄関で立ち話してるわけにはいかないよ？ 葵ちゃんは今回の主役なんだからねっ！」

ウィンクして言った夢月は、急かすように葵をリビングへと連れて行った。

そして、残った俺達も後を追うようにしてリビングへと向かった。

リビングへと遅れて到着した時、ふと気になる組み合わせの姿が見えた。

姉御と夢月だ。

二人は二、三回会話を交わした後、姉御がリビングの奥にある廊下へと向かって行った。

その後ろを、朔夜が慌てて追い掛けて行く。

ちなみに、その方向には夢月の部屋と俺の部屋、両親の部屋と洗

面所がある。

……夢月の部屋にでも行つたのか？

もしくは、洗面所、か。

どちらにせよ、気になったが為に、夢月に問い掛ける。

「なあ、あの二人はどこに向かつたんだ？」

「え？ お兄ちゃんの部屋だよ」

「……………は？」

さらつと、訳の分からん事を言う妹だな。

「お兄ちゃんが帰って来てからつてのを条件に、入っても良いって約束したんだよ」

「何でそうなるう！？」

古臭い突っ込みを入れつつ、夢月の反応を見ないまま、早足で自室へと向かう。

そして、目の前に立ちはだかる扉を開け、中を見渡す。

すると右の奥にある机の前で、オフィスチェアに座っている朔夜が声を掛けて来た。

「あ、亮さん！ すみません、勝手に邪魔してしまつて」

「いや、良いんだ。良いんだけどな……………」

苦笑混じりで言葉を詰まらせる俺の視線の先。

ベッドの下から、尻が飛び出していた。

言つておくが、ちゃんとジーパンを穿いているぞ？

そんな事はさておき、思わず目を逸らしたくなる美尻の下から伸びている足を掴み、力一杯引いた。

すると、潜り込んでいた姉御が姿を現す。

大物だな。もし俺が漁師だったら、大喜びで港に帰り、三枚に下ろして刺身にするだろう。

別にそれが姉御という訳では無い。

生憎、カニバリズムはお断りしています。

「おおおおう!? なんじゃ、お主! 女子の足を気安く触るで無い!」

「そのレデーは、人の部屋のベッド下で何やってたんだ?」

「レデーじゃなくて、レディーですよ?」

「知つとるがな」

思わずどこかの方言を発してしまった。
どーでもいいが。

「ふふふ、折角健全な殿方の部屋にお邪魔出来る機会があったのだ。
エロ本を探すのが道理よお」

「どんな道理だ、どんな」

「ベッドの下に無いという事は、お主は単純では無いという事が。
安心じゃ」

人の話を全く聞いて無いし。

つてか、ベッドの下に隠している奴は単純と言いたいのか。

謝れ、全国の男子達に謝れ!

面倒だから、声には出さないが。

俺が内心でそう言っている間に、姉御は俺から見て左側にある、
壁に埋め込まれたクローゼットの下へと向かった。

そして、何の躊躇も無く、開け放つ。

ちなみにその中には、本棚が下部に置かれており、漫画数冊と小説数十冊入っていて、しかしスペースはかなり空いている。

姉御はそこから一冊の小説を手を取った。

「ほう、？風と共に去りぬ？か。これはめいさ　ふふふ、私の目を誤魔化せると思ったか！？」

急に叫ぶ姉御。

意味が分からん。

第三者が見れば、もっと意味が分からんだろう。

と、その時だ。姉御はその本の表紙カバーを剥がして、俺に見せ付けた。

「他作品の表紙で擬態させても無駄と言う物じゃ！……？妹にゃんにゃん？だと……？　お主、シスターコンプレックスか！？」
「俺のじゃねえええ！！………あ」

表紙のイラストを見て、唐突に思い出した。

それが、誰の物をか。

俺は急いで姉御の手から異物を奪い取り、駆け足で部屋を後にした。

廊下へと出てリビングの方へと向くと、一直線上に馬鹿面で大笑いしている圭吾が居た。

俺は彼の下へと早足で向かい、手に持った異物を思い切り顔面に叩き付けた。

「ぐがあっ！　いでええええ！！」

圭吾の断末魔が室内に響くが、無視して彼の両肩を鷲掴みにする。

「これは冬休みにお前が持つて来ていた物だよな！？ いつの間にカムフラージュさせて忍び込ませていたんだよ！？」

「気付くの遅いぞつ。所詮お前は、一度呼んだ小説を放置するような人間なんだな？ ってか、一冊だけで終わつたとおもっくばお！！」

話を聞いている内に腹が立つて来た為、異物を持ち圭吾の口に突っ込んだ。

……まだ、あるってか。

その事実苦笑しつつ、自室へと舞い戻る事にした。

嫌な予感がする現状で、俺は自室への扉を開ける。

「や……やあ……そ、そんなうひゃあああああ！！ りよ、りよりよりよりよりよ亮さん！？ あ、あのですね！ こここここここれはですね！！」

何故か、朔夜が異物を音読していた。

ってか、今のはどこまでが音読だったんだ？

そんな事はどうでも良いので視線を姉御へと向ける。

彼女は彼女で、クローゼット前にて異物に読み耽っていた。

ちなみに、彼女の横には五冊もの異物が積み重ねられている。

「のう、お主。戻って早々悪いが、ジャンルは一つに絞った方が良

いぞ？」

「それは俺のじゃねえ、圭吾のだ。つまりは、圭吾の趣味って訳だ」

言いながら、机の下へと向かって引き出しを開け、ガムテープを取り出すついでに朔夜から異物を奪い取る。

そして、姉御の近くまで行って座り込み、ガムテープを引き伸ばした。

久々に聞いたガムテープの音で苛立ちを消そうとしつつ（絶対に無理だが）、異物の縁全てに、投げた際に開かないようしっかりとガムテープを貼り付ける。

もちろん、姉御の横にある五冊と彼女が読んでいる一冊にも、だ。それらを重ねて抱え、廊下へと向かう。

一直線上に見える圭吾に、計七冊の異物を全て投げつける。

その全ては、真っ直ぐに飛んで行き、見事にクリーンヒットした。断末魔は当然、無視する。

「なんじゃなんじゃ、折角お主の好みが分かっておったのに。儂に謝罪せい！」

入室するなり、姉御から強制謝罪命令というブーイングが飛んできた。

だが、その程度で揺らぐ俺では無い。
と、その時だ。

姉御が、何かを思いついたのか拍手を打った。
ニヤリと、不適な笑みを浮かべて。

「そうじゃそうじゃ。好みを知る方法があつたのう。 今ここで、
儂と朔夜がお主を好きだと言つた場合、どちらを選ぶ？」

「 な！？ 」 「 ほえ！？ 」

完全に予想外の位置から、不意打ちを食らつた。

故に、体温が少し上がった感じがする。

一方、朔夜は顔を真っ赤にして、慌てふためいた拳句に奇声を上げ出した。

姉御は、そんな俺と朔夜を交互に見て、最後に俺を見据えた。

「ふふふ。取り乱している様子は無いと言つのに答えないという事は……どちら好みという訳じゃな？」

「質の悪い冗談は止めてくれ……」

「まあ良い、また機会はあるじやろう。 さて、皆の下へともど
……るのは、もう少し後になるじやろうな」

姉御の視線の先を見れば、朔夜がオフィスチェアで回転しながら奇声を上げていた。

確かに、もう少し後になるな。

とにかく、朔夜の暴走が納まるまで、俺達は待つ事にする。

結局、暴走が納まったのは、それから十分後だった。

一段落着いた後、三人でリビングへと戻ると、かなり賑やかになっ
ていた。

そして、皆が個々で会話をし、盛り上がっていた。
とりあえず俺は、いつの間にか復活していた圭吾の下へと行き、
会話に入る。

「　　と、そうだ亮。やっぱりパーティーと言えばシャンパンだ
よな？　今、俺の手元にはそのシャンパンがあるんだがどうだ！？」
「何だ、圭吾。それでシャンパンかけでもやろうつてのか？」

そう言つと、圭吾がシャンパンを夢月に手渡す。
すると彼女は、何故シャンパンを渡したのか分かったらしく、立
ち上がってキッチンへと向かった。
うむ、良く出来た妹である。

誰に似たんだろうねえ……。俺では無いな、確実に。
などと考えている間に、夢月が戻ってくる頃を見計らつてか、急
に圭吾が立ち上がった。

もちろん、全員の視線が圭吾に集まる。

「では、これより本田圭吾主催、王様ゲームを始めたいと思います
！！」

「よし、じゃあ圭吾がブリッジしてエクソシストな」
「……あの、俺は正常な人間なんで、そんな器用な事は出来ないん
ですけど……っていうか、まだ始まってないし」

圭吾が苦笑すると同時に、その場にいた全員が失笑。
ちなみに俺は、口元を吊り上げた微笑だ。
ニヤリという効果音が似合うね。

「ほう、お前は王の命令に逆らうと言うのか……姉御！ 夢月！
その者を我が国への叛逆者として処罰せよ！」
「御意」 「ハーイ」

姉御と夢月はそれぞれ返事し、圭吾にじりじりと近寄る。
その距離、わずか四歩分。
圭吾は、チツと舌打ちをし、辺りを見渡す。
変な目付きで見渡した結果、何か打開策でも見つけたのか、笑った。

同時、後ろにあるテレビの上に置かれていた物を手に取る。
その後、こちらを向き、手に持っている物に、右手の親指と人差し指を伸ばして拳銃の形にし、突き付ける。

「ああ！ ミイちゃんが！」

夢月が叫ぶ。

その物とは、夢月が大事に可愛がっている、黒猫のぬいぐるみだった。

「残念だが、コイツは人質 もとい、猫質となってもらう。解放してほしかったら、夢月ちゃんが俺に協力するんだ」

脅迫と言っなの交渉に夢月は少し考え、そして頷いた。
彼女は、えいっと言って姉御に抱きつく。
すると、姉御は苦笑し、片膝をついてしゃがみ込んだ。

「面目ない、我が主人よ。私はここまでのようだ……」

そして最後に、くつと言って、夢月と共に後ろへと下がって行った。

「ふむ、これは不味いな……どうするか、朔夜女王」

「ええ！？ 私ですか！？ えっと、えっと……こちらも、あちらと同等の物を盾にとれば良いと思います……よ？」

何故、最後が疑問形なのかはこの際、気にしないでおく。
同等の物……か。

「朔夜女王、良い案をありがとう。さすがは我が妻だ」

「……え？ ええ？ えええ！？ そんな、妻だなんてっ！」

顔全体を真っ赤にして暴走気味の朔夜を無視し、俺は指を鳴らして話を進める。

「執事長、直樹よ。冷蔵庫から奴の私物を持って来てくれないか？
こちらにも、同等の物を用意する必要があるのだな」

「畏まりました、国王。少々お待ち下さい」

透き通ったような綺麗な声で答えた直樹は、キッチンへと消えて行く。

「おい直樹、裏切るなよっ！」

圭吾の言葉はもう遅く、直樹はシャンパンを片手に戻って来た。

「すみません、亮国王の命なので。 お持ち致しました」

「うむ、良くやった。反逆者よ、これで交渉材料は互いに同等だ」

俺は口元に笑みを作る。

だが圭吾は、それ以上の笑みを作った。

「同等？ 何を言ってるんだ？ お前にとってこの猫は、シャンパンと同等の価値なのか？ 違うだろ。この猫の方が上の筈だ」

それを聞いた俺は、先ほどまでの笑みを消し、苦虫を噛み潰した表情になる。

そして、沈黙。

やがて、圭吾が一つの微笑と共に口を開く。

「では、これを返す代わりにお前の娘である葵姫を頂こうか」

突然出された、外道とも言える提案に、俺を含める全員が驚き、そして啞然とする。

唯一、笑みを浮かべている圭吾を除いて。

そんな中俺は、吐息一つし、決意する。

「……分かった……直樹よ、娘を……葵を呼んで来てくれ」

苦しい、厳しい決断だった。

だが、現実が甘えをぶち壊す。

故に、俺は葵姫を差し出そうと、思う。

しかし、姉御はそんな決定に不満が爆発したのか、一喝した。

「血迷ったか、国王！ そんな物と自分の娘を天秤に掛けるのか！
？」

「分かっているっ！　これが、親としてどれだけ間違った事をして
いるのかを！！」

「ならば何故、そのような　」

「仕方がないのだ！！　私は国王なのだ……一国の、王なのだ……。
国を、数千の民を……。守らなければならないのだ……！」

俺は、振り絞った声で訴える。

悲しみを押さえ込みながら。

怒りを押さえ込みながら。

それを聞いた姉御は、疑問多き表情で問う。

「何故、あのような物が国に関わるのだ……？」

何も知らぬ姉御に向かって圭吾は、ハンツと鼻で笑った。

「親衛隊であるお前でさえも、知らされていないのか？　なら、俺
が代わりに教えてやる。これは、この王国を魔物から守る結界を作
る為の装置なんだよ」

姉御は目を見開く。

そして俺は、やはり分かっていたのか、と呟く。

相変わらず、口内が苦い。

だがその時、ある声が耳に届いた。

「お父様！」

声のした方を見ると、そこには葵と従者の日向が並んで座ってい
た。

「あ……葵………すまない。本当に………すまない………」

「良い、良いのよ、お父様。私一人が行く事によって、国民が守られるのだから」

無垢な笑みでそう言いながら、葵は俺に軽く抱きついた。

小さな身体が、簡単に俺の腕の中に納まる。

ああ、この子はこんなにも幼いというのに、本当に良い子だな…

…。

思い、崩れる表情を見せぬよう、頭を撫でてやる。

そして、元より計画していたある事を思い出した。

「……そうだ、お前に渡さねばならぬ物があつた。直樹、あれを」

もう一度命令すると直樹は、畏まりましたと言って会釈し、またキッチンへと消えて行った。

暫しの時間を待って、彼が戻って来た時、その両手に支えられている物を見て、葵は驚く。

それは、火の灯った蠟燭が十六本立てられた大きなケーキだった。

「これは料理長の夢月が、お前のために作った物だ。さ、蠟燭の火を吹き消して、この悲しい日を、祝いの日であるという喜びの感情で押し潰してくれ」

一生分の思いを込めた頼みの言葉と同時に、直樹がケーキを葵の隣にあるテーブルの上にそっと置いた。

彼女は少し戸惑うが、すぐにケーキと向き合う。

そして、フーツと声を出しながら息を吹き掛けた。

強い風に吹かれた蠟燭の火が、踊りながら消えたのと同時に、俺と朔夜が偶然にも声を揃えて言った。

「誕生日、おめでとう！」

祝いの、定番の言葉に続いて、この場にいる葵以外の者達もそれぞれに、おめでとうと言いながら拍手を送り、クラッカーの音が響き渡った。

葵は、そんな俺達を見て、満面の笑みになった。

その笑みは、今までに無いくらい、良い笑顔だった。

第33話：良い思い出をこの夜に

時刻は午後九時、と言った所か。

テーブルの上に置かれていた筈のケーキは、既に元の姿を微塵も残して折らず、今は零れたクリームと皿だけになっている。

二時間前の話だ。

そして一時間前には、葵へのプレゼント渡しが行われ、それぞれがオルゴールや猫のぬいぐるみ、洋服や可愛い写真立てなどを、そして俺はツインテールを結ぶ為の黄色いリボンを渡した。

葵は、その黄色いリボンを気に入ったらしく、すぐに夢月に付けて貰い、その場で回りながら喜んでいた。

途中、目が回って暫くダウンした事は、黙っておこう。あ、矛盾ともあれ、回想が早々と終わり、時は戻って現在。

相変わらず騒がしい声が、部屋中に響き渡っていた。

「それにしても、皆よくノッてたな！ お前も、迫真の演技だったぜ」

圭吾は数時間前の出来事を掘り起こし、拳を俺に近づける。

俺はその拳に自分の拳を当てて、言葉を返す。

「お前も、悪役らしくてよかったぞ。特に、葵をくってところがな。発想がお前らしかった」

「ま、まるで俺が危ない誘拐犯じゃねえか……。お前からの俺の印象は犯罪者かよ」

「ん？ そうだけど……間違っているか？」

言っと圭吾は溜息一つし、苦笑した。

「本当、お前の俺に対する態度は酷いな……。それよりも、あの演技力だと、秋の文化祭は演劇やらねえとな！」

「え？ 一人芝居か？ そうかそうか、応援するぞ？ 頑張れ！」

俺は笑いながら、圭吾の肩を大きく叩いた。

そんな俺に向かって圭吾は、お前もだよって指をビシッと指して来た。

決まった！ って思い込んでいる顔が、腹立つ。

「……そういえば前に、昔のアニメで演劇が何とかって言ってたな。その影響か？」

言つと圭吾は、チツチツチツと言いながら人差し指を左右に振る。何だよ、折角話を合わせてやろうと思ったのに。

「違うな。今回の演技でわかったんだよ。今ここに居る俺達には素質があるんだよ、絶対」

「なあ皆、記念撮影でもしねえか？」

「唐突に話を変えるなよっ！！」

何やら騒がしい圭吾を無視し、話を続ける。

「折角の誕生日なんだ。写真って形で残そうと思って。丁度、葵には写真立てがプレゼントされているしな。それに、創立記念日に出来なかった事だし」

その提案に皆はすぐに賛成した為、俺は早速、準備に入った。確か、一眼レフ型のデジタルカメラが俺の部屋にあった筈だ。

「　　えと、葵ちゃんは主役だから真ん中ね。そして、その両側には私と朔夜ちゃん」

夢月がテキパキと指示を与えた結果、前列は右から夢月、葵、朔夜となり、後列は右から日向、俺、圭吾、直樹、姉御となった。圭吾は、専用のスタンドに設置されたデジタルカメラの照準を合わせて、タイマー設定にしてこちらに戻って来た。

「ねえねえ朔夜ちゃん、葵ちゃんに抱きつこうよ」
「え？　あ、はい、良いですね！　それ」

夢月と朔夜は、えい！　と言って葵に飛びつく。

「俺もやるぜ！　おりゃ！」

圭吾はそう言って、俺と直樹の肩に手を回して、担ぐ形になった。

「お前もやるのかよ……」って直樹、お前は何で平然と笑顔でいられるんだよ」

「細かい事は気にするな、笑って忘れろっ！」

瞬間、デジカメからフラッシュが起き、同時にパシャッという音が聞こえた。

目、瞑らなかつたかなあ。

そんな、俺らしくない心配をしてみる。

記念撮影を終えた後も宴会騒ぎは続いたが、日付が変わると、皆は疲れたのかリビングの床で、それぞれの形となって一斉に眠った。俗に言う、雑魚寝って奴だ。

だが、俺はまだ眠れそうに無く、ソファーに座り、暗闇の中で残ったシャンパンを飲んでいた。

「……まるで死んでるみたいだな」

苦笑しながら、眠っている奴らを見る。

全員が、安らかな表情で眠っていた。

馬鹿面の圭吾を除いて。

と、その時、一つの人影が立ち上がった。

その人影は唯一の光である、月明かりが差し込んでいる場所へと向かった。

「……葵か」

「良かった、起きてたんだね。……ちょっと話がしたいんだけど、良いかな？」

問いに少し考えた後、分かったと答えて了承しておく。
だが、場所は何処が良いだろう。
話をするのに打って付けな所は……。

「そうだな、ベランダにでも行くか？　こんな時間にする話だ、他の奴らには聞かれたくない事なんだろう？」

問いに葵は、うんと言って頷いた為、俺達はベランダのある別室へと向かった。

玄関からリビングへと続く廊下の途中、リビングの入口手前の右側には、空き部屋がある。

そこは完全な和室であり、奥の窓から外に出れば、ベランダとなっている。

俺達は今、丁度ベランダへと出た所であり、月明かりが二人を照らし出した。

今宵は満月。運のいい事に、空には雲一つ無く、綺麗な満月を見る事が出来た。

冷たい夜風に当たる中、上を見上げていた俺に葵は、聞いても良いかな？　と確認して来た。

俺はそれに、無言で頷く。

「えと、遠回しに言うのは苦手だから、直接言っね。……日向さんって、私の弟でしょ？」

予想外の言葉を聞いて、正直驚いた。失笑もした。

そして、葵の方を向くと彼女は丁度俺を見ており、やっぱり苦笑した。

俺はそんなにも驚いた表情をしていたか……。

こいつに、いや全人類に、俺は隠し事が出来無いようだ。

大げさな冗談だな、自重しよう。

「……いつから気付いてた？」

問うと、先日騒動があった日とすら答え、

「だって日向さん……じゃなくて日向、お父さんと話していた時、兄が何とかって言うてたもん。しかも私の名前も言うて」

一息ついて葵は笑い、対する俺は苦笑。

「でも良かった。これで疑問が解けたよ。昔、それまでの記憶が無くなった時があつて、大きな喪失感があつたんだ。……忘れてはいけない、大切な誰かを忘れてる気がするってね。……私の予知が見れるのは、絶対の未来。その未来には、日向が弟だつて知る機会は一度もなかった。でも……」

「でも？」

俺は止まった言葉を、オウム返しで返す。

この俺を焦らすとは、いつからお前は鬼畜側に回った。

「屋上で亮に、未来について話したでしょ？ あの時の亮の返答はね、私が見た未来とは違っていた。その日から、未来が何度も変わって、私が見る意味も無くしていったんだよ」

だからあの時、驚いていたのか。

……何故か、俺の選択は未来を変えるらしい。

夢月の時も、同じように驚かれた記憶がある。

そんな記憶を掘り返していると、葵は両手を後ろで組んで、前屈みになって上目で俺を見て来た。

「……ねえ、亮。ありがとね、私の未来を一つだけでも変えてくれて」

「あゝ……気にするな、俺はやりたくてやったただけだ」

微笑を見せ付けると、葵はいつも通りのにやははっという笑い声を上げる。

「亮らしいね。お気楽って言うか、何て言うか。あ、能天気！」

「うごっ！ お前に言われると、俺の純粋な心が傷付く！」

「うわっ！ 自分で純粋とか言っちゃってるよ！ 末期、この人頭が既にまっき」

「何を言うか。お前程どす黒くは無いぞ！」

「酷い！ 私の事、そんな風に思ってたのね！？ やっぱ、私との関係は全部遊びだったと言うのね……およよよ……」

大袈裟に泣き真似をする葵は、一息つくと笑顔を俺に向けた。

「……でも、やっぱり変えられない未来もあるんだね……。それじゃあ、私はもう寝るよっ」

一瞬、悲しそうな表情で、聞き取れなかった何かを呟いていたが、すぐに笑顔に戻り、ベランダを出ようとした。

その為、俺は苦笑しつつも振り向いて、おやすみなっという言葉を発しようとしたが、葵は部屋とベランダの境目で止まっていて、ついでに俺の方を向いていた。

「どうした？ 言い残した事でもあったか？」

「……ねえ、明日もし私に何かあった時は、日向にこう伝えておいてくれないかな？ 私が」

葵が伝えてほしい事を聞いて疑問が生まれたが、それを聞こうとする前に葵は、じゃあおやすみーっと言ってリビングへと戻って行ってしまった。

呼び止める事は簡単だっただろうが、俺には何故か出来無かった。ただ短に、本心では止める気が起きてなかったからかもしれないが。

俺は手で顔を覆い、大きな溜息をつく。

その後、室内の暗闇に視線を向け、問い掛ける。

「……で、お前は何の用だ？」

視線を一点から逸らす事無く待ち続けていると、ややあってから暗闇の中で何かが動いた。

その何かは、月明かりに照らされて人影となる。

「……どうして分かったの？」

「視線と気配ですぐに気付いた。流石に誰かはわからなかったがな。で？ 何の用だ、直樹」

「別に用はないよ。ただ、二人が出て行ったからどこに行くのかな

あ、と思つてね」

直樹はそう言つと、部屋の出口側に身体を向き、上半身だけで俺の方を向く。

「それじゃ、僕はもう寝るね」

そう言い残し、直樹は部屋を出て行つた。

「……何だつたんだ？ アイツ」

俺は首を傾げてから外に向き直し、しばらく夜風に当たる事にした。

満月は、雲一つ覆う事もなく、ただただ町中を照らし続けている。ふと、満月に兎が見えるか確かめてみる事にした。

……おいおい、死神に見えるよ、見えちゃうよ。

疲れてるんだな、と結論付け、満月を見るのを止めた。

もし本当に死神なら、どの位置からでも俺が見えちまうじゃねえか。

おー、怖い怖い。

以上、現場の亮でした。

……最近、俺の性格が急激に変わりつつある気がする。

一番嫌な、馬鹿な奴方面へと。

はは、悪くねえな。

第34話：そして、眠りにつく

翌日の土曜日。

全員が眠気眼に起き出した頃に、それは突然起こった。

俺と日向は、サイレンが鳴り続ける救急車に揺らされながら、車内のベッドの上で意識を失って眠っている葵と共に、病院へと向かっていた。

事の始まりはわずか三十分前の午前九時。

葵が、朝食の準備をしていた夢月の手伝いをしている途中に突然倒れたのだ。

皆が混乱している中、俺と日向は何とか冷静に対処できた為、救急車を呼ぶのが早かった。

後は皆への事情説明だが、葵が何故倒れたのかは、詳しい理由を前に夢月に話してある為、皆への事情説明は任せておき、今は東京都内のある病院へと向かっている。

その病院は、俺の知っている場所であり、研究員であり教授をやっていた親父が設立した研究施設と共に建てられた所でもある。

ちなみに、その院長は親父の友人が親父の跡を受け継ぎ、あの事故があった時は全力で夢月をサポートしてくれて、同時に俺の力ウンセリングもしてくれた為、俺が心から信用している人だ。

だから、後はその人を頼って、葵の無事を祈るだけだった。

病院のロビーで待っている事となり、俺と日向はロビーにある長椅子に座っていた。

それから一時間程待たされて、ようやく長身の医師が一人、こちらに向かつて来た。

白衣を羽織ったその男は、自分の茶髪の寝癖を気にした後、眼鏡をかけ直していた。

その医師こそ、俺が信用している人だ。

かざま しゅっへい
風間 修平先生。

この人を俺は、そう覚えている。

「久しぶりだね、亮くん。二年ぶりかな」

「こちらこそお久しぶりです、先生。事故の時以来ですから、大体その位ですね」

俺と修平先生は軽く挨拶を交わした後、揃って日向の方を向く。

「えと、こちらが先程、ここに運び込まれた篠塚 葵の双子、日向です。って、何でお前、啞然と驚きの両方を器用に作っているんだ？」

「いや、敬語が使えるのかと思って。いつものお前を見ると、自然と驚く」

まあ、確かに普段の俺を知っていると、驚くわな。

けれども心外だった為に、溜息をついてから答える。

「そりゃ、この人は夢月の命を救ってくれた恩人だからな」

「うん、素晴らしい家族思いだね」

「シスコンだろ」

要らぬ付け足しをする日向を、うるせえっと言いながら睨み付け

る。

つと、こんな話をしている場合じゃなかった。

「先生、本題に入りますが　葵の状態は、どうなんですか？」

その問いに、修平先生は難しい表情になった。

「……意識はあるんだけどね……目を覚ますのは、いつになるかわからないんだよ。そのところは、日向くんは知っている筈だけだね」

そうか、昏睡状態になるって事を日向が聞いたのは、修平先生だったのか。

修平先生は、日向を見て言葉を続ける。

「だけど、一つだけ方法があるんだ。だから、今の君には二つの選択肢がある」

まず一つ目は医師として、と言って修平先生は人差し指を立て、真剣な表情になる。

「今の彼女の状態は、脳が深く眠り込んでいるんだ。けれどこの脳に、生体式電子脳を埋め込むんだ。当然、脳の大半を電子脳にする事になるけどね。でも、これによって彼女の意識は戻るよ、確実にね」

でも、

「でも、当然リスクはある。脳の大半を機械に切り換えるから、四肢の神経を上手く制御出来ず、最初は全く動かない。何せ、昏睡状態から無理矢理目覚めさせるんだからね。動いて、首から上だけだ。

長い間、リハビリを続けなきゃ、動く事は無い。それが何年掛かるかさえ、分からない」

二つ目は個人として、と言って修平先生は、今度は中指を立て、表情を緩ませる。

「君が、彼女の面倒を看て上げるんだ。彼女が自力で目を覚ますその日までね。それは、いつ目が覚めるかは分からない。数年後か数十年後か、もしくは一生か、あるいは明日かもしれない。そんな眠ったままの状態になっている彼女の世話を、君が、して上げるんだよ」

それは、究極の二択だ。

白雪姫のように、キスの代わりに脳を弄る事ですぐに目を覚まし、しかし四肢が不自由な生活を送らせるか。

はたまた、人魚姫のように、身体の代わりに意識が泡となって心の海を漂っている間、いつ起きても良いように面倒を看続けるか。

などと、俺らしくも無いメルヘンチックな例え方をしてみる。

ちなみに、メルヘンチックの意味は微塵も知らない。

ふと、日向の顔を見てみれば、かなり迷っている様子だった。

しかし、その表情は暫しの時間を使って変化し、頷く。

……真っ直ぐな目だな。良い顔してやがる。

数日前の屋上で見せた顔と比べてみたいくらいだね。

「……後者だ。俺が、付きっ切りで面倒を看る。それが罪滅ぼしであり、空いてしまった家族の時間を、少しでも埋めようと思うから」「大丈夫かい？　かなり大変だよ？　途中でもう駄目だなんて言っても無駄なんだよ？」

「二言は無い！　これは、俺の決意だから」

日向の言葉を聞いた修平先生は、良く言った！ という表情になった。

本当、心から嬉しそうだ。

「それじゃあ、葵ちゃんのいる病室に行ってみたらどうか？ 場所とは三階の特別室だよ。亮くんは覚えているだろうから、私は行かなくても大丈夫だろう」

「たしか、夢月が入院していた頃のことですよ？ 分かりました」

最後に軽く会釈をし、日向と共にエレベーターへと向かった。

特別室に入ると、二年前と余り変わっていない事に驚いた。

入り口のすぐ左側にある別室にはキッチンや冷蔵庫、炊飯器などがあり、調理が出来る形となっている。

そして、部屋の奥にある窓は大きく、全開する事もできる為、風通しを良くする事も出来る。

また、その近くに葵が眠っているベッドともう一つベッドがあり、普通に生活が出来るようになっていた。

ベッドの足元から真っ直ぐ先の壁際に置いてある少し大きめの液晶テレビは、夢月が使っていた頃に訳あって壊れた為、今はその横に置いてある、小さめの液晶テレビが使われているようだ。

この特別室と呼ばれる病室は、訳ありの患者が入る場所で、もちろん個室、その上家族は面会時間などに関係なくずっと側に居られる為、付きっ切りで世話をする事が出来るのだ。

と、ここの設備を思い出していると、いつの間にか日向は、葵の隣まで行っていた。

その為、俺も近付いて、彼の隣に並ぶようにして葵を見る。

彼女の表情は少し緩んでおり、安眠してるようだった。

理由は多分、彼女の腕に刺してあるチューブから送られてる栄養剤のおかげだろうが、俺は日向が来たからじゃないかと思える。

すると日向は、右手を伸ばして葵の頬をそつと撫でた。

ごめんな、という言葉と共に。

何故謝ったのか、それは分からなかったが、コイツにはもう教えないといけないかもしれない。

「……なあ、日向。葵は微妙にだが、思い出していたんだ。お前の事を」

「っ!？」

その言葉を聞いた日向は目を見開き、驚いた表情で俺の方を向いた。

「お前が何で自分を必死になって助けてくれたのか、ずっと疑問に思っていたそうだ。あの時、お前は双子がどうか叫んでたしな。その時から、僅かに思い出していたらしい。自分には双子の弟がいた気がする、ってな」

後半の言葉を聞いた時、日向は苦笑した。

「そうか……弟か。……確かに、思い出しているな」

「ん？ そういえば、お前がお前の親父と喋っていた時は兄として、

と言ったな……どっちが合っているんだ？」

問うと日向は、懐かしそうに葵の顔を見た。
遠い昔を見るような目で。

「ああ、双子だからな。前にも言ったように幼い頃、競争をやったんだが、何度やっても負けて、いつも俺は弟だった。おかしい話だよな、最初に生まれてたのは葵だったのにどっちが先かなんて競争してたんだ。だけどそれが楽しかった。一度だけ、泣きながら勝ちを譲ってもらった事もあったな　って……！」

日向は自分の失言に気付き、再度俺の方を向く。
だが、もう遅い。
聞いちゃったよ、聞いちゃった。

「日向が泣きながら勝ちを、ねえ……」

とりあえず、その姿を思い浮かべて、思わず失笑する。
それを見た日向は、チツと舌打ちをした。
……っと、後一つあったな。

「……それと昨日の夜、葵からお前に伝えておいてくれて、伝言を任されたんだ」

言うと日向は、興味津々な表情になった。
うむ、話し甲斐があるってもんだな。

「……もし私が、日向の事を忘れても、日向が私の事をずっと忘れずにいてくれたら必ず、私は日向を思い出すよ。絶対にね。だ、そうだ。　ん？　どうした？　今度は、目を見開いて」

「……いや、何でもない。ただ、懐かしかったただけだ」

言って、日向は葵の寝顔を見る。

気付くと、いつの間にか日向の表情は笑みに変わっていた。

そして、また右手で葵の頬を撫でた。

今度は、ありがとうという言葉と共に……。

何故、今度はその言葉に変わったのか、俺には分からなかった。いや、分かる筈が無い。分かっても意味が無い。

双子だからこそ、意味のある行動つても存在するのだから。姉弟の絆は、簡単に切れる事は無い、ってな。

……らしくない台詞だった。

そう、内心で呟きつつ、俺は二人つきりにさせてやろうと思い、病室を後にした。

都内に立ち並ぶ高層ビルの間から見える太陽は傾きつつあり、光は大地を斜めに照らし出している。

その陽光が差し込んでいる、さほど広くない公園では二人分の小さな人影が、楽しそうに笑い声を上げて走り回っていた。

暫くすると、走り疲れたのか、二人はブランコに座って休憩を始めた。

そして、少し休んだ後、片方の小さな人影、青色の長髪をゴムで

縛って作られたツインテールを揺らしながら立ち上がる女の子は、もう片方の人影、中途半端に長い黒髪を手で触って気にしている男の子の方を向いた。

「今回も私の勝ちだねっ！」

嬉しそうに微笑む女の子に対して男の子は、うっつと唸っていた。それを見た彼女は軽く吐息し、そして男の子に問う。

「……ねえ、今回の勝負は無かった事にしてあげるから、代わりに私の願いを聞いてくれる？」

その言葉を聞いた男の子は、不思議そうに女の子を見上げるが、言いたい事がわかったのか、ゆっくりと頷いた。

「ありがとね。……もし私が　　の事を忘れても、　　が私の事をずっと忘れずにいてくれたら必ず、私は　　を思い出すよ。絶対にね」

言って女の子は、男の子に手を差し伸べる。

彼はその手を取り、立ち上がった。

その時の表情は、満面の笑みになっていた。

「もちろん！　忘れない、絶対。だって俺達は、双子なんだから！」

男の子の言葉を聞いて安心したのか、女の子の表情もまた、満面の笑みになっていた。

そして、二人は手を繋いで公園を後にした。

もうすぐ日が暮れる。

二人は、少し優しい父親が作る夕飯を楽しみにしながら走り出し

た。

目が覚める。

だが、今日の朝は目覚めが悪く、おまけに頭痛がする。

……あの夢を見たからだろうか。

二人の子供が出てくる夢。

その二人は、どことなく日向と葵に似ている気がして……。

馬鹿馬鹿しいと内心で呟き、先程の考えを否定した俺は、重い頭を抑えながら起き上がり、時計に目をやる。

時刻は午前七時。まさか俺が、休日に早起きしちまうとは。

「……って、あれ？ ……月曜日？」

ベッドの横にある棚の上に置かれている時計はデジタル時計で、時刻と日付、それに部屋の温度が表示される物なのだが、日付は何故か四月二十八日の月曜日となっていた。

だが俺の記憶では、昨日という日は葵が入院した二十六日であり、今日は土曜日の筈だ。

「……壊れたのか？」

俺はそうとしか考えられず、ベッドから降りて時計の横に置いて充電しておいた携帯電話を手に取り、とりあえずリビングへと向かう事にした。

少しずつ覚醒しつつある頭を掻きながら廊下を歩き、リビングに入ると、キッチンにはリズムにのって、頭を揺らしながら弁当を作っている夢月の姿があった。

とりあえず彼女に、おはようつと言うと、彼女は一度作業を止めて近付いて来た。

「やっと起きて来たね、お兄ちゃん」

「え？ 早起きな方だろ？ …… つかお前、何でエプロンの下に制服着てるんだ？ 今日は学校に行くのか？」

真面目顔で問いかけた俺に、夢月は驚いた表情で答えた。

「何言ってるの！？ お兄ちゃんも学校でしょ！？」

「いや、普通日曜に学校はないだろ」

「…………… 日曜日？」

驚いていた表情は、次第に疑問の表情へと変わっていき、上目遣いで俺を見た。

「…………… 今日はず曜日だよ？」

「はい？ そんな訳無いだ」

「それじゃ、自分の携帯を見てみてよ」

俺の言葉を遮るように、夢月はやけに真面目な言葉で言ってきた為、俺は仕方なく携帯を開いた。

そして、ディスプレイに映っている日付を見ると、四月二十八日月曜日とはつきり表示されていた。

ちなみに、携帯という物は自分で時刻を設定する事が出来ず、圏内にいる時に受信する電波で常時更新される仕様となっている。

まあ、所謂電波時計って奴だな。

もちろんそれは、俺の携帯も同じだ。

……そういえば、部屋にあるデジタル時計も電波時計だった気がする……。

つと言つ事は、だ。

「俺の日曜日はどこいったあああああ！」

その、余りのショックに、俺は頭を抱えて叫んだ。

「もっつ、叫んでないで早くご飯食べてよね！」

「はい、すみません」

俺、呆氣無く撃沈。

……俺はこの先一生、夢月に逆らえないんだろうなと、しみじみ思った。

いつものようにバスに乗りながら、俺は考え事をしていた。

何故日曜日が無いのか、腑に落ちない。

夢月が言うには、起こそうとしても寝返りを打っただけだった為、諦めて放って置いたんだそうだ。

人間って、一日中寝てても大丈夫なのか？

「……とんだ怠け者だな、俺」

苦笑混じりに呟き、バスに揺られながら、窓の外を見る。

そこにはとくに桜が散って、緑色の葉がついた木々が流れていく。

今月の初めと比べて、すっかり変わった光景を、俺は只見つめていた。

「そろそろ五月だなあ……」

そう、呟きながら。

「そろそろ五月ですねえ……」

教室で自分の席に座り、後ろの席にいる朔夜の方を向いた瞬間、彼女は目をつつとりとさせながら、俺と同じような事を呟いた。

「……お前、意外と思考回路が俺と同じなのか？」

「ほえ？ 思考回路、ですか？」

朔夜は何の事かわかっていないのか、クリーム色の癖毛を揺らして小首を傾げた。

「いや、何でも無いよ。ああ、何でも無いさ」

「そう言われると、余計に気になるんですけど……」

困った表情を見せる朔夜に、まあまあっと言いながら、窓の外を見る。

……色々あって騒がしかった四月も、もう終わりなんだなあ。

一週間前に束の間の非日常を体験した筈の俺の心は、既に日常状態に戻っており、すっかり安心しきっている。

そして、すぐ目と鼻の先には五月が待ち構えている訳だが、このまま何の騒動も無く過ごせられればなと思えば、多分その通りに事は進まないだろう。

神様は、俺を嫌ってらっしやるからなあ。

ともあれ、終わり良ければ全て良し、という言葉を見習えるよう、努力しよう。

そう決心し、窓から見える空を見上げた。
相変わらず、いつもの空がそこにあった。

第34話：そして、眠りにつく（後書き）

どもー、I z u m oです。

ラストの部分に終わった感がありますが、ここまでが以前小説大賞に応募した分の話です。

つまりは、第一章完！ってやつですねw

あ、もちろんこれから続きますよ？；

そんなこんなで、半年掛けて第一章分を終える事が出来ました。

それもこれも、この作品を見て下さり、時に応援の言葉を下さった読者の皆様のおかげです。

そんな皆様に感謝しつつ、これからも頑張っていきたいと思います。

ああ、他の作品もよろしく願いしますねw

では、また！

第35話：過ぎ去った日と、いつも通りの日

昔、俺の周りには変な奴らが居た。

自称・親友のオタク少年。

見たまんまの天然少女。

俺様主義の自己中変人少年。

自己嫌悪が激しい自殺志願少年。

けれど、いくら周囲に変人が居ようと、定着した日常は変わり栄えが無く、しかし楽しい日々だった。

最初は非日常であっても、それが定着すれば日常となる。

代償として、それまで日常だった光景は非日常か、もしくは全く縁の無い物となってしまう。

まさに、そんな感じの日々だった。

だが、そんな奴らも、時が経てば次第に離れていき、残ったのは一人だけ。

その一人と新しい日々^に足を踏み入れた今、俺の日常は変わっただろうか。

ふと、一ヶ月を振り返ってみれば、相変わらず変人ばかりである。人は変われど、人種は変わらない。

俺の周囲には、そんな奴らばかり集まる。

まあ、それが楽しいと思える俺が、居るんだがな。

そう思い、窓の外を見ていた視線を、何気無く正面へと戻す。

そこには昔とは別の天然少女が居て、目が合った俺に笑顔を見せた。

ん、良い笑顔だ。

だから、無意識に右手が動き、彼女へと近付いて、

「いたっ！ な、なんでデコピンするんですか!？」

「いや、なんとなくしたくなった。今では反省している」

言って、意地悪めいた微笑を作る。

すると朔夜は、全然反省しているように見えませんと頬を膨らませてムツとした表情になった。

だが、その表情はすぐに変わり、何かを思い出したような表情になった。

「そういえば、五月のゴールデンウィークに予定は入っているんですか？」

「いや、特にねえな。どした？」

突然変わった会話に戸惑う事無く答えると、朔夜は嬉しそうな表情を見せた。

「それはよかった！ 実はですね、前に亮さんが来た私のバイト先でイベントがあるんですよ。あのお店、こどもの日に丁度一周年になるそうなので、真佑ちゃんが会社の収入を使って、大抽選会を行うそうです」

「か、会社の収入を使うって……いいのかよ……？」

問いに朔夜は苦笑して答える。

「私もそう思ったんで聞いてみたんですけど、社長公認だから大丈夫、だそうです」

社長公認で、会社の収入を使うのかよ……。

「……んで？ それに来てくれと？」

「はい。参加者は先着順なんだそうですが、前売り券は常連客に販売されるそうなんです。それで、バイトとして働いている私には無料で貰えたので、よかつたらコレ、亮さんに差し上げます」

言いながら朔夜は、机の横にかけてあるカバンから前売り券と思われる紙切れを取り出し、俺に差し出して来た。

「おう、それじゃもらっ」

「おっはようー！ 我が親友、亮と朔夜ちゃんよお！！」

俺の言葉を遮るが如く、突然大声で叫びながら近付いて来たのは、俺からしては親友と呼んでいいのかわからないヤツ、圭吾だ。

コイツは自慢の空元気な笑顔を俺に向けながら、右手の親指をグツと立てて俺に向ける。

「聞いて喜べ、亮！ お前は必ず俺に感謝するだろうからな！！」

圭吾のテンションは、日を追う事に中学の頃とは比べ物にならない程高くなっている。

とりあえず、思った事を言っておこう。

「お前に感謝した事ないから、今回も絶対に感謝しない。いや、出来ない。わかつたなら席に座ってる」

「んなあゝ！？ す、少しは聞こうぜ、俺の話を……」

「亮さん、お友達の話はちゃんと聞きましょう？」

別に聞きたくないわけじゃないが、前フリが気に入らなかった。つと、そんな言い訳は、にこやかな笑みで俺を見ている朔夜に通

用するとは思えない為、観念して圭吾の話を聞いてやる事にした。

「……わかった、話してくれ」

その言葉を聞いた圭吾は、雲がかかったような暗い表情から一転して、太陽が射したかのような晴れ晴れとした表情になった。

面倒臭いヤツだ……。

そんな思いもお構い無しに、圭吾は話を進める。

「実はな、この前お前を連れて行った西洋風メイド喫茶で、大抽選会というイベントがあるんだ」

その時、もしかしてつと疑問を持ったが、面白そうだからもう少し話させておく。

「そのイベントは先着順なんだが、常連である俺には前売り券の購入が出来るんだよ。そして、その前売り券を……手に入れましたあ……」

叫んで圭吾は、ポケットから二枚の紙切れを取り出して、その内の一枚を俺に突き出してきた。

それはやっぱり、見覚えのある物だった。

「もちろん、お前の分も買っておいたぜっ！」

「わりい、ついさっき朔夜に貰ったわ」

俺はそう言いながら、貰ったチケットをポケットから取り出してひらひらさせているのと同時に、圭吾が音を立ててこけた。

「なんで持つてるんだああ！！　　ってか朔夜ちゃん、俺にはな

いの!？」

「す、すみません。バイトとして働いているのは私だけなんで、特別にって真佑ちゃんから一枚だけ貰ったんです。それでこの間、誕生日会に招待してくれた亮さんに、お礼として差し上げようと思って……本当にすみません!」

言って朔夜は、申し訳なさそうな表情で頭を下げた。
それを見た圭吾は、苦笑しながら片手を振った。

「そ、そんな、謝らなくていいって。朔夜ちゃんが悪いわけじゃないし、もう終わった事だから!」

「そうそう、こんなヤツに下げる頭なんて勿体無いくらいなんだから。世界共通用語だぞ? M O T T A I N A I ってな」

「お前、さり気無く俺を馬鹿にしてるだろ……」

圭吾は小さく溜息をついて、その後、あっと言って俺を見た。

「って事は、お前も行くのか?」

「ああ、せっかく貰ったんだしな。無駄にするわけにはいかないから、行くよ」

「……そうか、お前が自らの意志で……俺は嬉しいぞ……」

言いながら圭吾は、腕を組み、満面の笑みで顔を上下に振って頷いていた。

……盛大に勘違いをしていると考えられるので、とりあえずは馬鹿に下目で見しておく。

と、その時だ。

教室の入口にある引き戸が開き、鬼頭が入って来た。

同時に、圭吾も含めて立っていたヤツらが一斉に自分の席へと戻って行った。

それも、一瞬でだ。

その光景を、微笑しながら見ていた鬼頭は教卓の前に立ち、徐に
スーツの内ポケットから煙草とライターを取り出した。

……って、

「何やってんだ、アンタは！」

気付くと俺は、思わず叫んでいた。

すると鬼頭は、箱から取り出した煙草を一本口に銜えながら俺を
見る。

「……誰かと思えば、このクラスで唯一の反乱分子である霧島じゃないか。どうした？ 何か文句でもあるのか？」

「大有りだ！ 何でアンタは教室で喫煙しようとしてるんだよ！？」
「ふんっ、そんな事が……霧島、あれを見てみる」

勝ち誇ったような表情をしながら鬼頭が人差し指で示した先、そこは教室の外側の窓だ。

その窓の上部には、ずっと回り続けている換気扇が埋め込まれている。

……まさかとは思うが、続く言葉を聞いてみよう……。

「換気扇が付いているという事は、喫煙が出来るという事だ」

「……それは喫煙者のためじゃなくて、教室内を換気するためのものだ。」
「ならば煙草の煙も、ついでに喚起してもらおう。さて、ホームルームを始めるぞ」

無理矢理終わらされたよ……。

などと思つて苦笑している俺の視線を無視し、鬼頭は銜えた煙草に火を付け、煙を口から吐き出す。

「え〜っと…… ああ、神田は家の事情によつて病院に行っているため休みだ。それとだな…… 今日と明日は六時間目の授業をカットし、五時間目までとする。よつて、ホームルームが終わり次第、一人残らず下校だ。今日までの提出物がある生徒は明後日まで延長、部活は強制で休部だ。 以上」

鬼頭の言葉、特に強制休部という報告に対してだろうか、教室内に、え〜っとという声が響いた。

だが、そんな生徒達を鬼頭が睨むと、一斉に静まり返った。

「文句があるヤツは校長室に行けばいい。私に言われても困る。…… どうしても私に言いたいヤツがいるのなら、煙草を献上してもらうが？」

問いに教室内の全生徒が揃つて首を左右に振つたために鬼頭は微笑して、煙草を銜えたまま教室を出て行った。

その瞬間、リミッターが外れたかのように教室内が騒がしくなる。と、その時だ。

後ろの朔夜が、俺の背中をペンのような物で突いて来た。そのため俺は、どした？ と問いながら後ろへと振り向く。

「えつとですね、今日は早く終わるようですし、よかつたら葵ちゃんのお見舞いに行きませんか？」

「見舞い、か。もちろんいいぞ。そついやあ、一度は行つておかないとな」

そつ答えると、朔夜は嬉しそつに目を弓のようにして笑顔になった。

「それでは、お見舞いの品を決めないといけませんね」

「見舞いの品？ …… ああ、それなら」

言って言葉を止め、机の横に掛けてある鞆に手をつ込む。

…… 確か内側のポケットに…… あったあつた。

手に触れた感触、少し硬みのある紙の束だ。

俺はそれを取り出し、朔夜の机の上に置いた。

「これは…… あ、もう出来たんですね！」

「お前な、今の時代はパソコンとプリンターがあればすぐに出来るぞ？ …… って言っても、俺は機会音痴だから、夢月にやつてもらったんだがな。とりあえず、お前の分だ」

「わあ！ ありがとうございます！！」

輪ゴムで束ねられた内の一枚を朔夜に渡したそれは、葵の誕生会で撮った記念写真だ。

後列の両サイドは、仏教面の日向が左、腕を組んで笑っている、姉御こと川瀬 奈々が右に立っており、中央にはピースしながら苦笑をしている俺が左、同じくピースしているが平然と笑顔でいる出雲 直樹が右、そして俺が苦笑をしている原因となっているのが、二人の肩に腕を回して満面の笑みを浮かべている圭吾が中心にいる。前列は、この誕生会の主役である葵が目をも弓のようにして笑顔になつており、彼女を中心にして左から無邪気な笑顔の夢月が、右からは葵と同じような笑顔の朔夜がそれぞれ葵に飛びついていていた。

そんな写真を見て、思わず笑みを零した後に朔夜を見ると同じように笑みを零していた。

「亮さん！ 見てくださいよ、私と夢月ちゃんが飛びついている所、バッチリ撮れています！！」

「それを圭吾が真似しているのも、何故かバッチリなんだな」

そうしてしばらくの間、俺と朔夜は写真を見て笑い合っていた。

第36話：初めてのお見舞い

いつもとは違い五時間しかない授業を全て寝て過ごし、やっと下校時刻になった。

すると朝、鬼頭が言っていた通り、全生徒がまるで追い出されるかのように学校を出て行った。

そんな中を、俺と朔夜は並んで歩き、バス停へと向かっていた。

「それにしても、残念ですね。奈々さんや直樹さん、圭吾さんまでもが一緒に行けないなんて」

「だな。どうせなら、誕生会に参加したヤツらで見舞いに行きたかったんだが」

と、その時。

制服のポケットに入れていた携帯のバイブレーターが起動し、メールが着た事を知らせてきた。

その為俺は、ポケットから携帯を取り出し、メールの内容を確認する。

「……珍しく、アイツも駄目らしい」

メールの相手は夢月だ。

授業が終わった後、夢月にも、見舞いに行かないか？ というメールを送ったんだが、どうやら用事があるらしく、今日はパスとの事。

「どうして無理なんですか？」

朔夜は俺の携帯を覗き込むように顔を画面に近付け、問い掛けて

きた。

「なんでも、五月の中旬にある修学旅行の計画立てが、夢月のグループを含めて終わっていないから、残ってやるそうだと。で、夕食は作れそうにないから、外で適当に食べてきて、か」

少し考え、すぐに答えが出る。

「よし、牛丼だな」

その呟きを聞いて、朔夜は驚いた表情で俺を見た。

「ぎゅ、牛丼ですか！？ さすがに、一人で牛丼っていうのは……」
「いや、別にいいじゃねえか。牛丼は美味しい」
「あ、そうだ！」

無視かよ。

朔夜は両手を合わせて笑顔になり、口を開く。

「私の家で食べて行きませんか？」

「……マジで？ いいのか？ やっぱ駄目ってのは無しだぞ！？」
「もちろんですよ！ 是非、食べて行ってください」

ああ、俺の目の前に救いの女神様がいる……。

「よし、そうと決まれば早速」

「お見舞いですよ？」

「も、もちろんだ！」

思わず大声で言うと、朔夜は軽く握った右手を口元に当てて、く

すくすつと笑った。

それを見て俺も笑う、がその瞬間、視野の右側の学校前道路を、見た事のあるシルエットが走って行った。

………つて、

「バス来たじゃねえか!!」

「ええ!?!」

俺と朔夜は驚きのあまり大声を上げるが、そんな事をしている間にバスはバス停の前で止まった。

「走るぞ、朔夜!」

「あ、はい!」

合図と共に俺は自分の鞆と朔夜の鞆をしっかりと持ち、彼女のスピードに合わせて走り出した。

何とかバスに間に合い、二人揃って息を荒くしながら空いている席に座る。

久しぶりに走った俺は少し息が荒いだけだが、隣り合って座っている朔夜は、俺以上に息を切らしていた。

「……大丈夫か?」

「は、はい……だいじょうぶです……滅多に走らない……もので……すみません……」

「いや、謝らなくてもいいって」

朔夜は所々言葉が途切れており、相当疲れているようだった。

「お疲れな。着いたら起こすから、寝ててもいいぞ」

「あ、はい……………そうさせて……………もらいます……………」

言って朔夜は目を瞑り、ゆっくりと息を整えた。

……………コイツの寝顔を見ると、頬を抓りたくなるな。

さすがに疲れている相手にはやらないが、そう思いながら自分の息を整え、窓の外を眺める。

外の景色には、少しずつ建物が増え始めていた。

ちなみにこのバスは、俺が登校に使っているのとは違い、東京都内へと向かって走っているバスだ。

バス停の場所を言うと、校門から出て右にずっと行くと桐河町行きのバス停があり、逆に左へずつと行くと、今俺達が乗っている都内巡回のバス停があるという事になる。

もちろん、都内へと向かうバスのために桐河行きと違って、飛翔鷹高校の学生が多く乗っている。

そう思うと、空いた席に座れたのは運がよかったと言っべきか……………。

そう思い苦笑していると、向かい合った正面の席に座っている飛翔鷹高校の女子生徒三人が、こちらを向いて小さく笑っていた。

たぶんその視線は、隣で寝ている朔夜へと向けられているのだろう。

……………笑うほどの寝顔なのか？

そう思いながら朔夜を見ると、口元からは微量のヨダレが垂れていた。

癖毛でいかにも天然そうな寝顔で、その上ヨダレというのは様になっっていると思うが、さすがにヨダレは拭き取ってやろう……………。

すると、鞆のポケットにハンカチがあるのを思い出し、急いで取

り出して朔夜の眠りを妨げないように、慎重に拭き取った。
その後、無事に拭き取ったハンカチを広げ、朔夜の首元に掛けておく。

「……ふう……」

思わずため息。

すると、たまたま視界に入った正面の女子生徒達が、笑顔で音を立てずに拍手をしていた。

どうやらこれは、大儀だったようだ。
誇れるようなものではないと思うが……。

「おい、起きろって、もうすぐ着くぞ」

言いながら俺は、朔夜の頬をペチペチと弱めに叩くと、うーんと唸りながら彼女は目を覚ました。

「……ほえ？ もんじゃ焼きですか……？」

「は？ 何言ってるんだ？ お前」

寝ぼけてるな、コイツ。

「葵が入院している病院に着きそっだ、と言っただ。起きれないのなら背負ってやろうか？」

「ああ、葵ちゃんの病院……背負う？ ……負ぶさる……ほええ！
？ そ、そそそんな事しなくてもいいですよ！？ ほ、ほら、も

「目が覚めましたし！」

朔夜は顔を赤くし、両手を胸元辺りで左右に振って取り乱しながらも、全力で否定した。

「……………本当、面白いヤツだな。」

と、そう思った時だ。

車内に次の到着地を知らせるアナウンスが響いた。

『毎度ご乗車ありがとうございます。次は、葛城総合病院前、葛城総合病院前です。お降りの方は、お近くのボタンを押して、お知らせ下さい』

いかにも録音されたような女性の声。

こういうアナウンスは、声やセリフが変わるうとも、昔から使われている機能だそうだ。

「さ、行くぞ。朔夜」

言つて、背を朔夜に向けてしゃがみ込む。

「だから、負ぶさらなくてもいいですって！　は、恥ずかしいですからー！」

「はははっ、冗談だ。冗談」

笑いながらそう言つて立ち上がり、揺れる車内を歩いて出口へと向かう。

「……………何だ、冗談だったんですか……………」

「ん？　どした？」

「ああ、いえ、何でもないです！」

やっぱり面白いヤツだつと内心で呟き、目的地に到着したバスを降りる。

後ろから急いで走ってくる朔夜の足音を耳で聞きながら、目の前にある病院を見上げる。

数十メートル先にある正面入口の上には、葛城総合病院という文字の形をした大きなパネルがあり、その後ろには八階ほどの高さ、横には途轍もなく長く大きい建造物が聳え立っている。

改めて正面から見ると、親父の研究はすごいもんだつたんだなつと実感してしまう。

親父の研究は国から直接支援を受けていたらしく、そのための資金も途轍もない額だつたそうだ。

そしてその資金で、この葛城総合病院を建てたと聞いた。

だが、その研究内容は、息子である俺でさえも知らないほどのトップシークレットとして扱われていた。

「……何やってたんだろぅな、親父達は……」

「どうしたんですか？」

不意に、左側から声。

振り向くとそこには、小首を傾げている朔夜が立っていた。

「いや、何でも無い。気にするな。さ、葵がいる病室に行こう」

「あ、はい！ それじゃ、急ぎましょう！」

言って朔夜は、俺よりも速く歩いて入口の自動ドアを通った。

俺もその後ろに続いて、閉まるうとしている自動ドアを通り、中へと入った。

病院内は異常なくらい広く、平日と言うのに色々な年代の人達が多く来ていた。

その為受付係は、ロビーとは違って狭いカウンターのスペースを忙しそうに走り回っていた。

そんな人達を見て苦笑しつつ、受付口の列に並んでいる朔夜に歩み寄る。

「……何で並んでいるんだ？」

問いに朔夜は、首を傾げた。

「何でって、お見舞いに来たので受付係の人に入室許可を頂こうと思ひまして」

「見舞いするのに許可とかいらねえだろ？」

「……え？ そうだったんですか！？」

「……………」

「……………」

しばらくの沈黙。

俺と朔夜は目を合わせたまま動かない。

「……………よし、葵のいる病室は三階だから、エレベーターに乗るぞ」

「あ、は、はいっ！」

沈黙を壊す事が出来て、内心ホツとしながら、確か入口の右側にある通路の途中にあるエレベーターへと向かった。

第37話：久しぶりのその場所は

病室への入口がいくつもある三階の廊下をあるいている俺と朔夜は、特別室　特別患者用生活個室　と書かれたプレートが、スイッチ式の自動ドアに掛けられている病室の前で立ち止まった。

「……あ、あの、亮さん。ここにWCと書いてあるんですが、ここって元は御手洗いだったんですか？」

言いながら朔夜が指で示す場所、零号室と書いてあるプレートの下にはWCと書かれたプレートが埋め込まれていた。

「ああ、それはWelcomeって意味だ。馬鹿な親父がユーモアのつもりで埋め込んだんだが、当初はトイレと間違えるヤツが続出しちまったんだ。……今は滅多に間違えるヤツはいないらしいがな」
「そ、そうなんですか……」

引き攣った笑みを作った朔夜を見て、疑問が解けたんだなっとな勝手に納得し、軽くドアをノックした後にスイッチを押して中へと入った。

すると、入って右側にあるキッチンで長髪の少年、日向が首を傾げながら、冷蔵庫の中をジッと見ていた。

だが、俺達が来た事に気付くと、一度こちらを見て頷き、冷蔵庫の中から烏龍茶と書かれたラベルの貼ってあるペットボトルを取り出した。

「……………烏龍茶でいいか？」
「珍しく気前がいいな」

嫌味のように言っていると、日向は冷蔵庫の隣にある棚からガラスのコップを三個取り出しながら微笑した。

「色々世話になった客人だからな。これくらいはさせてもらいたい」

それにつとまって、取り出したコップに烏龍茶を注ぎ始める。

「お前らが居なかったら、俺は今ここに居ない。そして、一生後悔する人生を送っていただろう……その件では、本当に感謝している」

「お前、よくそんな臭いセリフを堂々と　ングッ!?」

「亮さんは人の事言えません。反省してマシユマロでも食って下さい。感謝なんて……友達として当然の事をしたまでですよ！　気にしないで下さいね」

どこから来た、このマシユマロ。

……ってか量が多過ぎる！　水、いや烏龍茶！

「ム……モゴ……グムッ！」

俺は言葉になつてない声を出しながら、日向の前にある烏龍茶を必死に指でさした。

すると日向はそれに気付いたのか、笑いながらコップを一杯、俺に差し出してきた。

それを俺は、急いで受け取って口に流し込む。

「　ゲホゴホッ！！　死ぬかと思った！　おい朔夜　　ってお前、何顔そらして肩を震わせて笑ってたんだよ……」

「……ほえ？　あ、すみません、反応が面白かったもので……あ

の、大丈夫でしたか？」

朔夜は小首を傾げて問いかけて来た為、俺はため息をついて肩を落とした。

「何とか大丈夫だったよ……ってか、あのマシユマロはどこから出て来たんだよ？」

「ああ、マシユマロは私の好物の一つなので、常時持ち運びしています！ 食べますか？」

「もういい」

そう言い切り、再度溜息。

「……… 亮、お前一段と馬鹿に磨きがかかったな」

「何だよ磨きつて！？」

問いに、日向は答える事なく歩き出し、奥の部屋へと向かった。その先、開いた窓から入る風がカーテンを靡かせているその下には、少女が眠っているベッドがあった。

その少女、葵の側まで行った俺達は彼女を見ながら、近くにあった椅子に座る。

葵は、数日前と何ら変わりの無い安らかな寝顔をしていた。

片腕に繋がられている栄養剤も、同じく変わっていない。

つまりは、悪化も何もせず、ただただ眠っているだけだということだ。

「……… 葵ちゃん、いい夢見られているでしょうか？」

「心配すんなって。この寝顔は、いい夢見てる顔だよ、多分」

「多分、ですか……… あ、亮さん、この写真立てにあの写真を入れませんか？」

そう言って朔夜が指で示す方向、ベッドの隣にある小さな棚の上には、誕生会の時に誰かがプレゼントした、写真の入っていないピンク色の可愛い写真立てが置いてあった。

ちなみにその周りには、他の皆がプレゼントしていた猫のぬいぐるみやオルゴールなどが置かれている。

朔夜はその写真立てに近付いて手に取り、笑顔でこちらを向いた。

「コレに入れて飾るといいと思いませんか？ あ、ちなみにコレは私がプレゼントしたんですよ」

「あゝ、それをプレゼントしたのはお前だったのか。ありがとう、おかげで疑問が解けた」

「え？ あ、はい、どういたしまして……？」

朔夜は何故、礼を言われたのかわからず、首を傾げながらも返事をした。

まあ、当然の反応だな。

「……つと、そうだ。日向、お前にも写真を渡さないとな」

俺はそう言いながら、鞆から写真を一枚取り出して、ベッドの向かい側の椅子に座っている日向に渡した。

そして、もう一枚取り出し、隣に居る朔夜に渡す。

「それ、写真立てに入れておいてくれ」

「もちろんです！ ……置いておく場所は、元あった棚の上でいいですか？」

問われた日向は頷き、そして、俺の方を向いた。

「俺はしばらく、学校を休む事にする。今まで一緒に居てやれなかった分、今は一緒に居てやりたい」

それを聞くと俺は、肩を竦めてため息をついた。

「遅すぎるぞ、バカヤロウ。当たり前的事を出来なかったんだ、少しでも当たり前のように居てやれ。……まあ、たまには顔を出せよ?」

「来月の上旬はテスト期間ですしねっ」

「……………え?」

朔夜の言葉を聞いて正直、テストだという事を忘れていた……。

「ありがとう、朔夜」

「え? え!? いきなりどうしたんですか!?!」

「よおし、三人も居るんだし、バンビでもするか!」

「ちょ、ちよっと、無視しないでくださいよ! っというより、バンビって何ですか!?!」

混乱気味の朔夜を無視し、俺は写真立てのある棚の下戸を開けて、中から数枚のカード束と大きめの四角い板を取り出した。

その板にはチェスの板のように白黒のマスが刻み込んであり、四方の隅には三十センチくらいの高さがある、プラスチックで塔を模したオブジェがついている。

その塔の下部には丸い穴が開いており、その前には受け皿が設置されている。

それを見た朔夜は、眉を寄せて難しい表情をしながら、小首を傾げた。

「……………コレがバンビ、ですか?」

問いに、俺は頷いて答える。

「そうだ。コレはこの病院の院長である修平先生と俺の親父が共同製作したゲームだ。……実は、数年前に大手のホビー会社に子供向けとして特許を求めて提出したらいいんだが、一瞬で却下されたらしい。理由は、ルールが高度で子供達のおもちゃには出来ない、だそうだ」

「……その院長がこの病院に入院したヤツに広める為に、ここに置かれているのか？ 何故、一般玩具にしなかったんだ？」

「前者の質問はそれで正解だ。後者の質問は……親父が、子供向けじゃないと売らないつと言い切ってた。で、憂さ晴らしなのか、息子である俺にルールを全部叩き込みやがった」

だが、覚えると面白いぞ？ つと言葉を付け足して微笑し、近くにある折り畳み式のテーブルを展開して、その上に板を置いた。

そして、二人の方を向くと、いつの間にか朔夜は、棚の中に入っていた説明書をマジマジと見ていた。

その後彼女は、驚いた表情をしながらこちらを向いた。

「す、すごく分厚いですね、コレ……百五十ページもありますよ？」
「ああ、ゲームの説明は最初の二十ページだけだ。残りは製作者コメントと、親父による俺と夢月の育成日記・総集編だ」

言っと、朔夜は最後の方のページを捲り、苦笑した。

「……た、確かに、亮さんと夢月ちゃんですね。写真も載ってますよ？ わぁ！ 可愛いです……！ この亮さんはレアですよ、レア……！」

盛大に興奮してるな、朔夜……。

「……………っておい、日向！ 何、肩を震わせて顔を逸らしながら笑っているんだ!？」

「……き………きにする………な………」

「だああ！ 見るのをやめろおお!!！」

そう叫んだ俺の声は、病室内に響き渡ったが、二人は見るのを止めず、しばらく笑い続けやがった。

第38話：素直に話せるその理由

「すみません、荷物を持って頂いて」

「飯を食わせてもらえるんだ、これくらいはしないとな」

そう言うつと朔夜は、ありがとうございますつと云って微笑んだ。

……さて、俺達は今、葵の見舞いを終えた後に、朔夜の頼みで買い物をした帰り道を歩いている最中だ。

辺りはすっかり暗くなっているが、どうやら朔夜の家は東京都内の荒川区、町屋にある為、少し時間は掛かるが町屋駅から降りた後は徒歩で向かっている。

そして、その間は俺が朔夜の荷物を持って歩いているという事だ。

「……それにしても、結局最後まで見てしまいましたから、あまり出来ませんでしたね、バンビ」

「災難だよ、ホント。お前ら、俺と夢月を見てずっと笑ってたしな…… にしてもお前、バンビ下手だったな？」

問うつと朔夜は、両手の平を左右に振りながら苦笑した。

「せ、説明書を読みながらでしたし、亮さんと日向さん、普通じゃ思いつかない戦略を使ってきましたし……日向さんって、飲み込みが早かったですね」

「だな。正直、驚いた。アイツはああいうゲームの才能があるな、うん」

言って頷き、微笑する。

すると、朔夜もつられて笑い出した。

そして、しばらく歩くと不意に、朔夜が俺の名を呼んだ後に問い

掛けて来た。

「……前から聞きたい事があつたんですが、いいですか？」

「ああ、いいぞ。答えられる範囲内で話そう」

「ありがとうございます。それじゃ、えと　どうして亮さんは、女の子と最初から気軽に話が出来るんですか？　最近の学生は、自然と男女グループで分断されていて、どちらも会話をあまりしようとしないと聞いたんですけど」

あ、真佑ちゃんから亮さんは不思議だなんて聞いたんですけど、と言葉を付け足して、再度首を傾げた。

真佑ちゃん、というのは高崎　真佑実の事だろう。

年齢的には先輩である身、そういう所は疑問に持つんだな……。同時に、それを聞いた朔夜も気になった、と。

……確かに、今に始まったわけでもなく、二〇二三年くらいから今の二〇三六年の間で、急激に分断が見られるようになったらしい。唯一分断されていない男女は、身内か親類、もしくは小学校や中学校からの仲ってやつだけらしい。

……つと、コレはテレビでやってた番組で得た知識だ。

俺は一息入れ、話を始める。

「……俺も最初は、女子と話す機会はなかったが……切っ掛けがあった。丁度中二の時、俗に言う鬼人って通り名で恐れられていた時だ」

「切っ掛け、ですか？」

オウム返しに問う朔夜の視線を感じながらも、俺は懐かしむように夜空を見上げる。

歩きながら見る空は位置を変えずに闇に覆われ、しかし都市の明かりで薄い黒、その上スモッグで星がほとんど見えない、という表

現になる。

「……夏休みの少し前だ。会った事の無い高校生に突然、廃ビルに呼ばれてな。変な言いがかりを付けられた後、突然喧嘩になった。その時はたまたま圭吾が居なかったから困役が無く、終わった時は珍しく傷だらけだったんだ」

「さ、さりげなく言いましたけど、突っ込み所が満載ですね……」

言いながら苦笑している朔夜に、それは言っなよ？　　と笑みで返し、続ける。

「で、さすがに疲れたから、夜空でも見て休もうと思って屋上に向かった。だが、そこには先客が居たんだよ。……今にも飛び降り自殺しようとしてる奴がな」

言った瞬間、朔夜は驚いた。

ま、無理も無いか。

「そ、それで、その人はどうなったんですか!？」

「助けたよ。それも、ギリギリでだ。……で、ソイツが切っ掛けとなった女子って訳だ。　　と、家まで後どれくらい掛かる?」

「もう少し掛かりますね。それよりも、続きを話して下さい」

その言葉に了承し、町屋の町並みを見ながら、思い出すように口を開く。

「……助けた時は、当然ながら何で助けたとか、私にはもう生きる理由がないとか居場所が無いとか言ってたんだがな。居場所が無いのなら、俺達の馬鹿騒ぎに加わればいい。毎日馬鹿やって、喧嘩して、好き勝手出来て、きっと楽しいからなっと言ったら、死のう

とするのをやめて、次の日には俺達のグループに参加していた」

「亮さん、いい説得だったのに、結局は喧嘩に巻き込んだんですね

……」

「いや、一つの命を救ったんだから、そこは気にしないって事で……

……まあ、それからずっと鬼人を引退した後も、一緒に居て笑ってた。二人揃って圭吾を馬鹿にしなからな」

言って、思い出し笑いが込み上がってきた為、素直に声に出して笑った。

「圭吾さんって、昔から弄られてたんですね」

「今はお前も対象だな」

「ほえ！？」

朔夜はそれを聞いて驚いた表情をし、俺は再度笑い出した。

「ひ、酷いですよぉー！……それで、その子は今、どうしているんですか？もしかして、同じ学校！？」

問われた言葉に一瞬、答えるのを躊躇したが、もうとっくに心が落ち着いているのに気付いた俺は、されど表情を苦笑に変えて空を見上げながら答えた。

「……死んだよ。去年の五月に、交通事故でな」

「え……？」

事を言った瞬間、朔夜は啞然として言葉を失い、歩みを止めた。俺はそれに気付き、少し離れた所で同じく歩みを止めて、彼女の方へと振り向く。

その表情は、何を言ったらいいのかわからない、そんな表情だ。

だが彼女は、無理に口を開こうとした。

「……あ、えっと……」

「そんな話に持っていったってごめんなさいってか？ 俺が勝手に話したんだ、お前が気にする事じゃない。それに、もうとつくに心の整理が付いている」

「そ、そうなんですか……」

俺の言葉を聞いて安心したのか、ホッとした表情を見せ、そして小首を傾げた。

「……その人の事、どう思ってたんですか？ えと……す、好きだったんですか？」

言って頬を赤らめた朔夜を見て笑いながらも、首を左右に振って答える。

「好きとか、そういう感情はなかったな。まあ、思っていた事を例えるなら……家族だな」

「家族、ですか？」

「ああ、家族だ。圭吾とソイツ、そして夢月。皆が集まっているとまるで兄弟のような感じがしていた。だから、家族だ」

それに、つと呟いて微笑。

「ソイツには彼氏が居たしな。たった一ヶ月と数日の、しかも最後まで告白しなかった不器用な彼氏がな」

「たった……一ヶ月……とても、悲しいですね……」

そう呟きながら、朔夜は表情を曇らせた。

だが、その表情を無理に笑顔へと変え、目を伏せて軽く会釈した。

「お話してくれてありがとうございます」

「気にすんな。思い出話をしてみたくなったから、しただけだ」

「それでも、ありがとうございます！」

言って朔夜は歩みを再開し、俺はそれに合わせて同じく歩き出す。
横の車道を走る車が、一層増した気がする。

それはまるで、夕飯時である事を知らせているようだった。

第39話：思い込みの激しい親ってのはどうかと

車道の隣にある歩道を歩いていた状況から、いつの間にか住宅に囲まれた道を歩いていた。

朔夜が言うにはもうすぐらしく、その言葉はすぐに現実となった。朔夜が立ち止まった視線の先には？九条流秘伝・ガッツ！もんじゃ焼き？と書かれた暖簾のれんが掛かっている店があった。

……神よ、どうかこの訳のわからん暖簾を掛けた店が、朔夜の家じゃありませんように……。

「着きました、ここが私の家です」

「ノオオオオオオツツ！！」

「ど、どうしたんですか！？」

俺、頭を抱えてしゃがみ込む。

「人ん家の前で騒ぐな！　うるせえぞ！！」

その時突然、店内からエプロンを付けた金髪の若い男が怒鳴って出て来た。

「あ、お父さん！　ただいまです」

お父さん！？

「おう、よく帰って来たな朔夜あ！　……で、そっちの男は誰だ？」

言って、朔夜に父と呼ばれた男は、俺を指で差す。

「……あ、俺は朔夜のクラスメイトで霧島 亮。今日は、朔夜に晩飯を食って行かないかと誘われて来たんだ」

「ほう、クラスメイト……そうか!!」

何がそうなのかと問う前に、朔夜の父は俺の真横に来て肩に腕を回して来た。

「つまりは、朔夜の彼氏だなあ!? ついに俺の娘にも、彼氏が現れたかあ! 父さん、嬉しいぞ! よろしくな、亮とやら!! 俺は九条 将史^{まさし}だ」

「ええ!? ち、違いますよ! 亮さんはそういう人じゃありませんって!」

ぜ、全力否定……。

「そんな言い訳しても無駄だぜ? もう下の名前で呼び合っているのと、晩飯食わせるために家へと誘ったのが、何よりの証拠だあ!」
「それは友達として、下の名前で呼んだ方がいって思ったからです! それに誘った理由は、今日は亮さん、夕飯がないそうなのでどうせならって思って誘ったんです!!」

……それにしても、俺の入る隙がねえな、この会話。

などと思っている間に、将史は俺の耳元に顔を近付けて来て、朔夜に聞こえる声で何やら呟いた。

……ツンツンの金髪が当たって痛い。

「娘はあの通り、天然だからよ。しっかり守ってやってくれ、息子よ!」

「息子じゃねえ!」 「息子じゃありません!」

「はっはっはっ、息が合ってるじゃねえかあ!」

この時、俺は思った。

この人には、何を言っても通用しない、と。

それなら、嘘を言っても終わらせるしかないんじゃないか？

腹も減ってるし……。

「……アンタのしつこさには負けたよ。そうだ、俺は朔夜の彼氏なんだ」

「おお！ やつと白状したかあ！ やっぱ、俺の読みは正しかった」
「えええ！？ な、ななな、何、何を言ってるんですか！？」

頬を赤らめながら、異常なほどに慌てている朔夜に、内心で手を合わせて謝りつつ、肩に掛かっている将史の腕を下ろして、話を変える事にする。

「まあ、そういう事だから、とりあえずこの話はここまでって事で
晩飯、食わせて貰っていいか？」

「もちろんいいぞ！ つと、その前に……その袋は何だ？ 朔夜」

言って将史は、俺が持っている袋を指でさし、朔夜に問い掛けた。

「り、亮さんが私の、わた、私の ほえ？ あ、ああ、それはです
ね、夕飯の材料を店から使うわけにはいけないと思って買ってきたんです」

「何言ってるんだ？ お前の彼氏が来たんだ、喜んで店を使うぜ！」
「え？ いいんですか？ ……って、彼氏じゃないですって……！」

再度慌てる朔夜を見て、俺は将史と共に笑っていた。

……仲のいい、面白い家族だな。そう思うと、更に笑みが増した。

「さてと、それじゃあそろそろ中に入れ。今日はもう店仕舞いつて事にしておくからよ」

言いながら将史は暖簾を下ろし、さっさと店の中へと入って行った。

その後、俺は未だに頬を赤らめて混乱している朔夜の名前を呼んで正氣に戻し、中へと入る事にした。

暑い所に居た後に吸う夜の空気は普通よりも冷たく、温まった肺を急激に冷やした。

その風を目一杯吸った後、俺は横に居る朔夜を一度見て、町屋駅へと歩みを再開する。

結局あの後、少し抵抗を持ちながら食べたもんじゃ焼きが予想以上に美味く、声に出して歓声を上げたところ、将史が大喜びして大量に追加を持って来てしまった。

まあ、全部食えたからよかったが……。

「……………なあ、朔夜」

呼び掛けに朔夜は、はい？　つと返して来たので、言葉を続ける。

「今日はありがとな、美味しい飯を食わせてくれて。それと、勝手にお前の彼氏だなんて言って悪かった」

「ええ！？ い、いえいえ、そ、そんな事…… あ、お父さんを止める為に言っただからです、別に気にしていませんよ？」

最初は慌て、後には何か思いついた表情をして冷静になり、微笑した朔夜を見て俺も釣られて微笑した。

その後、町屋駅に到着した為、改札口で分かれる事になった。すると、不意に後ろから声が聞こえた。

「また、来て下さいねっ！」

それは、朔夜の大声だ。

その声に答えるかのように、俺は片手を上げて改札口を通過しようとする。

その時、改札口は俺を通す事無く閉まった。理由は簡単だ。

「……切符買っただけ……」

その眩きと同時に、後ろから朔夜の笑い声が聞こえた。

四月の終わり目である三十日の水曜日。

結局、早めの下校は前日もあり、二日連続で校内から強制撤退さ

せられた事により、二度ある事は三度ある、ということわざが頭に浮び、まさか今日も強制撤退か？　　つという希望を抱きながら、自分の席に突っ伏していた。

すると突然、スピーカーから放送が流れ始めた。

『はあゝい、まだ眠気がとれていないと思われる皆さん、おはようございまゝすっ！　　今回が初の放送となる元・放送部、現・情報提供部部长であり、進行を勤める事となったメグミでゝっす！　　よろしくゝ』

異様な、それでもリズム感のある音楽と共に聞こえる、元気の良すぎる声。

『二日間の工事によって、やっと機材が揃ったから、こうして始める事が出来ましたあ！　　皆さんのご協力、ありがとうございまあす！！　　今回の二日間には工事によって拡張された機材の他にもスポンサーの方からの支給品がやっとなどいたから、一時間目を潰して先生方に配ってもらおうと思いますっ。　　全学年、楽しみにしててねゝ』

元気すぎるのはあれだが、何故か数名の男子が歓声を上げている為、悪くないなっと思ひ、机に突っ伏しながら聞耳を立てていた。

『あ、それと、今日からは普通に授業を開始するから、無意味な希望は持たないよーに！　　それでは、今日はここまで！　　ご質問、ご感想は直接、情報提供部に言つてねゝ！　　また放課後ゝ』

そう言い残して、メグミとやらの放送は終わった。

……………何だったんだ？

そついう疑問が残るが、一日の情報を毎朝流すつていうのは意外

と便利な気がする為、悪くはないと自分の中で答えを出しておく。
そして、不意に顔を上げると、正面、圭吾が満面の笑みで机の間
を通過して向かって来ていた。

「……どした？ やけに嬉しそうだが、何かあったのか？」

問うと圭吾は、にへらつと笑みを強めて答える。

「いやあ、今日はいいい日だなあっと思ってな」

「急になんだよ？ 何でいい日なんだ？」

「よくぞ聞いてくれた！！ 実は今日、このクラスに転校生が来る
んだが、そいつの名前は」

「ほらお前らー、席に着けー」

圭吾が名前を言おうとした瞬間、タイミング悪く鬼頭が入って来
た為、圭吾は、見たらわかるぜっと言って素早く自分の席へと戻っ
て行った。

「それじゃあまず最初に……」

言って鬼頭は、両手を教卓に叩き付けた。

「喜べ女子！ 昂れ男子！ 今日とは転校生を紹介するぞ！ 入れ！
！」

その言葉を合図に入口が開き、一人の少女が入って来た。
教卓の横に立った彼女は、少し赤みの掛かった黒い長髪を後ろで
束ねてポニーテールにしており、美少女と呼んでもいいくらい可愛
らしい顔の左目には、彼女に似合わない漆黒の眼帯が付けられてい
た。

そんな彼女を見て周りの男子は歓声を上げ、女子は小声で会話を始めたが、俺は机に全力で突っ伏して、されど少しだけ隙間を作ってそこから見始めた。

……顔を隠す理由は、俺はソイツをよく知っているからだ……。

「如月 きさらぎ かずは 和葉よ、よろしくね」

「あゝ、彼女はかの有名な—First Mechanical Progress—ファースト メカニカル プログレス—、略せばFMP社・社長の一人娘だ。その会社はこの学校のスポンサーであるから、入学案内に書かれていたノートパソコンの支給はもちろんFMP社からだ。後で配るから、楽しみにしてるようにな」

それとつと言って鬼頭は教室中を見渡し、頷いた。

「あそこに空いている席があるだろ？ ここから見て、あのやる気が無い銀髪の左奥、クリーム髪の左だ」

言つと和葉は、わかつたわつと答え腰を左右に小さく振りながら、指定された席へと、俺の列に沿って歩き出す。

まるでどっかの女優を気取ってるな……。

そして、俺の横を通った時、一言呟いた。

「……会えて嬉しいわ、りょーちゃん……」

言つて和葉は、フフンっと小さく笑つて、右後ろの席に座った。
最悪だ。

悪夢だ。

俺は内心で呪文のように呟きながら、教室を去って行く鬼頭の後ろ姿を細目で睨んだ。

「……厄日だ……」

「何、独り言呟いてんのよ？」

突然、右から声が聞こえた。

その声に反応するかのように右を向くと、腕を組んで微笑している和葉の姿があった。

「……よう、久しぶり」

「久しぶりの再会でそれだけ？ ホント、変わってないわね、亮」

言って微笑した和葉に俺は苦笑しながら、余計なお世話だっと思いを込めて返答する。

すると、後ろの席に座っている朔夜が、不思議そうな口調で問い掛けて来た。

「……あの、お二人はお知り合いなんですか？」

「その質問には俺が答えよう！」

出た、説明役の圭吾。

だが、さすがに今回は、

「おい圭吾、あれは言うな」

「この二人は、両親が決めた許婚なんだ」

圭吾の言葉、特に最後には、聞耳を立てていたヤツらを含めて、その場に居た全員が驚き、叫んだ。

……厄日だ……。

第40話：変わったのは彼女？それとも…

俺と和葉が許婚である事がバレてからというもの、毎時間の休憩時にはクラス内の全員からの質問攻めが続いた。

そして今は昼休み。

やっとの思いで抜け出す事が出来た為、弁当片手に切れた息を整えながら、フェンスに寄りかかって座り込んだ。

「……………疲れた……………」

呟き、青い空を見上げてため息をつく。

それとほぼ同時、入口の扉がゆっくりと開き、先に朔夜が、少し間を空けて鞆を持った圭吾が出て来た。

二人は俺の姿を見つけると、朔夜は微笑を、圭吾は肩を竦めて苦笑しながら近付いて来た。

「やっぱりここに居たんですね。搜したんですよ？」

「ん？ ああ、悪いな。一刻も早くあの状況から抜け出したかったからな」

「た、確かにすごい質問攻めでしたからね……………。それにしても、許婚ってのは本当なんですか？」

朔夜は心配そうな表情で首を傾げて、問い掛けて来た。

「…………… 本当だ。親同士が決めた事なんだけどな」

「その親同士は、どういう関係なんですか？」

再度の問いに、俺は迷った。

こういう事は話すべき事なのか、と。

だが、その迷いを打ち壊したのは圭吾だった。

「迷う事はないんじゃないか？ 亮。朔夜ちゃんは今もう家族みたいなもんだろ？ それに相應しい期間を過ごして来たんだし、結構親しくしてるしな。 ってか、弁当食おうぜ、弁当」

言って圭吾は、俺の横にあつた弁当を広げて割り箸を割り、先に食べ始めた。

「理由になつてないって……まあいい、話そう。 その親同士は腹違いの兄弟でな。兄に当たる俺の親父は、俺の母である霧島家に婿入りしたんだ。ちなみに霧島家つてのは、大昔から代々継がれている由緒ある家系で、特別な血と運を持っている。で、それに目を付けた親父の弟であり和葉の父は、俺の親父に頼み込んで、結果許婚となったんだ。詳しい理由は知らないが、ただでさえ有名な如月家に霧島家が交われれば、名も上がると読んだんだろうな」

息継ぎを一つ。

さすがに喋りっぱなしは厳しい。

「え？ でも、亮さんのお父さんが霧島家に婿入りしたんですから、もう目的は果たせているんじゃないんですか？」

「いや、親父はその母である斉藤家についていったんだ。俺からして祖母と祖父が離婚したって奴だな。まあ、その為に子供を許婚にしたってわけだ」

その答えに、朔夜は理解出来たのか、納得したように数回頷いた。すると圭吾は、付け足すように話を始める。

「ま、所詮は親が決めた事だからな、もちろん亮は反対しているん

だ。……だけどな、和葉の方は賛成なんだ。許婚とか関係無く亮が好きだからなあ」

「そ、そうなんですか……でも、先ほどは素っ気無い態度でしたよ？
あ、そろそろ私も食べます」

問いと同時に、圭吾に渡された割り箸を割って、卵焼きを掴んだ。それに続いて俺も、割り箸を手取る。

「おい圭吾。そのシュウマイ、二個は残しておけ」

「しょうがねーな…… 確かに、俺もあれは何故か分からないんだ。亮にベタベタだった小学校を卒業した後は、中一の時に一度か二度しか会ってないからな。嫌いになったのかもしれない。 だあ！ その春巻き、取っちゃらめえ！！」

「キモい声だすなつ。 それだと嬉しいんだが、嫌いつて一点張りでは無い様だ。朝、席へと向かう途中、すれ違った時に俺をりよーちゃんと呼んだからな。 朔夜、その餃子は中身が無いぞ」

「ほえ！？ 掴んだら軽く潰れちゃいました！ ……味が無いです……」

皮だけの餃子を食べた朔夜は、悲しい表情をしながら口に含んだ皮を噛み続けた。

それを見て笑った圭吾は、堪えながら膨らみのある餃子を口に含む。

「お、これはほんも って、中身が米！？」

「あー、わりい。夢月が焼いてた餃子を、俺が弁当に詰む為に手伝ったんだがな、全ての餃子が見事に中身をぶちまけてしまったから、別のを入れて補ったんだ。その後は、キッチンを追い出されたが」

「こ、このやろっ……夢月ちゃんの手作りを…… っと、つまりは、何かを企んでいるって訳か？」

すぐに態度を変えてくれた圭吾に感謝しつつ、もう一つの疑問を圭吾に聞いてみる。

「そういえばアイツ、何で眼帯してんだ？」

「んもも、ほんもんむんむもんもお」

「食い終わってから喋れ、行儀悪い」

言つと圭吾は、んぐんぐつと言いながら親指を立てた。

「んぐつ……それは、本人に聞くもんだろ？」

「それもそうだな……」

眉を少し寄せて呟き、そして動かしていた割り箸を止める。

「……っと、聞き忘れてたが、その鞆は何だ？」

問いながら、圭吾の隣に置いてある鞆を指で示すと、圭吾は思い出したかのように割り箸を弁当箱の端に置き、鞆を開いた。

その中から出て来たのは、今日の一時間目に配られた、FMP社製のノートパソコンだった。

閉じている際のサイズはA4ノートぐらいで、基本色であるシルバーのフレームの中心に？FMP？と模られた金色のプレートが埋め込まれている。

圭吾はそれを開き、こちらに見せて来た。

デスクトップの壁紙はすでに圭吾使用となっており、烏の羽根が舞う光景をバックに、両手に銃を持った目つきの悪い青年と、その青年に抱きつくような形になっている笑顔の少女が中心にでかかと写っていた。

そして右端には？ロリゲレン？デメゴンガマスを撃て？などと

いう、訳の分からないテロップが小さくあった。

……時々、圭吾の趣味が理解できない……。

「何、怪訝な表情してんだよ…… とりあえず、見ろよコレ！
ハードディスク テラバイト

内臓H Dの容量が1TBもあつて、メモリーが8GB以上なんだぜ
ギガバイト！？ しかもこれ、FMP社の最新型で、まだ発売もしてねえんだ
！」

「ちょ、ちょっと待て。……何だよ、1TBって？ それにメモリーも」

そう問い掛けた瞬間、圭吾は馬鹿を見るような表情で俺を見た。
そしてため息をついた後、パソコンのデスクトップにあるマイコン
ンピューターとやらをクリックして、何かを開いた。

「いいか？ HDってのはこのパソコンに入れるデータの保存先で、
1TBって事は大量のデータを入れられるって事だ。そして、メモ
リーはパソコンが処理を行う為のプログラムやデータを一時的に記
憶しておく装置で、容量が多いと記憶の処理が早いつて事だ。わか
ったか！？」

「あ、ああ……わかった……」

圭吾はこういう事に関しては、無駄に熱くなるんだよな……。

「……にしても、FMP社はすごいな。確か、二〇一七年に突然設
立されてから、独自で生み出した新たな技術と製品で急上昇し、日
本が代表する企業の一つにまで申し上がったんだろ？」

「そ、そんなにもすごい会社なんですか！？」

「ま、亮の言葉に付け足すと、FMP社は世界進出中の企業だから
な。近い内に、宇宙関連の事業も始めるって噂だぜ」

宇宙、ねえ……。

内心で呟きながら、俺は空を見上げる。

その先には、どこまでも青い空と少しの白い雲が浮いている、いつもの空だ。

……宇宙は、

「宇宙はあまり好きじゃありませんね。だって空が、青い空が無いんですもん」

不意に朔夜が放ったその言葉は、俺が思っている事と同じだった為、一瞬驚き微笑した。

すると朔夜は、俺が微笑した事に気付いたのか、困った表情を見せた。

「ど、どうして笑ったんですか!？」

「いや、同じ事を考えてたんだなって思ってたな」

吐息を一つし、話を変える。

「さ、早く弁当を食い終えるか」

言って割り箸を動かし、残った物を食べるのを再開する。

すると他の二人も、釣られて再開した。

腕時計を見れば、時刻は午後一時。昼休みの終わりは近い。

「おかえりなさい、りょーちゃんっ」

俺は今、目の前の光景に困惑し、啞然としている。
何故か自宅の玄関で、和葉が出迎えているのだ。

「……どうしてお前がここにいる？」

とりあえず問う。すると和葉は、微笑みながら小首を傾げた。

「もちろん、許婚だからよ？　ほんとには乗り気じゃなかったんだけどね、りょーちゃんが良いのならって思ってた……も、もちろん夢月ちゃんもだけどね」

途中、小声で呟き、最後は慌てて両手を振りながら言った。

「そうか……まあ、もちろん駄目だ」

「ええ！　何だよ！？」

「冗談だ」

再度慌てた和葉を見て、俺は笑いながら答えると、彼女は驚いた表情をし、そして笑った。

冗談だった事に安堵した、苦笑混じりの笑い声だ。

「許可してもいいんだが、二、三聞きたい事があるんだが、いいか？」

「もちろんいいわよ。とりあえず、リビングでね」

言って和葉はリビングへと向かった為、俺もその後が続いてリビングへと向かう。

するとキッチンの方から、いつもの声が聞こえた。

「お帰り、お兄ちゃん！」

それは最愛の妹、夢月の声だ。

「ああ、ただいま。何か変わった事はあったか？」

「カズちゃんが突然来た事以外、何の変わりもないよ」

「そうか、それはよかった」

そう言い残し、リビングにあるソファに座って、テレビを見ながら待っている和葉の下へと向かう。

そして、彼女の前にあるテーブルを挟んだ先に座って彼女と向かい合った。

「……さて、さっき二、三と言ったが、四つ聞かせてもらう」

「ええ、いいわよ」

和葉の了承を得て、吐息を一つ。

「それじゃ、聞かせてもらっかな。最初は」

第41話：聞きたい事があったり

俺と和葉が向かい合ってるリビング。

その壁側にあるテレビにはバラエティー番組が映し出されており、笑い声が部屋中に広がっているが、二人の間には何故か緊迫した空気が流れている。

そんな中、最初に口を開いたのは俺だった。

「この芸人、身体はつてんなあゝ。富士山の頂上に鯉幟こいのぼりを立てるなんて……成功したらギネスだな」

「あら？　でも昔、エベレストの頂上に六匹家族の鯉幟を立てた人もいたわよ？　……って、私に質問するんじゃないかっただかしら？」

「あ、それじゃ、改めて」

吐息。

「一つ目は……クソジジイは元気か？」

「初めの質問はそれなのね……お爺様は元気よ。それで、ついでに伝言。そろそろ夏の季節じゃから、合宿が楽しみじゃのう、って」

「なら俺からも伝言だ。お前の葬式で合宿が無くなるのを心から願ってやる。孫の一生の願いだから早くくたばれ、ってな」

言っと、和葉は苦笑した。

「本当、二人は仲がいいんだか悪いんだか」

「中間くらいだな。……ま、元気で何よりだ。それじゃ、次の質問に移るぞ。どうして学校と今の態度が少しばかり違うんだ？」

「それは……他人の前だと恥ずかしいから、って事でどうかしら。」

だから、強く接してしまうのかもしれないわ」

「そうか。まあ、話しやすいからいいんだがな」

そういえば、和葉は意外と恥ずかしがり屋な所があった気がする。
あれは、小六の頃……。

つと、回想に浸る暇は無い為、次の質問に入る。

「それじゃ……ああ、そう、三つ目だ。三つ目の質問だ。何故、
転校して来た？」

問いに和葉は、んゝっ、とうなりながら眉を寄せ、虚空を見る。

「……転校、というよりかは、少し遅れた入学ね。私も亮と同じく、
推薦を貰って来たの」

「ん？ だが、鬼頭は転校生と言っていたぞ？」

「転校生だった方が、クラス内でも面倒にならないからよ」

言って和葉は、フフツツと笑った。

だが、その表情はすぐに変わる。

「でも、圭吾が許婚だってばらしたから、どちらにしても面倒にな
ったんだけどね」

深いため息をついた和葉を見て、俺は苦笑する。

……確かに、アイツのせいで俺の日常が少しずつ変わっているの
はたしかだな。

という風に、全てを圭吾のせいにした後、次の質問に入る。

「……それじゃ、最後の質問だ。その眼帯はどうしたんだ？
昔は付けて無かっただろ？」

問いに和葉は目を見開いて驚いた表情を見せ、すぐに表情が曇って俯いた。

地雷を、踏んでしまったか……？

「……………そう、そうよね……………覚えてるわけ……………ごめんなさい、これには答えられないわ。これは……………私の証だから」

「お前の証？」

オウム返しのような問い掛けに和葉は、そうよつと言って笑みを作った。

つと、その時だ。

「はいはい、お話はそこまでだよー。お兄ちゃんもカズちゃんも、夕飯を運ぶの手伝ってね！」

両手を叩きながらキッチンから来た夢月は、満面の笑みだ。

「夢月、ちなみに飯は何だ？」

「え？ お米だよ？ 新潟産のコシヒカリ」

「単純でツツコミ所の難しいボケは止める。夕飯はなんだって聞いているんだよ」

「TAK E2ね」

「冗談に対するノリが悪いよ？ お兄ちゃん。…………えっとね、オムライスだよ」

言つて夢月は、身体を翻してキッチンへと戻って行った。

その跡についていくように、和葉は立ち上がってキッチンへと向かった。

「ほら、りょーちゃんも手伝ってよ？」
「へいへい」

曖昧な返事を返しておき、俺もキッチンへと向かった。

放課後の教室にはもちろんの事、誰一人居ない。

そんな教室に、俺は手紙で呼び出された。

ちなみに手紙には、小さな丸みのある文字で、「放課後の教室で待っていて下さい」と書かれていた。

その為俺は、窓から夕日の指した教室の自分の席に座って待つ事にした。

心当たりもない相手を待って、だ。

っと、その時だ。

入口の引戸が音を立てて開き、一人の女生徒が入って来た。

彼女には、見覚えがある。

『……………あ、あの、来てくれてありがとうございます！……………突然ですけど……………好きです！私と付き合ってください！！』

その言葉を聞いた瞬間、思考が止まり、すぐに胸の奥が熱くなった。

『……………実は、俺もお前が好きなんだ！』

「ベタなストーリーねえ！　こんなものを見てる人の気が知れないわよ」

頼杖をつきながら俺の隣に座っている和葉は、テレビを見ながら文句を言っていた。

ちなみに俺は、その文句を気にする事無く、テレビを見続ける。

「ゴールデンタイムなのにこんなドラマ……視聴率はどうなっているのかしら？　お父様に頼んで、画面端に今の視聴率が表示されるテレビを開発企画に追加してもらったものもありね……！」

「アホかつ！」

結局、我慢出来ずにツツコんでしまった。

「お前、そんな事したら番組が見辛くなるだろ！」

「ツツコミ所がズレてるよ、お兄ちゃん……」

声に気付けば、斜め向かいに夢月が座っていた。

夢月は呆れ顔を隠さずにモロ出ししながら、持ってきたと思われるお盆の上に載ったコップを一つずつ俺達に配った。

中には茶色の液体、たぶん烏龍茶であろうものが入っている。

……何故か、俺の烏龍茶だけ色がおかしい。

「……なあ、夢月。俺のお茶の色が濁っているんだが」

「番組は視聴率で決めるんじゃないや無くて、内容でいいかどうかを決めるんだよ？　実際、二十四時間徹底観察！　野良猫の日常を首輪に付けた小型カメラで公開！　は、低視聴率だったらしいけど、面白かったんだから！」

「それは視聴者が途轍もないくらいに限られるわね……」

熱の入った夢月の説明に、和葉は眉を下げて苦笑を漏らした。
……俺は無視ときましたかい。

「……………飲む」

「だってね、カメラを付けた猫が、期待通りの行動を何度もしてくれて、そこがまた可愛くって　あ、お兄ちゃん。それは賞味期限がとつくに切れているヤツだけど、味の方は大丈夫？」

吹いた。もちろん、コップの中に。

「ああ、行儀が悪いなあ。賞味期限は美味しく頂ける期間の事なんだから、飲んでもたぶん大丈夫なんだよ？　たぶん」

「たぶんかよ……………ってか、実の兄に対する行動が酷くねえか？　悲しすぎて泣きなくなるよ……………」

肝心の味ですが、烏龍茶とは違う苦味が、口の中に広がりました。

「大丈夫、大丈夫。もし倒れても、私が看病してあげるわよ」

「全力で拒否させてもらう。それと、さり気無く腕を絡ませるなっ」

「えゝ！　ケチ……………」

和葉はそう呟き、渋々と腕を解いた。

そして、あつと何かを思いついたかのように声を上げ、和葉は夢月を見る。

「夢月ちゃん、お風呂は使えるかしら？」

「え？　うん、ちゃんと沸いているよ！」

夢月は親指をグッと立てて、和葉にウインクした。

「わかったわ。それじゃ、早速使わせてもらっわね」

そう言い残し、和葉は浴室へと小走りで行った。

『 って、おわあ！！ ごめん！ 見るつもりは』

……ベタだなあ……。

などと内心で呟きながらほのぼのとテレビを見ていると、不意にある事を思い出した。

「……なあ、夢月。確か風呂のシャワー、昨日壊れてからそのままじゃないか？」

「あ、そういえばそうだった。お兄ちゃん、伝えてきてくれる？ 私はこれから食器とか洗わないといけないし」

立ち上がりながら言った夢月は、空になったコップ三つをお盆に載せて、キッチンの方へと歩いて行った。

面倒事を押し付けられた俺は、軽くため息をついて立ち上がり、浴室へと向かう。

……確か、機器の故障で水しか出なくなっただっけか。

湯は、昨日の夕方に俺がホームセンターにて急いで買って来た湯沸し機器？ 熱いのが入りたいの？ 略称・熱入とか言う、いかにもすぐ壊れそうな企画商品で沸かせたが、シャワーはどうにもできないからな……。

その為、今日は湯だけだな、と思いつつ浴室のある洗面所の引き戸を開ける。

「和葉、言い忘れてたがシ」

さて、ここで自問だ。

ドラマや漫画などで、ラッキーな主人公が起こすハプニングの一つに、たまたま着替え中の女子がいる部屋に入ってしまうというものがある。

ちなみに、圭吾は一生の中で遭遇してみたい状況トップ3に入っているらしい。

だが、そのような状況などは所詮架空のハプニングであり、遭遇する確立なんてポーカーでロイヤルストレートフラッシュを出すのと同じ……の筈だった。

引き戸を開けた時、視界に入ったのはまさにその状況であった。すでに全裸状態だった和葉は、外した眼帯を持ったまま、入って来た俺に気付き振り向く。

その時見えたのは、眼帯をしていた左目が透き通るような白い目をしており、それから俺の視線は降下。

スラリとした綺麗なラインの身体と、胸元の中心には……傷？

「……って、おわぁ！！ わりい、見るつもりはなかったんだ！」

ついさつき、どつかで聞いた事のある台詞を、俺は全力で慌てながら放った。

対する和葉は、驚きの形相を赤く染め、そして叫ぶ。

「だったら早く出て行きなさぁーいつ！！」

「はいっ！！」

言われるがままに、俺は全速力で廊下に出て、勢いよく引き戸を閉める。

……何やってんだろぅなあ、俺は……。

内心で呟きながら、先ほどの光景を思い出す。

全裸だった身体　じゃなくて、眼帯の下にあった白い目と、胸元から腹部にかけてついていた大きな傷跡だ。

すくなくとも、最後に会った日の記憶からして、左目の色は白ではなく黒だったはずだ。

「……知リたき謎を知る時、新たな謎が己を悩ます、か」

無意識に呟いた言葉は、昔どこかで聞いたものだ。
そんな言葉を呟く自分に、思わず苦笑する。

「きゃあ！ 冷たいっ！！」

その時、和葉の声が浴室から響いた。

第42話：昔懐かし銭湯へ

「だから銭湯よ、銭湯！ シャワーの使えないお風呂よりも、使えるお風呂の方がいいでしょ！？」

「そんな事言われてもよ、ここら辺に銭湯なんてあるのか？」

言いながら俺は、携帯のアドレス帳を開いて、銭湯のある場所を知っていきそんな奴の名前を探していた。

そんな俺達は今、リビングの中心にあるテーブルを囲むようにして座っており、シャワーが使えないと知った和葉が我が儘を言っているという状況だ。

「あ、圭吾に聞いてみたらどう？ 彼ほどの情報通なら詳しいかもしれないわよ？」

言われる前に、圭吾の携帯にコールしていた。

それから数秒待たされ、そして聴き慣れた声が受信機器を通して聞こえた。

『うい、どうした？』

「ああ、聞きたい事があるんだが、桐河町付近に銭湯があるか知ってるか？」

問うと、圭吾は少し間を空けてから答えた。

『………… いや、記憶にねえな。わりい。 おい、ちょっと待て。

そこはゴシックにした方がいいぞ。影付きのな』

「………… 聞くが、何やってんだ？」

『いや、気にするなって。ちよつと作業中なだけだ』

『圭吾さん、誰と話しているんですか？』

……女の声？

『前に話した霧島 亮だよ。 わりい、作業に戻りたいんだが…』

…もう良いか？』

「あ、ああ！ もう良いぞ！ お疲れな！！」

これ以上、圭吾の邪魔をする訳にはいかない気がした為、すぐに電源ボタンを連打した。

……にしても、一緒にいた女は誰だったんだろうか？

声からして学生に値する年齢だろうが、小中高のどれかかはさすがにわからない。

聞いた事のあるような何か少し違うような声だった、というのだけは分かる。

「ねえ、どうだったの？」

正面からの和葉の問いと同時に、俺は思考を停止させて首を左右に振った。

駄目だった、という意味をもった表現に、和葉は溜息をついた。

つと、その時だ。

不意に、キッチンの方から夢月の声が響く。

「お兄ちゃん、奈々ちゃんに聞いてみたらどうかかな？」

「奈々？ …… ああ、姉御か。どうしてだ？」

「だって、奈々ちゃんのような喋り方ってお爺さんみたいじゃない？ だから、銭湯とかにも詳しいかなっと思って」

妹よ、爺だからと言って銭湯に詳しいという考えは間違っている

ぞ……。

少なくとも、クソジジイは銭湯に関して無知だ。
っというか、常識に関して無知だ。

……とは思ったものの、可能性を試してみるのも悪くないな。

「わかったよ、駄目元で聞いてみる」

言いながらアドレス帳から川瀬 奈々の名を探し出し、早速コー
ル。

そしてしばらく待つと、

「お前がわりに電話するなど、初めてじゃな。どうしたのじゃ
？」

「初っ端から失礼だな……あつと、聞きたい事があるんだが、桐河
町付近に銭湯があるか知ってるか？」

「銭湯か……」

しばしの沈黙。

やっぱり、知ってるわけないか？

っと思つたその時、予想外の返答が帰ってきた。

「なら、いい場所を知っておるぞ？ 住所と名前を教えるから、紙
を用意せい」

「マジかよ！？」

思わず声に出してしまった事に苦笑しつつも、前に居る和葉に声を
出さないよう、かみとぺん、と口を動かしておく。

すると和葉はしばらく間を置き、何かわかったのか立ち上がって
どこかへ行った。

そして戻って来て俺の前に何かを置いた。

それは、

「……惜しい、何かが惜しいんだよ。缶とペンじゃない、紙とペンなんだ」

俺の前には、ごく丁寧にペンを缶の中に挿した物が置かれていた。

「そ、そうならそうと、ちゃんと言いなさいよっ！ 恥、掻いちゃったじゃない！」

頬を真っ赤にして訴える和葉に苦笑しつつ、俺はペンを缶から抜いてペンの後部を押す。

そうして出たペンの先端を自分の手の甲に近付け、書く構えをする。

「ま、ありがとな。準備出来たぞ、姉御。住所と名前を教えてください」

「ふむ、それはだな」

俺達の住むマンションから十五分と歩いた先に、それはあった。昔懐かしい作り、と言えはいいのか、外の入口からいきなり男湯と女湯が分かれているというレトロな作りになっている。

そしてそれぞれの入口が引き戸になっており、その手前には青や赤の暖簾が掛かっていた。

「銭湯？任侠自慢？……何と無く近寄り難い名前よね……」

引き攣った笑顔を作る和葉は、どうしても一歩が踏み出せないようだった。

だが隣に居る夢月は、早く入りたくてウズウズしているようだった。

「……そいやあ夢月、お前銭湯初めてだっけか？」

「うん！ そうなんだよ！ だから楽しみなんだっ！！」

大分、楽しみにしているようだな……。

何はともあれ、もう九時を回っているからか、客の出入りが全く見られないこの銭湯は、果たして儲かっているのか疑問である。

「とりあえず、入るしかないだろ」

「背に腹は変えられないってのは、まさにこの事なのね……」

和葉はまるで、收容される囚人のように渋々と、赤い暖簾を潜って夢月が開けた引き戸から入って行った。

それに続いて俺は青い暖簾を潜り、引き戸を開けて中に入る。そしてその時に聞こえた声は、

「おおよく来たのう！ 待っておったぞ？」

入ってすぐ左側にある番台から、聞き覚えのえる声がした。つというか、それはついさっき聞いた声であって……。

「あ、姉御！？」

そこには腕を組んで、満面の笑みを見せしている姉御の姿があった。

「あ、奈々ちゃんじゃん！ 久しぶり！」

「うむ、久方ぶりじゃな、夢月。それと……お主は転校生の如月和葉じゃな？」

「ええ、そうよ。こんな所で会えるなんて奇遇ね、川瀬さん」

微かな笑みで返した和葉は、会釈して早々とロッカーへと向かった。

それを追って、夢月もロッカーへと向かい、すぐに二人の姿は見えなくなった。

すると姉御は、俺の方を向いてため息をつく。

「無愛想な娘じゃのう……わしの苦手な性格じゃ」

「どうやら、そのようだな。ま、その内慣れるだろ。 っと、そ

れより聞きたい事があるんだが」

「ん？ 何じゃ」

「何で今更、レトロな銭湯なんてやってんだ？ こちら辺はニュータウンだから、建てたのは最低でも三年前だと思っから尚更だ」

問うと姉御は、ふむ、っと言って銭湯の中を見渡した。

それはまるで、俺にも見渡してくれと言っているようだった為、俺も見渡す。

「……わしの祖父が江戸っ子で、どうしても昭和の感じが蘇る銭湯を建てたがってたのじゃ」

見渡す先、浴室方向には低い仕切りがあり、その隅には牛乳などが入ったガラス張りの冷蔵庫があり、その手前の壁際には年代物の椅子型の赤いマッサージ機が数台置かれている。

そして仕切りの向こう側には木製で長方形型のロッカーが平行に

並んでおり、それより奥がガラスとガラス張りの扉で隔てられた浴場が見える。

「見事な再現力だな。テレビでしか見た事無いがわかる。さぞかし爺さんは喜んでたろ？」

「ああ、喜んでおった。……今はもう、亡くなっておらんかの」

視線を姉御に戻すと、懐かしい何かを思い出すような表情で虚空を見ていた。

だが、俺の視線に気付くと、すぐに視線を俺に合わせて微笑した。

「なんじゃ？ 見とれてたか？」

「それは、自分が綺麗だと自惚れてるのか？」

「……少しはお世辞でも上手くなれい。さもなくば、ただの甲斐性無しにしか見えぬ」

言って笑う姉御は、不意に片手を差し出してきた。

「……………」

「代金じゃ、代金。銭湯は先払い制である故、はよう全員分の六百元を出すのじゃ」

「六百元？ って事は……一人二百円！？ 安すぎるだろ！」

そう言いつつも財布から千円札を取り出し、姉御が差し出している手に載せる。

すると姉御はそれを番台の下にあるであろうレジに入れ、代わりに四枚の硬貨を俺に渡した。

「これくらいの値段でないと、お客が来ぬのでな。それに、維持費は充分にある。後は、銭湯に安く入りたい者へのサービスじゃな。」

さ、疲れを癒しに行つて来い」

わかつたよ、と返事をして、俺は木製のロッカーへと向かつた。見るとそのロッカーには、部屋と部屋を隔てる仕切りが無く、代わりに衣服を入れるのに丁度いい籠が置かれていた。

……にしても、思えば俺も銭湯は初めてなんだよなあ。

湯船に浸かる前にやる事とかあるのか？

タオルは湯に浸けたら駄目だったよな？

シャンプーとか置いてあるのか？

無かつた場合はどうすりゃいいんだ？

持つて来てねえぞ？

つと、そこまで思考して急停止させた。

「……………悪い癖だな……………」

服を脱ぎながら呟き、苦笑する。

悪い癖というのは、一つの疑問を持つと思考に集中し、されど疑問だけを増やしてしまう事だ。

それは小学生の頃からだったが、二年前からそういう思考はしないようにしている。

疑問を思考しても新たな疑問を増やすだけとなるのなら、最初から思考しなければいい、と思い立ったからだ。

「　　ほうほう、やはり鍛え上げられておるのお。いい身体をすれおるわい」

「なっ!？」

不意に聞こえた姉御の声に驚き振り向くと、番台から身を乗り出している姉御の姿が見えた。

「た、質が悪いぞ姉御!!」

「ふふふっ、鬼神と呼ばれた男がどんな鍛え方をしておるのかと思つてのう。 案の定、いい鍛え方じゃのう! 無駄な肉は何一つ無く、見た感じは普通に見えるが、実際の筋力はそれを思わせないほど協力じゃ」

そ、そこまで力説されると、姉御が色んな意味で怖くなる……。内心で呟き、少し引き気味の俺を他所に姉御は、うんうん、と二度頷いた。

「さすが、如月翁に鍛えられたと言われているだけあるのう」

「……如月翁? ……クソジジイか!!」

聞きたくも無い名前を耳にした俺は、声を上げた。

同時に、クソジジイの腹の立つ顔を思い出してしまった。歳の癖に、飛び跳ねるほどの元気があるクソジジイを。

「そうか、やはりクソジジイと呼んでおったか。ご老体は大事にせぬといかんぞ?」

「あいつは大事にしなくても、ゴキブリ並みの生命力を持ってるから大丈夫だ。不死だぞ? あれは」

言いながらズボンを脱ぎ、籠に突っ込んだ所で止まる。

「……な、なあ、姉御。そろそろ向こう向いてくれるか? もう全裸になるんだが……」

半目で姉御を見ながら言うと、当の本人は急に笑い出した。

「ふっ、はっはっはっ! 鬼神ともあろう男が、女子おなこに裸を見られ

るくらいで恥ずかしがるのはお！ お主、やはり面白い奴じゃ！
！」

「いやいや、それは昔の呼び名で…… ってか、俺は男だぞ！？
恥ずかしがるに決まってるだろ！」

「じゃったら、わしに見られぬよう、同時にプライドを守る必要があるのう……ほれ、さっさと脱ぐがよい」

俺、啞然。

ってか、風呂入りに来たただけだったよな？ 俺。

それにさっきから、姉御からSっ気が伝わってくる気がする。

などと冷や汗を掻きながら思った俺は、ロッカーの上にあった貸し出し式のタオルを手に取り、それを壁代わりにして下着を脱いでタオルをしっかりと腰に巻くと、一目散に浴場へと突入した……瞬間、視界が急に天井を向いた。

「はい！？」

原因は足に感じた濡れている固形物、石鹸であろうそれによって滑ったようだ。

だが、ここで転べば、オープン状態の入口から直で姉御の視界に入り、笑い者とされてしまう……。

だが……！！

刹那、宙にある身体を力一杯仰け反らせ、両手をタイル張りの床に着けて後ろに宙返りし、転ばずに着地する。

そうなる筈だった。

身体を仰け反った直後、視界の両手が着く位置に一つの物が映った。

それは、

「また石鹸！？」

叫んだのとほぼ同時、石鹼が両手に当たって滑り、石鹼は浴場に向かって発進した。

そして俺は、大の字のような体勢でタイルの上に落ちた。

痛みに苦笑する中、頭上の方からは姉御の苦しそうな笑い声が聞こえた。

第43話：そうか、もう二年か……

リビングに味噌のいい匂いが、湯気と共に漂う。

それは、テーブルの上に置かれた味噌汁から立つ物であり、更にその周りにはスクランブルエッグとご飯がきちんと並べられている。それらが三セット分置かれたテーブルを囲んでいるのは、俺と夢月と和葉の三人だ。

のどかな朝食時。

いただきます、という揃った声と共に、それぞれが箸を取って食事 시작했다。

俺の前に向かい合うようにして座っている和葉は、毎週土曜日の朝にやってる人気番組？どつきり あんさつたい！？に夢中になり、中々箸が進んでいない様子。

そして、左斜め前に居る夢月は、よくわからんが先程から独り言のオンパレード。

「……に出発するんだけど。……お兄ちゃん、本当に予定空けてあるよね？」

寝起きの状態の、しかも土曜日の早朝に起こされたのだ。

脳がまだ完全に目覚めていない状態の為に、夢月の独り言に答えている余裕が無い。

すまん、妹よ。

「……………ねえ、お兄ちゃん？ 人の話聞いてる？」

俺は味噌汁のお椀を手に取り、箸を突っ込んで具を持ち上げる。

……………
椀か。^{えのき}

その椀を口に含み、

「……お、意外と美味しいな！　　ぶっ！？」
「ひ・と・の・は・な・し・を・聞けー！！！」

夢月が叫びながら腕を振って投げたそれは、テーブルの隅に置かれていたお手拭だ。

それは一直線に飛び、俺の顔面に直撃する。

俺は急いでそれを掴み、テーブルに叩き付けた。

「な、何するんだ！？」

「何するんだ、じゃないよ！　人が今日の予定を話しているのに無視しないでよねー！」

「………予定？　………今日は何かの日か？」

味噌汁のお椀をテーブルに置きながら問うと、夢月は驚いたような呆れたような表情になった。

「はあ………今日はね？　お母さんとお父さんの命日だよ？　だから、お墓参りっ」

その言葉を聞いて、一瞬にして思い出した。

同時に、テレビの横に置いてある小さめのカレンダーに目をやる。

今日、五月三日。

丁度二年前のこの日に、母さんと親父は事故で死んだんだっただけ……。

「……あ………わりい、忘れてた。で、何時に行くんだ？」

「忘れてたって………まあ、思い出したんならいいけど。　　九時に

は家を出るつもりだよ？」

「はやっ！！　………十二時とかは　　」

「駄目、九時だよ。だから、朝食は早く食べ終えてね」

言い終えた夢月は、箸を取って食事を再開した。
この状況だと、反論するより従った方が無難、か。
そう決心し、俺も食事を再開する。

……… ってか、

「和葉？ お前いつまでテレビ見てんだよ！？」

「う、うるさいわね！ もうすぐよ、もうすぐ！」

邪険な表情で俺を睨み付けた後、すぐにテレビへと視線を戻した。
そんな和葉を見て、やっぱり昔と変わんねえな、と思う俺だった。
もつとも、そんな事を思っている暇さえ無いんだが……。

今日は休日の、しかもゴールデンウィークの為、俺達の乗る西武
新宿線の電車内は多少の混雑を見せていた。

そんな状況で夢月と和葉は、どんな手を使ったのかちゃっかりと
長椅子に座れていた。

ちなみに俺は、二人の前で直立体勢。

不公平かな、不公平かな……。

などと思っている間に、降りるべきである駅に到着とのアナウン
スが鳴り、電車が停まった。

「さ、早く降りるよ」

言いながら夢月は、早々と電車を降りて行く。

「今日は一段と元気がいいわね」

「いや、逆だろ……」

「……え？ それってどういう　あ、ちょっと待ちなさいよ！」

問いと制止の言葉を飛ばして来る和葉を無視し、夢月を追って電車を降りる。

そこから駅の東口を出てすぐの所にある花屋にて花を買った無月と合流し、バス停へと向かう。

そうしてしばらく待って来たバスに乗り込み中ほどまで進んだ時、服を引かれた為に反射的に後ろへと振り向く。

それは、不機嫌そうな表情をした和葉によるものだった。

「……………どうした？」

「さっきの、逆だろっていう言葉の意味を教えなさいよ」

「あゝ、その事か……」

言いながら、吊革を片手で掴み、前へと向き直す。

その方向には、平行に並んでいる二人用の椅子に、夢月が花束を持って座っていた。

彼女は目が合うと、笑顔を見せた。

それに笑顔で返した俺は、再び和葉の方を向く。

そして仕方なさの交じる表情で、仕方無く話す事にした。

「……あいつが、母さんや親父が死んだ時、一種の精神的ショックで心を閉ざしていたって事は知ってるか？」

「ええ、確か事故に遭った時。夢月も同じ車に乗っていたのよね」

「そうだ。その頃アイツはとにかく不安定で、二人の葬式にでさえ

出る事が出来なかった。だからだ。アイツは親に、自分達のせいで心を閉ざしたと、笑う事が出来なくなってしまったと思わせない為に、命日には自分の元気をアピールするかのよう无理をするんだ。別れの儀に出られなかった事に対する罪滅ぼしのようにな……」

誰にも聞こえないよう、和葉だけに聞こえる声で言った。
すると和葉は、複雑な表情を作った。

気まずい事を聞いてごめんなさいとでも言いたげな表情を、だ。

「つまらねえ顔するな。夢月が心配するぞ」

「でも」

「でも、じゃねえ。あゝ、話さなきゃよかったよ……まあ、どうしても謝りたいのなら、夢月にはいつも通り接しろ。今の話を忘れてだ」

「そうした方がいいよね。わかったわ」

うんうん、と二度頷いた和葉は、しかしわずかに表情に曇りが残っていた。

丁度その時、目的地であるバス停に到着した事を報せるアナウンスが鳴り、出入口の両方がスライドして開く。

「ほら、行くぞ和葉」

言って和葉を呼び、再度先に降りた夢月を追う。

そして地に足をつけ、ドアを閉めて走って行くバスを目で見送った。

そうした後、目的地の方向を見る。

俺達が降りたバス停を道路で挟んだ向かい側にある、横に広い門。その門の間とも言える位置には、？所沢聖地霊園？と彫られた石が置かれている。

その石を通り過ぎ、霧島家の墓へと向かった。

「こ、今年もすごいねえ……」

「しかも、俺達より早く来てるしな」

俺達が驚いているその視線の先、他の墓石の群から隔離されている霧島家の墓前には、大量の花が添えられていた。

そのそれぞれの花は種類が異なる為、置いて行った人数も結構居ただろう。

もしかしたら、去年よりも多いかもしれない。

だが、特に多いのは、毎年同じく向日葵だ。

何故、向日葵なのかといえば、単純に母さんが好きな花だからだそう。

などと思いつつ、霧島家の墓石の左右に、同じく隔離されている墓石を見る。

左側には高柳家^{たかなぎ}、右側には榊家^{さかき}と彫られた墓石は、霧島家を含めて三つ並んでいる。

三貴家。

この三つの家系は、そう呼ばれている。

理由は、詳しく知らない。

ただ、この三家は大昔から日本の裏社会を担い、牛耳っていたそう。

今現在は高柳家の消失、霧島家の縮小により、ほとんどが榊家中心となっているらしいが……。

縮小したとは言っても、やはり影響は残っている。

大量の花束も、過去の影響下にあった者達による物だろう。

そして他の墓石との隔離は、先祖代々の仕来りだと聞いた。

クソジジイ曰く、この三家は高貴なる家系であるのと同時に、多くの穢れを受け継いでいる。その為に、他の墓石と同等の位置には置けない、だそうだ。

……俺も、この下に眠るのか。

まあ、墓石の下に入るのは骨だけな　　つと、何馬鹿な事を考えてんだ、俺は……

そう思っただけ、片手で頭を掻く。

すると視界に、細い腕と数珠が入って来た。

「はい、お兄ちゃんの数珠だよ。お兄ちゃんがぼーっとしている間にやる事は全部終わったから、せめて最後に手を合わせようね？」

言われて顔を上げると、夢月と和葉の片手には柄杓の入った桶が握られていた。

そして墓石には、既に線香は煙を上げていた。

いつの間にやっていたんだ？

つというか、俺はその間中ずっと三貴家の事を思い出していたのか……。

「早くしなさいよ」

迷惑そうな表情の和葉は、合わせた手に数珠を掛けて、既に準備は出来ている。

そんな和葉に、わかってる、と告げて俺も手を合わせる。

同時に霧島家の墓前に三人で、前列が俺と夢月、後列に和葉という形で並んだ。

そして、揃って目を瞑る。伝わらないとわかっていても、内心で伝えたい言葉を呟きながら。

「今日一日、お疲れな、夢月」

微笑しながら言って、夢月の頭を撫でる。
すると夢月は、恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「べ、別にお疲れってほどじゃないよ？」

「いいやお疲れ、だ。だからもう無理なくていいぞ」

「無理なんて別に…… うん…… 急に疲れが押し寄せて来ちゃった」

言って夢月は、あはは、と笑って疲れ混じりの笑顔を見せた。

「……それじゃ、そろそろ行きましょう。お昼はどうするの？」

「あゝ、悪いが俺はもう少しここに残るわ。所用があるんでな」

「所用ねえ…… わかったわ。夢月、私達は入口近くの休憩所で待ってましよう」

和葉は仕方なさそうに了承してくれ、夢月の手を引いて歩いて行った。

その姿を見送り、霧島家の墓石の方へと向く。

太陽の光を反射させ、わずかに黒々しさを象徴させていた。

その隣、墓石の下に入っている者の名を見る。

「霧島 清美きよみに霧島 良太りょうたか……」

「過去に浸っておられるのですか？ 霧島の若様」

「ッ！？」

誰だ！？　と問う為に振り向いた先、丁度榊家の墓前に当たる位置に、声の主が居た。

それは花束を片手に持つて、黒い長髪をポニーテールにし、それを風に靡かせながら微笑んでいる、和服姿の少女だ。

「初めまして、と言うべきでしょうか。霧島の若様」

「俺を若と呼ぶて事は、先々代頭首の老い耄れ共が、高校に上がったらつけると言っていた側近つて奴か？」

警戒心を弱める事無く問うと、少女はクスクスと笑い出した。

「早とちりはいけませんよ？　私は榊家の現・頭首、榊護様の側近、藤林桜と申します。以後、お見知りおきを」

「ま、護の側近か……で、用件は何だ？」

「用件、というか、霧島の若様に用があつた訳ではありません。今日が霧島夫妻の命日であるが為に、若の代わりにお花を添えに来ただけです」

言いながら俺の隣まで来た桜は、手に持っていた花束の袋を取り、既に置かれている花の群に混ぜて添える。

そして両手を合わせて、目を瞑った。

その後、目を開けると同時に俺の方を向いた。細めた目で。

「ずいぶんと丸くなりましたね？　噂では、結構荒れた人だと聞いていました」

「何年前の情報だよ、それは……。今の俺の情報には更新されてないのかよ」

「あ、その事に関して思い出したのですけどね」

言って桜は表情を一転させ、笑顔で人差し指を立てた。

「元々、側近という立場は、若の頭首としての品格を正す為に居るのです。ですが、貴方の情報は先ほど言った内容で通っていた為、急な変更ですが正す必要はない、との事です。先々代頭首のご老体方々より」

「……俺、一応は霧島の頭首って事なの」

「あ、すみません。電話です」

かよ、という言葉を遮ったのは、桜の携帯が奏でている電子音だ。最近の女の子にしては珍しい、シンプルな初期設定の固定音¹。……って、俺がとやかく言える資格無しなんだがな。などと思っている一方で、桜は袖から携帯を取り出して通話ボタンを押した。

「何でしょうか？」

はい、今終えた所です。

ええ、霧島

の若様が今、前に　はい、わかりました。少々お待ち下さい」

言って桜は、携帯を俺に差し出した。

俺はそれを受け取り、携帯を指でさす。

誰だ？ という意味だ。

「若から、貴方に、と」

「あゝ……　代わったぞ」

『はははは、久しぶりだな私の最高のライバルにして最高の友』

」

切った。

「ありがとう、もう良いぞ」

「お早いですね。何をしたかったのでしょうか、若は……」

桜は小首を傾げながら、携帯をポケットに戻す。
そして俺を見て、再度笑顔を作った。

「それでは、これから用事がございますので、ここらでお開きとさせていただきます」

「ああ、わかった。護にはまた合宿があるらしいぞ、と伝えておいてくれ」

「ええ、もちろん伝えておきます。それと短い間でしたが、兄がお世話になりました。……それでは、また」

兄？ と問うよりも早く、桜は身を反転させて俺に背を向け、歩き出した。

……まあ、いつか。

とりあえず、兄って誰なんだろうかと思い出しながら、面倒臭くなつてすぐに止め、夢月と和葉が待っているであろう休憩所へと向かう事にした。

第44話：GWにメイドか、暇な奴だな俺も

「お帰りなさいませ！ ごしゅ　　って、ふぁ！？　りよ、亮さん！　来てくれたんですね！？」

メイド服姿の朔夜は、入店した俺に気付くと両手を合わせて嬉しそうな表情になった。

その為俺は、ああ、と軽く返事を返す。

……右側でしゃがみ込み、俺は無視かよ、と呟きながら泣き真似をしている圭吾には、あえて触れないでおく。

「あ、えと、ここで止まっていると他のお客様の迷惑になりますので、とりあえずお席の方に案内しますね」

言って身を翻して歩き出す朔夜に合わせて揺れる、メイド服のフリルを見ながら、その後について行く。

そうして着いたボックス席に圭吾と向かい合って座り、朔夜からメニューを受け取る。

それと同時に、数字が幾つも書かれた、ビンゴカードのような物を二枚、受け取った。

「それでは、ごゆっくりどうぞ」

そう言い残して、朔夜は去って行った。

その後ろ姿を、頭を地面スレスレまで下げて見ている圭吾の後頭部に、メニューの角を叩き落す。

「いっただぁぁ！！　　何すんだこの野郎！」

「にしても、客が多いな。これだけの人数が、今日の為にチケット

を買ったのか……」

「いやいや、無視するなよ。そして謝れよ」

向かい側で何やら煩い圭吾を無視し、辺りを見渡す。

生憎、隣の席との間にはモザイクのガラスが隔ててあり、丁度力ウンターが見えなかった。

だが、辛うじて見えた出入口では、メイド服姿の従業員が受付をし、来店した客を席に案内するという作業を繰り返していた。

そして、そこら中の壁には、？五月五日、こどもの日にて、一周年記念特別イベント開催！（但し、チケット購入者に限る）？と書かれた派手なポスターが貼られている。

「何か、ものすごい大イベントって感じだな……　そだ、ビンゴ大会の景品、何があるか知ってるか？」

突然、圭吾が問い掛けて来た為に、ビンゴがある事自体知らなかった、と言いながらその方向へと向く。

すると圭吾は、ポケットから一枚のカラー用紙を取り出した。その用紙の上部には、？チケット購入者への案内？と書かれており、その一つ下には、？当日のプログラム？と書かれている。

一から順に、店長から開会の挨拶　新作デザートを試食　フリータイム　ビンゴ大会　店長から閉会の挨拶、となるそうだ。

で、圭吾が言う景品は、裏側にまとめて書かれていた。

四等・一万円分商品券、三等・五十インチ液晶テレビ、二等・明日一日、ご指名のメイド（従業員）とのデート許可券（もちろん私服）、一等……、

「一等・ハワイ旅行！？　真佑美の奴、さすがに経費使い過ぎだろ

……」

「俺的には、景品がおかしい事に疑問があるんだがな」

そう言って少し間を空けた圭吾は、急に頭を抱えて、

「何でデート許可券が、明日一日だけなんだぁー！！」
「？」

「お前に一般的な感想を、一瞬でも望んだ俺が馬鹿だったよ……」

溜息をついて呟き、圭吾の頭に角を叩き落したメニューを取り、
テーブルの隅に置く。

そして、手元に置かれていた水を一口飲む。

「……圭吾、お前虚しいな」

「お前のせいだろっ！！」

『はいはい、注目注目！』って言っても、モザイクガラスが邪魔で見えないか……
ただ今、カウンター前にて、マイク放送をしている、店長の高崎 真佑美だよっ！！』

圭吾に黙ってると言っているかのように突然、店内のスピーカーから流れたのは、真佑美の声だ。

その声からは、相変わらずの元気が感じ取れる。

『今回は、ん、コホンッ！……今回は、当店の一周年記念特別イベントにお越し頂き、誠にありがとうございます。今現在、ここにいらっしゃる皆様は、当店を何度もご利用して頂き、そしてまた当店を愛してくださっている方ばかりだと思っています。その為私達メイドは、いつも以上に清楚にお持て成しさせていただきま
す』

その声はいつもの真佑美らしく無い いや、会ってまだ一ヶ月ほどの俺が言うのは失礼か。

とりあえず、今の俺からしてみれば、真佑美らしくない初めて聞く喋り方だった。

だがそれこそが、大手企業会社社長の娘として、当然の態度なのかもしれない。

『それでは、メイド喫茶としては珍しい、西洋風の物静かなメイド達を時折見ながら、心安らぐ音楽と共に時が来るまでごゆっくりお楽しみください。……尚、プログラム四番のビンゴ大会は十四時を予定しておりますので、くれぐれもビンゴ用紙を紛失なさらないよう、ご注意ください。それでは、よしなに』

その最後の言葉と共に、スピーカーからは低い音量でクラシック曲が流れ出した。

「……G線上のアリア？ バッハか」

優雅な、そして心んお落ち着く曲が、スピーカーを通してゆつたりと店内に響き渡る。

クラシックは……嫌いじゃない。

「お待たせしたねえ、霧島様？」

「お、おはようございます、亮さん！」

突然の声は右、メイド服姿の真佑美と朔夜だ。

いつの間にか居た彼女達の内、真佑美は、事もあろうに苗字を様付けで呼びやがった。

「……俺を苗字で呼ぶのは何の真似だ？」

「え？ ……もしかして、気に触っちゃった？ 冗談のつもりだったんだけど……」

その、失敗したかのような驚きの表情をした真佑美を見て、俺は

自分が言った言葉に後悔した。

……霧島だから、という理由ではないらしい。

「なーにツンケンしてんだよ、亮！　ごめんな、真佑先輩。こいつ、たま〜に冗談が通じない時があるんだよ」

「……あ、そうだったのかあ〜！　本当、びつくりしちゃったよ。とりあえず、ごめんね？」

「いや、俺の方こそわりい」

今回ばかりは、ナイスフォローの圭吾に感謝しておこう。

そう内心で思いつつ、真佑美にここまで来た理由を聞く事にする。

「……で、どうしたんだ？」

「そりゃあもう、あいさつだよあいさつ！　今この店に来ている友達は、キミ達だけだからねっ！」

「俺達だけ、か。　なあ、それよりも気になる事があるんだが、景品に金を掛け過ぎじゃないか？」

問うと、真佑美は右手の人差し指を立てて、左右に揺らした。

「チツチツチツ、甘いなあ〜りょーちゃん。そんなキミに説明しようっ！　今回の参加者は、当店の定員である百人とちよい。で、もちろん皆チケットを買っている。そのチケットは一枚一万円！」

「一万！？」

「これで軽く百万は稼いでいる事になる。その上、新作デザート試食の時間は、同時にフリータイムでもあるのだ。ここで一人千円分は注文してくれると読むのだよ。で、通常の売り上げは少なくとも十万円ほど。この十万円はもうちよい金額を足して液晶テレビにあてる事が出来る。一万円分商品券は、チケットの代金が戻ってくるようなものだし、店員との指名デザートはもちろん無料だから、後は

ハワイ旅行だね。これは我が会社の自家用航空機を使って宿泊先は別荘。これで、収入は黒字だよ！ 会社の収入を使うまでも無かったってわけだよっ！！」

嬉しそうに、どこか誇らしげに言い切った真佑美は、俺と圭吾の前に置いてあったコップの水を、それぞれ飲み乾した。

どうやら、一気に説明した事により、喉が渴いたようだ。

そのコップに、朔夜はいそいそと手元にある給水ボトルを使って水を注ぎ、俺達の前に置く。

……健気だなあ。

「それじゃ、私達はそろそろ仕事に戻るよっ。ごゆっくりどうぞー」
「あ、そ、それじゃ、ごゆっくりしてってくださいね！」

そう言い残し、真佑美は元気に、朔夜は何やら慌てながら、早々と立ち去って行った。

その後ろ姿を、圭吾はまたしても頭を低くして見ていた為、再度後頭部にメニユーの角を叩き落した。

快音が、響いた。

時刻はもう、二時を回ったところだろうか。

プログラムによるとビンゴ大会の始まる時間である為に、メイド達が忙しく客席からデザートなどの皿を集める姿が数多く見られる。

そして、どんな技術かは知らないが、席と席の間を隔てるガラスからはモザイクが消えて、今では透き通ったただのガラスだ。

それによって見えるカウンターには、巨大な電子掲示板と番号の書かれたボールが、内部で風によってかき混ぜられているボックスが置かれていた。

もちろんその隣りには、真佑美の姿がある。

彼女は手に持ったマイクを数回叩いており、それによってスピーカーからは風船を叩いたような音が響いていた。

それを確認した真佑美は頷き、

『はいはい静かに！ 皆さんお待ちかねのビンゴ大会が始まるよお！？ つてなわけで皆さんには、モザイクを消せる事をすっかり忘れていたガラスを通して電子掲示板を確認しながら、ビンゴ用紙の数字に穴を開けていただきまーす。リーチの時とビンゴの時は、ちゃんと大きな声で伝えてね？』

真佑美お得意の元気な声と共に流れ始めた曲はオペレッタで、運動会などでよく聴くジャック・オフエンバックの天国と地獄だ。

その陽気で軽快な曲調は、ビンゴ大会にぴったりだな。

『それじゃあ、最初の数字を取り出すよお！！』

そう告げながら、ボックスの中に手を突っ込む。

そして一つのボールを掴み、引き抜いた。

『さて、最初の数字は！？』

』

宅配便の紙に、すらすらとボールペンで配送先を記入する。

その配送先の名は、葛城総合病院院長・風間 修平。

届け物は、五十インチ液晶テレビだ。

それを書き終え、次は依頼主である俺の名と住所の記入に取り掛かる。

「んにしても、盛り上がったなあー！ それに、俺はまさかの明日一日デート許可券が当たったよ！」

「あーはいはい、よかったなあ。……ま、参加してよかったよ。これで、壊しちまってからそのままになっている特別室のテレビを弁償出来るんだからな」

そう言っている間に記入は全て終わり、大きく背を伸ばすついでに辺りを見渡す。

店内はすっかり喫茶店の雰囲気に戻っており、数人のメイドがポスターや飾りを外す作業に取り掛かっていた。

……で、異様なまでの盛り上がりを見せたビンゴ大会は、一等のハワイ旅行は一組のカップルが獲得し、二等の明日一日デート許可券は圭吾が、三等の五十インチ液晶テレビは俺が、一万円分商品券はどっかの出版社の記者が獲得という形になり、無事終了した。

本当、真佑美の司会進行はたいしたもんだな。

そう思いながら、圭吾と話している真佑美を見る。

「おっとそう言えば、みんなも今日はお疲れさまー！ どうだった？ 楽しかったかい？」

「すごく楽しかったぜ！ それに、新作デザートも美味しかったしな！」

「りょーちゃんは？」

あまり好まないが、真佑美にとってもう定番となっているあだ名

で話を振られた。

「ん？ああ、よかったぞ。それと、司会お疲れな」

「うい、ありがとー！……でさでさ、けいちゃん。明日のデート、誰を指名するか決めたかい？」

「そうだなあ……」

問われた圭吾はしばらく考え込む。

だがすぐに思い浮かんだのか、よしっ、と言って親指を立てた手を真佑美に向けた。

「朔夜ちゃんにするぜ！　どうだ？　亮、お前も来るか？」

「いや、俺はパスだ。明日は所用がある」

言う圭吾は、ああ、詩織か、と言いながら水を飲んだ。

その、圭吾が言った名に、真佑美は喰らい付いて来た。

「何々？　誰なの詩織って？　りょーちゃんの彼女！？」

「……いや、親友だ。一年ぶりに会う、親友」

「あ、ちなみに俺は今日会ってくるわ。明日は行けそうにないからな」

上機嫌に言う圭吾に苦笑しつつ、わかったと返答しておく。

そうして話が一区切りつくと、真佑美は両手をパンツと叩いた。

「それじゃ、朔夜に伝えてくるよ」

そう言い残し、カウンターへと向かう真佑美の後ろ姿は、スキップしているように見えた。

第45話：俺達の過去（前編）

携帯電話を開いて時計を見ると、時刻は四時を回っていた。

その為俺は、朔夜ちゃんと一緒に近くの喫茶店に入る事にした。もちろん、普通の喫茶店だぞ？

……ちなみに俺、圭吾が何故朔夜ちゃんと一緒に居るのか。

それは昨日のビンゴ大会にて、一日デート許可券を獲得したからだ。

女の子とのデート。

これほどまでに嬉しい事は、一生の内にあっただろうか……。

「無いな」

「ほえ？ どうしたんですか？」

急に声を出した俺に、メニューを見ていた朔夜ちゃんが顔を上げて問い掛けてきた。

「あ、いや、何でも無い何でも無い。それより、何にするか決まった？」

まさか声にでるとは、と内心で呟きつつ、メニューに目を通す。すると朔夜ちゃんは、決まりましたと笑顔で言った後、俺は店員を呼んで注文した。

それから数分後、テーブルの上、朔夜ちゃんの方にはミルクティーが、俺の方にはレモネードが置かれた。

それを一口飲むと同時に、朔夜ちゃんは、あの、と前置きして話し掛けてくる。

「今日は、本当にありがとうございました。おかげで楽しい一日に

なりました！」

両手を合わせて嬉しそうに言った朔夜ちゃんの笑顔、本当に可愛いなあ。」

「いやいや、俺の方こそありがとな。いくら昨日のご褒美だからって、休日に呼び出しちまって」

「いいえ、気にする事はありませんよ？ 仕事ですし、暇でしたし。……それと、聞きたい事がありましたし」

突然、申し訳なさそうな表情になった朔夜ちゃんは、一度深呼吸して胸に手を当て、目を瞑る。

そして、決心したかのように頷きながら目を開け、俺を見た。

「昨日言っていた、詩織さんとは誰なんですか？」

ああ。その事か って、

「……あれ？ 確か亮は、朔夜ちゃんに話したって言ってたぞ？」

「……へ？ 聞いていませんけど……？」

おかしい。何かがおかしいぞ？

……もしかして。

「昔、自殺しようとしていた人を亮が助けたってのは、聞いたことがある？」

「あ、はい。その話は聞きました」

そのまさかだった。

アイツは、亮はどこか抜けてるなあ、本当……。

「その助けたって人物が詩織、東城とうじょう 詩織しおじだ」

こうして名前を口にするだけでも、懐かしく思えるとはなあ。

「……え？ という事は、詩織さんはもう……？」

「そ、亡くなってる。一年前の今日にな」

言いながら、俺は顎に手を当てて考える。

この際だから、ちよつと昔話に付き合ってもらおうかな、と。
時間もあるし。

「……朔夜ちゃん。亮が中学の頃、鬼神と呼ばれるほど喧嘩をして
いたって姉御が言ってたの、覚えている？」

問いに、朔夜ちゃんは無言で頷く。

「何故アイツがそこまで荒れたのか、知りたくはないか？」

「え！？ で、でも、そういう話は亮さんの許可を取った方がいい
んじゃないですか？」

「大丈夫大丈夫。これは幼馴染みであり親友である俺だからこそ話
せる事なんだ。それに、朔夜ちゃんも中途半端に知っているよりか
は、全部知っておいた方が良いだろう？ その方が誤解も生まれな
いし」

笑顔でそう提案すると、朔夜ちゃんは少し迷い、そしてゆっくり
と頷いた。

……可愛いなあ。

再度そう思いつつ、じゃあ話すよ、と前置きして話を始める。

「……二年前、アイツの両親は車で交通事故に逢い、亡くなったん

だ。原因は相手の信号無視……と言われてはいるけど、詳しい事はわからない。生き残ったのは二人で、一人は相手。ソイツは車から降りて逃走し、まだ捕まっていない。そして、もう一人の生き残りが、両親が運転する車の後部座席に乗っていた夢月ちゃんだ」

名前を聞いた瞬間、目を見開いた朔夜ちゃんは、両手で口を囲いながらも、聞く事を続ける。

「その事故を知った亮は、両親を失った事に悲しみながらも最愛の妹が生きていてくれた事に喜びを感じていた。だけど……夢月ちゃんは、事故のショックで一時的に放心状態になっていて、その後もずっと心を閉ざしていたんだ」

今でも思い出せる、あの頃の亮。

何をしてもいい方向に傾かない現状に苦しんで嘆いていた姿は、本当に悲しい姿で……。

「どれだけ夢月ちゃんに声を掛けても無意味である悲しさ。事故を起こした者、そして自分達を残して亡くなった両親に対するやり場の無い怒り。その全てを八つ当たりに変えて発散させる事にした亮は、ところ構わず喧嘩に明け暮れる日々を送るようになった。……でも、狙う相手は皆不良ばかり。それに、だ。その日々もほんの数ヶ月で終わっただよ」

夏休みが始まる少し前の日だ、と言っておき、レモネードを一口飲む。

そうして喉を潤わせ、話を再開する。

「ある日、アイツは学校で会うなり、馬鹿が増えるぞっと言って詩織の事を話してきた。当然、急な事だったから、全然意味わかんない

かつたけどな。まあ、その日から新しい奴が俺達に加わったんだ」
「その人が、詩織さん……」

急に込み上げて来た笑いを堪えながら、ああと答えるが、結局堪えきれずに笑っちゃった。

「おかしい話だろ？ それまで喧嘩ばかりで、他人の事なんて知ったこっちゃねえって言ってるような奴が、苛めが原因で死のうとしてる奴の命を救ったんだぜ？ 偶然だったとか細かい事はどうあれ、そんな時は笑ったよ、腹抱えて笑った。……蹴られたけどな」

笑みから苦笑に変えて、またレモネードを飲む。今度は一気に半分まで。

「それからはずっと、遊んばかりだ。たまに他校から喧嘩を吹っ掛けられたから喧嘩したが、それだけだ。だが、短期間での行動によつて、アイツの噂が広がり、鬼神とまで呼ばれるようになったんだ」

「……その間、夢月ちゃんはどうしていたんですか？」

「ああ、そこにも大きな変化があったよ。詩織はな、結構元気な奴でな。その上、馬鹿な俺らと居た事で他人と接する事がすぐ出来るようになった。そんな詩織が、何日か二人つきりにさせてつて夢月ちゃんのケアに当たったんだが、たった三日で完治させたんだ」

「ええ！ す、すごいです！ 三日で閉ざしていた心を癒して、完治させるなんて……！」

朔夜ちゃんが、素直に喜んでいる事に、内心嬉しかった。

こんな話を聞いた奴は、大抵遠回しなお世辞や作り笑いをする……気がしていたからだ。

ま、朔夜ちゃんに限ってそんな事はしないと信じていたからこそ、話したんだがな。

だから俺は、話を続ける。

「ま、つまりは二人とも、互いが恩人なんだよ。亮は詩織の命と居場所を、詩織は亮のたった一人の肉親である妹を、それぞれ救ったんだ」

言って笑いながら、馬鹿みたいに安堵していた亮を思い出す。

同時に、亮に対して嬉しそうな申し訳なさそうな、そんな複雑な表情をしていた夢月ちゃんも思い出した。

全てが懐かしい、過去。

「そうして俺達が三年に上がった頃、また面白い事が起きたんだ」

「また……ですか？」

「そ、また。詩織が、自殺しようとしていた奴を助けたんだ。

しかも、半年前に詩織が自殺しようとしていた場所と、全く同じ場所だな」

その事に朔夜ちゃんは、ええ！？ と声を上げたが、すぐに両手で口を塞いだ。

可愛いなあ、本当。

「……で、でも、その一カ月後ですよ？ 事故に逢ったのって……」

恐る恐る問う朔夜ちゃんに、俺は頷く。

「ああ、ほぼ一カ月後だな。で、だ。その助けた奴は同級生の男子でな。詩織はさり気無く、ソイツが好きになっていた、と俺達

に相談してたんだ。……結局、恋は実らなかった。両思いだったってのに気付かずに……」

残念そうに呟き、残りのレモネードを飲み干して席を立つ。

気付けば、いつの間にか無くなっていた朔夜ちゃんのミルクティーに驚きつつも、電子版伝票を手にとった。

全額は、合計六百八十円。全く問題無い。

「じゃ、そろそろ行こうか。朔夜ちゃん」

「え？ あ、はい！ ……えと、私の分はおいくらですか？」

「良いって良いって、これくらい払わせてくれ」

電子版伝票で顔を扇ぎながら言い、そのままレジへと向かった。

その後ろを、講義しつつも小走りでついてくる朔夜ちゃんの足音を聞きながら、レジに電子版伝票を差し込んだ。

自動ドアを潜り外へと出ると、既に太陽は大分傾いていた。

そんなに話し込んでいたか？ と疑問に思いつつも、横を歩く朔

夜ちゃんの方を向く。

すると丁度、朔夜ちゃんも俺の方を向き、そして会釈した。

「今日は、本当に何から何までありがとうございました！ 先ほども、私の我が儘で話をしてくれた上に、代金を払っていただいたて……」

「気にすんなって。俺が話したかったから話したんだ。朔夜ちゃん
は謝る必要なんてないよ」

微笑を浮かべながら言うと、突然朔夜ちゃんは口元に手を当てて、クスクス、と笑い出した。

「亮さんと同じ事言ってます。本当に似ていますね、お二人は」
「そうか？ まあ、昔っから一緒に居たからなあ……」つと、お！
「同じくらい昔から居る奴はっけーん！」

言いながら、横断歩道を渡って歩いてくる和葉に、俺は大きく手を振った。

すると和葉は、驚いたような今にも逃げ出したいような表情になったが、早足でこちらに向かって来た。

「け、圭吾じゃない！？ き、奇遇ね、こんなところで会うなんて。

えと、そちらの方は確か……」

「あ、九条朔夜です。よろしくお願いします、和葉さん！」

笑顔で即座に自己紹介をした朔夜ちゃんに、こちらこそよろしく、と言って返した和葉は、顎に手を当てて俺と朔夜ちゃんを見比べた。最初は細目で、その後しばらくして眉を顰めた和葉は、最後に恐る恐るといった感じで俺を見る。

「……貴方達、どういう関係？」

「友達だぜ？ で、今はデート中」

問いに素直に答えると、一にホッとした表情を、二に驚いた表情を見せた。

それはもう、背後に落雷が見える程の驚きよう。

そして三に、両手をパントマイムのように動かして慌て出した。

「そ、そそそ、それはよかったわね！！ それじゃあ、お、おおお 邪魔虫の私は退散するわ！！ また明日！！」

終始慌てながらそう言い残し、和葉は走り去って行った。

…… どうしたんだ？ アイツ。

「あの…… 圭吾さん？ 和葉さん、何か大きな誤解をしたまま行ってしまったんじゃないですか？」

心配そうに問い掛ける朔夜ちゃんに、そうかもしれないな、と呟きながら考える。

別に俺は誤解されてもいいが、朔夜ちゃんは非常に困るだろう。どうすればいいかな……。

などと考えている内に、突然音楽が聞こえてきた。

それは、近くにある広場に設置されている時計からだった。

時刻は既に、五時を回っていた。

第46話：俺達の過去（中編）

どこまでも広がる青い空を、俺はよく馬鹿二人と共に仰向けにな
って見上げていた。

手を伸ばせば届きそうな空を、馬鹿話をしながら。

そんなある日、詩織は唐突な疑問を呟いた。

「……どうして世界はこんなにも広いのに、人はちっぽけなんだろ
うね。苦痛だよ？ 心から分かり合える人なんてごく僅かだし、中
々会えないんだもん」

「確かに、俺達はたまたま気が合って、偶然が重なって出会ったが、
三人なんて人間全体の数から見れば、チッポケだな。……ま、お前
は四人目を見つけたんだから進歩だぜ？ なあ、詩織い」

ニヤニヤと、不気味に笑う圭吾を見て、詩織は起き上がって慌て
始めた。

「え？ え！？ 何の話かな！？」

「惚けるなよあ、詩織い」。最近、西城さいじょう巴ともえって奴とよく一緒にい
るんだってえ？ 正直な話、どこまで進んだんだよあ」

同じく起き上がり、相変わらず弱点を見つけるとしつこく突きま
くる圭吾に、詩織は顔を赤らめる。

そしてしまいには、俺を見て助け舟を求めるような表情になった。

……俺の舟は、泥舟だぞ？

「そいやあ、西城 巴ともえってのは、前に詩織が助けたって奴だったか
？」

「そ、そうそう、そうだよ！ それも、亮と初めて会ったあの場所

でだよ！？ もう驚いちゃった」

俺と詩織が初めて会った場所とは、とある廃ビルの屋上だ。そういえば前に、時々あの場所に行っている、と詩織本人から聞いた気がする。

それは、馬鹿だった頃の自分を忘れない為。
今の自分の糧にする為、とそう言っていた。

「似てるんだよねえ、巴って。昔の私に。世界に色が見えなくて、生きていく意味が見出せなくて、そして死を選んだんだって。……死ぬよりも、生きている方が何十倍もいいんだよ？」

「またそれかよあー。恋話聞かせろよ、恋話」

「いいじゃん、この言葉は気に入ってるんだし。 どんなに苦しめても、必ず隣りに立つ人は現れる。それは」

「それは、どんな人かはわからないけれど、きっと救ってくれる人だから。この世界は、そういう風に作られている。不思議なくらいにね……と、彼女はよく言っていましたね。綺麗事というのはわかってはいますが、それでも良い言葉です」

「ああ、確かにそう言っていたな。口癖のように……」

言いながら俺は、目の前にある墓石を見ている。

そこに彫られている名は、東城 詩織。

そしてあたりを見渡せば、多種多様な形をした墓石が見える。

ここは、墓地だ。それも、詩織の祖父が管理している、寺の裏手。敷地はそれほど広くは無いが、それでも数百もの家系の墓石が群

を成している。

その場所で俺は、詩織の墓参り中だ。
隣りに居る黒髪の少年、西城 巴と共に。

「……そういえば、亮さんが来る少し前に、夢月さんが来ていましたよ？ 馬鹿兄貴が、などと詩織に愚痴って、すぐに帰られました
が」

「ああ……悲しいから、聞かなかった事にしとく」

苦笑を混じえて言うと、巴はクスクスと笑い出した。
そんなコイツを見て、変わったな、と思い口にする。

「お前、本当変わったな。初めて会った時と詩織が死んだ後の違いにも驚いたが、今はもつと驚いているぞ」

「ははは、僕自身もその事に驚いていますよ。それもこれも、みんな詩織のおかげです」

言いながら巴は、懐かしそうに詩織の墓石を見つめる。

そして、それに答えるかのように、線香の煙が揺らいでいた。

「……当時の僕は、何度も自殺をしようとしていました。ですが、その全てが不思議な事に誰かに見つかり、未遂で終わっていました。リストカット、首吊り、薬など……全てが未遂。そしてあの時も、飛び降り止められて……それが、最後の自殺行為になりました。詩織という日々が、少しずつ楽しく思えてきていましたから」

会えてよかった、と言い、墓前で手を合わせる。

それに続いて、俺も手を合わせた。

静寂が流れ、やがて巴が言葉を発する。

「……詩織、キミがあの時助けてくれた事で、今の僕がいる。生きる事の意味を知ったり、亮さん達に出会ったり、高校に入学出来たり……」

「あゝ、そいやあお前、どこの高校に入ったんだ？」

「え？ ああ、推薦で私立飛翔鷹高等学校に入学しました」

「へえ……飛翔鷹高校ねえ……」

しばらく間を置き、あれ？　　と思った。

考える。何か、聞き慣れた名を聞いたな、と。

そして、

「つて、えええ！？　俺と同じ高校じゃねえか！　何組だよ、お前！？」

「A組です。ちなみに、生徒会役員一年生代表も務めさせてもらっています」

言う巴の表情は、満面の笑み。

どうやら、コイツは気付いていたようだ。

……あゝ、そうか。そういえば、生徒会役員就任式つてのがあったな、行事予定に。

何故か、一年の生徒会役員も一丸となって活躍する創立記念日の後だったから覚えている。

とは言っても、俺はその時間、保健室に居た。

葵が倒れた日と、偶然重なったんだな。

「にしても、いくら知らなかったとは言え、廊下で幾度かすれ違っていただろうに。俺は、なんて駄目な人間なんだ……」

「自虐はよくないですよ？　しかも、貴方を尊敬している僕の前で」

「尊敬？　尊敬か……照れるじゃねえか」

言いながら頭を掻き、微笑。

その後、数秒目を瞑る。

過去への区切りはとうに出来ている。けれど、今日だけは過去に浸りたかった。

その望みを瞑っている間に済ませ、目を開けて吐息。

「……それじゃ、俺は帰るぞ。また、明日な」

そう言うところでは俺を見、会釈した。

「わかりました。それでは、また明日。中間テストがありますが、頑張つて下さいね」

「ああ、テストか……忘れてたなあ……ま、何とかなるだろう」

片手を軽く振ってそう言い残し、巴に背を向けて歩き出そう……とした。

が、一つ思い出す。

同時に、再度巴の方を向いた。

「……なあ、巴。詩織が助けたっていう子、見つかったか？」

「……いえ、まだ名前さえもわかっていません。十五歳の女の子だった、という事はわかってたんですが……」

十五歳というのは、当時の歳だろう。

つまりは同年代、あるいは一つ下、か。

「わかった。……見つかるといいな」

「ええ、本当に」

その言葉を聞いた俺は、そのまま踵を返して歩き始める。

……詩織は、人を助けて事故に逢った。

目撃者の証言によると、赤信号の歩道にフラフラとその子が出て行き、丁度大型のダンプカーが来て撥ねられそうになったそうだ。いや、もし詩織が押し倒していなかったら、完全に撥ねられていただろう。

だが、その子の代わりに詩織が撥ねられ、死んだ。

そして、その助かった子は、いつの間にかいなくなっていたそうだ。

で、巴はずっとその子を探しているのだという。

もし会った時、何を言うかは……わからない。

その一言で思考を止め、俺は墓地を後にした。

辺りはすっかり暗くなり、道行く街灯には光が灯り始めた。しかし、その街灯のほとんどは割れているか、破損しているかで光を点滅させている。

その所為か、俺が行く道の周囲はより一層暗く感じ、亀裂の入ったビルの壁がいつもより気になる。

けれども、歩く。廃墟となったこの街を。

今、俺は立ち入り禁止区域に来ていた。

そこは旧・東京都。

HEAVEN事件によって、廃墟の街となった場所。

時折、視界にチラつく人影は、浮浪者達だ。

立ち入り禁止区域として、ただ警告しか出されていないこの場所は、何の管理もされていない。

それは、浮浪者にとっては居心地の良い住処となるのだ。

ちなみに、何ヶ月かに一度の頻度で来ている俺は、今だに一度も襲われた事は無い。まあ、簡単に打ち負かせると思うが。

代わりと言って良いのか、物乞が多い。

ん。……噂をすれば、なんとやら。

急に、後ろ側の服の裾が引かれた。

振り向いて見れば、ボロボロで布切れのような服を着た、少年少女。

小さい男の子が、姉であろう女の子の後ろに隠れながら、二人一緒に裾を引く。

上目遣いで俺を見る目が、微動だにしていない。

そして、目には 光が無い。

「……分かった、ちょっと待ってろ」

言って、ポケットに手を突っ込む。

次いで中から取り出したのは、四枚の板チョコだ。

本当は必要な物だったんだが、別にいつか。

とりあえず、手に持った板チョコを少女に渡す。

すると、少女は目を見開き、少年は目を輝かせた。

「やるよ。ただ、誰にも見られるなよ？ 奪われないように隠せな」

言って、その場を立ち去る。

暫くして、少年少女は俺を追い越して、前へと走って行った。

……さて。

自分の用事を済ませよう。

そう思い、辿り着いたのはとある廃ビル。

コンクリート造りの階段を一步步つ上り、屋上を目指す。

だが、その一步一步が重い。

全身の傷が、思った以上に負荷になっているようだ。

……にしても、高校生が武器持って中学生を襲うか？ 普通。しかも大勢で。

かく言う俺も、中学生の癖に喧嘩ばかりやっている訳だが。

ちなみに、その高校生達は一階のロビーフロアでのびている。

普段ならどうって事無いんだが、予想以上に多かったのと囃役の圭吾が居なかった為に負傷してしまった。

などと内心で呟いている中、ふらつき、壁に寄りかかる。

「……あれ、こんなになるまで血が出たっけ？」

迂闊だった。でも、たまには悪くないかもしれない。

とにかく今は、疲れた身体を癒す為に空を見たい。

だから今は屋上へと向かっているのだが、最上階はまだだろうか。ふと、上を見上げると、そこにはプレートがあり、2Fと表示されている。

……え、二階を突破していない？

溜息。

同時に足に力を込め、一段一段踏み越えていく。

そうしてようやく到着した四階、最上階。

目の前にある屋内と屋外を隔てる鉄扉を開き、外へと出る。

瞬間、風が吹き込んだ。

突然の事に驚き、一瞬目を瞑るが、薄目を開けて外を見渡した。すると、そこには一人の少女が居た。

フェンスを越えた向こう側に立つ、風で長髪を靡かせた少女が。

第47話：俺達の過去（後編）

一瞬、その光景に反応出来ず、身体が止まった。

まるで時間が止まったかのように、ドアノブを掴んだ状態で唯一動くのは彼女の長髪だけだ。

って、状況説明してる場合じゃねえ……！

気付けば、俺は走り出していた。

身体の痛みなんて知ったこっちゃない。

ただ、目前まで近付けた少女を止める為に、右手を伸ばす。

しかし、同時に彼女の身体が傾き、落ちる直前となった。

だから俺は、フェンスを足で踏み越え、

「つつかんだあああ！！」

右手で少女の腕を掴み、左手でフェンスを掴む。

二人分の体重が左手にかかり、フェンスの網が指に食い込んだ。いつてえ、と叫びたかったが歯を食いしばって堪え、左足を屋上の縁に引っ掛ける。

今、少女は空中におり、驚愕の表情で俺を見ている。

……そりゃ、驚くわな。

内心で呟いて苦笑し、両腕に力を込める。

右腕は少女を引き上げ、左腕は二人を引き上げる。

そうしてようやく、両足を縁に載せる事が出来た為、両手を使い最後の一踏ん張りで少女をフェンスの向こう側に下ろす。

その際、ふらついて落ちそうになった時が、一番冷や汗が噴き出したのは内緒だ。

ともあれ、無事に少女を救出した為、俺もフェンスを越えて少女の前に座る。

相変わらず、彼女は驚愕の表情で目を見開き、俺を見ていた。僅かに身体が震えているのは、一瞬でも宙に浮いて地上を見たか

らだろうか。

まあ、そんな事よりも……疲れた。

両者、肩で息をし、荒い呼吸の音だけが聞こえる。

おんな中で、最初に言葉を放ったのは、少女だった。

「……どうして……助けたの？」

震え、息が絶え絶えの声で問われる。

どうしてと、言われてもなあ。

「……そりやお前、自殺する事が……馬鹿げてるからだろ……」

同じく息が絶え絶えの声で答えた俺は、冷静さが欠けていた。

だからこそ、言った瞬間に悪い予感がし、後悔する。

予感は見事に的中し、少女の表情はみるみる内に怒りの色を見せた。

「馬鹿げてるって……ふざけないでよ！　じゃあ、生きてる事は馬鹿げてないって言うの！？　私みたいに、生きる意味なんて何も考えられなくて、居場所もないやつに、生きてる意味が分かると思う！？　生きてるだけで馬鹿にされて、日常がぶち壊されて……そんな私は死しくないんだよっ！　なのに、なのにそれさえも馬鹿にされたら、私は……私は……！」

それは、感情爆発だった。

長い間、溜めに溜めてぶつける宛ても無かった感情が、今一気に吐き出される。

故に言葉は滅茶苦茶で、けれども言いたい事の意味は何となく分かる。

しかし、その理由で俺は彼女が死を選択した事に、納得する訳に

はいかない。

だから、と言うように、俺は思いついた事を、ただいつも通りの調子で、言う。

「だったら、俺達のどこに来いよ。毎日馬鹿やって、騒いで、喧嘩して、好き勝手出来るんだ。良いだろ？ …… お前の、新しい居場所だ」

俺の言葉を聴いた瞬間、少女は呆けた顔に変わった。

口を半開きにし、瞬きもせず目を見開く。

だが、次の瞬間には表情が崩れ、目に涙が溜まり、口がくしゃくしゃになる。

泣く。

鳴く、と言っている程に大声で泣き叫ぶ彼女は、俺に殴りかかってきた。

弱々しい力で、パンチを繰り出してくる。

まるで、駄々を捏ねる子供のように。

…… 結局、こいつは死にたかつたんじゃないかって、居場所が欲しかっただけじゃないかと思う。

それだけでも、自殺志願者とは全く違う部類だ。

ともあれ、死のうとしていた少女を助けた訳だが、圭吾にどう説明しようか……。

俺はその時、既に彼女が俺と圭吾のグループに加わる事を前提に、今後を考えていた。

翌日、四限目の授業中。

英文を読み上げている英語教師の言葉など右から左で、俺は虚空を見つめて思考していた。

思い返すのは、昨夜のその後だ。

少女の名は東城 詩織と言って、偶然にも同じ中学の同級生だった。

だが、クラスは端と端であり遠い為、会う暇は昼休みぐらいしかない。

というか、詩織の要望で昼休みにだけ会う事になっていた。

周囲の目を気にしているのだろうか。

……まあ、仮にも俺は校内で避けられてる存在だしな。

向こうが気付いていようがいまいが、正式に詩織が俺達について来ると決めない限りは、表立った面会は避けておこう。

とりあえず、圭吾を紹介するのは……また次回でいいか。

一応、圭吾には説明してあるが、その際やつはフラグフラグと五月蠅かった。

これだからオタクは困る。

などと考えている内に授業が終わり、休職時間を終え、昼休み。

待ち合わせ場所である図書室へと早々に向かい、詩織の姿を探すすると、居た。

一番奥の本棚の前で、体育座りをし、顔半分を隠すように本を持って読書中だった。

だが、彼女の特徴的な黒が混じった茶色い長髪と穏やかな目つきが、本人であると俺に確信させた。

とりあえず早足で近寄り、横に立って本棚に寄りかかる。

「見えてるぞ」

「いい。減るもんじゃ無いし」

即答される。

まるで、その質問に返し慣れているかのように。

……さて、来てはみたのは良いものの、肝心の詩織は読書中である溜めに絶賛暇中だ。

その為、彼女の隣に座り、胡坐をかく。

数十分経過。暇だ。

と、その時不意に詩織が本を閉じ、俺の方へと向く。

目を合わせれば、不安が入り混じった瞳。

「……えと、昨日はありがと。少し、救われた感じがしたよ」

「少しか。……なあ、お前が自殺しようとした理由って、イジメか？」

問うと、暫しの沈黙があった。

凶星だろうか。

そして、ゆっくりと頷く。

「今日も、あった。昼休みに亮に会えると思うと耐える事が出来たけど、多分もちそうに無い……」

言って正面を向いて俯き、長髪が垂れて横顔が隠れる。

見えないその表情は、どんな表情をしているのだろうか。

今、俺はどうすれば詩織を救えるか考えている。

だが、何も思いつかない。

まあ、あるにはあるが、これは俺だから考える事だろう。

女の子である詩織には不向きだ。

結局、彼女の日常に大きな変革を与える事が、出来ない。

そう思った瞬間、不意に声が来た。

「なら、殴っちゃえばいいじゃんか」

見れば、馬鹿が来ていた。

本棚に片腕で寄りかかって立っている圭吾は、当然のような表情で異常な事を言う。

俺が考えていた事と、同じ事を。
違うところは、そこに納得の言葉があった事だ。

「どうせ、もう居場所はここにあるんだ。今まで関わってきた捨てたい関係を、ぶん殴ってぶち壊せばいいだろ。意外とスッキリするぜ？」

満面の笑みを見せる馬鹿。

その馬鹿の言葉を聞いた詩織は何か言いたそうな表情をし、しかし声は出ない。

再度俯き、歯を喰いしばる。

次いで大きく頷き、立ち上がった。

その目には、明らかに決意の色を宿していた。
走る。

ここを図書室である事を忘れていいのか、図書室担当の教師の注意を無視し、飛び出して行った。

その後ろ姿を見送った後、立ち上がって圭吾をど突く。

「いたっ！ なにすんねん」

「なんで関西弁なんだよ」

「いや、とある豆腐の物真似を」

「そんな事はどうでもいい。本当、お前は馬鹿だよな」

「え？ ここは褒めるところじゃね？ 違うのか！？」

喧しい馬鹿は無視し、図書室の出入口の方を見る。

大丈夫だろうか、と不安になり、けれどどうする事も出来ない為、放課後を待つしかなかった。

とりあえず、良くない結果になったら圭吾を殴れば良いと判断し、

余った時間を過ごす事にした。

その日、二年のクラスで一騒動あったそうだ。

A組で起きたそれは、女子生徒が突然女子生徒に殴りかかり、大騒ぎになったらしい。

誰がやったかは言うまでも無いが、結果殴りかかった女子生徒は自宅謹慎となった。

それを聞いた俺と圭吾は、放課後の校門にて立っていた。

下校生徒達を尻目に、時たま俺の名前が聞こえる事に苦笑しながら、圭吾と談笑していた。

それから何時間経っただろうか。

ふと、知った顔が視界に入る。

両手に包帯を巻いた詩織が、俯いた状態で生徒玄関から出て来ていた。

圭吾もそれに気付いたらしく、片手を大きく振る。

「待つてたぞー、謹慎娘ー！ ナイスパンチだっ」

馬鹿の言葉にハツとなり、顔を上げた詩織は、目を見開いて走り出した。

そして、圭吾の頬に左ストレートをぶち込む。

馬鹿が倒れた。

「いったいじゃんっ！ 凄く痛い！ なんて方法を提案してくれたんだよこんにゃろー！」

怒鳴る詩織は両手を構えて、圭吾が立つのを待った。
対し、頬を押さえながら立ち上がった圭吾は、腹部に数発ジャブを食らいながらも耐えて、反論する。

「う、うつせーな！ やったのはお前なんだから、俺の所為じゃねえよ！」

「いや、それはないわー」

「なんで引くんだ！？ さては亮、俺に何か恨みがあるのか！」

「ある。ありすぎて困る」

「オオオオ！！ と叫びながら顔を手で覆い、馬鹿はしゃがみ込む。」

そんな馬鹿を詩織は、指を差して笑っていた。

その姿は、昨夜の詩織でも昼休みの時の詩織でも無く、明るい詩織だった。

ひとまず、安堵。

「で、スッキリしたか？」

「うん、超スッキリ！ 殴った瞬間、ぽかーんって顔しててね、その顔を何発を殴りながら、もうイジメるなー！ って叫んできた。そしたら、学校にイジメられた」

「停学にならなかつただけ、マシだろうに。それで、自宅謹慎だが大丈夫か？ 暇じゃないか？」

「大丈夫！ どうせ、来週から夏休みだし。それに」

「ビシッと親指を突き立て、目を弓のようにして笑みを見せる。

「凄く楽しそうな、新しい居場所を見つけたから！」

その言葉を起点として、俺達の付き合いは始まった。

それから半年以上、馬鹿騒ぎは続く。

思えば、圭吾以外で常に行動する奴は初めてだなと、三人になった事に嬉しく思いながら、月日は過ぎていった。

階段を登りながら、過去を振り返る。

もう戻らない、過去を。

まだ今日は終わっていないから、もう少しだけ過去に浸らせてくれと、時間に頼み込みながら、屋上を目指す。

二年前よりも一層、ひび割れや錆が酷くなった廃ビルの階段を、ひたすら登って行く。

そうして到着した最上階の鉄扉を開け、外へ出る。

視界へ入るのは、二つのドラム缶とフェンス、遠くには廃墟の群と薄暗くなった空。

俺はその光景を見て、春休みにも来たなあ、と内心で呟きながらドラム缶に近寄る。

途中、ポケットに手をつ込んで缶コーヒーを取り出し、プルタブを引いて開ける。

それを一方のドラム缶の上に置き、もう一方のドラム缶に座る。

次いでもう一個の缶コーヒーを取り出し開けて、口に運んだ。

苦味が口の中に広がり、意識が無駄に覚醒する。

一息。

そして、向かい側のドラム缶を見る。

「悪いな、お前の好きなチョコ持って来てたんだが、あげちゃったよ。お前なら、同じ事してたよな？」

問い掛けに返事は無いが、気にせず言葉を生む。

「にしても、お前が死んだって聞いた時、心臓が止まったかと思っただぞ。また、大切な奴が交通事故に遭っちまったんだからな。……でもよ、もっと驚いていたのは巴なんだぞ？　そして、一番悲しんでいたのも巴だった」

だがな、

「あいつは、もう立派になったよ。生徒会役員の一年代表だってやってるんだぞ？　お前のおかげで、立派になった。だから、心配する事は何もねえ」

じゃあ、亮は？

詩織がもしここに居て、会話が出来るとしたら、そう聞かれる気がする。

けれど、大丈夫だ。

「大丈夫。引きずってはいない……が、浸っている。それも、今日だけだ。だから　楽しかったぞ、詩織」

それは、ただの独り言でしかない。

だが、別にそれでも良い。

例えばこの光景を誰かに見られていたとしても、別に良い。

もう会えなくなつてから丁度一年経ち、日常は大きく変わった。その旨を命日に報告する。

これは多分、来年も再来年も行う事だろう。

だが、こうやって過去に浸るのは、今日が最後だ。

次からは、ただ日々の変化の報告と、巴の成長を伝えでもしよう。だからこそ去り際の言葉はじゃあな、では無く、

「またな、詩織」

告げ、缶コーヒーを飲み干し、空き缶をまだ残っている缶コーヒ
ーの横に並べる。

次いでドラム缶を降り、片手を一振りしながら屋上を後にした。

第48話：ドキッ！とはしない、勉強会

中間テストを翌日に控えた今現在。

俺はその事に何一つ慌てる事無く、途中で夢月に頼まれた調味料を購入し、いつも通りに帰宅した。

そしてそのままの足で、キッチンにいる夢月の下へと向かう。

「ホレ、ご注文の品だ。報酬は貰えるのか？」

「ありがとね。報酬はお好み焼きだよ」

おいおい、それじゃあこの依頼が無かったら、飯抜きだったのかよ……。

そう内心で呟きつつ、ふとリビングの方へと視線を移した。

そこには何故か、いつももあるはずの和葉の姿が無かった。

やけに静かなのかのはその所為か。

珍しい事の為、明日は雨が降るんじゃないかと心配しつつ、お好み焼きの生地を作っている夢月に問い掛ける。

「なあ、和葉の奴、どこに行ったんだ？」

「え？ 和葉ちゃんなら、帰って来てからずっと私の部屋にこもってるよ？ って言っても、そんなに時間は経ってないけどね」

「ほお、アイツが引きこもりねえ。ま、飯時になったら出て来るだろう」

言いながら、リビングの奥にある廊下を見て、微笑する。

ちなみにその廊下には、洗面所、俺の部屋、夢月の部屋、そして親父達の部屋がある。

で、空き部屋が無い為、和葉は夢月の部屋を共用しているのだ。

……まあ、広い和室が空き部屋として一応あるが、本人曰く和室

は嫌だとの事。

贅沢な奴だ。

そう思った時、ポケットに入っている携帯電話が着信音を鳴らしながらメールが着た事を知らせた。

「お兄ちゃん、まだ初期設定の着信音なの？」

余計なお世話な事を言いながら苦笑する夢月を無視し、携帯を取り出してメールを確認する。

「朔夜か。珍しいな」

「え、何々？ 朔夜ちゃん!？」

やけに食らいついてくるな、夢月。

しかも生地を作りながら。

……三個目は明太子入りか。

「食らいついてくるのは良いが、生地作りをミスるなよ？ 明太子は好きなんだから っと……あゝ、朔夜が家に来たいそうだ」

「ええ！ 何でまた急に!？」

「何でも、明日のテスト勉強を手伝って欲しいそうだ。俺は別にいいが、お前はどうか」

「もちろん、オッケーだよ！ どうせなら、夕飯と一緒に食べようって伝えておいてね」

聞くまでもなかったな。

とりあえず、夢月に言われた通りの返事を送っておく。
するとしばらくして、返事が着た。

ありがとうございます！ それでは、今すぐ向かいますね!!
か。

「今から来るってよ。よかったな、夢月」

「やったあー！ それじゃお兄ちゃん、ホットプレートとお皿の準備をしておいてねー」

「へーい」

気の抜けた返事をしており、キッチンの下にある収納スペースを開けて、中からホットプレートを取り出す。

それをリビングまで運び、夕飯とされるお好み焼きに向けての準備を始めた。

テーブルの上にあるホットプレートを俺と夢月が囲み、お好み焼きの生地を焼いていた。

そして丁度、いい感じに豚玉が焼けた頃に、ピンポーンという聴き慣れた音がリビングに響いた。

来客を知らせる音だ。その来客に対応する為、ホットプレートの温度を下げて焦げないようにし、玄関へと向かう。

そして鍵を開け、ドアを開けるとそこには、白く可愛らしいドレスのような服を着た朔夜の姿があった。

「……派手な服だな、お前」

「えー！？ いや、これはお父さんが着てけっていったもので」

ああ、あの人なら納得出来るな。

俺の事、朔夜の彼氏だと勘違いしてる人だし。

「いらっしやい、朔夜ちゃん！　　って、わわ！　可愛い洋服だね〜！　似合ってるよ！」

俺の腕の下に出来た隙間からピョッコリと顔を出した夢月は、お世辞　いや、本音だろうな　を言っただけを笑みを見せた。
同時、背中に衝撃。

……夢月の一撃か……いてえ……。

「あ、まあ、確かに似合ってるな」

「ええ！？　そ、そんな事ないですよ……」

夢月に強制されて言うつと、朔夜は頬を赤らめて否定した。
何だ？　言わなきゃよかったか？

……女心つてのは、よくわからんな……。

「……つと、そいやあ、何で俺なんだ？　勉強相手」

とりあえず、話を変えて疑問をぶつけてみた。

すると朔夜は、実はですねつと困ったような表情で前置きした。

「私、昔から勉強つてのを計画的に出来なくって……それで、圭吾さんに頼んでみたら、俺は馬鹿だから無理だって、断られちゃいまして……」

アイツは確かに馬鹿だからな。

だから余計に、飛翔鷹高校から推薦が来たって聞いて驚いた。

「で、圭吾さんが、急に思い出したかのように、亮だ！ アイツは頭がいいから手伝ってもらうといいぞ、って言われたんでこうして亮さんに頼んだんです」

なるほど……そういう事か。
納得、納得。

「んなら、話は早いな。とりあえず飯食うか、飯」
「夢月特製のお好み焼きだよっ！ ささ、入って入って」

朔夜が来たからか上機嫌な夢月は、彼女の手を取って早足でリビングへと向かった。

その後ろを、俺は肩を竦めながらついて行く。
そうして、ホットプレートの周りは、俺と夢月と朔夜の三人が囲んで座る事となった。

「はい、朔夜ちゃんの分だよ」

言って夢月は、熱々の豚玉を綺麗に分割して皿に載せたお好み焼きを、朔夜の前に置いた。

それを朔夜は、いただきますって言って恐る恐る口に運ぶ。

「……っ！？ す、すごくおいしいです！ お父さんの作るお好み焼きよりもおいしいです！！」

そう歓声を上げた朔夜は、次々とお好み焼きを口に運んでいく。
……ってか、コイツの家ってお好み焼き屋じゃなかったっけ？
正確に言えばもんじゃ焼き屋だが。

本職よりも美味いって、ある意味凄いな。

「本職の親父よりも美味いつてのは、言い過ぎじゃないか？」

「いえいえ、本当にお父さんのより美味しいんですよ！ 生地から既に違います！！」

「そこから違うのか……よかったな、高評価だぞ。基礎から拘る夢月シェフ？」

ニヤニヤしながら、半目で夢月に話を振る。

すると夢月は、高等部に手をやりながら照れ始めた。

「いやあ、普通にやってるだけだっ」

「もしそうだとしても、凄いです！ 今度、お店に手伝いに来て欲しいくらいです！！」

それはそれで、朔夜の親父の仕事が無くなるんじゃないか？

そんな事を思いながら二人の会話を聞いていると、不意に後ろから声が来た。

丁度、俺達の部屋がある廊下側からだ。

「自棄に賑やかな……何やって　く、九条さん？」

それは、和葉だった。

最初は気だるそうに入ってきた和葉は、朔夜の姿を見るなり固まってしまった。

まあそれは、朔夜も同じ事なんだが。

「和葉さん……？　どうしてここにいるんですか？」

「あ……和葉が許婚つてのは覚えてるだろ？　だがそれ以前に、親戚のような奴だからな。転入当日から居座ってる」

面倒な事になる前に説明しておく、朔夜は納得したかのように数回頷いた。

……わかり易い説明じゃなかった気がする……。

一方、和葉はリビングへと入ってくるなり、不機嫌そうな表情をしながらテレビの電源と付け、丁度俺達に背を向けるようにして座った。

どうやら、既に面倒な事になっていたようだ。

「……おい、和葉。食わないのか？」

「いらないわよ。お腹、空いていないから」

「本当にいいのか？ 夢月の作ったお好み焼きだぞ？」

「いいの。今は何かを食べたりする気分じゃないのよ」

頑固な奴だ。

腹、減ってるからこそここに来たんだろうに、意地を張りやがって……。

そんな奴を見ると、もう少し聞きたくなる俺が居る。

「そう言ってるが、実は腹減ってるんだろ？ 遠慮するなって」

「しつこいわね！ いらないって言ったらいらないのよ!!」

怒声を上げながら振り向いた和葉は、しかしすぐにテレビの方へと向き直した。

また、朔夜を一度見てから。

……何があつたのかは知らんが、厄介事のような気がする。

「……わかったよ。それじゃ、俺達はさっさと食つぞ」

そう言つと、夢月と朔夜は笑顔になり、食べる事を再開した。

……女同士の問題は、女同士で解決してもらうのが手っ取り早い

からな。

一日でも早く、解決する事を願うよ。
そう内心で呟き、俺も食うのを再開した。

「で、だ。この、Xの二乗を……って、大丈夫か？ 眠そうだが」

見ると朔夜は、ペンを止めたままトロンとした目で、眠そうにウトウトとしていた。

「……ほえ？ ああ、うくっ！？ だ、大丈夫です！ 問題無いです！！」

なんか、全然大丈夫そうに見えないな……。

さて、ちなみに今現在、夕飯を食い終わった後から、ずっと俺の部屋で勉強を手伝って とうか教えていたのだが、時計を見ると大分時間が経っていた。

いくら休憩を挟んでいたとは言え、さすがに疲れが見えてくるだろう。

……終電も近いしな。

夢月だったらこの場合、泊まって行く事を勧めるだろうが、さすがに明日はテストである為、そろそろ帰らした方がいいだろう。

「……そろそろ終わるか？ 時間も時間だしな」

「え？ あ、はい。そろそろ終電の時間ですしね。……あの、今回はありがとうございました。勉強を手伝ってもらっただけでなく、お食事まで頂いて」

ノートや筆記用具を片付けながら、そう言って会釈した。

そんな朔夜に、同じくノートなどを片付けながら、気にするな、と言っておく。

「コレが、我が家のお持て成しの仕方だ。だから、客は客らしくして、遠慮する必要は無いんだよ」

「そうなんですか？ ……それじゃあ、もし次に来た時は遠慮しないようにしますね」

「ああ。ってか、もし次にというよりも、明日も来い。お前、意外と馬鹿だったしな」

よく飛翔鷹高校に受かったな、と思えるほどだった。

「ひ、ひどいですう……自覚はあるんですけどね…… って、明

日も来ていいんですか!？」

「いいぞ、暇だし。それに、夢月も喜ぶだろうしな」

軽く即答すると、朔夜は苦笑を漏らした。

だがその表情も、すぐに笑みに変わる。

「それでは、明日もよろしくお願いします!!」

そう言う朔夜の表情は、本当に嬉しそうに見えた。

第49話：生徒会からの勧誘

「いよっしゃあああ！！ やつと終わったあああ！！！！」

突然の声は、教室中に響き渡った。

その為、俺を含めて全員が、一斉に声のした方向を見る。

そこには、椅子の上に立って人差し指を高々と上げている圭吾の姿があつた。

……面倒臭い奴め。

内心でそう悪態を吐き、溜息を深くつく。

そして、腕時計に目をやった。

時刻は九時五十分で、日付はテスト最終日である九日の金曜日だ。そのテストは最初の一時間で終わり、今は三十分程の休憩時間が与えられた。

何でも、その後に新築の講堂にて、生徒会役員による修学旅行の説明があるとか。

多分、説明をする生徒会役員ってのは、

「失礼します、亮さん」

「……いきなり本人の登場かよ」

ソイツ、巴は突然に教室の戸を開けて入って来ながら、俺の名を呼んで近寄って来た。

……ってか、入って来る時の言葉がおかしいと思うのは、俺だけか？

「おはようございます、亮さん」

「ああ、おはよう。そしてA組から遙々、ご苦労さん」

言いながら辺りを見渡すと、見事に多数の生徒の視線が俺達に向

けられていた。

その為、俺は圭吾でも見てろという意味を込めて、顎を圭吾の方に向けて数回振る。

するとこちらを見ていた生徒全員が何故かほくそ笑み、仕方なさそうに圭吾へと視線を移した。

……何だ、この無駄なシンクロ率は。

とにかく、巴にここへ来た用件を聞いて、さっさとお帰り願おう。

「で、何の用だ？」

「はい、実はですね……詩織の命日のあの日、亮さんが帰られた後に、小さな女の子を連れた女性が来たんです。僕達と同年くらいの」

耳元で、誰にも聞こえないように小声で話す巴の声には、少し嬉しそうに感じ取れる。

「それで、その女性が詩織のお墓に手を合わせた後、不意に僕の方を向いて、この子知り合い？　って聞いてきたんで、友達です、って答えたんです。したらその女性は少しの間を置いて、彼女が助けた人は今も生きている、記憶喪失だけだね、って言い残して帰って行っただですよ」

「……ちよつと待て。つまりは、その時に助けられたっていう記憶が、その人には無いって事か？」

じゃなくて、

「ってか、誰なんだ？　その人、生きていた人って」

「僕にもわかりません。でも、少なくとも助かった人の情報が入ったんです。それだけでも、よかったです」

……確かに、コイツにとっては重要な手掛かり。

長い間、探し続けていた奴の情報が、少なからず入ったんだ。それだけでも、良しという訳か。

「……まあ、伝えなかったのはコレだけです。それでは、また」
「ん？ おう、またな」

短い、それでも重要な内容だったな。

そう思いながら、去って行く巴の後ろ姿を見ると、突然姉御がめつと顔を視界に入れてきた。
顔が近い。

「突然だが、お主に問おう。わしが尊敬する西城殿とお主は、知り合いか！？」

「あ、ああ、そうだが……尊敬？ 尊敬しているのか？」

意外な言葉に驚き問うと、姉御は腰に手を当てて大きな胸を張り、当然じゃ、と答えた。

「あの者、西城殿は素晴らしい。生徒会役員一年代表を務め、その就任式での演説には心打たれる程の強い信念を感じ取れたのじゃ。西城殿こそ、来年の春の選挙で生徒会長に立候補する者として相応しい……！」

「結構高評価なのな。 ってか、来年の春？ 生徒会長つてのは、三年がやるんだろ？ 二年の選挙は早くて秋だろうに」

何言っただお前、という顔で言つと逆に、何言っただコイツ、って顔を返されてしまった。

しかも姉御は、ご丁寧に溜息と肩竦めをセットで。
傷付くわあ……。

「この学校の事、何も知らぬのだな、お主は……いいだろう、話してやろうぞ。この学校の生徒会全般は、三年生ではなく二年生が中心なんじゃよ。三年生は進級した時から、進学に集中する為に生徒会から手を引くのじゃ。進学校である飛翔鷹高校では、進学の方が圧倒的に多いからのう」

「だから、生徒会長などの上位クラスは、二年が真つ当するって事か」

「うむ、その通りじゃ。……時にお主、提案なんじゃが、生徒会執行部に入らぬか？」

「パスだ」

俺、即答。

姉御も、まさか即答されるとは思っていなかったのか、口を開けたまま固まった。

だが、すぐに再起動し、空いている席の椅子を持って来て俺と向き合う形で座った。

「……今現在、執行部として相応しい手練^{てだれ}が、この学校にはおらんのだ。お主とわしを除いてな。故に、お主の力が必要なのだ！」
「あのなあ、それは生徒会が生徒を力で捻じ伏せるようなもんじゃねえか？ そんなもの、どっかの独裁国だけで充分だ。力よりも、話術の優秀な奴を探せ」

「それはわかつておる。じゃが、それだけでは足りぬのだ……時にはどうしようも無いくらい、力が必要なんじゃ……。それに、現・生徒会長もお主を欲しておる」

最後の言葉に、俺はピクリと反応する。

生徒会長という優秀な存在が、一生徒でしかなくその上過去に問題を持っている俺を間接的に勧誘しているのだから、当然だ。

……だが、考える時間が欲しいな。

「少し、待ってくれないか？ テストが終わったばかりで、脳が疲れてるからよ」

「む……毎時間、早く終わらせて眠っていたというのに、疲れたというか……まあよい。では、ここらで失礼するぞ」

良く見てらっしゃる。

言って軽く会釈した姉御は、立ち上がって椅子を元の場所に戻し、自分の席へと戻って行った。

……生徒会執行部ねえ。

正直、あまりそういう責任の問われる組織には入りたく無い。

俺はただでさえ校内にも他校にも顔が広がっているんだから。悪い意味で。

そんな俺が問題を起こして、生徒会に迷惑を掛ける訳にはいかなーいと思っっている。

生徒会長が、それでも良いというのなら話は別だが、生憎、俺はそこまで買われていないだろう。

ともあれ、考える時間は必要な現状だ。

その結果に行き着き、吐息して圭吾を見る。

すると圭吾は、未だに椅子の上に立っており、訳のわからない踊りをやっていた。

……良いねえ、悩みのなさそうな幸せ者は。

三十分の休憩を終え、一年全員は新築であり別棟にある講堂という場所に集められた。

内部はかなり広く、体育館同様、入って正面に当たる場所には広いステージがあり、その中央には教卓のような物が置かれている。

そのステージを中心として、出入口に近付くに連れて坂を上るような形となっており、出入口からステージを見る場合、軽く見下ろす形となっている。

そして、一番下から平行に、映画館にあるような固定された折り畳み式の椅子がずらりと敷き詰められていた。

また、それらと同じ造りの物が二階にもあり、こちらは来賓や保護者、一般客用となっているようだ。

まあ、一言で映画館かコンサートホールと云えばいいのだが……。ちなみに俺達のクラスはその坂の一番下から十段目くらいの位置にあり、その列の椅子に座って校長の話を聞きつつ、現在進行形で絶賛暇中だ。

と、その時。

丁度真後ろの席に座っている圭吾が、俺の肩を突きながら声を掛けて来た。

その声は、小声だがはつきり聞こえる事から、前屈みの体勢になっ
っているのだろう。

だから俺は、背凭せもたれに頭を沈め、振り向かず口を開く。

「……何だ？」

「ちょっと聞きたい事があってね。さっき、姉御と何話してたんだ？」

「お前ががつくような内容じゃないぞ？　ただ、生徒会執行部に入ってくれないか、と言われただけだ」

言つと圭吾は、なにい！？　　っという声を上げて、俺の頭を両手

でガツチリと掴んできた。

そしてそのまま小刻みに揺らしながら声を殺して、

「生徒会執行部に誘われたあ！？ 鬼神と呼ばれるような事を過去にやって今現在他校にもその名が知れ渡っているお前が生徒会執行部に……！？」

驚きのあまりか、呼吸せずに一気に言った圭吾は、数回深呼吸して溜息をついた。

「……姉御も、何考えてんだろっねえ。こんな大問題児を執行部に誘うなんて」

「知るかつ、こっちが聞きてえよっ。……だが、誘ってんのは姉御だけじゃないらしい。生徒会長も、俺を誘っているそうだ」

「生徒会長？ ……ああ、生徒会長がか……」

なんだ、その納得したような反応は。

「生徒会長なら、納得なのか？」

「もちろん。……ってか、生徒会長の噂を知らないのか？」

「知ってる訳無いだろ。詳しく教える」

そう命令しつつ、話を終えて頭を下げた、ステージ上の校長を見る。

……あ、^{カツラ}鬘が落ちた。

絶対に落ちない鬘があるこのご時世に、落ちるような鬘を着けるとは……。

鬘愛用者のクソジジイ曰く、落ちる鬘は鬘にあらず、との事だ。俺には関係無い事だから、別にどうでもいいが。

とりあえず、大爆笑をしている一年全員が止まるまで、校長は赤

面必須だろう。

などと思っている間に、圭吾が話を始めた。

「今年の生徒会長はな、今までに無い美青年であり、成績優秀で人望が厚いんだ。その上、やる事成す事全てが大規模で、受けもいいんだ。まさに、バの付くケモノだよ」

「普通にバケモノって言えよ。……で、その生徒会長が俺を誘うのは、納得出来ると？」

いつまでも笑いの止まらない一年全員に堪忍袋の緒が切れたのか、マイクを持った鬼頭がステージに上がった。

そして深く息を吸い、

『貴様らあ！ 静かにしろ！！』

怒声で叫んだのと同時に、キーンツという音がスピーカーから鳴り響き、そのダブルコンボによって一斉に静まり返った。

「どうしたんだ？ 鬼頭先生。……ま、いつか。 納得出来る例を挙げると、創立記念日の時、柄の悪い奴らが騒動を起こしたらしいんだが、そいつらを止める為に、モノホンのヤクザを呼んで止めさせたそうだ。また、部員の一年生全員に可愛がりとかなんとかほざいて重傷者を出した部活があったんだが、二・三年生が全く反省の色を見せなかったが為に、部を潰したそうだ。二・三年生を病院送りにしてな」

一息。

「つまりは、だ。校内の風紀を、いや秩序を守る為なら、どんな事でも限度を超えて行なう奴なんだよ。まさに、目には目を、歯には歯を、って事だな。それでも人望が厚いってのが、驚くべきところ

でもある」

「だからこそ、過去に問題を起こしている俺でもお構い無しって訳か」

なんとも単純な事だったな。

……何かを守る為ならどんな事でも、か。

どこことなく護と性格が似てるところから、結構な切れ者なんだろうなと想像出来る。

「……ま、執行部に入るつもりなんてないがな」

「おお！ そう言ってくれると思ったぜ！ それじゃ、一つ頼みがある。俺が作った部活に入ってくれ」

「……は？」

突然の勧誘に、思わず後ろへと振り向く。

そこには誇らしげに、満面の笑みを浮かべる圭吾の姿があった。

その表情は、何かを企んでいる時の圭吾の表情だった事に、後から気付いた。

第50話：情報提供部の部室にて

俺は今、大事な放課後を、圭吾の後に続いて廊下を歩くという無駄な事に使ってしまったている。

しかもその場所は、管理棟の三階、通称？文化部室通り？だ。

誰が付けたのか分かんが、その名の通り文化部が持つ部室が敷き詰められている廊下だ。

そんな場所を俺はただただ、前に行く馬鹿について行く。

ちなみに、この管理棟というのは四階建てで、教室のある教室棟から少し離れたところにあり、渡り廊下で繋がっているのだ。

他にも特別教室棟という物もあるが、こちらは二階建てで意外と小さい。

そして講堂が、この管理棟のすぐ隣となっている。

で、管理棟に話は戻るが、運動部の部室が敷き詰められている？筋肉通り？があるのが一階。

職員室や生徒会指導室、校長室などがあるのが二階。

先程も言ったが、文化部の部室が敷き詰められている文化部室通りがあるのが三階。

暗黙の了解で誰も立ち寄らない、いや立ち入ってはいけないらしい未開のエリアである四階。

そしてその上が屋上となっている。

ちなみに俺がよく行く屋上は、教室棟の屋上だ。

管理棟の屋上は、途中に未開エリアの四階がある為に、行った事は無い。

……というか、この学校の奴らは通称を付けるのが好きなのか？何だよ、筋肉通りって……。

他にももっとありそうだな、などと考えている内に、既に廊下の端まで到達しそうにあった。

このまま行けば、四階や二階に繋がる階段しかないはずだが。

「おい、圭吾。もしかして、未開のエリアに行くつもりか？」

前に行く圭吾に問うと、こちらを向いて微笑を見せた。

「いやいや、そんなわけないだろ？ 行ってみたいのは山々だが、暗黙がねえ」

「それじゃ何で、階段のある方に」

向かって、と言おうとしたところで、俺の言葉は途切れた。

……俺達が歩いている方向からして、階段は左手に現れる筈だ。

そしてその階段への入口は、既に見えている。

だが圭吾は、まさかの右へと曲がった。

しかしそこには部屋など無い。

部屋があれば、部活名の書かれたプレートが、廊下を歩く者に見えるやすく天井近くの高さに設置されているもんだが、それが無い。

だからこそ俺は、素早くその曲がった場所へと向かう。

するとそこには、

「……何だよ。死角だな、この作りは……」

そこには、通路があった。

丁度一人がスムーズに通れる幅の通路。

そしてその奥、五メートル程先に、半開きになったドアが見える。どうやら、ドアの向こうは階段になっているらしい。

また、ドアの上部には、放送部と書かれたプレートがあり、その真下には情報提供部と影のついたゴシック体で書かれているプレートがあった。

縦に、くの字に曲がった階段を上った先には、部屋があった。

放送部か情報提供部なのかよくわからないが、とにかくその部室内は広がった。

軽く見渡せば、形に例えて長方形だな。

そしてその広いスペースを上手く活用するかのようにパソコンやテレビ、モニターやプリンターなど、数多くの電子機器がところ狭しと置かれていた。

ちなみにその全てに、FMP社のロゴが記されている。

視線を変えてみると天井は高く、その先にはゆっくりと回る四枚羽のプロペラが二つ。

これは、部室内の空気を巡回させる為の物だろう。

また、その巡回させる為の空気を上手く取り入れる為か、天井の二箇所と部室に入ってすぐ右側に、それぞれ大窓が付いていた。

そして左斜め前、数台のモニターに半円の形で囲まれるような所で、キャスター付きの椅子に一人の女子生徒が座っていた。

さらりとした茶色い短髪の上にびよっこりと飛び出したアホ毛が特徴的な彼女は、小柄な身体を揺らしながら、キーボードを打って作業に没頭しているようだ。

よくみると、髪に隠れるようにして、耳に小さめのヘッドホンが掛かっているし。

……邪魔するわけにはいけないから、とりあえず自力で圭吾を探すか。

そう目的を決めた俺は、先程見渡した時に気になっていた場所へと向かう。

そこは、入って左を見た時に見つけた、少し離れた場所にある引き戸だ。

俺はその前に立ち、引き戸に手を掛けてスライドさせようとした。すると引き戸は、音を立てる事無くすんなりと開き、その向こう

にはテレビ番組の編集室のような部屋があった。

長方形だが僅かに狭いその部屋にはマイクや音量調整機器、モニターなどがあり、右側には大窓があった。

その大窓から見える光景は、講堂のステージ。

それも、二階の席よりも高い位置から。

……どうやら、講堂の機器を制御する管理室のようだ。

「お？ やつときたな、亮。……俺の後ろを歩いてたつてのに、何で遅れたんだ？」

突然、圭吾の声が聞こえた。

その声と同時に、さらに奥の引き戸が開き、圭吾がひょっこりと姿を現した。

「……正直、驚いたんだよ。だから呆気にとられて固まって、遅れたんだ」

とりあえずそう言っておくと、圭吾は笑いながらこちらに向かって来た。

うぜえ……。

「……ところで、その奥はどうなってるんだ？」

「ん？ この奥には左に曲がるガラス張りの通路があつて、その先にはココと同じような作りの、体育館の管理室があるんだ」

言いながら引き戸を閉めた圭吾は、突然何かを思い出したかのようにな俺を管理室から押し出した。

そして先程見つけた茶髪の女子生徒に近寄り、勝手にヘッドホンを取って椅子を回した。

丁度、俺の方を向くように、だ。

だが彼女は、急な事に驚き、また見知らぬ男子生徒である俺が目の前に居る事に、困惑しているようだった。

無理も無い。

しかし圭吾は、そんな事などお構い無しに彼女の肩を軽く叩きながら、紹介するぜ、と前置きして言った。

「こいつはココ、情報提供部の部長で一年生、紺野 恵だ。元々放送部を再建しようとしてたらしいんだが、部員が集まらなくてな。で、そんな時に色々あって俺と出会ったわけだが、何ならいつその事新しい部でも作るか？ って提案して、今があるんだよ」

「お前らしいって言えば、お前らしいな……俺は霧島 亮だ。よろしくな」

「あ、はい！ ……よろしくお願いします……」

言いながら恵は立ち上がり、オドオドしながら会釈した。

……ん？ 立ち上がった瞬間、身長が伸びた気が。

座り縮みする体質か？ ……何言ってんだ、俺。

「霧島さんの事は、圭吾さんからよく聞いています。それで……部員の少ないこの部活に、入ってくれる優しい人だとか……」

「……圭吾。お前、これが狙いだったのか」

「何の事かなあ。とりあえず、どこにも所属していないのなら、ココに入部してくれよ……な？」

言いながら圭吾は、どこからともなく入部申請紙を取り出して、俺に差し出してきた。

……な、じゃねえよ馬鹿野郎。

その馬鹿野郎の目は、気持ち悪いくらいに輝いている。

「まったく、調子のいい奴だな。……ちなみに現在の部員は何人だ？」

「えと、三人。俺と恵と直樹だな」

直樹も入ってるのか。

……アイツなら、無理矢理じゃなくても誘われれば入るだろうな。だつたら俺も、入るしかないんだろうよ。……いや、入ろうじゃないか。

そう決心し、入部申請紙を手取る。

「入ってやろうじゃないか、情報提供部。試しに、な」

入部申請紙をヒラヒラさせながら問うと、恵の表情が綻び、笑みへと変わった。

ありがとうございます！ と元気な声を上げて。

そんな彼女の横、圭吾は右手の親指をグツと突き出してきていた。

「それでこそ亮だ！ ありがとな、マジで。ありがとな!？」

「うるせえ、黙れ。詰まらない部だつたら、すぐに辞めるからな。退屈させるなよ？」

少々キツク言ってやると、圭吾はしょぼーんとしながら、近くのキャビネットの中から部活案内パンフと書かれた小冊子を取り出して、俺に差し出した。

俺はそれを無視しながら、一つの疑問を持つ。

……毎日、朝と放課後に放送をやってる奴、確かメグミって名前だつたよな？

その疑問は、また今度聞いてみる事にする。

まあ、もし本人だつたら、キャラが変わり過ぎているという事になるのだが……。

第51話：出発の朝は、やっぱり騒がしい

さて月曜日、修学旅行当日。

俺と和葉はバスを待つ為に、バス停の前で立っていた。

準備は昨日の内に済ませてあり、俺の左側にはカッターシャツなどが入ったボストンバックが置かれている。

そのボストンバッグを見下ろした後に、左手首に巻き付いている物を見た。

それは、今まで付けていた腕時計よりも面積が少し広く、それそ薄さは腕時計並の物だ。

長方形のそれは表面にデジタルで時間が映し出されており、またタッチ式となっていて、色々な操作が可能となっている。

簡単に言えば、腕時計型の携帯端末だ。

名を一 portable information device《ポータブル インフォメーション デバイス》というらしい。パッケージには略称で“PID”と書かれていたな。

これは、FMP社が開発中の新型機種のプロトタイプらしく、昨日クソジジイから、遅れた入学祝いとして送られてきた物だ。

「まあ、便利だからな……感謝しとくか」

「珍しいわね、貴方がお爺様に感謝だなんて。お爺様、喜ぶわよ？」
「……いや、調子に乗りそうだから止めておこう」

言って苦笑すると和葉は、恥ずかしがり屋さんね、と言いやがった。

その為、言葉を返そうと彼女の方を向くと、笑っていた。

「……どうした？ クソジジイの顔を思い出したのか？」

「お爺様の顔に、笑える要素なんてないわよっ。……今の話題とは

別。まさか、修学旅行の行き先に、しかも一日目の今日に大阪が含まれているだなんて、思いもしなかったもの」

「あゝ、大阪な。確か、栞にFMP本社の見学つてのがあったな。

……クソジジイに会う羽目になるのか……」

そう思うと、自然と溜息が漏れた。

するとその溜息に反応して、和葉はその場でしゃがんで、俺の顔を覗き込むようにして下から見上げてきた。

その表情は、またしても笑み。

「そんなにお爺様と会つのが嫌なのかしら？」

「嫌だ。絶対に嫌だ。見学中はバス内で寝ていたいくらいだ」

「……まあ、後数時間もすれば、嫌でも会う事になるんだけどね」

クスクスと、喉からわざとらしい笑い声を出した和葉は、覗き込むのを止めて立ち上がった。

……あゝ、コイツが男　もとい、圭吾だったら殴ってたのになあ。

そう、内心で黒い言葉を吐きつつ、PIDいじりをしようと思つたその時、和葉が不満の声を上げた。

「それにしても遅いわねえゝ、バス。いつもの時間はとっくに過ぎ……」

何故か、中途半端なところで言葉が途切れた。

刹那、和葉は勢いよくこちらに振り向く。

顔が怖い……。

「りょーちゃん！　ここから学校まで、距離はどれくらいなの！？」

「は？　え？　ちよっと待て、急にどうし」

「これを見なさい！」

命令の言葉と共に、和葉が指で示した方向には、バスの時刻表。その、どこのバス停でも見かけられるような時刻表には、一枚の紙が貼られていた。

俺はその紙に近付き、マジマジと書かれている文字を見た。

……本バスをご利用の皆様へ、お知らせがあります。残念ながら、一部の時間帯の利用者数が一・二人しかない為、このままでは赤字となる事が判明しました。その為、真に勝手ながら、廃線とさせていただきます。廃線となるお時間は以下の通りです。八時～九時・発。何卒、ご理解をしていただき、また今後も本バスをよろしくお願いいたします……と。

「今、八時十五分だ。学校が始まるまで、後十五分。……走るか」

「あ、当たり前よっ！！ それじゃ、貴方は私の荷物を持ちなさい！ 私は全力で走るから！！」

「おいしい！ 何で俺が荷物持ちなんだ！？」

そう言っている間にも、既に和葉は走り出しており、距離が開き始めていた。

「男の子なら、女の子の荷物ぐらい持ちなさいっ！」

「そんな状況じゃねえぞおっ！！」

大声で吼え、急いで俺と和葉の分のポストンバッグを両肩に掛け、走り出す。

ポストンバッグの重量に、振り回されながら。

八時三十分という、その時間に俺達はギリギリで間に合い、今は息を切らしながら机に突っ伏している。

……正直、方や軽量、方や重量の荷物を肩に担ぐというアンバランスな状態で、約十五分間ずっと走りっぱなしだったから無理もない。

陸上部でも息切れはするだろう、たぶん。

……ってか、突っ伏している状態って、意外と息苦しいな。そう思い、身体を起こすと、急に圭吾の顔が視界に入った。

「だああああああああああ！！！！」

驚き、つい右ストレートが圭吾の頬にヒット。

「ぐほおっ！！　　いつてえじゃねえか！」

「うるせえ！　息切らして疲れている奴が身体起こした時に、いきなりお前が視界に入ってきて、殴らないわけないだろ！！」

「意味わかんねえよ！　何だよその理屈！！」

声を放つだけ放ち、俺と圭吾はぜえぜえと息を切らしながら、睨み合う。

だがしばらくして落ち着くと、二人揃って吐息して、俺は問う。

「……で、何かようか？」

「お、おう、そうだったそうだった。言い忘れてた事があったな、

実は――

『全校のみなさん、おっはようございまーす！ 情報提供部・部長のメグミでーす！』

突如、圭吾の声を遮るかのように、スピーカーからはチャイムの後すぐに、陽気な音楽と共に声が来た。

それは、毎度お馴染みのメグミだ。

『今回は放送が少し遅れましたが気にしない気にしない。さてさて、今日の予定は、皆さんお待ちかねの修学旅行でーっす！ 二泊三日の修学旅行、楽しんできてくださいねー！！』

えーっと、という声と同時に、数枚の紙が重なる際の音がし、そして言葉は再開される。

『さてさて行き先は、一年生が大阪・京都・大阪の順番で二つの県に。二年生は三日連続沖縄に。三年生は飛翔鷹高等学校に、それぞれ行くそうです！ 皆さんは、それぞれの場所でたくさん楽しんできてくださいねー！！』

刹那、下の方の階から、開いた窓と入口を通してブーイングが聞こえた。

……三年か。そりゃま、修学旅行先が学校で、それもわざわざ放送で言われたら、ブーイングしたくもなるわな……。

ちなみに、三年の修学旅行先は学校だというのは、受験対策の勉強合宿だからなんだそうだ。

だがそんな合宿の夜は、毎年テンションの上がりまくった三年が徹夜でパーティをするらしい。

同時に、翌日のテンションが疲れでとんでもない事にもなるらしい。

情報源は、圭吾だ。

『三年生のみなさん！ 別棟の四階放送室まで聞こえるブーイング、ありがとうございまーす！ もし窓が開いてなかったら聞こえてなかったけど……そのすつごく元気なブーイングを、是非先生にもぶつけてあげてくださいっ！ 鬼頭先生に』

刹那、ブーイングが止んだ。

それも、鬼頭の名が出た瞬間に、だ。

……鬼頭って、そんなに恐れられているのか？

そう思っている間にも、メグミの放送は続く。

『あれれ？ ブーイングが止んだみたいですね……っと、それじゃあ今日はここまで！ 皆さん、修学旅行でいい思い出作ってくださいねー！』

その言葉と共に、軽快な音楽が流れ、放送が終わった。

すると圭吾は、俺の耳元に顔を近付けて、小声で喋り出す。

「……で、だ。さっき言おうとしてた事なんだが……今の放送、恵なんだ。紺野 恵」

「あゝ……そんな気がしてた。だが、そうなると何であんなにもテンションが高いんだ？ 第一印象は大人しい奴って感じだったんだが」

「薄々気付いてたのかよ。……アイツはな、司会やナレーターをやり始めるとああなるらしいんだ」

まるで漫画だな、おい。

敢えてその言葉は口にしなかったが、半目で圭吾を見る。

「お前それ、本人から許可取って俺に教えたのか？」

そう問うと、圭吾は右手の親指をグツと立てて、笑みを見せた。

「あつたりまえだつ。部員には知っておいて欲しいという、本人の希望だ」

「そうか。それなら別にいいんだ」

言って頷き、軽く吐息する。

と、丁度その時だ。

出入口の戸が開く音とおぼ同時に、鬼頭が入って来た。

「さー、座れ座れ！ さて、遅れてすまなかったな。職員会議

が長引いたもんで。……校長が、メグミの放送が終わってからです！ とか言った挙句、報告は特にありませんときた。無駄に長引かせやがった校長に、久々に殺意が沸いたぞ」

教師鬼頭、早速問題発言。

そんな鬼頭に対し、一人の男子生徒が拳手をしながら立ち上がった。

「先生！ 校長はゾラが全校生徒に発覚したばかりなので、優しく接した方がいいと思いますぜ！」

誰かと思えば、和津田だった。

「はっはっはっ！ あの鬘の落ち方はよかったよなあ！ まあ、私は昔っから鬘だった事を知っていたから大丈夫だ、哀れまん。一緒に飲みに行った時なんか、鬘を奪って私が被ってふざけていたぐら

いだからな！」

「先生！ ナイス暴露です！ ちなみにその時の光景、写メってますか！？」

圭吾、追加で起立。

「ああ、もちろんあるぞ？ 後で見せてや って、見せられるかつ！ 何故わざわざ私の羞恥をお前らに見せなくてはならんだ！」

「おおう！？ 和津田！ 鉄壁の鬼畜・鬼頭先生に弱点の存在が判明したぞ、ノリ突っ込み付きで！ 早急に確保せねば！！」

「待て圭吾！ さすがにそれは危険過ぎる！ 鬼頭先生を試してみろ、これは忘れるべきだ！！」

その言葉と同時、圭吾が直立になって固まった為、釣られて和津田も直立になり、固まる。

そして二人は、ゆっくりと鬼頭の方を向いた。

その方向には、にこやかな笑みで額に青筋を立てている鬼頭の姿がある。

すると二人は再度顔を見合わせ、せーの、という手拍子の後に鬼頭を見て声を揃え、

「すみませんでしたもう知りませんもう忘れました何の事でしたっけ何かありましたかあはははっ」

……この二人、リハーサルでもやってたのか？
そう思える程、息がぴったりだった。

馬鹿は、同じ馬鹿に出会つと、凄い馬鹿になると、そう思い知らされた。

そんな馬鹿コンビを鬼頭は見据えながら、腕を組んで口を開く。

「ほう……まあいい。それじゃあ、今後の行動内容を説明するぞ。まず、九時になったら」

機嫌をなおしたのか、鬼頭はこれからの行動を話し出した。それとほぼ同時、背中をペンのような物で突かれた。

その為、俺は後ろの席、朔夜の方へと振り向く。

同時、突然口にマシユマロを突っ込まれた。

一個だけじゃなく、何個ものマシユマロを固めた奴を。

「ちょっとだけ静かに、お願いを聞いてくださいね？ どうして変な目つき何ですか。……まあ、いいです」

「……………」

「えつとですね。バスの席順はくじ引きで決めたんです。あ、亮さんが寝ていた時にですよ？ それで、私と亮さんが隣り合わせになるんですけど、窓際の席をもらってもいいですか？ あ、と、溶けっ、えい！」

マシユマロ、追加入りました。

一回に突っ込む量が多いのは、すぐに溶けるからだろうな。

とりあえず、無言で頷いておく。

すると朔夜は、安堵の表情になった。

「よかったあ。私、乗り物に乗るとすぐに眠くなっちゃう体質なんです。ほら、窓際だと、窓に寄りかかれるじゃないですか」

「……それを先に言っておくもんだぞ、普通」

やっと食い終えた。

「ってか、眠くなるってのは置いといて、窓に寄りかかるのはキツいんじゃないか？ バスが揺れて、窓に頭がガンガンガ」

「はい、貴様。霧島、私語だな？　どうする？　泣いて私に詫びるか、三回クルッと回ってワンッ！　っと泣いて私に詫びるか。どっちがいい？」

「どっちみち詫びるのかよ。すみません。これでいいか？」

「態度がなつてないが……そんな事言ってる場合ではないな。霧島の口から謝罪の言葉が聞けただけでもよしとしよう。　それじゃあ、もうすぐ九時だな。全員、荷物を持って説明した場所に集合だ。いきなり忘れ物はするな―」

手を数回叩きながらそう言つて、鬼頭は教室を出て行つた。

……俺、そう簡単に謝罪はしないような奴だつて思われてるんだな。

「りよ、亮さん。すみません、私のせいで……」

「いや、俺がガンガンとか言つてたからだな、意味わからんが。……で、お前は窓際でいいんだな？」

苦笑しながら問うと、はい、お願いします、と言つて一礼した。

それに対して、俺は無言で頷き、荷物を持って立ち上がる。

そしてそのまま圭吾の下へ行つて頭を一発殴っておき、集合場所へと向かう事にした。

……場所は聞いてなかったからわからないが、生徒の流れに乗つて行けば大丈夫だろう。

途中、後ろから圭吾の怒鳴り声と朔夜の笑い声が聞こえたが、敢えて振り向かずには歩き続けた。

第52話：親友（？）をおだてる（？）楽しさ

そこら中から喧騒が聞こえる観光バス内にて。

俺は左の席でスヤスヤと眠っている朔夜の横顔を尻目に、窓の外を眺めてボーっとしていた。

学校を出発して早一時間弱。

車外の光景は既に移り変わっており、今は高速道路特有のバリケードと、その向こうの木々が見える。

今時、東京から大阪までバス一本で向かうのもどうかとは思うが、こうやって色んな毛s期が見れるのも悪くない。

と、そんな事を思っていた時だ。

「ちなみに、霧島はどう思うのだ？」

突然、前の席の右側からひょいと顔を出して、姉御が問い掛けて来た。

なんの事だかさっぱり分からない。

「ん？ その様子では、わしらの会話に全く耳を傾けていなかったと見える。実はのう、圭吾が自分にとってどんな立場の人間なのか例えるならお主はどうじゃ？ という問いじゃ」

「もちろん、頼りになる親友だよな？ な？」

通路を挟んだ真横の席に座る圭吾は、身を乗り出して発言を強制してくる。喧しい。

そんな事より、圭吾を何に例えるか、かあ。

……これって、なんて答えりゃいいんだ？

「物語にして例えるのもありじゃな。バスでの旅路は長い故、退屈

しのぎにはなるうて」

「物語か。だったら……そうだな」

何か、良い素材が無いか考える。

圭吾が、というよりも物語の創作が主になっている気がするが、
敢えて気にしないでおこう。

とりあえず、圭吾の部屋に飾ってあったポスターを思い出しつつ
……。

「ああ、あれだな。例えるなら」

今から二十年後、二〇五六年。

人類は宇宙に進出し、新たな文明を築こうとしていた。

しかし、人類は資源を求め、またしても戦争を始めていた。

宇宙戦争が実現したのだ。

……などと内心で語りながら、俺は格納庫へと向かっていた。

艦内に響き渡る警報は敵襲を知らせ、オペレーターによるアナウンスが乗組員に指示を与える。

ちなみに、俺に与えられた指示は、格納庫にて自分の機体に乗
り、出撃して戦闘をする、というものだ。

そうして、長い通路の先、自動扉を抜けると格納庫へと到着した。
既に準備が整ってる機体、人型機動兵器が数体並んでおり、俺は
整備士の誘導に従って、その内の一つである前から二番目の機体
に乗り込む。

コックピットの中は、戦闘機のそれとほぼ同じで、椅子に座って
操縦桿を操作する仕様だ。

また、搭乗したのと同時にコックピットの機器が起動し、視界がクリアになった。

見えるのは、格納庫内の光景。

次いで、正面に表示されたウィンドウは、通信システムだ。

『亮。初陣らしいが、大丈夫か？』

「大丈夫だ、問題ない。お前についていけば、難なく達成できるだろ」

『お前って、一応俺は上官だぞ？　少しは敬えな』

微笑しながら文句を言う圭吾は、この部隊の体長だった。

随分と出世したなあ、としみじみ思う。

なんせ、この艦隊のエースなのだから。

そんな彼の顔が映るウィンドウの横に、突然もう一つウィンドウが展開される。

『アサルト各機、出撃体勢に移行して下さい。現在、敵艦隊による砲撃が激化している為、— A D F 《 a n t i d e b r i s f i e l d 》の解除が出来ないでいます。その為、本艦の主砲を連続して砲撃し、相手に隙を作らせるので、その間に一瞬だけ A D F を解除いたします。その際、タイミングを合わせてカタパルトを射出しますので、いつ飛び出しても良いように、心構えをお願いします』

作戦の説明を行うオペレーターの話はここで一度途切れ、代わりに俺達の機体がカタパルトにて移動を開始する。

最初に射出力カタパルトに接続されたのは、圭吾の機体だ。

足が固定され、機体が傾き、出撃体勢となる。

『それでは、カウントを開始します。十、九、八、七、六、五』
「総員、出撃次第俺に続けよ？　一気に活路を開くぜ！」

『四、三、二、一、 出撃！』

合図と共にカタパルトから光が放たれ、火花を散らしながら滑り、圭吾の機体を射出する。

一瞬で一定速度に達した機体は、そのまま宇宙空間に飛び出す。刹那、機体に敵艦の砲撃が直撃し、爆散した。

「俺一瞬で死んでるじゃねえか！」

怒鳴る圭吾はより一層身を乗り出し、姉御は腹を抱えて大笑いしていた。

今にも通路に落ちそうな程に、身体を捻らせている。そんなに面白いのか？

「エース隊長であつたとしても、いざという時はすぐに死ぬ程の運の無さを表現してみたんだが」

「さすがじゃ、さすがじゃよ霧島！ あっけない圭吾にはぴったりじゃー！」

言いながら、尚も姉御は笑い続ける。

だが不意に、彼女は片手を挙げた。

じゃあわしも、と言って呼吸を整えている。

「今ので何か思いついたのか？ つーことは、また圭吾が死ぬ話？」
「おいおいおいおい、また俺死ぬのか。無様過ぎるから止めてくれよ」

眉間に皺を寄せ、真顔で抗議する圭吾を大丈夫と宥めて、姉御は語り出した。

都内のある墓地。

空には雲がかかり、雨が降り続けている中を、傘を差し花束を持った一人の青年があるいていた。

彼が立ち止まったのは、一つの墓石。

見れば綺麗な花が何本も供えられ、線香も真新しかった。

どうやら、先客が居たようだ。

だが、青年はその事に気にせず、供えられている花に、手を持った花束を追加する。

次いで、傘を脇で押さえて両の手を合わせて目を瞑る。

彼には相棒が居た。

彼以上に強く、また多くの人望を持った男が。

しかし、裏社会を担うその男は、戦って戦って戦い続け、自らの身を削り、そして死んだ。

だから彼は、相棒に誓う為に、ここに來たのだ。

跡を継ぎ、仇を取ると。

そう、墓石に彫られた？本田 圭吾？の名に誓った。

「そうじゃねえかと思ったよおおお！　ってか、最初から死んで

るし！」

「そうか？ 死んでるのは俺かと思っただが」

というか、姉御らしい設定だな。

しみじみとそう思う。

一方、物語の中心となっている圭吾は、不満の声を上げていた。

「なんで俺、毎回死ぬんだよ！ しかも、そんなに活躍してないしさつ。もっとこう、感動出来る物語は無いのかよ、俺が活躍する」

主旨が変わってきている気がするのよ、俺だけだろうか。

圭吾を例えるならどういふ存在かということから、圭吾が主役の物語を作る話題になったな。

まあ、暇潰しには丁度良いか。

「それじゃあ、私が語りましょう！」

突然、寝ていた筈の朔夜が名乗りを上げた。

それに対し、俺達の視線は彼女に集まる。

姉御はワクワクした目で、圭吾は好奇心半分疑い半分の目で、俺はいつの間にか起きていたんだという驚きの目で。

色々な目に見つめられて戸惑いつつ、朔夜は両手の平を振る。

「大丈夫です、良い物語を思いつきましたから。……それは、ある冬の日の物語です」

「それが、彼の唯一の願いでした……。以上です。ご清聴、ありがとうございました」

朔夜が語り終えた頃。

周囲の反応は、感動一色だった。

俺や姉御でさえ、目に涙を溜めており、圭吾に至っては号泣だった。

また、周囲を見渡せば、個々で会話をしながら聞き耳を立てていた奴らも、今は目に涙を浮かべていた。

バス内の前半分で起きていた喧騒が、完全に止んだのだ。

そして、語った本人は満足気な表情をしている。

……それにしても、良い出来の物語だった。

まさか、圭吾が主役という設定でここまで感動出来るとは、思ってもみなかった。

「で、朔夜。結局、圭吾は最後にどうなったんだ？」

「え？ 最後は、相手の事を想いながら、お亡くなりになります」

全員が一斉にずっこけた。

全員がずっこけた後、バスが揺れた為に鬼頭は一喝さえ、この話題は終了となった。

そして今は、最初と同じく喧騒がそこら中から聞こえている。

俺達もまた、その喧騒を生む内の一グループとなっていた。

まあ、一番喋っているのは言うまでも無く圭吾だが。

……ああ、そういえば。

「バスの席順はくじ引きで選ばれたって聞いたが、俺達固まりすぎでないか？ 今気付いたら、圭吾は隣は直樹だし」

言いながら、圭吾が指差す方向を見ている。

バスの後部を指しているようだが、どこを見れば良いのか分からない。

そうやって視線を迷わせっていると、奥の左端だと圭吾からの追加指示。

言われるままに見てみれば……ああ、そういう事か。

和葉と日向が隣り合わせだった。

和葉が窓際で、日向がその隣。

最後尾の座席は僅かに座高が高い為、表情が見えるが、最悪の状況に見える。

基本無口な日向は目を瞑って眠っており、お喋りである筈の和葉は会話相手がおらず、窓の外を見ながらイライラしている。

また、日向の周りの人達も無言だった。

……日向の印象は、眠りを妨げてはいけない不良か。

少なくとも、そんな感じだろう。

でなければ、和葉は周囲の奴らと喋りまくってると思うし。

南無三。

「さすがに、あれはきついな。やっぱりお前の運って奴か」

「おうよ！ でも、お前に運は分けてやれねえ。ごめんなっ」

「何がだ？」

「いやだって、最初に向かうのは大阪のFMP本社見学だろ？ あ
のじいさんには、嫌でも会わなきゃな」

あゝ、そうだった。

糞爺が嫌い過ぎて、すっかり忘れていた。

……無事に、見学が終われば良いんだがなあ。

そんな事を内心で祈りながら、圭吾達との会話に別の花を咲かせる事にした。

第53話：本音じゃなくても来たくない場所

大阪に到着した、という鬼頭のこえに目を覚ました俺は、眠気眼を擦りながら、窓の外を見据える。

まあ、見たところでここがどこか判別出来るわけではないが。

少なくとも、景色が都内に変わっているところを見ると、高速道路でない事は確かだ。

……ってか、俺いつの間に寝てたんだ？

なんの夢を見ていたのか、そもそも夢を見ていたのかさえ分からない為、いつからかだなんて判明は難しいもんだ。

ふと、隣の席を見やると、朔夜はまだ睡眠中だった。

頬が緩んでおり、寝息も安らかな彼女は、多分幸せな夢でも見ているのだろう。

そんな一時を邪魔するのは気が引けたが、肩を揺すって声を掛ける。

「着いたぞ、朔夜。大阪だ」

「ふむあ……ふへへ……」

なんだ、ふへへって。

あ……デコピンだろうか。

「ふみいたいつ！ な、何事ですか！？」

「何事ですかじゃねーよ。大阪に到着したから起こしたんだ」

「だからって、なんでデコピンなんですかあ……」

おでこがヒリヒリします。

朔夜はそう悪態をつきながら、額を摩る。

一応、確認してみるが……よし、青くはなっていないな。

若干赤い気がするが、それは当然の事なので気にしない。

「っと、とりあえず出るか」

気付けば、バスを降りようとしているれ湯は最後尾に近付いており、日向と和葉の姿が見えた。

一目で分かる程、和葉はイライラしていた。

日向は無表情無感情状態だったが。

ともあれ、特に持ち物は無い為に手ぶらで立ち上がり、列の最後尾に朔夜と並んでバスを降りる。

バス内の暖かい空気から一変して、少し肌寒いような空気となった外は、建物の入口前だった。

入口の自動ドアにはFMPのロゴが刻まれており、床の大理石にも同じ文字が大きく刻まれていた。

…… 思えば、FMP本社に来たのは初めてだな。

今まで糞爺に会う機会は、霧島本家か如月家、もしくは俺達家族の自宅に直接来ていたから、こっちから糞爺関係の場所に行ったのは、如月家だけだ。

故にFMP本社がどういう所かは知らない。

まさか修学旅行で初めてここに来る事になるとは、予想だに出来なかった。というか出来る筈が無い。

「こら霧島。班と纏まって行動しろと指示しただろ。早く本田のところに駆け！」

鬼頭から整列命令が出た為、いらぬ思考を休止して辺りを見渡し、圭吾を探す。

いた。少し離れた場所で馬鹿面が、俺を手招きしていた。

とらえず早足で圭吾の下へと向かい、班員を視界に入れる。

男子は圭吾と日向と直樹、女子は朔夜と和葉だ。

圭吾にとってはいつものメンバーを入れたつもりのようだが、バス内でのアクシデントで日向と和葉はミスマッチだ。

その証拠に、日向と和葉の立ち位置は、間に朔夜と直樹が入る事でかなり開いている。

幸い、ムードメーカー圭吾と、天然の朔夜が居るから班の空気はブラマイゼロだが、大丈夫だろうか。

一方、俺の心配を他所に、圭吾は楽しそうにパンフレットを広げ、直樹と会話していた。

暢気な奴である、本当に。

「よし、お前ら注目！」

いつの間にか貴様らからお前らに変えた鬼頭は、全生徒の先頭で声を張り上げた。

「今から、飛翔鷹高校のスポンサーであるFMP社の本社を見学する。だが諸注意だ。中には多くの展示物があるだろうが、絶対に寄らない触れない壊さない事！そして、社員や社長のくだらないスピーチがあるが、寝ては駄目だ！寝た奴は宿泊先のホテルで徹夜正座をしてもらうぞ。以上！」

なんだか途中、教師らしからぬ言葉が聞こえた気がするが気のせいだろうか。

「それでは、私を先頭に今から施設内に入る。皆、クラスと班番号順に並んでついて来てくれ」

全員に聞こえるように告げ、鬼頭と共に列が動き出した。

とは言っても、班として纏まっていれば良いだけなので、綺麗に整列している訳では無い。

故に俺の右側には朔夜が、左側には圭吾が並んで歩いていた。
で、左側の圭吾は施設内に入るなりテンションが上がり、そこら
中の展示物をデジタルカメラで撮っていた。フラッシュ付きで。
正直、五月蠅い。

「……お前、なんでそんなにテンション高いんだ？」
「何？ 逆に聞くが、何でお前はテンションが上がらないんだ！？
見るよこの傑作の数々！ 全てがFMP社オリジナルの製品ばかり
なんだぜ！？」

特にアレだよ、アレ！ と楽しそうに言いながら、腕時計のよう
な製品を指差した。

……ん？ アレってもしかして、
「この事か？」

言いながら、袖を捲って隠れていたPIDを見せる。
すると、圭吾の表情は明らかに変わった。

「ええええええええええ！？ はあああああああんぶどう
っ！」

「五月蠅い。なんかもう、驚いてるのか気合入ってるのか分かん
なかったぞ」

とりあえず左ストレートを頬にぶち込んでおいた。

「で、何で驚いてるんだ？」
「だってよだってよ、それってまだ出回って無い製品じゃん！ っ
てか、発表したばっかの物だぞ！ なんで持ってたの！？」
「今朝な、糞爺が俺宛に小包を送ってきやがったんだ。その中身が
コレだよ」

「うわあ……さすがFMP社社長の孫だな……」

何がさすかなのかよく分らん。

と、その時不意に、右側の朔夜が声を上げた。

「え、亮さんって、ここの社長さんのお孫さんだったんですか？」

「あれ？ 話してなかったか？ いや話しただろ、前に屋上で。ここの社長の名前は如月だ。如月 源次郎。気付いたか？」

「むう……あ、和葉さんと同じ姓ですね！ という事は……亮さんのお祖父さんですね！？」

「やっと正解、おめでとう」

軽く三回程拍手して褒めると、朔夜は照れ臭そうに後頭部を掻く。

……でも、その行き着いた答えって、孫であると言った時点で分かるんじゃないか？

なんて思うのはタブーだろうか。

そう思っている間に奥のホールに到着し、各クラス毎にずらっと並べさせられた。

ホールはかなり広く、例えるなら飛翔高の体育館と言ったところだろうか。

バスケットコート三つ分くらいはある。

そこへ四人一列を一クラスとして、六クラス分が並んでいる。

ちなみに俺は真ん中辺りだ。

暫く待たされた後、スーツ姿の女が前面の中央付近に立ち、マイクを構えた。

『飛翔鷹高等学校の皆様、本日はおこし頂きありがとうございます。早速ですがお呼び出しのお知らせです。霧島 亮様、至急こちらまでおこし下さい』

スピーカーから聞こえるのは、俺を呼び出す声。
正直、嫌な予感しかない。

だが、スピーカーを使つての呼び出しである為、出て行かない訳にはいかない。

故に人と人との間を通つて前へと出る。

そして、マイクを持っている女の前に立つて 瞬間、床が開いた。

「 うおあつ!？」

一瞬、何が起こつたか分からなかった。
だが、無意識の内に両手を広げたおかげで、なんとか落ちなくて済んだ。

反射神経に感謝。

ふと下を見てみれば、垂れ下がった足の先に暗闇があつた。
どこまで続いているのだろうか、と思える程の深い穴だ。

大きさは俺一人が綺麗に落ちれる程。冷や汗が全身から滲み出ると、とりあえず出よう。

そう思い、両腕に力を込めて身体を持ち上げる。

一応、足も使おうとしたが、壁がつるつるで登る事は出来なかった。

ともあれ、身体が半分以上まで上がったところで足を床に引っかけ、身体全体を地上に上げる事が出来た。

一息つき、立ち上がって全生徒の方を見れば、全員が言葉を失つて驚いている。

そりゃ、突然男子生徒が穴に落ちそうになったら、驚くわな。

……にしても、こんなくだらない事を仕掛けたのは、やっぱり糞爺だろうか。

と、その時。

後方、ホール入口側から、もの凄い勢いで殺気が迫ってきた。

何であるかの確認をする暇も無い。

故に選んだのは左腕を構えての防御行動。

それとほぼ同時、二の腕に強い衝撃と、

「よ、孫っ」

陽気な挨拶が聞こえた。

ああ、糞爺か。

相手が誰なのか気付いた瞬間、左腕で防御している何かを右手で掴み、上へと持ち上げて振り下ろす。

その過程で左手も追加し、床に叩きつけようとした。

途中、見れば掴んでいたのは糞爺の左足で、足の先にはちゃんとちっちゃい糞爺の本体があった。

偽者では無い、そう判断して喜びつつ、今まさに床に叩きつけられようと していたのだが。

振り下ろした先は穴だった。

「「あっ」」

糞爺は落ちて行く。

俺を落とそうとした穴へと。

場が、静まり返った。

いや元から静かではあったが、それ以上の沈黙だ。

まるで俺以外に誰も居ないかのよう。

だが次の瞬間、小さな手が穴から這い出てきた。

ひいっ！ という悲鳴が前列の生徒から聞こえ、全生徒の列が一歩下がる。

その間にも小さな手はもう一つ追加され、糞爺が登ろうとして来ていた。

だから、両手を蹴り落としてやった。

また落ちて行く。

それから数十秒経って、

『え……ただ今、落ちて行きました方が、FMP社社長の如月源次郎様です。では、次は副社長の』

「無視かよっ！！」

全生徒の息の合ったツツコミが、ホール内に響き渡った。

その後、社長の代わりに副社長がスピーチをし、合同で社内見学となった。

だが、俺はというと糞爺の秘書と名乗る女から呼び出しを食らい、社内見学のグループとは別行動となった。

そして現在、エレベーターに乗って上昇中である。

そこそこ広い箱の中に、曲がりの無い真っ直ぐな背をこちらに向けて立つ秘書と無言で二人つきり。

空気が気まずいと感じるのは俺だけだろうか。

せめて他にも二人程、一緒に乗ってもらいたかったものだ。

なんというか、空気が重い。

……いや、他に何人居ようと、無言であれば空気は重いか。

だが、その空気を変えたのは、秘書の第一声だった。

女にしては少し低く、しかし背を向けていても綺麗に聞こえる程、良く通る声だ。

「霧島様、先程は失礼致しました。しかし、源次郎様はあれで、貴方の姿を見れた事にかなり喜んでおられるのです。どうか大目に見てあげてください」

「あゝ……まさか秘書からその言葉が出るとは思わなかった。というか、ただ姿を見るだけなら、他にも方法があつただろうに」

「何分、あの方はサプライズ好きですので」

おかげでまた、変な噂が立ちそうだな。

糞爺に直接言つたつもりで愚痴っておく。

すると秘書は含み笑いをし、咳払いで誤魔化してこちらへと向いた。

その表情には、笑みがある。

髪が長く、雰囲気のわりには若々しさのある凛々しい顔立ちをした彼女は、素直に格好良いと思える程、絵に描いたような秘書だった。

自分でも何を言ってるのかよく分からないが、それだけ凄いつて事だ。

そんな彼女の顔には、どこか見覚えがあつた。

いや、この人に見覚えがある訳ではない。

何と言えはいいのだろう、似た顔を見た事が、ある気がする。

誰だっただろうかと記憶を辿っている内に、チンツと到着を報せる音が響いて、エレベーターのドアが開いた。

その先には待機室のような小部屋があり、そのまた先に両開きの木製扉があつた。

とりあえず、秘書の案内でエレベーターを降り、扉の前に立つ。

「どうぞ、お入り下さい霧島様。源次郎様がお待ちです」

「一応、言っておくが。霧島様つてのは止めてくれな。せめて霧島さんとか亮さんとかにしてくれ」

「私目のようなただの秘書に、自らの名を呼ばせるとは……随分と

大胆な人ですね」

「え、そこは食らいつくところじゃないだろ!？」

無視された。

俺が圭吾に対する態度を、秘書が俺にしているみたいだ。

こいつ、かなり訓練されてるな。深い意味は無いけど。

ともあれ、一息ついて扉を開ける。

そこは社長室であり、奥にある机の向こう側には、大きめの椅子に座る糞爺こと如月 源次郎の姿があった。

第54話：昔話とかその他色々

「よお、糞爺」

第一声は、いつも通りの言葉だ。

だからこそ、糞爺は糞爺と呼んだ事を気にせず、笑みを浮かべていた。

「てつきり、来ないと思っておったぞ。わしの呼び出しにも、というかこの本社にもな」

「そりや来たくは無かったけどよ、糞爺が早く入院しねえかなと様子を見ようと思ってな」

「相変わらずじゃのう、孫。ただ、報告によると少し丸くなったようじゃな。例えるなら、鉄の棘ボールがゴム製の棘ボールになった感じじゃ」

ふにやふにやじゃねーか、とツツコミを入れると、何が可笑しいのか糞爺は大笑いした。

白髪だらけで顔に皺が多いが、若者に負けず劣らず元気な糞爺は、社長室に居るのにも関わらず浴衣姿だ。

その笑いが終わるのを待っていると、糞爺は次の言葉を放った。

「じゃが、芯は強くなったようじゃな。先程蹴りを入れた際、お前は持ち堪え取ったからの」

「昔なら吹き飛んでたからな。……だが、あれは手加減してたんだろ？」

「ん？ おう……手加減、じゃな」

歯切れの悪い言い方をした糞爺は、少し表情に影を落とす。

見た事の無い表情だった。

だが、そう思ったのも束の間、糞爺はいつも通りの笑顔になり、歳に反してまだ健康な白い歯を見せた。

「とりあえずは、和葉を居候として受け入れてくれた事に、心から感謝しておるよ。正直、断られたらどうしようかと思っておったわい」

「断る理由は無いしな。ただ、数年ぶりに会った時、記憶の中にあるアイツと今のアイツが違い過ぎて、驚いたけどな」

「おお、孫もそう思ったか！ ナイスボディーになったじゃろ？ 出るところも出て、セクシーになったわい」

「くたばれ糞爺」

どうやらこの古い先短い糞爺、歳のわりにあまだエロ脳が衰えていないようだ。

見た目は糞爺、素顔は糞餓鬼ってか。

そういえば、合宿の時もそうだった。

糞爺と圭吾が手を組むと、必ず覗き騒ぎが発生したものだ。

……っと、そういえば。

「和葉の奴、最後に会ったのは小学校時代の合宿の時なんだが、その時は眼帯してたか？ 後、ココに傷痕なんてあったっけか？」

言いながら、胸元を人差し指でつつく。

すると糞爺は、一瞬呆けた表情をし、次に嫌らしい笑みになった。なんじゃないんじゃない、と言いながら、机越しに身体を乗り出してくる。

「結局、お前にも覗き趣味があったんじゃない。やはり血は争えんか……！」

「言ってる意味わかんねえよ糞爺。大体、俺は見たくて見たんじやねえ。なんと言つか、事故だ。そう事故」

「なんじゃ、事故に見せかけたのか。一度目は堂々と正面から覗きに突入していたというのに」

「あ？ …… あ、あれは糞爺が無理矢理連れ込んだんだろうがっ！」

確か小学生として最後になる合宿の時。

お前は男になるべきじゃ、などと訳の分からない事を言った糞爺は、俺を無理矢理脇に抱えて、そのまま風呂へと突入した。

女風呂へと。

そこには先客として和葉が居て、次の瞬間には甲高い声で悲鳴を上げられた。

冷静にその場面を思い浮かべれば、そこには傷痕は無かった。筈。

「わしの所為するとは…… 鬼畜じゃな！」

「黙れ糞爺質問に答えろ」

真顔で一言。

すると糞爺は、ちえー冷たいのう、と呟きながら、乗り出していた身体を椅子に戻し、腕を組む。

「ふむ、眼帯と傷痕か。それは、本人に聞いた方が早いんじゃないかのう？」

「とつくに聞いたよ。で、亮が覚えてるわけ無いとかなんとか言つて、回答を拒否された」

「そうか……。なら、わしからも何も言えん。和葉が嫌がる事を、わざわざ言つわけにはいかんからな」

それは祖父としての、当然の反応だろう。
いや、もっと視野を広めれば人としてか。

……やっぱ、本人が話してくれるのを待つしかないか。
気にならない、と言えば嘘になる。

だが、好奇心を持ち続けたところで、話してくれる日は来るの
だろうか。

「……なんじゃ？ そんなに気になるのか。それは従姉妹だから
？ 許婚だからか？」

「前者だ。俺は許婚に反対だと、昔から言ってるだろ？」

「むう、乙女の恋心を無視するとは、孫も酷い男になったのう」
「糞爺？ それは本気で言ってるのか？」

問うと、糞爺は目を見開いて驚いて見せた。
わざとらしい反応だ。

いやもしかして、もしかすると素かもしれないな……。

「アイツあ、和葉は別に俺を見てるわけじゃないと思う。勘だな」
「んにい？ それは初耳じゃな。じゃが、あれ程好きと言ってベタ
ベタだった和葉に限って、そんな事ありえるかのう」

「昔の話だろ。それに、今も似たような態度を取ってくるが、わざ
とらしすぎるんだよ。まるで本心を紛らわす為に、嘘の感情を塗り
たくってるみたいにな」

全部、俺なりの考えだな。

そう付け足しておき、一息つく。

……まあ、そう思っただけでも、問題は相手が誰なのか、といっ
たところだが、俺に分かる筈が無い。

だからこそ、糞爺にはそこを突っ込まれたくないんだが。

あれだけ自身ありそうな言い方した後だから、ねえ？

果たしてどうだろうか。

腕を組み、暫く考え込んでいた糞爺は、一度頷いてから口を開く。

「……つまり、許婚は撤回しろと、そう言いたいんじゃない？」

危惧していた返答とは違っていた為、安堵する。

というか、予想外の言葉だった。

この際、それをお願いしようと思ひ肯定の意味で頷くと、糞爺は急に笑い出した。

「なんじゃ、そんな事ならいつでも出来たぞ。お前には名前があるんじゃない。権限はむしろより孫の方が上じゃ」

「は？ あ、あ……霧島家頭首の名において、霧島 亮と如月和葉との許婚を解消願いたい。コレで良いのか？」

「どこことなく品格が欠けておるが、まあいいじゃろう。孫は、頭首としての権限は使わないつもりらしいのう。……今もそうか？」

わざとらしく問う糞爺の表情にイラっとしつつも、頷いておく。

「俺には頭首なんて器、似合わないしな。護の方がよっぽど似合ってるよ」

「……何か勘違いしてるようじゃな。似合ってるというだけで、代々継がれる強大な権力が手に入ると思ったら大間違いじゃぞ？ 頭首の家系の血を引く長男長女のみが、権利を持っているものじゃ」

急に態度が変わった糞爺は、鋭い眼光を俺に突き刺すようにして向ける。

その表情は無表情だが、獲物を狙うような殺気を感じる。

一瞬、背筋がゾワツとした。悪寒は久しぶりだ。

糞爺のこの表情も久しぶりである。

幼い頃、初めて糞爺主催の合宿に強制参加させられた時も、同じ顔をされた。

何が原因でその顔を見せたのかは、覚えていないが。

「孫、護は似合っているから頭首にんったのではない。成らなくてはいけないという、強制があるからじゃ。お前もそうなのだぞ？ 護の場合、榊家頭首である事に誇りを持っているからこそ、真つ当しておるのじゃ」

また、強制という名で縛り付けられる。

考えただけでもうんざりするが、糞爺に反論は出来なかった。

霧島家頭首である事に、誇りを持った事は無い。

頭首に成ってから、それに関わる事で良い事などほとんど無かったから。

だから、頭首という立場に向き合う事をせず、一步下がる。

下がった場所には、霧島 亮という普通の立ち位置があるから。

頭首という立ち位置よりも、幸せだから。

……結局、逃げているだけなんだけどな。

遅かれ早かれ、いずれは頭首として真つ当しなければならぬ事に、自分でも薄々気付いている。

「なんじゃなんじゃ、深刻そうな顔をしておって。まるでわしが悪者みたいではないか」

どうやら、無意識の内に顔に出ていたらしい。

とりあえず苦笑で誤魔化し、いつもの調子で悪態をつく。

「悪者みたいじゃなくて、俺から見た糞爺は昔から大悪人だ」

「うはっ、傷ついた！ わし、心に残る傷を負ったぞ！ トラウマじゃー！」

「老い先短いんだから、トラウマの一つや二つ追加しても問題無いだろ。どうせすぐ死ぬんだし」

「老人虐待じゃー！」

頭を抱えて叫ぶ糞爺を見て、俺は大笑いした。すると糞爺は、失礼なと呟きながら、咳払い一つ。そして改まった表情で俺を見据え、苦笑を漏らす。

「すまんが、頭首の話はまだ終わつとらんよ。実は、孫に手紙が着ておる。本家から、お前に渡せと言われてな」

言いながら懷から封筒を取り出し、俺に差し出す。

受け取って見て見れば、霧島 亮様と筆で書かれた綺麗な文字が目に入る。

正直、嫌な予感がした。

理由としては、差出人が先々代の爺の名前であつた事と、それが霧島では無く榊だったからだ。

そして、こういう手紙が届く時は、超重要事項を伝えられる時だと、聞かされていたからだ。

第55話：超重要事項の内容は。

俺は今、かなり緊張していた。

一生で二度目となる、超重要事項クラスの手紙。

初めて受け取ったのは、次期頭首の継承式に関する内容だったか。そんな事を思い出しつつ、暫くその手紙を見つめる。

だが、意を決して封を破り、慎重に中身を取り出した。

出て来たそれはいくつにも折り畳まれた物で、広げるとかなりの長さだ。

それもまた筆で書かれており、堅苦しい言葉が並んでいる。

故に流し読みをするが、ある部分が目に留まった。

？桐嶋家先々代と高柳家の先代である御老体が殺害されました？

我が目を疑った。

御老体だから、亡くなったという報せならまだわかる。納得出来る。

しかし、この報告は殺害されたというものだ。

何故、殺されたのだろうか。

既に頭首の座を下り、隠居していた奴らが。

そんな事を思いながら、以降の文を読み進める。

？先日、霧島家先々代が高柳の下へ会いに行く、という言葉を残し、側近と共に外出なされました。しかし、それから数日経っても先々代は帰って来ず、危機感を覚えた私共は、榊家総出で高柳家先代の下へと向かったのです。するとそこで、大量の薬莖と斬殺された霧島家先々代、高柳家先代、銃を握った彼らの側近の死体が発見されたのです？

そこまで読んで、一息つく。

脳を整理しようとするが、上手く出来ない。

余りにも唐突過ぎる死は、俺に驚愕しか与えなかった。

すると糞爺は俺の手から手紙を引ったくり、マジマジと読み始め

る。

数分が経ち、ようやく読み終えて手紙を折り畳み出した糞爺は、溜息をつく。

「……実はのう、昨日の話になるんじやが、榊家先々代が殺害されたと聞いたのじや。わざわざここまで来た、護の口からな」

「榊家もか！？ 一体、何が起きているんだ……」

「全く分からん。じやが、霧島と高柳両家の御老体と、榊家御老体の死には明らかな時間差がある。故にか知らんが、一部の分家の阿呆共は一昨日まで、榊家を疑っておったのじや」

本当に阿呆だな、と内心で呟く。

一般的には疑うのは当然だろうが、俺達の世界ではあってはならない事だ。

絶対の信用と繋がりを誓ったからこそ、三貴家という組織が出来上がったのだから。

そのに疑いが生じるのは、屈辱以外の何者でも無い。

「だからこそ、護はこの事件の解決に全力で取り組むそうじや。濡れ衣を被せられたまま死んでいった先々代の無念を晴らす為にな」
「さすが護というかなんというか……。ってか、護はそれを告げる為にわざわざ大阪に？」

「いや、他にも用があつて大阪に来ていたようじや。そのついでに立ち寄ったそうじやよ」

もう動いているのか。

さすがだな、と褒め言葉を今度は内心で呟きつつ、糞爺が折り畳んだ手紙を再度開いて読み返す。

何か、引っ掛かるのだ。

いや別に、事件に関わった事ではないんだが。

事件に関係無い部分で、気になるところが。

……あ、

「糞爺。俺は、高柳家は消失していると聞いたが、なんで先代は居るんだ？」

問うと、糞爺は驚いた表情を見せた。

なんじゃ今更、とでも言いたげだ。

「もしや、孫は知らなかったのか？ 高柳家は先代の息子、簡単に言えば御老体の息子じゃな。そいつに頭首を継がせたのだが、去年唐突に娘と共に行方不明となったんじゃ。また、高柳家先代の方は二年前ぐらいから体調を崩して寝たきりになってな。事実上、高柳家は消失扱いになったんじゃ」

「隠居つてのはそういう意味でもあった訳か。ついでに言えば、高柳家の御老体が先代と呼ばれている理由は、俺達みたいに孫へと継承していないからか」

少し脱線した確認だが、否定が無いという事は正解という事か。

三貴家頭首の中で、唯一頭首が大人である高柳家。

その彼が いや彼らがか 行方をくらましたのは何故だろうか。

去年。

何か、本家やその分家の間で、俺の耳に入るほどの事件はあっただろうか。

もしくは、個人として何かあったか？

……何も思いつかねえ！。

一体、高柳親子は何を思つて……親子？

娘が居ると先ほど聞いた。

俺も、幼い頃に数回会つたのを覚えている。

確か俺と同じ年だった気がする。

そして、行方をくらましたのは高柳家頭首とその娘。
どうでも良い事だが、それでも聞いておきたい質問ばかりが生まれる。

「なあ、糞爺。さつき、行方不明になったのは頭首とその娘って言ったな。母親はどうした？」

「母親はのう…… H E A V E N 事件に巻き込まれて亡くなったわい。それ以降、頭首が男手一つで娘を育ててたんじゃ」

またしても初耳だった。

とは言っても、あの事件の時は多くの葬儀に出席させられてた為、もしかしたら高柳家の葬儀にも出ていたかもしれない。

連日葬儀だった所為か疲労で記憶が曖昧となり、今となっては断片的に、というか誰かの葬儀に出席していたってな感じに、大まかな事しか覚えていない。

故に、葬儀に居たとされる三年前の高柳家親子がどんな奴らか、それさえも記憶には無い。

こついう時、自分の無関心さに嫌気がする。

「おい孫。そこまで深刻な顔をするでない。っというより、この話はもう纏めに入るぞ」

俺はそんなに深刻な表情をしていたのか？

自覚が無かった……。

「高柳家の先代と霧島家、榊家両先々代が殺された。動機も犯人も不明。現在、その事件の解明は榊家と、おそらく少数の榊家協力派の分家のみが行っている。これくらいかのう」

「高柳親子については触れないってか」

「関連性は感じないからのう……。親子についての情報は、孫の自

己満足の為だけに話ただけじゃし」

ふむ、と呟き、背もたれに身体を預けて踏ん返り返る。

同時に深い溜息をつき、机の下に手を伸ばす。

こちら側からは見えない為、何をしているのか把握出来なかったが、手を机の上に出した時、持っていたのは茶色い液体の入ったグラスだった。

ウイスキーだろうか。

糞爺はそれを一気飲みし、かーっと爽快な声を上げた。

「やっぱ、ウイスキーは美味しいのう。にしても、話し続けてると喉が渴いて仕方無いわい。老いには敵わんのう……」

「ウイスキーじゃ喉は潤わないんじゃないか？ 渴きが悪化するだろう」

「それは飲んだ事無いから言えるんじゃない。孫も、飲むようになったら分かるわい」

「糞爺に昔、無理矢理飲まされたよっ！」

何が、お茶だから一気飲みせい一気飲み、だ！

片手で口元を驚掴みにされ、もう片手に持った瓶の中のウイスキーをぶち込まれたのを思い出した。

あの時は、事前に水で割ってあった事もあって、大事には至らなかったが、酒で溺れかけた。

以来、ウイスキーはトラウマだ。

「ああ、合宿の時だったかのう。懐かしいわい。ちなみに今年もやるからの、合宿」

「和葉から聞いたよ……。どうせ、強制参加なんだろう？」

問うと、当たり前じゃ！ と大声で言って、親指を突き出された。

それとほぼ同時に、後ろの扉が開く音が聞こえ、続いて声が来た。

「源次郎様。後数分ほどで飛翔鷹高等学校の見学が終了致しますので、切りの良いところでお開きとして下さい」

凜とした声が室内に響く。

振り向けば、先ほどの秘書が扉を全開にし、両手を下腹の前に添えて立っていた。

対し、糞爺は彼女に短い返事をした後、「孫よい」と訳の分からん呼び方で俺を呼んだ。

「今年の合宿は、連れて来たい奴は全員呼べ。孫も大分出来上がった来たからのう余裕が出来たわい」

「なら、圭吾を真っ先に推薦するぞ」

「圭吾か。奴は……まあよい。人数制限は無いからの、誰でも良いぞ誰でも特に女子おんなこ」

最後に本音出たな糞爺。

ともあれ、用は済んだのだ、戻るとしよう。

「じゃ、またな糞爺。次会う時はお前の死に際の病室である事を祈るよ」

「はっはっはっ！ わしゃ、そう簡単に死なんよ。もしかしたら、孫より長生きするかもな！」

馬鹿言え、と吐き捨て、身体を翻して秘書の下へと向かう。

そして社長室を出る直前、片手を上げておいた。

糞爺は気付いただろうか。

背中越しであり、また今は扉が閉まった為にもう確認のしようも無く、そのままエレベーターへと乗り込んだ。

第56話：二度目のバス内騒動

霧島家頭首。

その地位に立たされたのは、二年前に両親が事故で死んだ後だった。

霧島家に限らず、三貴家とその分家に値する家系は、長男が長女に頭首の座が継承される仕組みになっている。

年齢に関係無く、最年長が選ばれるのだ。

ちなみに、榊家頭首である榊 護は俺よりも一年前に両親をH E A V E N事件で亡くしており、既に頭首となっていた。

俺にとっては先輩に値するわけだ。

霧島家頭首、とは言っても、それらしい仕事など全くしていない現状だ。

それもそのはず、頭首継承式の際に、俺は頭首の座に置ける一切の事から手を引く、と宣言したからだ。

だが、居間となってはそれは、この事件での護への負担とプレッシャーを増やす結果となってしまったんじゃないだろうか。

その事がどうしようもなく気掛かりで、過去の自分を責める。

……あの時は、こういう気持ちを持って宣言したのだろうか。

思い出そうとしても、記憶にモヤがかかっていて何も分からない。ただ、覚えているとしたら。

宣言した時、護の表情は驚いているのでは無く笑っていた。

その笑みには、どんな意味があったのだろうか。

「なーに辛気臭い顔してんだよ、亮！」

圭吾の声に、ふと我に返る。

視界に入るのは、前の席の右側から身を乗り出している圭吾の姿だ。

「あゝ……わりい、考え事だ。ってか、そこは姉御の席じゃなかったか？」

「席変わってもらったぜ！ 姉御は今、俺の席で直樹苛めてるわ」

言われて右を見れば、困惑の表情を浮かべながら口を動かす直樹と、彼の方を向いて微動だにしない姉御の姿があった。

会話をしているように見えるが、なんだろう。

尋問をしているようにも見える。

「恒例の第一回、アテレココーナー！ パチパチパチイッ！」

「恒例ってお前、第一回に恒例も糞もないだろ」

「さすが、ツツコミが早いなお前！ ほい、頑張ったで賞」

のど飴を渡された。

とりあえず封を開ける仕草をすると圭吾は笑みを浮かべたので、取り出した飴を前歯に思い切りぶち当ててやった。

圭吾、席に引込む。……あ、もう復活した。

「にやにすんひゃい！ いはいとすほいひゃいんたしよ！」

「何言ってるか分からんが、気持ち良いつてか？」

「ちやうわいっ！」

おお、最後はちゃんと聞こえた。

前歯を押さえている圭吾を暫く待っていると、痛みが引いたのか手を離れた。

まだ少し、顔が引き攣っているが。

「うへへ……まだヒリヒリするぞ。もうやるなよ？ これすげー痛いんだから」

出っ歯になりそう、と圭吾は嘆くが、へこむんじゃないのかと内心ツツコンしておく。

やっと喋れるようになった圭吾は、気を取り直して拍手を再開した。

「というわけでアテレココーナー！」

「こりないのな。で、基本的に何をするんだ？」

「簡単簡単、姉御と直樹の会話にアテレコするんだよ。俺が姉御でお前が直樹な。言葉に詰まった方が負け」

じゃあ行くぞ、と言って二人の方へと顔を向け、構えた。

俺も渋々二人の方へと向き、考える。

スタートは言い出しっぺの圭吾からだ。

「いいかげん、本当の事を言って。もう、嘘をつかれるのは嫌なの
っ」

「口調違くないか？　だってしょうがないじゃないか」

「え、短っ！　もう貴方が浮気してる事ぐらい薄々気付いているの。だから、もう嘘はつかないで」

「あ……　なんで君はそんなに僕を疑うんだ。新婚の時は僕にデレデレで幸せだったのに」

「それは私の台詞よ！　新婚当時は帰ってくるなりよく、『おかえりなさい、あなた。ご飯にする？　ライスにする？　それとも、お・こ・め？』」

「『お前だー！』」

「『きゃー』なんて言い合ってバカップル全開だったというのに、今となつては『おかえりなさい、あなた。お風呂にする？　行水にする？　それとも、ソ　』」

「『今日は疲れてるんだ。また忘れた頃にしてくれ』」

「なんて言って、相手にしてくれないじゃない！」

「そういう君はどうなんだ。一緒に暮らしているお袋に、ご飯まだですか？ って聞かれた時、なんて答えた？」

「『やーねーお母さん、一昨日食べたでしょ』」

「毎日食わせろよ！」

「やかましいわ全部聞こえとるわいつというかわしの口調と全然違うじゃろしかも直樹は最初にしようがないじゃないかって言っておるがこれもう浮気認めとるじゃろそもそも後半からコントになっておる！！ はあ、はあ……」

息づき無し噛み無しの長台詞を言い終えた姉御は、荒い呼吸を深呼吸で正す。

続いて直樹に何か言った後、俺達の方へと身体を向けた。
すると圭吾は、身を乗り出して質問した。

「で、で？ 珍しい組み合わせだったけど、姉御と直樹はなんの話をしていたんだ？」

「女体に興味はあるのか？ と」

圭吾の身体が、乗り出した状態のまま通路に落下した。

顔面が直撃する。

俺も思わず、身体がズルッと滑る。

明らかに予想外の、というか俺達より質の悪い内容だった。

とりあえず、理由を話そうとする姉御に耳を傾ける。

「いやなに、周囲を見渡せば、純粹そうな少年は直樹しかおらんかったからのう。ふと、顔を赤らめる姿が見てみたかった故、苛めてみたのじゃ」

「こら川瀬、俺だって純粹だぞピュアだぞ」「姉御お、俺も苛めて下さい！」「姉御×出雲君、もちろん姉御が攻め……これは新ネタ

いけるわ！」

周囲の男子生徒達から抗議の声が上がるが、俺の耳に鮮明に入る声はおかしい方向の言葉が多い気がする。

もちろんと言って良いのか、和津多の声も混ざっていた。中には女子生徒の呟きも聞こえたし。

ってかお前ら、ちゃっかり聞き耳立ててたのかよ。

一方、姉御は彼らの声を無視し、言葉を続ける。

「しかし、いざ聞いてみればどうじゃ？ 困った顔で軽く流されるだけではないか！ なんじゃ面白くない。直樹はあれか？ 男性狂愛者か！？」

「ええ！？ なんでそうなるの！？」

「姉御、言葉がおかしいぞ。正しくは同性愛者だ。いや、別に直樹をそうだと言ったわけじゃないが ころころ、悲しい顔をするな」

抗議の声を上げた直樹の援護をしようと思ったが、逆効果になってしまった。

「しかしのう……乳房を揉むか？ と聞いても、愛想笑いするだけで何の反応も見せぬではないか！」

「あ、こら出雲！ 羨ましいぞ席変われ！」「え、なに？ 出雲は本当に同性愛者なのか？」「姉御！ 私女なので揉ませて下さ〜い」
「あんた男でしょうが。裏声使ってもバレバレよ？」

周囲の声は、既に願望を叫ぶ内容となっていた。
思わず溜息。

だが、こつもクラスメイト全員が声を上げているのは、初めてかもしれない。

創立記念祭準備の時は、雰囲気は最悪だったからな。

これが修学旅行効果なのか。それとも皆がクラスに慣れてきたからか。

わからないが、ともあれ良い雰囲気だと、そう思う。
ふと、直樹を見てみれば、目をギョツと瞑って顔を赤らめていた。
もちろん、それを姉御では無かった。

「おお、ついに赤らめおった！ ふふ、可愛いのう。ふふふ……」

目を細め、頬を緩め、直樹をジツと見つめる。

そんな姉御の妙な性癖を垣間見た。

え、なんで表情が見えるかって？

外は日が傾いてきていた為に暗く、向かい側の窓に反射して映っていたからだ。

変な奴だなど、改めて思う。

「あ、ちなみに最後に言ったの俺だから、お前の負けな」

「ぬぁんだってえええー!？」

「罰ゲームは……考えとくわ」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら、俺は圭吾を苛める。

対する圭吾は、頭を抱えて嘆いていた。

こいつはこいつで、苛めると楽しいんだよなあ。

そんな事をしみじみと思いつつ、窓へと視線を移す。

視野に入る朔夜は、あれほどの騒ぎの中でも安らかに眠っていた。
窓の外は姉御の居る側と違って夕焼け空が綺麗に見え、しかし奥の空は生憎の曇り。

一雨来るかな、こりゃ。

気分が滅入る感じがして、溜息が漏れた。

第57話：修学旅行一日目、ホテルにて

「うおお！ でけええええ！！」

圭吾の声がロビーに響き渡る。

とりあえず、五月蠅いから頭を殴っておき、辺りを見渡す。

確かに大きい。というか、広い。

ロビーは広く、床には大理石が使われており、遥か上にある天井からは、巨大なシャンデリアが吊るされていた。

受付は入口から入ってまっすぐ行った所にあり、左手にはエレベーターの搭乗口が八つもあった。

また、そのエレベーターを包む壁はガラス張りとなっていて、昇降中は周囲の景色が見える形となっていた。

なんというか、凄い。

そんな言葉しか出ない。

とりあえず、俺達はエレベーターへとまっすぐに向かい、乗り込んだ。

その際、圭吾が手に持ったカードキーを階数が書かれたボタン横にある穴に挿入し、八階のボタンを押す。

ちなみにこのカードキーは、バスを降りる際に鬼頭から各部屋の班長に配られた物だ。

部屋の出入りをする時にも、同じように使って鍵を開けるのだそうだ。

故に、俺達の部屋の班長である圭吾が持っているというわけだ。

などと内心で説明していると、直樹が俺の袖を引いて後ろへと振り向かせた。

「ほらほらりょーちゃん、良い景色だ！」

そこにはガラス張りの向こうに広がる、大阪の景色があった。

大都市である為に、絶景というわけでは無いが、斜めから射す夕日が街全体を朱一色に染め上げている。

思わずその光景に見とれ、立ち尽くす。

その状態が暫く続き、到着を知らせるアナウンスが鳴るまで何の音も耳には入らなかった。

名残惜しいと思いながら、その光景を記憶に焼き付け、エレベーターを降りる。

到着した八階には正方形のロビーがあり、左右に通路が伸びていた。

見た感じ、かなり奥まで続いている通路の入口には、部屋番号が書かれたプレートが壁に掛けられており、それを確認した圭吾は左の通路を進んで行く。

ドアは一定の間隔で設置されており、全てが同じ形だ。

また、圭吾が足を止めた、おそらく俺達の部屋であろうところも、同じドアだった。

って、当たり前か。

とりあえず、ドアを開いて中に入って行った圭吾に続いて、俺達も中に入る。

居間へと続く廊下と、右手に浴室があるのあ、自宅と一緒にだな。

玄関に揃えてあったスリッパに履き替え、奥へと進む。

廊下とリビングは直接繋がっており、大型の液晶テレビが置かれたリビングには、セミシングルベッドが四つ並べてあった。

そして、右手奥にはリビングと同じ広さの和室。

隔たりとなる障子戸は開け放たれた状態だ。

……あれ、完全に自宅じゃね？

そういえば、このホテルのスポンサーはFMP社だと鬼頭が言っていた気がする。

おかげで高級ホテルの部屋を取る事が出来たとも。

となると、最高責任者は糞爺となるのだろうか。

いや、その情報を整理したところで、どうしてホテルの部屋が自宅そっくりなのかという理由が分かるわけじゃないが。

ともあれ、部屋の隅に各々荷物おのを置き、一人一つのベッドに座る。今、顔を合わせているメンバーは圭吾、直樹、日向の三人だ。

圭吾と直樹は興味津々に室内を見渡し、日向はポケットに手を突っ込み、気だるそうにしながら明後日の方角を見ている。

……そういえば、葵の看病はどうしたんだろうか？

三日も葵の下を離れる修学旅行に来るなんて、特別な理由でも無い限り、ありえないだろう。

後でさり気無く聞いてみる事にするかな。

「さて、皆。これから大浴場に総員で出撃したいんだが、どうだ！？」

唐突に、圭吾が人差し指を突き立てて提案して来た。

大浴場か。

とりあえず他の反応を見てみれば、直樹は既にシャンプーや着替えなどを鞆から取り出す作業をしていた。行く気満々だな。

一方、日向は嫌悪全開の目で圭吾を見ている。

……仕方ねえな。

「俺はついてくぞ。もちろん、お前も行くよな？」

日向に向かって言うと、軽く舌打ちされたが、渋々頷いてくれた。そして、必要最低限の物　　と言ってもジャージだけだが　　を手に持って立ち上がる。

圭吾はその反応を見て親指を突き立て、大き目のスニーカー二つを両手に持って満面の笑みを見せる。

「よし、じゃあ行くか！」

「いや待て、なんだそのスーッケースは」
「秘密だ、秘密。大浴場でお披露目してやろう！」

言い切って、ウィンク。

うわぁ……うぜえ……。

蹴り飛ばそうと思ったが、早々に玄関へと駆けて行った為、蹴りは断念。

俺も鞆からジャージを取り出し、三人で馬鹿の後を追う事にした。

思えば、友達と風呂に入るのは何年ぶりだろうか。

いや、多分圭吾以外と入る事自体、初めてな気がする。
無意識の内に緊張してしまいそうだ。

そんな事を考えつつ、周囲を真似て腰にタオルを巻き、四人パーティーはらずらと大浴場へと入って行く。

スモークの掛かったガラス張りの戸を開け放った先には、かなりの広さのある浴場の光景があった。

そりゃ大浴場だから当たり前だろう、と言われるだろうが、予想を遥かに超えた広さに驚き、思わず足が止まった。

全く、このホテルに来てから驚きっぱなしである。

姉御の銭湯よりも当たり前のように広く、またそんじょそこらのファミリー浴場よりも、大きかった。

って、大が付いているから浴場以上ってのは当たり前か。

……さつきから、同じような事ばかり言ってる気がするな。

ともあれ、入口近くにある掛け湯をし、奥へと進む。

視界に入るのは各風呂の説明書きがされた看板で、一般的な大風呂、壁や床からジェットが噴出している、いわゆるジェットバスの

ような風呂、通常よりも温度が高い風呂に色々な効能がある風呂など、バリエーションのある風呂が並べられていた。

とりあえず、好奇心をそえられるジェットバスのような風呂に入る事にした。

他の場所に比べると、若干入浴者が少ないが、気にしないでおう。

そんな事よりも、歩く度に足の裏にジェットが当たって、こそばゆい。

俺はそのこそばゆさに耐えつつ、隅の壁からジェットが出ている場所まで移動し、壁に身体を預けるようにして座る。

「うあああ……」

ジェットが肩に当たって、なんとも情けない声が出る。

入浴者が少なくて良かったと、つくづく思う。

にしても、気持ち良い。

気付けば床からもジェットが出ており、それがちょうど腰の位置に当たっていた。

ダブルパンチとは、まさにこの事だろうか。

……なんか、おっさんっぽいな、俺。

脳年齢は既に中年なのだろうか。

まあ、いいや……。

よく考えたら、こういつたマッサージはご無沙汰だったな。

その割には、約二ヶ月以内に動き回る事があり過ぎた。

どうやら身体に疲労が蓄積しているようだ。

ふうっと吐息が漏れ、全身から力が抜ける。

そうした状態を楽しんでいると、視界に日向の姿が映った。

特に何かをしようとしているわけではない彼は、ふと俺の方へと向いて呆れた顔を見せる。

なんだろう、それほどまでに俺の顔は緩んでるんだろうか。

だとしたら……いや、なんでもないや。

もう思考がトロントロンだ。

とりあえず、ふにやふにやになった手で、日向を手招きする。

すると日向は一瞬怪訝な顔をし、すぐに仕方無さそうな顔になってこちらに向かって来た。

途中、足の裏にジェットが当たったのか驚いた表情をし、早足で隣までやって来る。

俺が座れよとジェスチャーを送ると、渋々座った。

刹那、頬が緩む。

もちろんその顔を見逃してはいない。

「ぬあんだ、お前も……気持ち良いかあ……？」

「五月蠅い。そういうお前はドロドロだな」

「うるすあいい……」

説得力ねえなあ、と内心で呟き、苦笑する。

あれ、説得力って使い方あってたっけ？

……再度苦笑。

あ、変な目で見られた。

……っと、気をしっかり持てい！

両頬を平手で叩くと、パチンツと良い音が響く。

よし、日向を読んだ理由を果たそう。

確か……ああ、葵か。

「なあ、日向。葵の調子はどうだ？」

「……一応、良くもならず悪くもならずだ。なんだ唐突に」

「いやなに、学校休んでまで看病してた時もあったのに、修学旅行は来たんだなと思ってな」

「そついう事か。……風間に追い出された」

言って日向は眉尻を下げ、珍しく困った顔になった。
そっか、修平先生に追い出されたか。

「修平先生、何か言ってたか？」

「葵ちゃん、自分の所為で君が修学旅行に行かなかったって知ったら悲しむだろ？　って。俺には俺と葵の二人分楽しんでくる義務があるんだとよ。で、その間の看病は風間がするそうだ」

修平先生らしい言葉だ。

患者とその家族の事を第一に考える。

自分は、葵の看病に時間を割く事も難しいだろうに。

でも、無理してでもやってのけるのが、修平先生の凄いとこなんだがな。

ある意味、葵の主治医が修平先生で良かった。

「ま、修平先生の言う通りお前は楽しむこったな。明日にでもお土産コーナーついててやろうか？」

「なんでお前がついて来るんだ。いらん、邪魔だ」

「おいおいおい、邪険にすんなよお。同じ兄という立場だから、手伝いたいで」

「霧島、あぶねえ！」

警告の声が聞こえた。

それとほぼ同時、水の塊が頭部に激突した。

風呂の中に沈み行く最中、一瞬自分が何をしているのか分からな

な声と、湯が流れる音が聞こえる為、男共が黙っているだけだ。

ともあれ、最初に言葉を発したのは、圭吾だ。

表情を歪めながら、片手を上げて口を開く。

「……………よっ」

「言いたい事はそれだけか…………？」

言つと、圭吾は何かを悟ったのか焦った表情になり、水鉄砲を構える。

それと同時。

激しい水飛沫を上げる第一歩を踏む。

「お前ら、亮は本気だ！これはもう、気絶でもさせないと止まらねえぞ」

「何言つてんだ？ 本田。ちゃんと謝ればす…………みそうにないなあれは！？」

その一言で、圭吾側の奴らも危機感を感じ取ったのか、水鉄砲を構えた。

刹那、一斉に水弾が放たれる。

第58話：まるで死闘と罰ゲームと、そして・・・

水の弾幕が飛来する。

それは一般的な水鉄砲が出すような生ぬるい物ではなく、本物の銃弾と呼べるくらいに形状が出来上がっているものだった。

弾速は水鉄砲のそれが少し速くなっただけだ。

つまり、簡単に避けられる。

……どこから持ってきたんだよ、あんなもん。

ふと、来る途中に圭吾が持っていたアタッシューケースを思い出し、あああれかと呟き苦笑する。

同時、斜め左に向かって走り出し、水弾を回避する。

お湯が走行の邪魔をするが、姿勢を低くしつつ、大腿で走る。

淵へと辿り着けば障害物は無くなるからだ。

果して、伸ばした手は風呂の淵を掴む事ができ、腕に力を込めて身体を引き、大浴場のタイル上に立つ。

被弾はゼロだ。

腰に巻いているタオルをついでに確認する。

落ちる気配は無い、ばっちりだ。

だから行く。

水の弾幕を掻い潜り、真っ直ぐに圭吾達の下へ。

対する彼らは慌てて水鉄砲を乱射するが、そのうち水が切れて、補充に時間を取られる。

故に一気に速度を上げた。

だが、圭吾が大きめの水鉄砲を構えた瞬間だ。

他とは遙かに違う大きさを持った水弾が放たれた。まるでバズーカだな、と呑気に感想を呟いておく。

その水弾は俺の手前で着弾し、弾けた水飛沫が一瞬だけ視界を奪った。

同時、濡れたタイルが足を掬う。

「うおっ！？　　つぶねえ！」

滑った事により体勢が崩れるが、濡れていないタイルに片手をつき、腕を支柱に身体を回し、倒立前転の要領で体勢を立て直す。

冷や汗が背筋を走る。

……タイルが乾いててよかった。

もし濡れたタイルに手をついていたら、最悪な体勢で倒れる事になり、なにかしら負傷していただろう。

悪くいけば骨折だ。

つたく、こんな遊びで重傷負ってたまるかよ。

内心で自分に言い聞かせつつ、再度走る。

その際、近くにあった桶を二つ、両手に持つ。

次いでそれをフリスビーのようにして一つ投げ、その勢いを生かして身体に回転をかけ、一周したところでもう一方の桶を投げる。真っ直ぐに飛んで行く二つの桶は、圭吾の仲間二人に直撃した。

顔面ヒット。残り三人。

いつの間にか圭吾以外も標的に入れているが、俺を狙って来たんだし問題はないだろう。

などと考えている内に、距離は後十メートル。

そして、接敵した。

圭吾達が入っている湯船に着水すると同時に、姿勢を低くし圭吾の仲間を足払いでこけさせる。

ラストは、元凶のみ。

標的を視界に捉え、走る。

「ストップ！　ストップだ亮！」

「残念だが、一発殴つとかないと止まらないわ」

言って拳を構える。

対する圭吾も、反射的に水鉄砲を構えた。
次の瞬間、

「うお?」「あら?」

身体がぐらつき、視界が歪む。
そして、水面に落ちていった。

「のぼせるとはなあ」

「お前の所為で酷い目にあつたわ……」

「いやいや、あれは事故だったんだって!」

「事故だったとしても、開戦に持ち込んだお前が悪い」

水風呂にて、気付けば三十分程文句を言い合っていた。

午後八時を過ぎた頃。

バイキング形式の夕飯を食べ終え、部屋に戻った俺達は、トランプと睨み合っていた。

行っているのはババ抜き。

それも、罰ゲーム付きのものだ。

誰かが三回最下位になるまでを一セットとし、その一セット終了時に一番、一位になった回数が多い奴が最下位に罰ゲームを指示出来るのだ。

もちろん、一セット終了時には毎回成績がリセットされる。

そして現在、俺が罰ゲーム二回、直樹が一回、日向と圭吾は無敗という状況だ。

ちなみに、受けた罰ゲームというのは、

「はーっはっはっはっ！ 猫耳が最高に似合ってるぞ亮！ は、腹いてぐえっ！」

「うるせえ、笑うな！ かなり恥ずかしいんだぞこれ……」

一回目で猫耳を、二回目で猫の尻尾を付けられていた。
完全に猫セットである。

いくら猫好きだからといっても、自分が猫になるってのはちょっとな……。

羞恥レベルはとくに最大だ。

ちなみに、二つの意味で腹を痛めた圭吾は、いつの間にか体勢を立て直してカードを構えていた。

「さあ、やるぞやるぞ！ 次は亮の語尾をにやんにしてやる。これでコンプリートだあ！」

「させるかっつの」

こうして、次のゲームが始まる。

ああ、ちなみに。

圭吾が受けた罰ゲームは鼻眼鏡だ。

「って、なんでお前の手札はそんなに少ないんだ!？」

「はっはっはっ、運が強いんだよ、俺は！ さて、ぶっちぎりで一位になってやる！」

いつもの圭吾の境遇を見ると、運が強いだなんて納得かねえ。
逆に、俺の手札はかなりの厚みを持っている。

か、勝てば良いんだ、勝てば。
そう決意し、直樹の手札を引いた。
それから数十分後……。

「ほら、言えよ。ビリになったんだから言えよ」
「ぐっ……分かってる……にゃん……」

刹那、圭吾は大笑いしながらのた打ち回った。
また、日向は顔を逸らして僅かに肩を震わせ、直樹は微笑を浮かべている。鼻眼鏡付けながら。
なんかもう死にたい気分だ。
と、その時。

突然、入口のドアが勢い良く開かれ、聞いた事のある声が聞こえた。

「おじやまするわー！……って、何やってるのよ亮」

振り向いて見れば、そこにはスウェット姿の和葉と朔夜が居た。
正確に言えば、朔夜を背負った和葉が。
彼女に背負われている朔夜は、顔を真っ赤にしてぐっとしている。

「なんだ？ 朔夜の奴、のぼせちゃったのか……にゃん？」
「は？ 何言ってるんの貴方」

当然の反応をありがとうございます。

「亮は今、罰ゲーム中なんだよ。猫っ娘のコスプレと語尾ににゃん、完璧だろ？」

「男に猫っ娘ってのはかなり変だと思っわよ……。まあ、亮は昔か

らテーブルゲームに弱いものねえ」

ニヤニヤしながら言う和葉は、ベッドに近寄って来て背中 of 朔夜を下ろした。

すると朔夜はゆっくりとした動作でベッドの上に倒れ込み、動かなくなる。

よく、こうなるまで風呂に浸かってたな。

「んで、なんの用なんだにゃん？」

「暇だったから遊びに来たのよ。向こうに居ても、相部屋の子達は許婚の話ばかり聞いてくるからつまんないの」

「つまんないからつてお前、男子部屋に来たらダメにゃん？ 鬼頭にどやされるにゃんよ？」

「ちよつと慣れてきてるわね、貴方。それくらい、見つからなきゃ問題ないわよ。ただ、一人気に食わないのが居るけどね」

言いながら、和葉は視線を別の奴に移す。

大体予想はつくが、一応視線の先を見てみると、相手は日向だった。

ゲームが一旦休止状態だからカードをシャッフルしている彼は、多分和葉と顔を合わせないようにしているのだらう。

カード見てりゃ、和葉と目が合わないしな。

「あの様子じゃ、問題ないわね」

「つてかよ、なんで日向を毛嫌にするんにゃ？」

「根暗だし喋らないし目つき悪いし雰囲気怖いし根暗だから」

侮辱の連打だな。

根暗二回言ってるし。

「日向君、災難だね……」
「ほっとけ」

あつちはあつちで、直樹が日向を慰めていた。
いや、気にしている様子は欠片も見えないが。

「でもよ、こっち来たところで何するにゃん？ トランプは……もうこりごりだにゃ」

「俺、トランプ以外持ってきてねーぞー」

「というか、どんなゲームやつても負けるでしょ、貴方」

「うるせえにゃ！ 意外と気にしてるにゃよそれ！」

「……ねえ、そろそろいい？」

「？ どうし へぼあ！」

突然、猫耳を取られ、それを使って打たれた。

「にゃんにゃんにゃんにゃん五月蠅いのよ！ 聞いてるこっちが恥ずかしいわっ」

「いや罰ゲームなんだから仕方ないにゃろ！？」

「だからそのにゃつてのを止めなさいって言ってるでしょっ」

「おわ、癖ついちゃったにゃ」

「まだ言っし……。なに貴方、案外楽しんでるの？」

「んなわけないだろ！ 誰が好き好んで語尾ににゃんなんてつけるかにゃんっ」

「ねえ圭ちゃん、二人って仲良いよね。はたから見ると夫婦喧嘩、じゃなくて夫婦漫才に見えるよ。さすが許婚だね」

「おい直樹、どこが」

「どこがよっ！ー！」

俺の声を遮った否定の言葉は、かなりの大声だった。

腹から力一杯出たような、全力の否定。

突然のそれは、ここに居る全員の動きを止め、言葉さえも奪う。ただ一人、ランプを切っている日向を除いて。

……いや、だからといって日向が何かをしてくれるとは思っていないが。

ふと、そんな日向から視線を和葉に移すと、彼女はハツとした表情で慌て始め、両手の平を勢い良く振る。

「ちょ、ちよつとなに空気を重くしてるのよ！そこは笑って返すところでしょ？」

その言葉に圭吾や直樹は徐々に頬を緩め、苦笑へと変わり、微笑した。

刹那、インターフォンのチャイム音が室内に響き渡った。

心臓が跳ね上がる感じがするほどに驚く。

これはかなり心臓に悪い。

そして、来客者の声が玄関先、ドアの向こうから聞こえる。

「鬼頭だ。グループリーダー本田、聞きたい事がある」

相手は鬼頭だった。

再度、全員の動きが止まる。

今度は日向さえも、その動きを止めていた。

無意識に冷や汗が背筋を流れ、視線が玄関先に集中する。

だが、用件がなんなのか聞いてない以上、ここで怖気づいているわけにはいかない。

とりあえず、圭吾に顎で返答するよう指示する。

「……ど、どうしたんですか先生」

「いやなに、見回りでこの近くを通ったんだがな、どこかの部屋

から女子の声が廊下まで聞こえて来たんだ。で、耳を澄ませたところ、どうもまだ声が聞こえるんだよ」

「えと……それでなんでこの部屋に？」

「なんだ、分からないか？ 私はこの部屋を疑っているんだよ。それも、かなり高い確率で、だ」

「ま、まさかあ！ 俺達が女子を連れ込んでるわけないっしょー」

「貴様のその言葉には信憑性が全く無いな。不合格だ。悪いが入らせてもらうぞ」

不味い。

そう思ったのと同時、圭吾が俺を見て和室の方を指差し、全力で玄関へと向かった。

今、玄関のドアには鍵がかけてある。

カードキーによる電子ロックだ。

だがそれは、教師が持つマスターキーによって、簡単に開錠されてしまう。

圭吾はその対策の為、玄関でドアを塞ぐ気だ。多分。

だから、俺はやれる事をやろう。

ベッドの上で横たわっている朔夜を抱きかかえ、和室へと走る。

途中、振り返れば、和葉もちゃんとついてきており、直樹や日向も玄関へと向かって走り出していた。

まさか日向も協力するとは。

驚きつつ、布団が詰められている襖を開け、朔夜を押し込む。

続いて和葉も中に入り、なるべく音を立てないように閉める。

鬼頭なら、些細な音でも聞き分けそうだからだ。

とりあえず、気力を使ったために襖に背もたれ、座り込んだ。

……どつと疲れた。

圭吾達の方はどうなっただろうか。

遠くから、僅かに声が聞こえる。

一人分しか聞こえないが、これは鬼頭がドア越したから、こっち

まで届かないからだろうか。

それとも、圭吾一人に延々と喋らせているのか。
鬼頭なら、後者があり得そうだな。

「……亮？ まだ居る？」

突然、和葉に襖の中から小声で問われた。

……会話は抑えた方が良さだろうか。

玄関の状況が分からない為、下手な行動は取れない。
もしかしたら既にドアが開いていて、会話をすれば鬼頭に聞き取られるかもしれない。

などと考えていると、襖の向こうで進展があった。

「よし、居ないよゆね。……朔夜ちゃん、ちょっと聞きたい事があるの。いい？」

「ふえ？ いいねすよ……どうしたんねすかあ？」

どうやら朔夜は、まだのぼせてふにやふになってるようだ。
そんな彼女に質問する為に、和葉が深呼吸をする音が聞こえた。

「じゃあ聞いわよ。……貴方、圭吾の事どう思ってるの？」

は？

「ふえ？ そりえあ、好きねすよあ。皆さんと同じように、好きねす」

「そうじゃなくて……恋愛って意味で、好きなの？」

「それはないねすよあ。とあいうかあ、ほんろにどうしたんねすかあ？」

「い、いえ、ゴールデンウィークの時、二人はデートしてたでしょ

？ ほら、やっぱりそういうのって幼馴染みとして気になるじゃない！？」

「ああ、あれですかあ。あれはですね」

そういつて、朔夜は説明を始めた。

俺はその間、考える。

どうしてそこまで気になるのだろうか、と。

いくら幼馴染みだとしても、そこまで聞くだろうか。

……いくら鈍感だと言われる俺でも、和葉の気持ちは分かる。

ただ、純粹に驚いているのだ。

俺個人の推測ではあるが、和葉が圭吾を好きだった事に。

その想いは、いつからだったのだろうか。

「　　つと、いうわけなんれす」

「え、はい？　……なに、私の勘違い？　な……なによ……勝手な勘違いだったなんて……」

はははつと乾いた笑い声をこぼし、安堵の吐息を漏らす音が聞こえる。

その後すぐ、次は朔夜が最初の言葉を作る。

「じゃあ、この際に私も質問れすっ。和葉ちゃんはいいなずけえの亮さんが、好きれすかあ？」

「へー？　よ、予想外の質問ね……」

俺も予想外だ。

というか、そろそろ席を外すべきだろうか。

……本音を言えば、聞いてみたいんだが。

「私は……亮が　」

「おい亮！ 鬼頭先生がお呼びだあ！ 起きてこいよお！」

バッドタイミングだ、圭吾！

「え、なに？ 亮、そこに居るの！？」

問われた質問に答える事無く、俺は立ち上がって玄関へと向かう。
呼ばれた事を口実に、その場から逃げる為に。

第59話：交渉人、英語で言うとnegotiator

玄関先に到着した時、状況は緊迫していた。

圭吾がドアに背中からべったりとくっつき、両側から直樹と日向が押さえていた。

そして、圭吾が扉の向こうに居るであろう鬼頭と交渉の真っ最中だ。

「いや、ですから　おお、亮！　やっと起きてきたか。ほら鬼頭先生、亮が来ましたよ！」

「ああ……ども」

「ん、眠そうな声だな。寝ていたというのは、どうやら本当のようだ」

どうやら俺は奥で寝ていたという事になっているらしい。

まあ、何故か第一声が気落ちした声だった為に、誤魔化す事ができたわけだ。

……なんで、気落ちしてたんだろうな。

そこんとは分らない。

「で、なんのようだ？　俺は眠いんだが」

「ほう、貴様も白を切るか。先ほど、私は言っただろ？　女子の声が聞こえたと。いくら寝ていたとはいえ、あれほどの大声では目が覚めるだろうに」

「いや、俺は奥の和室で寝てたから、お前が来てた事も知らなかった。ちなみに女子は居ないぞ？」

「なに？　おかしいな……本田の発言と噛み合っていないぞ。本田は、今そこに居るメンバーは誰だと聞かれて、神田と出雲、そして貴様が居ると言っていたな。貴様はリビングルームと和室を合わせ

て二人居るといふのか？」

馬鹿圭吾……。

思わず溜息をつきそうになったのを堪え、言葉を紡ぐ。

ここで言い返せなくなると、鬼頭の思う壺だ。

それに、これはただの引っ掛け。

答えなんて簡単だ。

「それは、この部屋に居る人物を言ったんだろ？ まさか一固まりになつてゐるグループだけを数えるやつなんていないさ。教師ならそれくらい分かるだろ」

「ほう、反論ついでに教師を侮辱するか」

「いや、侮辱ついでに反論してるんだ。それと、侮辱してんのは教師じゃなくてお前な」

「……貴様、もう一度痛い目にあいたいのか？」

「残念ながら、今回はドアが俺とお前の間にあるからな。顔を合わせないかぎり、痛い目になんて合わないさ」

「では貴様はこれから先ずつとここに居るのか？ そうでなければ、明日は嫌でも会う事になるがな」

「そこはあえて忘れてくれよ。先生、もう年だろ？ 一眠りしたら、今の事なんてすっかり忘れられるって」

「よく吠えるなあ、貴様は……」

「ちよ、ちよちよつとまつたー！ 亮はなんでそんなに喧嘩ごしなんだよ！？ 先生も、落ち着いて落ち着いて！」

突然、圭吾が会話に割って入って来て、俺達の会話を終わらせた。……っと、思わずヒートアップしちゃった。

「わりい、先生。口論にするつもりはなかったんだ」

「口論というより、罵り合いに思えたがな。まあいい。とりあえず、

私が提示してもらいたい証拠は……何故、女子の声が聞こえたのか。その声の主は誰なのか。このたった二つだ。早急に答えられない場合は、室内を調べさせてもらう」

さて、どうしたものか。

というか鬼頭のやつ、女子の声が聞こえた事を前提にしてるから、逃げ道がないじゃねえか。

でも、ここはくるしまぎれの発言をするしかねえ。

「ああ……実はあの声は、圭吾なんだ」

「え んぐつ!？」

圭吾が声を上げようとしたところを、素早く直樹が口をふさいだ。ナイスフォローだ。

「俺たちは罰ゲーム付きでババ抜きをやっててな。ビリになった敬語に、女装してもらう事になったんだ。それで、声も女声にしたんだよ」

「ほう……罰ゲームなら、やりたくてもやらなくてはいけないからな」

ちょっと無理ある気がするが、よしきた。

……なんて喜ぶ事は、当然のように出来るはずもなく。

「では本田。女声で、鬼頭先生最高ッス！ とでも言ってみろ」

なに言わせようとしてんだこのババア。

喉元まで出かかった声を堪え、唾を飲み込む。

そして圭吾を見れば、必死に首を振っていた。

当たり前だわな。

「いや、圭吾のやつ喉の調子を悪くしてな。今はだせねえんだ」
「なに？ それでは証拠にならないな……では、室内を調べさせてもらうか」

「だあああ！ わ、わかった、やらせる！ 出来るよな、圭吾？」

全力で首を振る圭吾。

今にも空を切る音が聞こえてきそうな程だ。

だが、時間と鬼頭は待ってくれない。

無茶ぶり、開始だ。

「よし圭吾、スリーカウントでいくぞ。スリー、ツー、ワン」
「鬼頭先生最高ッス！」

それは、完全に男が出すような裏声だった。
暫く、沈黙が流れる。

そして、ノックがあった。

「では、入るぞ」

「ストップ先生！ 先生ストップ！」

「そう慌てるな。居ないというのなら入っても問題ないだろう」

「いや、圭吾は今、全裸なんだ！ だから入ったら汚いものを先生に見せちまう」

「何を今更意味のわからんことを」

「おわ！ 圭ちゃんなんで全裸なんだよあ！？」

直樹、それはタイミングがおかしい。

「……わかった。だったら早く服を着る本田。それまで待ってやる」
「よし、じゃあその間に圭吾の女声にもう一回チャンス！」

「なんで着替えてる本田が言うんだ!？」

珍しく鬼頭が驚きの声をあげているが、今はそこにかまってる暇はない。

もう一度スリーカウントを取るために、圭吾に三本指を掲げる。

もう俺もやけくそだ。

なんかもう、笑えてきた。

対し、本人は涙目になってるが仕方ない。

「いくぞ、圭吾。スリー、ツー、」

「鬼頭先生最高ッス!」

カウントよりもすこし早くでたセリフ。

それはしつかりとした女声で。

また、聞こえた方向は前からではなく後ろで。

振り向けば、そこには腰に両手を添えて立っている和葉の姿があった。

脳内で悲鳴が上がる。

実際に上げるわけにはいかないが、しかし、これは

「む、なんだ出来るじゃないか。証言通り、本田だったしな。……

では、私はもう行くが、あまり夜更かしはするなよ」

言って、鬼頭は足音を立てながらどこかへ行った。

……え、今のでよかったのか？

思わず圭吾と目を合わせ、小首を傾げ合う。

次いで深い溜息をつき、その場に座り込んだ。

直樹や日向も同じようにして座り込む。

「はああ! びっくりしたああ!」

「僕、寿命が縮んだ気がするよ……」

圭吾と直樹は感想を言い合い、ハイタッチをした。
いや、それはどうでもいい。

問題は、なんで和葉が言ったのか。

そしてなんで、それでOKが出たのか、だ。

だが、そんな疑問が解ける前に、和葉は俺の横を通り部屋を出て
行こうとする。

その背に、朔夜の姿はなかった。

「お、おいちよつと待て！ 朔夜はどうした？」

「貴方が連れてきなさいよ。私は連れてくるので疲れたわ」

ならなんで連れて来た！？

そんな感想を吐き出す前に、和葉は出て行ってしまった為、俺は
和室に行つて朔夜を背負い、和葉の後を追った。

いつの間にかかなり先へと進んでいた和葉に追いつき、乱れた呼
吸を深呼吸で正す。

別に朔夜が重かったわけではないぞ。いや、本当に。

ただ、走る羽目になったから疲れただけだ。

とりあえず、前に行く和葉に問いかける。

「どうしたんだよ、急に部屋を出て行つて」

「別に？ もう眠くなってきたから、部屋に戻るだけよ？」

返答した彼女は、こちらに振り向こうとはしない。

「お前なあ、そうだとしても俺や圭吾達に一言くらい」

「忘れなさいよ？」

「へ？」

突然の話題が違う言葉に、少し驚く。

そのせいか、間抜けな声を出してしまった。

……っというか、どういう意味なんだ？

「なにを忘れろって？」

「さっき、あんたが盗み聞きした話よ！」

それは、どっちを指してるんだ。

意味もなく、内心でつぶやいて見る。

……とりあえず、

「わかったよ。綺麗さっぱり忘れる」

そう言っておく。

以降、会話は一つもなかった。

第60話：雨の日の鬼神

修学旅行二日目。

本日は京都で自由見学なのだが、生憎の雨だ。

その所為か、隣を歩く亮は非常に気怠そうだ。

今にも死にそうな顔だなあ。

あ、どうも圭吾です。

雨天によってテンションがガタ落ちな亮に代わって、本日をお送りします。

などと誰に向けていったのかわからない言葉を内心で呟いておく。俺たちは今、ビニール傘を片手に京都市内を歩いていた。

メンバーは俺と亮と直樹、朔夜ちゃんに姉御だ。

本当は日向と和葉も居たんだが、二人ともいつの間にか居なくなっていた。

しかも、自由見学開始直後にだ。

その事を鬼頭先生に報告したところ、これ以上の脱走者を出さない為に監視役として姉御が配属されたのだった。

他の班だというのに、生徒会役員だという理由で半ば強制的に選ばれた姉御は、少し不満気味だった。

本人曰く、班内にて弄りがいのある女子を新たに見つけたのだとか。

今度紹介してもらいたいな。口には出してないけど。

行ったら半殺しか共犯勧誘だ。前者が高確率、ここ重要。

獲物を得た猛獣は、他に取られないよう全力だすよね？ そういう事だ。

つと、まあ俺の勝手な偏見はさておいて。

脱走した二人を探しつつも、朔夜ちゃんと姉御の要望で清水寺へと向かう事になった。

なんでも、清水寺の舞台を一度でも見てみたいとのこと。

まあ、俺たち男組はこれといって行きたい所もないわけだから、ついていくのに文句は無いんだけどね。

……というか、高校生にもなつて京都見学というのは、いささかつまらないと思う。

もつところ、大阪の娯楽街とか

「のう、圭吾。亮はなして気分が落ち込んでいるんじゃない？」

「わ、びつくりした！」

突然、姉御に話しかけられた。

反射的に声のした方を向くと、亮が居たはずの場所に姉御が居た。亮はどこいった？ と思いつつ後ろをみれば、朔夜と並んで歩いている事に気付き一安心。

朔夜は直樹と並んで話ながら歩いている為、亮は独り状態だが。

「……わしの問いを無視するとは、良い度胸じゃのう」

「え？ ああ、ごめんごめん。で、なんだっけ。亮があんな状態の理由？」

「そうじゃ。あのようなもぬけのから状態の亮なぞ、見たことない。鬼神の名が泣くぞ」

腕を組み、呆れ半分の表情の姉御は、軽い溜息をつく。

……とは言つてもねえ。

「姉御。亮は鬼神を引退してるんだし、そこんこは大目に見てやれよ」

「ならん。元より二つ名は、本人以外の者が強さや賢さ、怖さに惹かれて付けるものじゃ。また、その名を知った者達は各々に想いを抱き、憧れや対抗心を持つ事になる。すなわち、本人の意見だけで簡単に終わらせられるほど、軽いものではないんじゃない」

名付け親は俺なんだけどね。

でも、それは決して口には出せない。

軽い気持ちで付けた名なのだから、確実に姉御に殺される。

正直、いつバレてしまうかと考えると背筋を悪寒が走る。

いや、だって……ねえ？

まさか自分の一言がここまで大きくなるなんて、思いもしないっしょ。

「あいつ、天気が悪い日、特に雨ん時はテンションがおかしいんだよ。かなり機嫌が悪いつていうかなんというか。なんでそうなのか、いつからそうなのかは、俺でさえもわかんねえ」

「それは、ただ己の気分の問題であって、偶然雨天に被っているだけではないのか？」

「んまあ、確かに決まって毎回おかしいってわけじゃないけど。あなるのは雨の日だけってのは確かなんだ。細かく言えば、雨が降ってる時だけ」

思えば、この前も少しおかしかったな。

でもまさか、日向に殴りかかるほどだとは思わなかったけど。

「とにかくだ。今のあいつにはしつこく絡まないでやってくれな。

予報だと昼過ぎに止むらしいから」

「お主という奴は、変なところで気が利く輩じゃのう。さぞかし女子に好かれるじゃろう？」

姉御はニヤニヤと、面白そうに返答を待っている。

……変なところであつてのは余計だけど。

「残念ながら、生まれてこのかた一回も彼女が居たことも告白されたこともねえよ。やっぱ、オタクだからかなあ」

「なんじゃ、オタクというのはそこまで邪見にされてるのか？」
「そんなもんじゃね」

投げやりに答えつつも、ちょい気落ち。

オタクにさえならなかったら、もしかしたら今頃リア充を満喫していたのかもしれない。

もしかしたら、彼女も居たかもしれない。

……しかーし！

「それでも、俺は」

「ふむ、わしは己の趣味を貫き通すのはよい事だと思っておるがのう」

「い、言われたー！……っと、そうだよ、そう。だから、俺はオタクである事に誇りを持つてるぜい！」

姉御に向けて親指をビシッとつけたて、満面の笑みになる。

俺的にバッチリだ。

だが、せっかく決まったと思ったのに、携帯の陽気な着信音が鳴り響き、空気を乱された。

全く、決まったというのに、邪魔するのは誰の携帯だ、と思っていたら俺の携帯だった。

着信音が今期のアニメの主題歌だったから、同類が近くに居ると思っただけ期待したが、そう上手くいかないもんか。

ともあれ、ポケットから携帯を取り出し、通話ボタンを押して耳に添える。

あ、通話相手の名前を見忘れた。……まあいいか。

「ほい、もしもし」

『やっと出たか。悪いが、出発地点近くにある商店街のようなところに来てくれないか？』

「お、日向か。どうしたんだよ急に」

『いいか、伝えたぞ？ 必ずお前一人で来い。……ったく、なんで俺が……』

「え、なんでだよ？ おい 切れちゃった」

「日向からか。全く、迷惑ばかりかけおって……。で、なんと？」

腕を組み、眉間を指で押さえながら言う姉御を見て、どう答えればいいか迷った。

いや、別にそのまま話せばいいのだろうけどさ。

俺一人で来いつてのに、何か深い理由があるのかもしれない。
だったら何か、いい言い訳はないだろうか……。

「……いや、すぐ切れちまってよくわかんなかったわ」

「そうか。居場所がわかるのならば、連れ戻しに行こうと思っておつたんじゃがな」

「そりや残念。って、ん？ ああ！ そうだった！」

「なんじゃ、騒々しい」

「部長に頼まれてた土産を買い忘れてた！ えと、たしか出発地点近くに土産屋あったよな？ すぐ戻るから行ってきていいッスか！」

答えを聞くより先に、俺は走り出していた。

こういう時、強引に行くのが一番いいんだよねっ。

当然、姉御は何か怒鳴っていた。

けれど、既に距離が空いてる為、止まらないでおく。

ああ、やつちまったなあ。

そんな事を思いながら、俺は来た道を走って戻って行った。

さてま、到着したのはいいが、肝心の日向がどこにも居ない。

辺りを見渡しても、姿形は視認できなかった。

というか、意外と商店街の規模が大きい為に、どこに居ればいいのかわかんねえ。

一応、端から端まで走り回ってみたが、意味なしだった。

……とりあえず、お土産でも見ていこう。

そう思い、近くにある土産屋に足を運んだ。

部長にお土産を買ってかないと、という言い訳は咄嗟に思いついたものだが、そういえばすっかり忘れてた。

恵はどんな土産を好むだろうか。

せっかく、放送部を俺のリクエストで情報提供部に改名してくれただ、そのお礼も兼ねていいもんを買っていこう。

そう考えながら陳列している商品を一通り見てみる。

京都の観光地をイメージしたキーホルダーに御当地ストラップ、ハンカチに髪留めなどなど。

これといって、パツとしたもんが見つからない。

ここはあえて木刀だろうか。

修学旅行といったら木刀だしな。

中学の時にあった修学旅行で買った木刀は、速攻で先生に没収されたが。

そう考えると、今回は鬼頭に没収されるかな。

……というか、女の子は木刀なんていらんか。

ともあれ、ここは無難にキーホルダーだろうか。

「つと、あれ？　もしかして圭吾？」

突然、後ろから声をかけられた。

これはまさか人生初の逆ナンかとドキドキワクワクしてどう答えようか脳内で色々としミュレーションしてよしこのギャルゲーの返

し方で行こうと思ひ振り向けば和葉だった。

俺のドキドキを返せ！

文句の言葉が喉まで出かったが、敢えてそこで止めて別の言葉を返す。

「そんなお前は和葉じゃないか。こんなところに居たのかよ」

「え、ええ、ちょっと寄りたいたところがあつたのよ。……まずかつた？」

「まずかつたものにも、鬼頭先生がちょい怒つてたぞ。日向も居なくなつてたしな。んで、監視役として姉御が配属先されてる」

そつえば結局、日向はどこ行つたんだろうか。

行方不明者一人は確保出来たからいいけど。

「うう、やつぱり怒つたのね……。ところで圭吾はここで何をしてるのよ。川瀬さんが監視してたんでしょ？ 見たところ、班の姿はどこにもないしね」

「ああ、それなんだがな。なんかすげえ急いでる日向に呼び出されてよ、ここに來たんだ。でも、全然見つからないから、お土産見たんだよ」

「ふーん、そうだったの。あ、そうそう、私のようはお土産を探すことだったの！ よかつたら一緒に探さない？」

思ひ立つたが吉日、と言わんばかりに、和葉は俺の手を取つて別のお土産屋まで引つ張られた。

さつきまで居たお土産屋から少し行つた所にあるそこは、建物が古くなつており、如何にも老舗といった雰囲気をかもし出していた。お客が多いところを見ると、人気店なんだろう。

和葉はその中へとずいずい入つて行く。

当然、手を取られている俺は引つ張られる形であとを追う事にな

った。

人混みの隙間をはいくぐりながら、しばらく歩いて中頃まで来ると、彼女は急に立ち止まって振り向く。

「さて、えーっと……何を買おうかしら」

「まてまて、誰に買って行くんだ？ それ言われないと手伝えねえよ」

「あ、そうだったわね。夢月ちゃんよ、夢月ちゃん。いつもお世話になってるから、お礼にね」

片手の指を二本立て、ピースサインを作る和葉は、満面の笑みだった。

何故笑みなのかは知らないが、とりあえず協力しよう。

……まあ、何がいいかはもう絞ってるがな。

「とりあえず、猫だな。猫グッズだ！ しかも京都だってわかるやつ」

「あ！ 完全に盲点だったわ……。京都に来たのだから、京都に関連する物を探そうと思って見落としてた」

「もちろん、京都関連の猫だな。そんじゃ、散開してさがすか！」

そう告げて散開しようとした　　が、俺の手をつかんでいる和葉の手が離れず、足だけが前に出る。

なんかコントみたいだなと思いつつ、和葉を見やると見事に嫌そうな顔をしていた。

「え、なんで散開？ 一緒に探せばいいじゃない」

「いや、だって個々で調べた方が効率良いだろ？」

「のこれだけ人が多いと、合流が難しくなるわ。それに比べて、一緒に居た方が意見も言い合えるわけだし効率いいでしょ？」

どう？ と問う和葉は、どこか勝ち誇っていた。
ふむ……確かに一理ある。

ならついでに、恵へのお土産がなにか良いかも、同じ女子である和葉に聞いたらいいかな。

「おっけ、なら探すか。出来るだけ早めにな」

「もちろんよ！ それじゃあ、まずあこからねっ」

言い終えるよりも早く手は引かれ、ぬいぐるみが飾られた棚まで向かった。

それ以外にも色々な棚を見て回り、どれがいいか話し合う。

途中、和葉とこうして二人っきりで居るのは久しぶりだなと思った。

いや、周囲は人混みだけどそれは抜きにして。

俺の記憶で最後に二人っきりだったのは、かなり前だった。

あの時は俺が手を引いてたというのに、ずいぶんと勇ましくなっ
たもんだ。

思い出し、不意に笑みがこみあがって来て、思わず吹き出してしまった。

和葉はそんな俺を一瞥し、すぐに棚へと視線を戻す。

俺も、お土産さがしに集中しますかな。

さてさて、何が良いだろうか。

内心でそう呟きつつ、棚に並べられている品々を見る。

ふと、目に入った品に視線を止めた。

……猫の置物か。

手の平サイズのそれはガラス細工で、中心が黒く外側は透明という、不思議な作りとなっていた。

透明と黒の境界線は濁っていて、じっと見ているだけで引き込まれそう。

いい物だな、と思う。

思わずガツポーズを作りたいくなるほどだ。

とりあえず、ガツポーズは内心ですることによって我慢し、猫の置物を手取る。

展示品限りなんだろうか。

もしかしたら店員が、綺麗な物を持って来てくれるかなと思いつながら、和葉に声をかける。

さて、次は恵の分だな。

第61話：憂鬱な中で、見たことのある姿

果てしなく憂鬱だった。

なんで俺は、雨天になるとこんなにも気落ちするのか分からない。別に何かを思い出すわけでもないというのに、雨にトラウマなんてないというのに。

ただ、ボーツとする。

すれ違つように、横を人が通る。人が通る。人が通る。

泥人形のように、顔も服装も無いなにかが歩いているようにもみえる。

人にとって、他人はそれくらいの存在でしか無いという事だろうか。

とりあえず、無意識に周囲を見渡した。

泥人形。泥人形。泥人形。見渡すかぎり泥人形。

泥人形。泥人形。泥人形……形？

ふと、黒の中に光が見えた。

それは少女だった。

金色の長髪をなびかせた、ネグリジェ姿の少女。

俺は彼女に、見覚えがあった。

その姿は夢の中の存在だともっていたというのに。

何故か、俺の視線の先に彼女は立っている。

表情は……見えない。

わずかにみえる口元は塞がれており、それは無表情を意味している、のだろうか。

分からない。だから知りたい。

見えないその表情が見たくて、彼女が誰なのか知りたくて。

一歩前に出て、手を伸ばし、口を開いて

「どうしたんですか？ 亮さん」

声をかけられた瞬間、意識が一瞬にして戻った。

景色に色が戻り、泥人形が人間に成る。いや、戻るが正しいか。ふと、手をみれば、前に伸びたままだった。

恥ずかしさのあまり急いで戻し、ポケットへと突っ込む。

そして、声をかけてきた人物、隣にいる朔夜に視線を移した。

彼女は小首を傾げ、今にもほえつとでも言いそうな顔をしていた。

「具合、どうですか？ えと、まだ悪いから、傘を差しているんですよね？」

「へ？ ……あ」

気づけば、雨は止んでいた。

俺は慌てて傘を畳み、空を見上げる。

まだ曇り空だが、降りそうではないな。

その事に安堵の吐息を漏らし、朔夜を見るとクスクスと笑っていた。

「な、なんだ！？」

「いえいえ、いつもの亮さんに戻ったなあって、そう思っただけです。やっぱり、明るくないとっ」

満面の笑みを見せる朔夜は、不意に前を指差した。

なにかとおもって見てみれば、俺たちとの間に少し距離が空いた先に姉御と直樹の姿があった。

姉御が直樹の肩に手を回し、なにかを言いながらニヤニヤしている。

対し、直樹は顔を赤らめて慌てていた。

「あんな感じに、にこやかに！」

「いや、あれはどこか違う気がするぞ」

例えるなら、先輩と後輩だろうか。

というか、姉御はかなり直樹を気に入っているようだな。

「いいんですよ、明るそうにみえていればっ」

「お前って時々、ズレてるよな」

くつくくつと笑ってやると、朔夜は驚いた表情を見せた。

次いで頬を膨らまし、ポカポカと二の腕を叩いてきた。

怒っているようだが、その可愛らしい姿を見ると笑みをこぼしてしまう。

「むー、ズレてるなんて失礼ですっ。しかも笑ってます！ 私はこれでも怒ってるんですよー！」

「あゝ、悪い悪い。これはあれだ、無意識だ」

「嘘です絶対嘘です！ もう、勘弁なりませんよ？ どれだけ謝っても許しませんっ」

頬を更に膨らました朔夜は、ついにそっぽ向いてしまった。
どうしたものか……。

ふと、解決策を求めて周囲を見渡せば、和菓子屋があった。

店先では串団子を焼いており、みたらし団子などが並べられていた。

……さすがに食い物につられはしないだろうか。

「悪かったって、朔夜。ほら、あこで焼いてる団子をおごってやるから、機嫌をなおしてくれよ」

「本当ですか!？」

「食いつきはやつ!」

「も、もしようがないですね。それじゃあ、団子で和解してあ

げますっ」

言い終えるのと同時に、朔夜は小走りで和菓子屋へと向かった。結構、単純だったな。

そっという人こそ、本気で怒らせたら怖いとよく言うが、朔夜の場合はどうだろうか。

まあ、圭吾論だから信憑性は薄いが。

ともあれ、約束は約束だ。

俺は嬉しそうに団子を選ぶ朔夜の下へと、のんびりと向かう事にする。

途中、姉御に寄り道を伝え忘れた事を思い出したが、まあ大丈夫だろう。

「で、なんでお前らはまた来てるんだ？」

問いかける先、ベッドの上には和葉と朔夜が座っていた。

ただ今年後九時頃。

昨日と同じような時間に二人はやって来て、こうしてベッドの上に居座った。

違うところといえば、和葉が大富豪に参戦している事と、朔夜がのぼせていない事か。

その朔夜はニコニコと笑みを見せながら、美味しそうにみたらし団子を食べていた。

おごりに個数制限が無かったと言われ、五個入りを四つも買わされた。

購入直後、やっぱり三つ分は自分で払うと言ってきたが、男に二

言はないということにした。

一つはその場で、もう一つは姉御と直樹にプレゼントし、今は残り二つの内の一つを食べている。

とても美味しそうに団子を頬張る姿は、ハムスターを連想させるな。

「さ、革命よ！……で、亮なにか言った？」

「聞いてなかったのかよ。いや、なんでまたここにきてるんだと聞いたただけだ」

「昨日もいったけど、私の班の部屋はつまらないのよ。だったら、ここでこうして遊んでた方が楽しいわ。はい、これで上がり」

「うおお！？きたねえ、はじめっから革命ねらいかよ。もう勝てねえー！」

頭を抱えて嘆く圭吾は、手札を表にしてベッドの上に叩きつけた。役は見事に、Qから上だけだった。

だが、それを見て直樹は驚きの声を上げる。

「え、革命で場を戻そうと思ったんだけど、使わない方がいいみたいだね」

「なに！？なんでそれを革命返しに使わなかった！」

「だって、僕のはJの革命だし」

「私は十の革命よ」

「ニアミスかよちくしょおおお！」

なんか使い方が変な気がするが、気のせいだろう。

ともあれ、圭吾は早とちりで手札を知られるというミスを犯し、当然の大貧民。

ちなみに、参加者は圭吾と和葉、直樹と日向の四人であるため、上がりの役は大富豪と富豪と貧民と大貧民となる。

ルールは一般的なものである為、次のゲームで大貧民が大富豪に二枚、貧民が富豪に一枚渡すことになる。

俺が入っていけば、間に平民という役が生まれるが、入れば確実に大貧民だと分かってるため、観戦にまわる事にした。

隣で団子を食い終えて一緒に見ている朔夜は、ルールが全くわからないからパスだそうだ。

俺はそこそこのルールを把握しているが、入れば確実に大貧民だと分かってる為、観戦にまわる事にした。大事な事だから二度言うておく。

だが、圭吾曰く、地域によって追加ルールがあるそうだ。

なんだよ、七出したら隣にカード渡せたり、十出したらカードを一枚捨てられるって。

その内、カード全てに追加ルールが加わりそうだ。

……いや、全国調べ回つたらもしかしたら、もう全カードコンプリートしてるかもしれない。

などと思っている内に、次のゲームが開始される。

「うおお……ジョーカーがあ！Aが持つてかれるうう……！」

「こ、こら！それ言っちゃ手札がばれちゃうじゃないの！」
「いでえ！」

圭吾の頭に素早くチョップを叩き込んだ和葉は、手札からスペードの三を出してスタートを合図する。

それから場は順調に流れて行き、またしても和葉の勝利は近づいて来る。

圭吾もそうだが、それ以上に和葉は強運の持ち主なのだ。

曰く、如月の血を引く者として強運がなければ恥、だそうだ。

……ちなみに、今回も罰ゲームはある。

受ける奴の判定方法は、前回のババ抜きと同じだ。

そして今、一セットが長期戦になっているものの、圭吾と直樹に

リーチがかかっている。

まさか圭吾が罰ゲームを受けるなんて、誰も予想だにしないだろう。

そう思っていると、不意に和葉がこちらに振り返った。

「朔夜ちゃん、圭吾の罰ゲーム考えといて。私じゃあ、面白いのは考えられそうにないわ」

「え？ え？ ちょ……なに勝手な」

「じゃあ、女装とかどうですか？ 猫耳は亮さんで見れたので、新しいものに挑戦です！」

一瞬で、圭吾の表情が青ざめた。
待てよと。そりゃないだろと。

声にならない口パクでそれを訴えようとするが、当然声は届かない。

同じような心境だった俺だからこそわかる訴えってやつだ。
だが、俺は止める気はない。

逆に、同じ屈辱を味わえと、ニヤニヤしながら思っていた。
それから三十分後……。

俺たちの前には、二連続で罰ゲームを受けた圭吾が、スカートの裾を摘んで立っている。

服は和葉が持ってきていた物だ。

肩が異常に露出した上着に、長めのベルトが巻きついたショートスカート。

それを今、圭吾が着ている。

また、裾を摘んでいる手をゆっくりと上げて、

「ちょ、ちよつとだっけよぐぶあっ！？」

問答無用で蹴り飛ばした。

ベッドの上にふき飛び、ちよつとどころかモロ見え状態で倒れて

いる圭吾を見て、つくづく思う。

男の女装って、需要ないだろ。

それを前に口にしたら圭吾に怒られたので、今回は言わないでおく。

男の娘とやらは、圭吾が属してる世界では需要あるらしい。

圭吾自身が女装するのは、全然関係のないことだな。

刹那、室内にフラッシュがたかれた。

何事かと思い光った方を見ると、そこには携帯のカメラで圭吾を撮っている朔夜と和葉が居た。

二人とも笑いながら、痛みでもだえる圭吾を写真に収める。

「……さて、保存しちゃったから満足よ。どうするの圭吾？ もう脱ぐ為に辞めるか、着たまま続行して屈辱を晴らすよう頑張るか。二つに一つよ？」

「こ、こなくそお！ 今度こそ、今度こそ勝つてやる！」

勢いよく立ち上がった圭吾の目は、燃えていた。

どうせまた負けるだろうけど。

けれども、それはあえて言わない。

幼なじみの気遣いってやつだ。……なんか違う気がするが、まあいいか。

とりあえず、団子を食べ終えて一息つき、全部屋共通でおかれて
いる緑茶を飲む朔夜と共に、敗者の行く末を見守る事にした。

圭吾、惨敗。

一度も勝つことがなかった、いや勝たせてもらえなかったこいつは、今や色とりどりの装飾品を付けていた。

女装に加え、猫耳や猫の尻尾、ピンクの首輪に語尾に「にゃん」と「ですわ」をつけるという結果で終わりを告げた。

随分と、ひどい結果になったものである。

ってか、こいつピンクの首輪まで持ってたのか。

もし、昨夜のゲーム中に和葉達が来なかったらと思うと、ゾツとする。

そんなゾツとする姿となってる圭吾は、地に膝と手をつき、かなり落ち込んでいた。

「なんで、なんでこんな……こんなことって……！」

「圭吾、語尾忘れてるわよ」

「ってか、ゲーム変えてりゃよかったんじゃないか？」

ふと思いついたことを言ってみると、圭吾はゆっくりと顔を上げて目を見開く。

それも、わざとらしく。

また演劇風か？　と思いつつ、何が良いか考える。

トランプで他にやれるものか……。

「そうだ、七並べとかどうだ？　まだやってないジャンルだしな」

「いいわねそれ。即採用よっ。……でも、圭吾がまだ復活しないよ
うだから、私がシャッフルと分配をするわ」

「おお……ありがてえ……！」

「語尾」

「あ、ありがたいにゃんですわ……！」

何故圭吾がそこまで喜んでいいのかわからないが、とりあえず項目は決まったようだ。

時刻は既に十時。

消灯時間まで後、一時間だ。

「今度こそ勝つぜえ……！　　っと、そうだ。亮！　夢月ちゃんのためにお土産買ってきたにやんですわよ」

「ん、土産？　どうせご当地ストラップだろ」

「まっさか」。そんなベタなもんじゃにやいですわつ。きつと氣に
いる物にやんですわ」

ニヤニヤしながら言う圭吾は、いそいそと自分のカバンが置かれている部屋の隅へと向かう。

そして中から、小さめの紙袋を取り出した。

見覚えのあるそれは、昼に圭吾が和菓を連れて戻ってきた時に持
つてたやつだ。

土産だったのか。

「ほら、ガラス細工で出来た猫の置物だにやんですわ！　綺麗にや
？」

せつかく綺麗に包装されていた包装紙を破り、拳大くらいある木
箱を開けた圭吾は、中から猫の置物を取り出す。

それは、確かに綺麗だ。

中心に黒色があり、外側に向かうにつれて濁り、薄くなり、最終
的にはガラスの透明色がある。

普通のガラス細工。

だが、なんだろう。

その黒をジッと見てみると、引き込まれそうな感覚に襲われて……。

刹那、ある光景がフラッシュバックする。

思わず片手で頭を鷲掴みにするほどに、それは強烈だった。

「　　ぐっ……！　　いつっ」

「え？　おい、どうした亮！　大丈夫か？」

心配してるのか、圭吾が語尾を忘れて声をかけてくるが、その声が少し遠くに聞こえる。

脳内で蘇る光景は、一つの闇。

数日前に見た、奇妙な夢だ。

昼間にあの少女の幻覚を見たからか、余計に思い出してしまっ

頭痛と悪寒が俺を襲い、吐き気がこみ上げてきた。

それを自力で堪え、深呼吸で自分を落ち着かせる。

「おい、大丈夫かって！」

「だ、大丈夫だ……。ちよっと、夜風に当たってくる……」

返事を待たずに立ち上がり、皆を一瞥しながら玄関へと向かう。

途中、後ろから聞こえてくるのは、圭吾の声。

それは気を取り直し、場を盛り上げらせる言葉だった。

……こういう時、圭吾の性格には感謝する。

内心でそう呟きながら、玄関に置かれているカードキーを持って、廊下へと出た。

第62話：夜道での偶然

ホテルの外に出ても、相変わらず気分は悪かった。

喉からせり上がって来そうな吐き気を押さえつけ、頭痛に耐えながら、とりあえずホテルの周囲を歩く。

俺が今、歩いている舗装された道はホテルに沿って設けられており、看板には散歩コースと書かれていた。

その外側にはホテルを囲うようにして木々がそびえ立っており、ここが大都会の中にあることを忘れてしまいそうになる。

大方、自然に囲まれた高級ホテルをイメージしたんだろう。

そんな古い思考が、実に糞爺らしい。

ともあれ、昼に雨が降っていたからか冷たい夜風を身に受けつつ、散歩コースを歩き続ける。

裏手に位置する所まで来た時だろうか、そこには人影があった。

口元であろう位置に赤い光を灯すその人影は、近づくにつれて姿があらわになってきた。

「……こんな所でなにやってんだ？ 鬼頭先生」

声を掛けると、鬼頭はこちらへと振り向き、くわえていた煙草を指で摘まんで口から離す。

次いで、灰を地面に落とし、笑みを浮かべた。

「誰かと思えば霧島じゃないか。どうした、もうすぐ消灯だぞ？」

「いや、ちよつと夜風に当たりたくてな……」

理由はほとんど削っておく。

毎回察しのいい鬼頭なら、もしかしたら分かるかもしれない思っただから。

期待なんて全くしてないが。

俺と視線を交わしながら、煙草を吸う鬼頭をジッと見据える。
たまに起きる風は、彼女の吸う煙草の煙を運び、俺の嗅覚がそれを受け取る。

そこそこ香りがする。メンソールだろうか。

などと考えている間に鬼頭は煙草を吸い終え、下に落とし靴で擦り潰した。

最後に大きく息を吐き、ようやく口を開く。

「にしても、貴様らの部屋は今日も騒がしいな。昨日の忠告も意味なし、か」

「は？ ……もしかして、昨日のあれは全部お見通しだったのか？」

少し驚き気味に問うと、当然だと言って腕を組み始めた。

「昨日のあれは、ただ楽しかったから乗ってやったのだ。まさか、如月がお前らを助けるために声を上げるとは思わなかったが。どう考えても自殺行為だろう、あれは」

言って鬼頭は、おもむろに顔を上げる。

俺もそれに釣られて上を見れば、明かりがはみ出す窓がいくつも見える。

「ふむ、楽しそうに騒いでいるな」

「そうか……って、なんで分かるんだ？ 声、聞こえるか？」

「聞こえるわけないだろう。私は、ここを使っているのだ」

鬼頭は微笑しながら、人差し指で頭を突つく。
最初は、どういう意味なのか分からなかった。
そりゃ、分かるはずがない。

鬼頭の口から出た名は、知っていながらも身近には無かった物だったからだ。

「電腦だ。これを使って、廊下の監視カメラ経由で見回りをしているのだよ」

生体式電子腦。

この名を最後に聞いたのは、修平先生からだったか。

「つまり、このホテルの管理システムをハッキングでもしてるのか？」

「ふふふ、とんでもない。実はな、担任には受け持つ生徒の部屋周辺にある、監視カメラにアクセス出来るよう権利が与えられるのだ。何かトラブルが起きていないか、ルール違反を犯す者はいないか。

例えば、男子の部屋に女子が居ないか、とかな」

「ってことは何か？ 昨日のあれはとくに気付いていた？」

「如月と九条がお前らの部屋に入って行くところからな」

ふふふ、と嫌らしい笑い声を上げる鬼頭。

本当、性質の悪い奴だ。

最初から気付いていたというのに、昨日は大声が聞こえたから不審に思った、と言いやがる。

まあ、そんな性格だからこそ、昨日は見逃されたんだろうか。遊ばれたけど。

「それで、電腦は先生皆が持つてるのか？」

「いいや、普通は自室のパソコンで見る物だ。私は、この学校に来る以前から電腦だった、それだけだ」

「それって、前の学校に居た時か？ それとも、以前の仕事で？」

「なんだ、やけに詮索してくるな。私に質問責めなど、珍しい」

確かに、自分でも珍しいと思っている。

だが、何故かチャンスだと思っているのだ。

いつも謎だらけな鬼頭の、素性を知れるということが。

……もう一つ言えば、今は何か話していないと、気持ち悪さが振り返してきそうに思えたからだ。

けれど、口では違う事を言う。

「興味がある、それだけだ」

「ほう、生徒から興味を持たれるとはな。素直に嬉しいぞ。教師とは、常に嫌われるものだからな」

「ん？ 俺は敵視しているが、嫌ってはいないぞ？」

「一言多いわ馬鹿者。まあ、言ってもいいだろう。……事故だよ。」

私は昔、脳科学専攻の科学者だったのだ。その時、ある実験に失敗し、脳が吹き飛んだ。ああ、物理的には無いぞ？ 精神的なものだ」

自嘲するような薄笑いを浮かべる鬼頭は、肩を竦めて小首を傾げる。

「脳を弄くる人間が、逆に脳を壊して弄くられ、機械の脳にされる。これほど、傑作な話はない。科学者と笑い話をする時は、必ずこの話をして笑いを誘うほどだ」

楽しそうに話す鬼頭は、しかし本当に楽しそうではない。

口はわらっているが、目が笑っていない。

まあ、当然だろうな。

なんでこう毎回、知ろうとする事は、暗い事実ばかりなんだろうか。

最近では、葵の時もそうだった。

戻っていけば、巴の時も詩織の時も。

もしかしたら、和葉の眼帯について興味を持った時も、聞き出していたら暗い事だったかもしれない。

そんな、マイナスな思考を断ち切るように、鬼頭の笑い声が耳に響く。

「ふふふつ、何をそんなに暗くなっている？ 私の話が重かったのか？ なら、話題を変えよう。私の教師としての人生は、大体二年前から始まったのだ。最初の一年は別の学校で。次の一年はこの学校で、だ。分かるか？ お前らは、私にとってまだ三回目のクラスだ」

正直、驚いた。

いや、ちよつとやそつとの驚きじゃない。

まさか鬼頭が、教師になって三年も経っていなかったなんて。しかも、まだ一年しか経ってない飛翔鷹高で、三年に怖がられるのかよ。

じゃあ、初めて会った時に感じたあの迫力は、科学者時代に培ってきたものなのか？

どんな科学者だよ……。

自分で言って、自分が馬鹿馬鹿しく思える。ともあれ、

「ためになる話を聞けてよかったよ。本当に、ためになった」

「む、棒読みに聞こえるのは気のせいかな？ 私の耳が悪いだけかな？」

まあいい、と言いながら、鬼頭はポケットからおもむろに煙草のソフトパックを取り出し、空いている場所の少し横を小刻みに叩いた。

すると、煙草がゆっくりと飛び出てきた為、それを口でくわえてライターで先端に火を灯す。

暫くの間、その状態で止まった後、口の開いた隙間から煙が溢れ出し、ようやくライターの火を消した。

その一連の動作を見届けた俺は、ふと口を開いた。

「なあ、鬼頭……いや、やっぱいいわ」

「なんだ、気になるじゃないか。どうした？　愛しの我が生徒よ、言ってみろ」

刹那、背筋を悪寒が走り、鳥肌が総立ちした。

なんだろ、鬼頭に愛しのなんて言われたからだろうか。
だとしたら、俺は正常だな。

やっぱり、柄にもない言葉はよくないもんだ。

「なんだその目は。そんなに嬉しかったのか？　こらこら、ジ

ト目になるな」

「まあ、なんだ。特に意味はねえよ。本当に、なにもない」

そう言つと、鬼頭は納得のいかない顔を一瞬だけ見せたが、数回頷いた後に溜息をついた。

仕方が無いな、とでも言いたそうな表情をし、煙草を一回ふかす。

「何もないのなら別にいいのだ。その代わり、何かあった時は遠慮無く言え？　力になってやろう」

「ああ……分かった、考えとく」

本当に失礼な奴だ、と聞こえたが、聞こえないフリ。

ふと、PIDを見やれば、消灯の時間はもうすぐだった。

鬼頭も自分の腕時計を見てそれに気付いたのか、煙草を急いで吸い始める。

半分くらい残ってた煙草が、一気にフィルターまで後退し、灰となった部分と一緒に地面に捨て、また靴で擦り潰す。

……あれ、これってポイ捨てじゃね？

ま、いつか。

「よし霧島、そろそろ戻れよ。私と話していたせいで消灯に間に合わなかった、などと言わせたくないからな」

「他の教師からの印象が悪くなるってか？」

「生徒からの印象が悪くなる、だ。変なところで履き違えないように。さ、行け行け」

邪魔者を追っ払うように、手の甲で叩く仕草をされた。わずかに口元をアヒル口にしながら。

そんな姿を見て、思わず吹き出してしまいながら、踵を返して来た道を戻る。

気付けば、頭痛は治まっていた。

そのため、軽くなった脳で、先ほど聞こうと思った事を内心で呟く。

……科学者だったのなら、俺の両親を知っているか、と。

俺は、科学者だった二人が何をしていたのか全く知らない。今までは、知ろうとしなかった。

それは、機会を探すのを面倒に思っていたからだろうか。

しかし今は、手掛かりになりそうな人が居た。

だからこそ、知りたいと思った。

自分勝手な意見な気がするが、それでもだ。

けれど、数多ある分野の中で、同じ分野の科学者でない限り、知ってるってのは偶然以外では無理だろうと思う。

だから、口には出さなかった。

それは外れる可能性が高いから、面倒になったから。

もしくはどこかで、研究内容を知るのを怖がっているからか。

……臆病なんだろうが、俺は。

どちらにせよ、いつかは必ず知る事になりそうだな。

そう思いながら、ホテルへと戻る。

あいつらはまだ騒いでるだろうか。

……騒いでそうだな。

第63話：？それ？が始まる少し前

修学旅行最終日は、三日間の中でもっとも晴天だった。

雲一つ無い青空、^{さんさん}燦々とコンクリートを照りつける太陽光。

夏を先取りしたような、そんな日だ。

生徒達は皆、気温が低い事を予想して長袖ばかり持って来た為、絶賛後悔中である。

もちろん、俺もその中に含まれ、今はタンクトップ並みに腕まくりをし、暑さと運動のせいで乱れる呼吸を落ち着かせていた。

さて、俺たちは今、大阪のテーマパークに来ている。

名前は確か、USJだったか。

こういう時、自分の一般情報への関心の無さを後悔しそうだ。

このUSJには十一時頃に到着し、今は二時を過ぎた頃。

俺は周囲に気を配りながら、単独で行動していた。

建物の角から移動先を見て、？奴ら？が居ない事を確認し進む。

久々の緊張感が、そこにあった。

……なんでテーマパークに来て、こんな事をやってるんだろうな。

悪い気は、しないが。

内心でそう呟き、自嘲の笑みを漏らす。

こんな事。

それが始まったのは一時間前、一時頃だったか。

身体中に照りつける太陽光を避ける為、レストランの屋根下に避難した俺達は、ついだという事で昼食を取る事にした。

PIDで時間を見たところ、時刻は一時ちょい前。

昼時ってやつだな。

とりあえず、空いてる大きめのテーブルに座り、それぞれがメニューを手に取った。

ちなみにメンバーは、俺と圭吾と朔夜、和葉に姉御に直樹、そして日向の七人だ。

数字にすると普通に思えるが、固まって歩くとなると意外に多く見えるな。

そんな事を思いながら、隣に座った朔夜に声をかける。

「結構、激しいアトラクションばかりだったが、疲れてないか？」

「大丈夫ですよ。まだ乗った事の無い物ばかりだったので、すごく楽しいです！」

「私も楽しいけど、もう疲れちゃったわ。こういうの、笑い疲れっていうの？」

「お前には聞いとらん」

キツパリと言ってやると、俺の正面に座る和葉は、頬を膨らませた。

同時にアヒル口になり、ぶーぶー文句を垂れてる。
なんというか、アホ面だなあ。

「ア」のところまで声が出て、そこでやめておく。

一方、彼女の隣に座る圭吾は、頃合いを見ていたのか、よしっと声を上げた。

「それじゃ、今からジャンケンして、負けた奴が皆の注文を頼んで持って来るってことな！ 一本勝負で、一人でも負けた奴が出た時点で終了。一発負けもありで、人数は何人でも可！」

「ちよつと、なにそれ意味分からないわ」

「……分からないって……馬鹿か……」

「やかましいわよ神田っ！」

日向の眩きを逃さず突っ込み。
ってか、あれ？

和葉の奴、日向を名前で呼んだな。
てつきり、根暗とか言うと思った。

まあ、それでも二人は相変わらず仲が悪そうだが。

……そういえば、店員が来ないな。

「ああ……そうか、ここは先払いで、わざわざ注文しに行かない
といけないのか」

「……馬鹿が二人……」

「「やかましいわっ！」」

今度は二人で突っ込み。

要らないところで息が合うな。

マジでいらねえ。

「と、とりあえずジャンケンしよう！ ほら圭ちゃん、合図合図！」
「ん、おおう、それじゃ始めるぞ。じゃ〜んけ〜ん ぽん！」

あいこなしの一発勝負だった。

負けたのは、姉御と直樹と朔夜の三人。

意外な三人が負けたなと、立ち上がる三人を見ながら思う。

「さて、ではお主らの注文を聞きましょうか。早々に言わぬと、行
つてしまうぞ」

「ちょ、姉御鬼畜！ 俺はスペシャルランチ！」

「俺も同じので」

「私、オムライスね」

「サンドウィッチ」

各々、希望のメニューを注文され、金を受け取った姉御は頷いて席を離れた。

朔夜と直樹もその後について行き、俺達だけが残る。気付けば、和葉と日向は無言で視線を交わしていた。まるで火花を散らしてるみたいだな。

というか、仲悪すぎだろ。

とりあえず、この二人は無視の方向で、周囲を見渡してみる。

先ほどよりも混んでいるところを見ると、今から昼食のようだ。席に座れない者も何十人かいるようで、俺達は運が良かったんだなと思う。

ただ、注文の列はかなりのものだから、そっちに関しては運が悪いと言えるか。

そんな事を思いつつ、視線を皆に戻すと、圭吾がつまらなそうな表情をしていた。

……え、なんでだ？

「どうした圭吾、つまらなそうだな？ さっきまで一番五月蠅かったのに」

「……いや、なんかさ。テーマパークなんて滅多にこないし来れないからさ、そりゃ楽しいよ？ でもさ、なんつーか、勿体無い気がするんだよな」

「勿体無い？」

オウム返しで問うと、圭吾は身を乗り出して来た。

圭吾のドアップ顔ほど、いらぬものは他に無い。

「そう、勿体無いんだよ！ テーマパークなんて、大人になってもいつでも来れるだろ？ それこそ、家族や友達とな。だが、俺達は高校生だ。もしかしたら、この面子でここに来れるのは今日限りかもしれない」

だからこそだ！

そう言いながら、乗り出していた身体を戻し、腕を組んだ。顔に浮かぶのは、先ほどよりも濃い満面の笑み。

どこか誇らしげなその笑みは、何か企んでいる時に必ず見せる表情。

その企みに何度振り回され、何度楽しまされた事か。

「何か、テーマパークに全く関係の無い事をしようか！そして、高校の修学旅行の思い出に、テーマパークより濃く刻もう！」

その宣言に、和葉と日向は視線を交わすのを止め、圭吾を見た。似合わない惚けた表情で、腕を組んで踏ん反り返っている圭吾に何か言いたそうだ。

しかし、言葉が見つからず、どうしようか迷ってる。そんな感じ。等の本人はそんな事などお構いなしに、告げる。

「缶蹴りをやろう！」

多分、俺も惚けた顔をしているだろうな。それほどまでに、驚愕した。

「待たせたな。すまぬが、スペシャルランチは最後の一つだったそうじゃ」

俺の目の前に、ポップコーンが置かれた。ビッグサイズの。またしても驚愕した。

「っというか、なんでポップコーン！？」

「いや、説明したじやろう。スペシャルランチは最後の一つじゃっ

たつて。故に、最初に注文した圭吾に渡したのじゃ」

「それは分かる！ 分かるが、だからってなんで俺はポップコーン！？」

しかもビッグサイズだし。

テーマパークは物価がただでさえ高いというのに、ビッグサイズなんて買ったら一食分じゃねえか。

だが、犯人は当然のように、これでよいではないかと言って来る。

「まあまあ、落ち着いて下さい亮さん。ほら、私のサンドウィッチを一つあげますから」

「え？ いや、そういうつもりで言ったわけじゃ」

「なんじゃ、女子おなこから譲り受けるつもりか？ 落ちぶれたもんよのう」

「わーかった分かった！ 大人しくポップコーンを食べるよ」

ついには意地を張ってしまった。

とりあえず、ポップコーンを数個まとめて摘み、口に放り込んで咀嚼する。

うゝん、塩味だ。

なんだろ、俺今昼食中なんだよな？

胸の奥から込み上げてくるのは、悲しさだろうか。

それを自力で抑え込み、食う事に専念する。

カップの中身が半分まで減った頃だろうか。

突然、圭吾が声を上げた。

「そういえば、姉御達には言ってなかったな。俺達は今から、缶蹴りをするぞ！ もちろん強制参加だ。お前らの思い出を道ずれにする！」

三人は圭吾を見て、固まった。

朔夜はサンドウィッチを喰えたまま、目をパチクリさせて。姉御は食べている途中の Pasta をすすりながら固まり、朔夜をチラリと見た後に目をパチクリさせている。

いやどんな対抗意識だよ。

唯一、直樹は固まりつつも、笑みを浮かべていた。

ついでに和葉と日向を見てみれば、黙々と食事を続けていた。

まあ、二度目だしな。

「な、なんじゃ？ 言つとる意味が、上手く飲み込めんのじゃが…」

「私もです。あ、いえ、別にやりたくないってわけじゃないですよ？」

二人の反応は、当然のものだ。

圭吾も、その言葉を待っていたと言わんばかりに嬉しそうな表情をし、口を開く。

その口から出た言葉は、先ほどと同じだ。

ようするに、高校生だからその馬鹿な思い出を、だろう。

思えばこれが、入学式の日の自己紹介で圭吾が言っていた宣言通りのことを、堂々とやって見せる最初の馬鹿騒ぎだな。

ちなみに、姉御と朔夜は納得していた。

これで全員賛成、で良かったか？

「よおっし、ルールを説明するぞ！ 缶を蹴れば勝ちという基本的なところはそのままに、この本田 圭吾が独自のルールを発表しよう！」

言いながら、圭吾は腰につけていたウェストバッグから空き缶を二つ取り出した。

「正門への集合時間である五時まではまだ四時間もあるからな。缶を守る側と缶を狩る側が三時間ぶっ続けで攻防してもらう。共通の敵は鬼頭だ。バレないように頑張ってくれ」

「ちよつと待て、何故にそのような時間が必要なのじゃ？」

「いい質問だつ。その理由には、缶が二つあることもそうだが、ルールにも関係する」

言つて、次に取り出したのはUSJのパンフレットだ。

入場時にもらえる為、誰でも持っている物。

圭吾はそれの地図面を広げ、手の平で全体を叩く。

「缶をおく位置は、守る側が選べる。もちろん、狩る側には分からない。密告も無しだ。つまり、狩る側は守る側のメンバーに注意し、同時に缶を探さないといけないんだ。しかも二つ！」

そのルールに、俺は思わず納得してしまう。

だが、質問の声はまだ続く。

「守る側は、どうやって狩る側を捕まえるの？ ローカルルールだと、名前を言つて缶を踏むわけだから、せつかく隠しても意味がないんじゃない？」

「心配ご無用！ その為の？ 武器？ は、持って来である。入口付近にあったロッカーに預けてあるさ」

武器？

その名を聞いて、圭吾の所持品を思い返す。

確か、それらしい物は水鉄砲ぐらいだったか。
まさか。

「水鉄砲か？」

「そのとおつり！ 水鉄砲が武器となる！ 狩る側は、水を当てられたらアウトだ。そうだな、三発食らったらしよう」

「水鉄砲って……持つてると目立たない？ それこそ、鬼頭に見つかりやすくなっちゃうわよ？」

「それに関しても大丈夫！ U S J は数年前から、季節問わず暑い日にはアクアイベントがあるんだ。水鉄砲持ったスタッフが、お客にかけるフリして水をぶちまけたり、売店で水鉄砲を販売したりもしてる。んで、今日は一時過ぎからそのイベントが始まるそうだ」

イベントをやるほどの暑さだったのか。

まあ、暑かったからなあ。

しみじみと、内心でそう思いつつ、ポップコーンを減らしていく。

「守る側、狩る側に間しては、携帯で連絡を取ることも可能だ。けれど、お互いに相手チームとの連絡は無しな。……つとまあ、こんなもんか。他に質問はあるー？」

全員が、頭を振^{かぶり}つてもう無い事を伝える。
すると圭吾は満足そうに頷き、立ち上がった。

「そんじゃま、チーム分けといきますか！」

それを合図に、じゃんけんの構えをとった。
皆もそれに合わせ、構える。

次いで、ぽんっという合図と同時に、全員が手を前に出す。

それにより決まったメンバーは、守る側が姉御と朔夜と直樹と日向。

狩る側が俺と圭吾と和葉となった。

どことなく、負けが決まった気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4401k/>

いつもの空 + 時々雨

2011年8月15日13時57分発行